

日本応用心理学会第55回大会 発表論文集



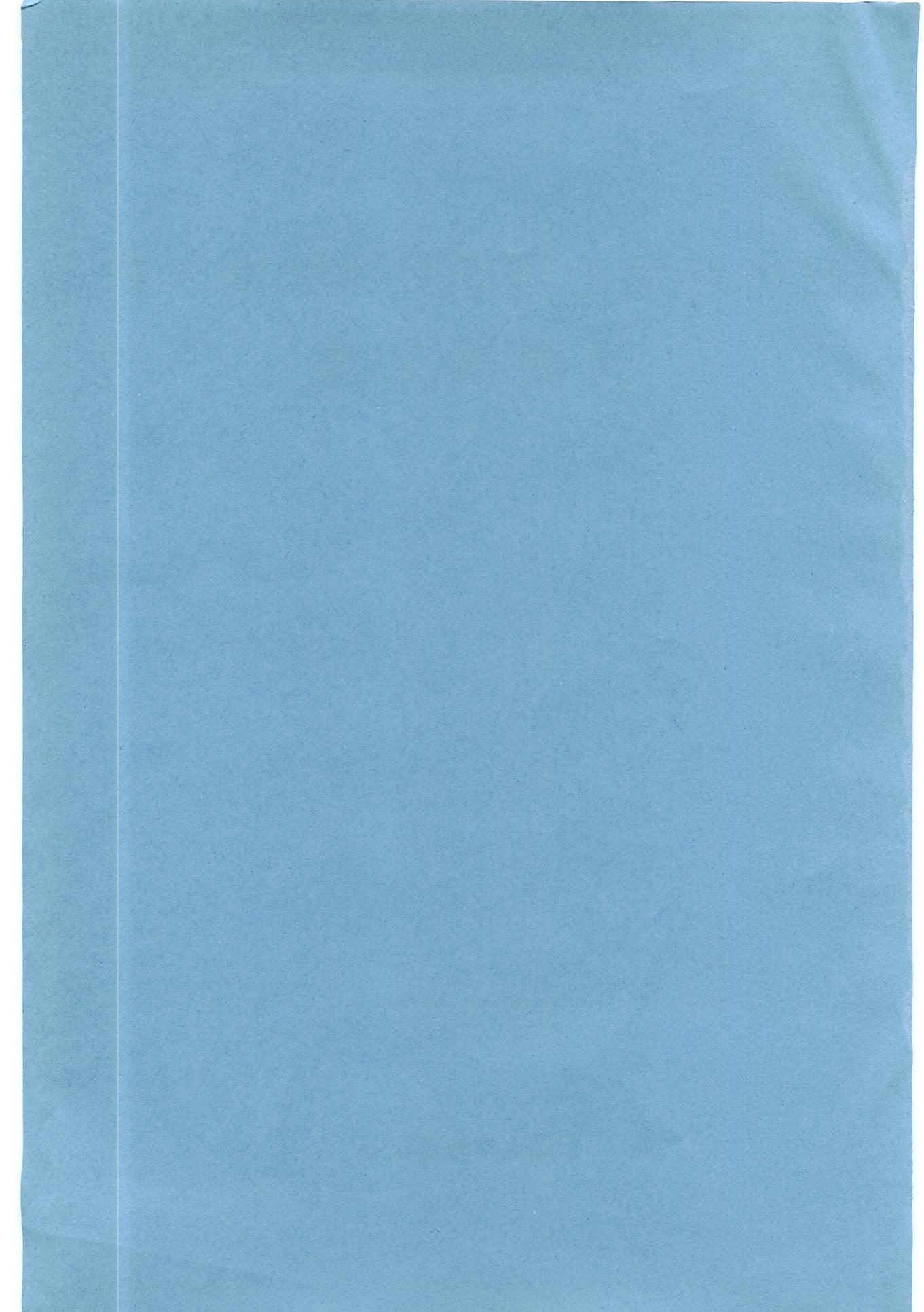
創価大学

1988

日本応用心理学会第55回大会
発表論文集

1988. 10. 22/23

創価大学教育学部



目 次

シンポジウム 1

職業に関する諸研究の現状

1) 教育学の立場から	企画・司会 創価大学	藤 本 喜 八 1
2) 社会学の立場から	横浜国立大学	鈴 木 寿 雄 2
3) 心理学の立場から	上智大学	岡 本 英 雄 3
4) 心理学の立場から	雇用職業総合研究所	木 村 周 4
	〃	松 本 純 平 5

シンポジウム 2

個性を育てる—「個性と個性教育の問題」をめぐって—

1) 欧米における個性を育てる教育	企画 創価大学	森 重 敏 1
2) わが国における個性を育てる教育	司会 東京国際大学	三 浦 武 1
3) 保育施設における個性教育	国立教育研究所	手 塚 武 彦 6
4) 家庭における個性教育	文部省初中局	正 田 実 7
	川村短期大学	浜 田 卓 子 8
	主婦	向 山 陽 子 9

公開シンポジウム

非行・いじめの克服

1) わが校はこうして非行を克服した(蓬萊中学校の事例)	企画・司会 創価大学	山 本 晴 雄 1
台東区立蔵前中学校教頭(元蓬萊中教諭)		鈴 木 茂 10
2) わが校はこうして非行を克服した(忠生中学校の事例)		小 林 義 明 11
町田市立忠生中学校教諭		酒 井 民 雄 12
3) わが校はこうしていじめ(校内暴力)を克服した(富士見中学校の事例)		鈎 治 雄 13
中野区立富士見中学校教諭		
4) いじめの心理	創価大学講師	

検査・測定 I

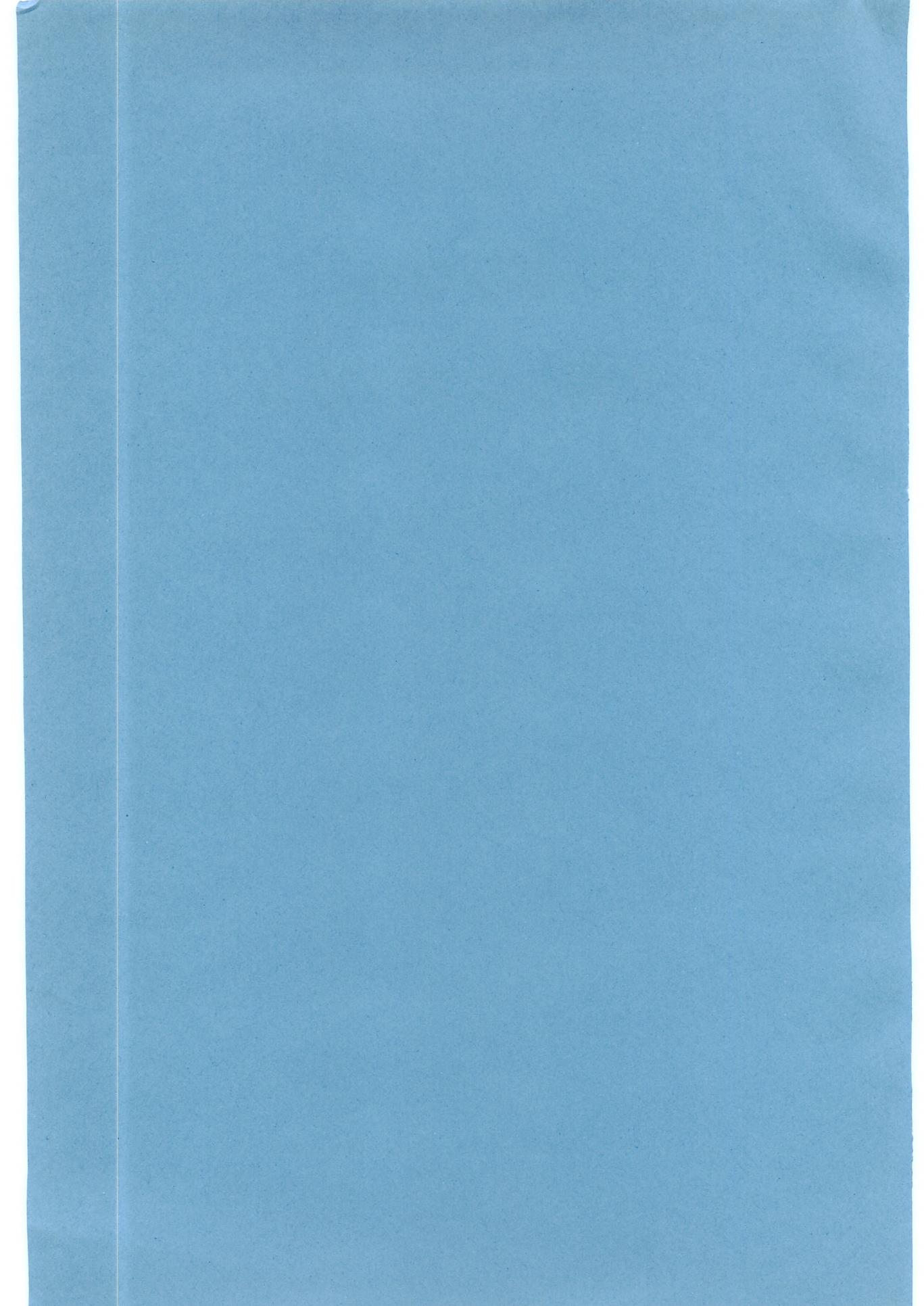
パーソナルコンピュータによる心理検査 の自動化 (Y-G 性格検査による試み第一報)	姫路学院女子短期大学 立命館大文学部 〃 〃	○杉本千代子 … 15 鈴木清 内藤みちよ 利光恵子
筆記具が筆跡に及ぼす影響	愛知県立旭丘高校 愛知県警察本部 〃	○川村司 … 16 若原克文 三井利幸
記載枠の有無が筆跡に及ぼす影響	愛知県警察本部 愛知県立旭丘高校 愛知県警察本部	○若原克文 … 17 川村司 三井利幸
参照文字の有無が筆跡に及ぼす影響	愛知県警察本部 〃 愛知県立旭丘高校	○三井利幸 … 18 若原克文 川村司
オフィスオートメーション機器における 精神作業素質の研究 (I)	立命館大学文学部 姫路学院女子短期大学 立命館大学文学部 〃	○鈴木清 … 19 杉本千代子 内藤みちよ 利光恵子
WISC の自動分析と応用の試み	女子聖学院短大	西方毅 … 20

検査・測定 II

ポリグラフ検査における質問項目間の 非類似性の効果	科学警察研究所	足立浩平 … 21
単語能力の年令的变化及び地域差 —WAIS (1958年版) 単語問題資料による—	児玉教育研究所	飯島澄子 … 22
作業曲線型の男女差, 産業差, 中学高校差	適性研究所	板倉善高 … 23

シンポジウム

公開シンポジウム



MSC とエゴグラムとの関連

日本福祉教育専門学校 ◯寺 沢 美 彦 … 24
早 稲 田 大 学 久 米 稔
工 学 院 大 学 高 野 隆 一
山 口 女 子 大 学 三 島 正 英
文 化 女 子 大 学 伊 賀 憲 子

内田クレペリン精神検査による
児童の作業特性(3)

日本精神技術研究所 ◯山 田 耕 嗣 … 25
〃 白 井 博 晤
独 協 大 学 滝 本 孝 雄

心理検査の利用をめぐる諸問題

明 治 大 学 商 学 部 竹 内 常 雄 … 26

人格・認知・情動 I

「血液型性格学」は信頼できるか(第5報)

日 本 大 学 文 学 部 大 村 政 男 … 27

パーソナリティにおける解放性—閉鎖性次元
の研究—開放的な人間と閉鎖的な人間における
「現在の生活」の情緒的意味構造」について—

帝 塚 山 学 院 大 学 西 川 隆 藏 … 28

自己受容性の研究(8)
—統制の位置との関連について—

駒 澤 大 学 文 学 部 板 津 裕 己 … 29

自己開示性に関する研究(6)
—面接条件による差異—

関 西 学 院 大 学 神 澤 創 … 30

記憶反応検査に及ぼす年齢の影響

航 空 医 学 実 験 隊 ◯竹 内 由 則 … 31
〃 長 塚 恭 一
〃 長 沢 有 恒

歯科用文章完成法(SCT-D)からみた
歯科衛生史像

城 西 大 学 ◯藤 田 主 一 … 32
〃 駒 崎 勉
明 海 大 学 西 川 博 文

問答法による人生観同定の試み(7)

武 蔵 工 業 大 学 ◯千 田 茂 博 … 33
常 磐 大 学 斎 藤 幸 四 郎

人格・認知 情動Ⅱ

ナルシズムの基礎的研究
—POS・GDS と NPI・EFI の関係について—

関 西 学 院 大 学 福 田 美 由 紀 … 35

アルコール依存症者の Body Image に関する
研究—ロールシャッハ法による検討—

駒澤大学大学院人文科学研究科 ◯ 柴 崎 圭 子 … 36
国立療養所久里浜病院 稲 富 正 治
駒 澤 大 学 文 学 部 中 村 昭 之

抑うつの研究Ⅰ
—Hopelessness scale を用いて—

駒澤大学大学院人文科学研究科 ◯ 島 山 浩 子 … 37
〃 松 坂 利 之
駒 澤 大 学 文 学 部 中 村 昭 之

抑うつの研究Ⅱ
—充実感尺度との対比による—

駒澤大学大学院人文科学研究科 ◯ 水 田 茂 久 … 38
〃 島 山 浩 子
〃 松 坂 利 之
駒 澤 大 学 文 学 部 板 津 祐 己
〃 中 村 昭 之

精神分裂病者の色彩認知

東 京 青 梅 病 院 成 田 猛 … 39

教育・発達Ⅰ

国立大学医療技術短期大学部看護学科
卒業生の学習意欲の研究（その1）

新潟大学医療技術短期大学部 ◯ 村 上 生 美 … 40
〃 原 萃 子
千 葉 大 学 看 護 学 部 内 海 滉

看護学生の母性意識の形成に
関する検討

東京女子医大看護学部 ◯ 高 橋 真 理 … 41
〃 柳 沢 千 衣

	千葉大学看護学部	前原澄子
	千葉大学看護学部	内海 滉
看護教育による看護学生の意識構造の変容 (その2)	長崎大学医療技術短期大学部	○草野美根子 … 42
	千葉大学看護学部	内海 滉
看護態度の意識(第1報) —臨床場面における態度に関する 看護婦と看護学生との意識構造の比較—	東京都立医療技術短大	○森下節子 … 43
	東京都立荏原看護専門学校	鈴木信子
	東京都立板橋看護専門学校	小池妙子
	東京都立広尾看護専門学校	玉木ミヨ子
	千葉大学看護学部	内海 滉
看護態度の意識(第2報) 看護学生の実習における意識構造	千葉大学看護学部	○内海 滉 … 44
	東京都立医療技術短大	森下節子
	東京都立板橋看護専門学校	小池妙子
	東京都立荏原看護専門学校	鈴木信子
	東京都立広尾看護専門学校	玉木ミヨ子
わが国の短期高等教育機関の在り方に 関する研究	日本電子専門学校	○片山吉晴 … 45
(1)経営情報系学科における女子学生の 進学動機について	〃	松田美登子
	豊橋短期大学	松田浩平
	〃	西野泰広
わが国の高等教育機関のあり方に 関する研究	日本電子専門学校	○松田美登子 … 46
(2)経営情報系学科における女子学生の 学科イメージの推移について	〃	片山吉晴
	豊橋短期大学	松田浩平
	〃	西野泰広

教育・発達Ⅱ

幼児教育の個別化・個性化に関する研究 Ⅸ 5歳児の描画のイメージについて	豊橋短期大学	○西野泰広 … 47
	〃	松田浩平
無認可保育施設における乳幼児の 死亡事故に関する事例的研究(1)	麻布大学教養部	岡本善之 … 48

舌の運動と構音 (V)	梅光女学院大学	○安部保子 … 58
	長崎大学	重永幸男
心理的距離テストの臨床応用に関する研究 (IV)	東筑紫短期大学	○七浦久子 … 59
	橋爪小児科医院	橋爪廣好
	福岡教育大学	藤本晴美
	〃	秋山俊夫
関係発展評価法の活用	関係学研究所	松村康平 … 60
看護学生と健康児のコミュニケーションに関する検討	愛知県立看護短期大学	○遠藤小夜子 … 61
	〃	山口桂子
	名古屋市立大学看護短期大学	湯川倫代
	千葉大学看護実践研究指導センター	内海 滉
看護場面における指導者および学生の患者に対する言語量の研究 II	秋田大学医学部附属病院	○山本勝則 … 62
	千葉大学看護学部	内海 滉
臨床実習前後の学生の変容(1) —MAS・エゴグラム・教師の評価 ・自己評価の関係—	産業医科大学医療技術短期大学	○中 淑子 … 63
	千葉大学	内海 滉
予備校生の健康に関する 臨床心理学的研究(3)	神戸YMCA大学予備校	○林 敬子 … 64
	関西学院大学	内野 悌司
	〃	福田美由紀
	〃	溝口育代
	〃	篠置昭男

臨床・相談 II

面接の過程	東京都教育心理研究会	高橋 哲也 … 65
Focusing 体験からの一考察(7) —研究会における体験から—	武蔵野フォーカシング研究会	○田島由美子 … 66
	武蔵野フォーカシング研究会	高橋 泰子

	〃	大沢美枝子	
	〃	式村正明	
Focusing 体験からの一考察(8) —Focuser 体験から—	武蔵野フォーカシング研究会	○高橋泰子 … 67	
	〃	田島由美子	
	〃	大沢美枝子	
	〃	式村正明	
Focusing 体験からの一考察(9) —Listener 体験から—	武蔵野フォーカシング研究会	○大沢美枝子 … 68	
	〃	田島由美子	
	〃	高橋泰子	
	〃	式村正明	
Focusing 体験からの一考察(10) —Listener 体験から—	武蔵野フォーカシング研究会	○式村正明 … 69	
	〃	高橋泰子	
	〃	田島由美子	
	〃	大沢美枝子	
面接に Focusing を導入することに関して の研究	東京フォーカシング研究会	井上澄子 … 70	
カウンセリングのグループに Focusing を 導入する意味	東京フォーカシング研究会	川村玲子 … 71	

臨床・相談Ⅲ

死の心理と臨床	共立女子大学	高嶋正士 … 72
精神分裂病指標 ロールシャッハ・テスト, WAIS, 症状評価 との関連について	社会福祉法人毛呂病院	新井 順 … 73
神経症者の意味構造 —自己概念を中心として—	秦野病院	小原ゆかり … 74
強い現実不適応感を訴える高校生	仙南中央病院	佐藤祥子 … 75

の症例

—何故、登校を続けられるのか—

ボディ・イメージに関する研究

—現代女性の痩せ願望について—

福岡教育大学 ○秋山俊夫 … 76

福岡県精神衛生センター 板井修一

教護院における集団心理治療の試み（その1）

—寮単位のアプローチについて—

千葉県生実学校 前田茂則 … 77

児童臨床に関する一研究

—集団状況における母子分離の問題について—

東京家政学院大学 吉川晴美 … 78

「いのちの電話」に関する研究（その3）

—自殺念慮的悩みと現実的悩み—

人間開発研究所 ○小山一郎 … 79

中央学院大学 片野卓

矢ヶ崎誠治

矯正・非行・犯罪

可能性としての人格(3)

山形大学教育学部 ○長谷川孫一郎 … 80

宮城刑務所 酒川靖一郎

金沢医科大学 中川敦子

可能性としての人格(4)

宮城刑務所 ○酒川靖一郎 … 81

山形大学 長谷川孫一郎

金沢医科大学 中川敦子

異文化生育者の非行に関する考察

—中国で生育したものについて—

東京少年鑑別所 川邊 譲 … 82

ポリグラフ検査の緊張最高点質問法に

おける裁決項目の記憶に関する一考察

千葉県警察本部 ○西田順造 … 83

科学捜査研究所 山下素邦

社会・文化・環境

高齢社会化状況の生活心理	高千穂商科大学	宮本昇	… 84
現代青少年の結婚観・家庭観	福岡県精神衛生センター 福岡教育大学 福岡教育大学大学院 本間病院	○小串武 秋山俊夫 寺崎裕志 綾野真理	… 85
現代青年にみる甘え、わがままイメージ	法政大学	亀谷純雄	… 86
地域の教育に関する親の意向	秋田大学教育学部	佐藤怜	… 87
明治前半期における心理学受容形成過程の研究(8)	東京国際大学	安部淳吉	… 88
少数集団所属と孤立、イジメ	新潟大学	石郷岡泰	… 89
大学生の自己確立過程について (I)	日本大学工学部 日本大学商学部 日本大学農獣医学部 日本大学経済学部 日本大学芸術学部	○常盤満 嘉部和夫 高久信一 土屋明夫 松本洸	… 90
大学生の自己確立過程について (II)	日本大学商学部 日本大学農獣医学部 日本大学工学部 日本大学経済学部 日本大学芸術学部	○嘉部和夫 高久信一 常盤満 土屋明夫 松本洸	… 91
大学生の自己確立過程について (III)	日本大学農獣医学部 日本大学工学部 日本大学商学部 日本大学経済学部 日本大学芸術学部	○高久信一 常盤満 嘉部和夫 土屋明夫 松本洸	… 92

産業・職業 I

中堅女子社員の職業的満足感・職業的 同一性・全体的同一性に関する研究 その3 大学生の SCT 反応との比較検討	玉川大学文学部 青山学院大学保健センター テンポラリーエデュコンサルト	○園田雅代 … 93 中釜洋子 田中香織
中堅女子社員の職業的満足感・職業的同一性・ 全体的同一性に関する研究 その4 SCT 内容分析による同一性の検討	青山学院大学保健管理センター 玉川大学文学部 テンポラリーエデュコンサルト	○中釜洋子 … 94 園田雅代 田中香織
中堅女子社員の職業的満足感・職業的同一性 全体的同一性に関する研究 その5 企業用コンサルテーションの一実践 例の検討	テンポラリーエデュコンサルト 玉川大学 青山学院大学保健センター	○田中香織 … 95 園田雅代 中釜洋子
女子従業員のワークモチベーションに及ぼす 個人属性および組織要因の影響力について	仁愛女子短期大学	早川清一 … 96
秘書適性の研究 其の1 —秘書職志望とパーソナリティの関係	梅花短期大学 梅花短期大学	○森田義宏 … 97 服部美樹子
部下のパフォーマンスの原因帰属に及ぼす 組織の圧力と監督社の要求の効果に関する 研究(Ⅱ)	立教大学文学研究科 東京国際大学 (株)リクルート 駿河台大学	○松田幸弘 … 98 角山剛 橋本ひろみ 松井賚夫
企業従業員の WORK MOTIVATION (2)営業職員のモチベーション喪失要因の検討	東京国際大学大学院 社会学研究科	関根一美 … 99
仕事の成果に基づく TPI 項目分析の試み —一般管理部門に関する分析—	人材開発情報センター	外島裕 … 100
中小企業における新分野進出と経営者行動	中小企業事業団中小企業研究所	高石光一 … 101

産業・職業Ⅱ

中高年齢者の作業遂行行動について	中京大学文学部	向井希宏 … 102
------------------	---------	------------

—組立作業を用いて（その1）—

職務遂行能力に関する因子分析的研究 —運輸従事者の高齢化に視点をおいた分析—	日通総合研究所	所 正文 …103
日常生活におけるエラー研究(4) —自動車内キー閉じ込みエラーの要因 その5—	大阪大学人間科学部	白井伸之介 …104
注意に関する精神生理学的研究Ⅰ —Vigilance Task Performance (3)—	駒澤大学大学院研究生 駒澤大学大学院人文科学研究科 〃 駒澤大学文学部	○中丸 茂 …105 小林 正和 東海林 義信 谷口 泰富
ソフトウェア開発における設計過程の 作業分析	東京大学大学院総合文化 研究科	林 裕子 …106
CST 体験の現実場面への応用(1) —CST：危機状況への対処から対応へ—	大阪教育大学教育学部 パーソナルマネジメントセンター	○上野 轟 …107 清水 増三
CST 体験の現実場面での応用(2) —現実の危機的状況への対応に関わって—	パーソナルマネジメントセンター 大阪教育大学教育学部	○清水 増三 …108 上野 轟
対話型コンピューターシステムに関する研究 —画面表示のあり方に関する一考察—	自動車事故対策センター 労働科学研究所 成蹊大学工学部	○伊藤 典幸 …109 井上 枝一郎 大倉 元宏
身体障害者の持つ職業情報の広がりについて	国立職業リハビリテーション センター	吉 光 清 …110

交通

交通行動に関する国際比較(3) —ドライバーの確認行動—	帝塚山大学教養学部 大阪大学人間科学部 〃	○蓮花 一己 …111 長山 泰久 李 淳哲
交通行動に関する国際比較(4)	大阪大学人間科学部	○李 淳哲 …112

—日本，カナダ，韓国における速度行動—	ク 帝塚山大学教養学部	長山泰久 蓮花一己
事故多発運転者に対するカウンセリング の効果	東京国際大学教養学部	清宮栄一 …113
運転場面における危険対象の把握とその 習熟過程	大阪大学人間科学部	小川和久 …114
人名索引		……… 115

わが校はこうしていじめ（校内暴力） を克服した

——中野区立富士見中学校の事例——

中野区立富士見中学校教諭 酒 井 民 雄

わが校はこうして非行を克服した

——町田市立忠生中学校の事例——

町田市立忠生中学校教諭 小林 義明

忠生中が非行を克服できたのは、次の4点にまとめることができます。

1. 悪を悪とする毅然とした態度で、どんな些細な非行に対してもわけへだてなく、根気強い指導をくり返して、学校秩序を回復するために、教師が一致団結してとりくんだこと。
2. 教師・父母・地域が力を合わせて、マンモス校解消、ひと声運動、クリーン作戦、地域教育懇談会にとりくんだこと。
3. 「わかる授業」の工夫や低学力の子どもに対する学力補充など、学習意欲や態度を高めるために一貫して努力したこと。
4. 学級・学年・生徒会・部活動の活性化と体育祭や文化祭などの行事を整然として規律があり、活気あふれるものにしていくこと。

現在は、非行克服から「明るい学園づくり」の定着・発展をつくり出すために、なみなみならぬ努力が続けられています。

わが校はこうして非行を克服した

——台東区立蓬萊中の実践——

台東区立蔵前中学校教頭 鈴木 茂

1. 「やる気」

①目標 ②活動の場 ③認められる

積極性→成就感→自信→意欲→積極性

2. 生徒一人一人の活躍の場を保障

① 部活動（プレイ・セラピーを含める）

② 学年・学級（生徒自ら計画実践する行事）

③ 生徒会（専門委員会，学年委員会）

④ 勤労体験学習（千葉県流山市に田畑と廃屋借用し，稲，野菜栽培）

⑤ ボランティア活動（心身障害施設，老人ホーム，乳児院，保育園）

3. 教師の問題

① 組織を組織として機能させる

② 共感的生徒理解ができる

③ 研修（ブレインストーミングから実践へ，イスラエル，北欧，南米）

4. 地域（小中一貫指導，地域社会）

家庭における個性教育

主婦 向山陽子

親は誰でも、子ども一人ひとりのありのままを認め、生かしたいと願っている。が、その同じ心のどこかに「皆からあまりかけ離れず」という思いがあるのは何だろう。

子どもの数が減り、物質的に豊かな現代、手出し、口出しをせず、子どもにまかせることや、子どもがまんさせることが、親にとっても“修行”に似た心の葛藤を伴う。

——私の子育てで大切にしてきたこと——

- 食事、睡眠、規則正しい生活を保障する
- 子どもの内からの遊びへの欲求を満たす、時間と空間を保障する
- 一緒に喜んだり、成長を驚いたり、子どもの気持ちに寄り添っていてやりたい
- 不快感を適度に体験させる
- 自分は愛されていると、子どもが実感できる接し方をしているか、時々反省する。

子育てを親の価値観や、常識を問い直す好い時期としてとらえ、親自身がのびやかに、生かされて過ごしたいものである。

保育施設における個性教育

川村短期大学 浜田 卓子

幼稚園では子ども達に何をすべきか。現在は子供の数の減少にともない幼稚園に入る幼児の数が定員に満たない所が多くなっている。定員獲得と経営を考えてか、漢字を教えたり、数字の練習をしたり、特別に体操教室を時間に組み込ませたりしているところが増えている。これ等は子どもの生活を考慮しているとは思われない。幼稚園に於て子ども達が生き生きと育つ場とはどの様にしたら良いのか考え直す必要があると思われる。子どもは遊びの中で育つものが多いと思う。

表面的に何をしているかを親に見せる保育ではなく、育っていく過程をしっかりと見つめてゆくことが大切である。子どもは様々なことを創造したり空想したりする。教師もその想像することを理解できねばならないのではないだろうか。色々な環境に育った子ども達をどのように保育の場で個性を尊重してゆくかを考えたいと思う。

わが国における個性を生かす教育

文部省初等中等教育局視学官 正 田 實

- 1 臨時教育審議会の答申と「個性重視の原則」
- 2 教育課程審議会の答申における「教育課程の基準のねらい」
- 3 個性を生かす教育の現状と課題
 - ア 制度などを中心として
 - イ 施設・設備などを中心にして
 - ウ 教育方法などを中心にして
- 4 個性を生かす教育と学習指導要領改善の方向
 - ア 小・中・高等学校の総則の考え方
 - イ 教科指導（算数・数学を中心にして）における個性重視の考え方

欧米における「個性を育てる」教育

日本教育研究所第5研究部長 手塚 武彦

- 1 学校教育に対する考え方の問題
 - 1) 知育, 徳育, 体育, 美育
 - 2) 制度の民主化・基礎教育の充実, 全体の向上
 - 3) 個人としての最大の成長
 - 4) エリート育成の功罪
- 1 学校, 学級としての指導方法の工夫
 - 1) 能力別, 進度別, 水準別, 個人レベルの編成指導
 - 2) 落第(留年), 飛び級, 補強学習・深化学習
 - 3) カリキュラムの軽減・自由化
 - 4) 適切な指導のための教員等の問題
- 3 以上についてのアメリカ・フランス・ソ連, 中国等の状況

職業に関する諸研究の現状

——心理学の立場から——

雇用職業総合研究所 松本純平

職業適応に関する研究は、職業の心理学的なアプローチとして代表的な領域である。そこで、最近、最終報告がなされた「若年労働者の職業適応に関する追跡研究」を紹介することを通じて、テーマに関連する問題提起を試みたい。

この研究は、昭和44年に開始された長期継続研究である。その内容は、中学卒業時点から同一対象者（全国7都県：男1,459 女1,361）をその後10年間にわたって追跡するものであり、その主な目的は、職業経歴の展開、職業意識の変化などの把握を通して、若年労働者の初期キャリア形成についての基礎的な資料を得るところにあった。

研究結果によれば、従来、若者の早期離職や転職、定着に関して考えられてきた命題には何らかの修正が必要である。それらと共に変化の激しい現代社会において職業行動を研究する上で、長期継続的研究法がもつ様々な問題点についての話題も提供したい。

職業に関する諸研究の現状

——心理学の立場から——

雇用職業総合研究所 木 村 周

雇用職業総合研究所における「職業研究」の現状を報告し、テーマに関連する問題提起としたい。

当研究所では、①働く人間と職業との適合性、②職業の実態と情報開発、③人間と職業とを結びつける職業指導、職業適応の3分野を中心に、「職業を選択し、就職し、社会に適応していく一連の職業生涯における課題」として職業研究を行っている。

当面している課題としては、

①関連諸学との連携による雇用と職業に関する総合的アプローチ、②経済構造の変化、高齢化、国際化、技術革新、勤労者意識の変化などに対応した今日的職業研究、③企業におけるキャリア開発、雇用管理研究、④職業紹介技法、カウンセリング、職業情報の開発など具体的技法や用具の開発、⑤国際比較研究や国際的共同研究などである。

研究のあり方としては、内外に開かれた実践的かつ総合的研究を旨としている。

職業に関する社会学的研究の現状

上智大学 岡本英雄

職業に関する社会学的研究は多岐にわたっているが、3つの分野に分けることができよう。1つは、職業を社会的分業の体系としてとらえるもので、デュルケムの「社会分業論」以来の伝統をもつが、近年はこの領域の研究は盛んとはいえない。

2つめは、職業を社会的地位の観点から分析するもので、職業の社会学的研究としてはもっとも成功を収めた分野であろう。社会移動研究の一環として世代間の職業移動の分析が初期に行われたが、これは地位達成過程の分析に席を譲った。この部分は方法論の議論に過度に傾いたとの反省がみられる。

最後は職業と日常生活や価値観との関連を検討するものであるが、単なる関連の記述から、関連のメカニズムの解明にようやくとりかかった状況にあるといえよう。

職業に関する諸研究の現状

——教育学の立場から——

横浜国立大学 鈴木 寿 雄

1 青年期の発達課題と学校教育

青年期の発達課題から見て、「職業」についての学習が最重要であるにもかかわらず、高学歴化の進行とともに、そうした学習の機会が乏しくなりつつある現状を探る。

2 普通教育の vocationalization

普通教育と職業教育の統合をめざし、今日の受験偏重の教育から青年を解放し、自らの生き方を探究させるため勤労体験学習の必要が提唱されているが、その課題を展望する。

3 職業教育の新しいparadigm

高学歴化の進行や産業・職業の構造変容に伴って、高校段階の職業教育はその機能を低下しつつあるが、そこに学ぶ生徒の一人一人を生かし、職業教育を活性化するための先導的試行について概観する。

シンポジウム企画のねらい

シンポジウム 1

企画・司会 創価大学教授 藤 本 喜 八

職業に関する諸研究の現状

心理学者は、職業について、最も初期から今日まで差異心理学的観点から研究するほか、近年は青年期の職業行動の10年以上にわたる追跡研究を加えている。社会学者は、世代間の職業移動や職業に対する社会的評価を調査してきた。教育学者は、かつての普通教育と職業教育との対立的な見方から Career education としての融合へと進みつつあるやに見受けられる。

これらの諸学における職業に関する調査研究を報告し合って、学際的なアプローチを模索したいと思う。

シンポジウム 2

企画 創価大学教授 森 重 敏
司会 東京国際大学教授 三 浦 武

個性を育てる—「個性と個性教育の問題」をめぐって—

子供の個性を育て、伸ばすという個性教育の問題は、「個性重視の教育」という形で最近の教育改革論議でも取上げられ、今日的な教育問題の一つともなっているが、個性教育の実践に至っては、とくにわが国の公教育の場合、いまだしの感が強い。

そこでこの問題について、従来、教育研究者として、教育行政官として、また幼稚園保育者として、あるいは家庭の主婦としてそれぞれ、長年にわたって広く深く研究され、実践されてこられた方々のご報告をいただき、話し合いのなかで、個性を育成するにはどうしたらよいか、個性教育のあり方を模索してみたい。

公開シンポジウム

企画・司会 創価大学教授 山 本 晴 雄

非行・いじめの克服

非行といじめは中学生時代に最も多発するものであり、その対策が教育実践家や学者に依って色々述べられている。しかし、その対策論は往々にして概念的になったり、理論倒れになる場合が少なくない。したがって本シンポジウムでは、非行またはいじめで問題校となり、教師間で色々研究し計画し、一定の対策を樹立実行して、ついに問題を絶滅した中学校の当事者の方々をお招きし、どのような方法や経過で、それを絶滅したかを発表していただいて、非行またはいじめに対する効果的な方法を実証的に探究することを企画するものである。

「いじめ」現象と教育の今日的課題

創価大学 鈎 治 雄

今回のシンポジウムでは、大要以下の観点から話をすすめたいと考えている。

I いじめの心理規制

1. 暴力のオモテとウラ
2. 同調行動と他人指向
3. 「偏見」と家庭の雰囲気

II 今後の課題

1. 社会的スタイルの変容と子どもの発達
2. 子どもの存在感と「代償的補償」
3. 「縁」の原理と教師—生徒関係
4. 自我理想の確立と生き方モデル

研究発表

パーソナルコンピュータによる心理検査の自動化

(Y-G 性格検査による試み 第1報)

○杉本千代子 鈴木清 内藤みちよ 利光恵子
 (姫路学院女子短大) (立命館大学文学部)

1. 研究目的

いわゆる「 Y-G 性格検査」は、現在では臨床分野では広く利用されており、研究されている質問紙形式の性格検査としては相当高い妥当性を持つものであることは諸研究の成果にみられるところである。

本研究では、この Y-G 性格検査をパーソナルコンピュータにより自動化することに着目し、「自動化 Y-G 性格検査」として、プログラムを開発・作成し、その実験に取り組むものである。

この実験プロセスにおいて、明らかとなる問題点や Y-G 性格検査を質問紙を使って行った場合と、コンピュータを使った自動化による場合とでは、被験者の応答が、どの程度違うか等、調査、検討、考察等を行うことを目的としている。

2. 研究方法

- a プログラム作成は発表者担当
- b パーソナルコンピュータ：「 NEC PC-9801、ディスプレイ：「 NEC PC-KD854」
- c プログラムは、説明、練習、質問(120)、プロフィール表示、判定型等結果表示の順序で構成。
- d データは、シーケンシャルファイルに記録。
- e 実験は、発表者担当
- f 実験期間 1988年6月以降
- g 被験者 短大生/20名
- h 実験場所 短大コンピュータ室

各被験者とも過去にこの種の検査(自動化)を取り扱った経験はない。

3. 実験方法

- a 教示：「やり方の説明は、すべて画面に出ますので、それを見ながらやってください」、「気持ちの準備ができたなら、このキー(f・5)を押してstartしなさい」とのみ言語教示を与える。
- b プログラム操作は、被験者にさせる。
- c 練習問題は、9問
- d 再度、説明を見たい時には、ストップキーを押して再startしてよいと許可。
- e やり方がわかったときに、リターンキーを押して質問項目画面に進む。
- f 質問は各1問毎に呈示
- g 応答は、「はい」の場合 Yまたはyを、「いいえ」の場合 Nまたはnを、「どちらでもない」の場合 Qまたはq等のキーを押す。

4. 考察

- a 質問紙より短時間で検査が実施できてよい。
- b 自動化 Y-G 性格検査に対するイメージは、パーソナルコンピュータの性能(機械観)に期待する傾向が観察される。
- c 質問項目の呈示は、被験者の従来の主観的評価に影響を与える可能性がある。
- * d 質問紙による場合と自動化による場合との比較検討結果は、資料により大会にて説明する。

5. 今後の課題

メッセージを文字のみで呈示する条件と、それに音声(画面呈示と同じもの)を加えた条件との比較検討

7	(被験者番号)															
18	(代名)															
F	(性別)															
Y	N	Y	Y	N	Y	Y	N	N	Y	N	Y	Q	N	Q	N	Y
Y	N	Y	Q	N	Y	N	Y	Y	Y	Y	Q	Q	N	Y	N	Q
Q	Y	Q	N	Y	Y	N	Y	Y	Y	Y	Q	Y	Y	Q	Y	Q
Q	Y	Q	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Q	Y	Q	Y	Y	Y	Q	N
Y	Y	Y	Y	Q	Q	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Y	Q	Y
Y	Y	Y	Q	Y	Y	Y	N	N	Y	Y	Q	Q	Y	Y	N	Q
Y	0 14	CO 15	AG 6	G 10	R 11	T 7	Q	D 16	A 5	C 9	S 2	I 19	N 18			

図 出力サンプル

筆記具が筆跡に及ぼす影響

○ 川村 司
(愛知県立旭丘高校)

若原 克文
(愛知県警察本部)

三井 利幸
(愛知県警察本部)

《緒言》

筆跡をパーソナルコンピュータで処理する方法については、すでに数回にわたり報告してきている。今回は、今までに報告してきた筆跡の処理方法を用いて筆記具の違いが筆跡に与える影響について検討した。検討した記載文字は「藤」と「市」の2文字で、これを男女各10名に12mmX12mmの原稿用紙上に鉛筆で10回ボールペンで10回、合計20回書かせたものを用いた。パーソナルコンピュータによる処理は、「藤」については、測定点15(要素数30)、「市」については、測定点6(要素数12)を用いて行った。

《クラスター分析》

「藤」について：鉛筆で記載した筆跡から計算した結果は、10文字の文字間でバラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 30$)が9(女7)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $30 < X \leq 45$)が7(女1)バラツキのある筆跡(クラスター距離 $45 < X$)が4(女2)であった。ボールペンの場合もこれと比較的類似していたが、バラツキのある筆跡が2と鉛筆に比べややまとまりがみられた。つぎに、各筆者において、鉛筆とボールペンとで書かれた筆跡を合せたものについてクラスター分析を行った結果、筆跡のバラツキを示すクラスター距離が大きく増加した筆者が6名あり、逆にほとんど変化のない筆者が9名であった。このことは、筆記具の違いが筆跡に多少影響を与える可能性があることを示している。

「市」について：鉛筆、ボールペン共にバラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 12$)が4(女3)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $12 < X \leq 18$)が6(女5)、バラツキのある筆跡(クラスター距離 $18 < X$)が10(女3)であった。このことは、「市」の筆跡は、筆記具に関係なくかなりまとまりのないものであることを示す。つぎに、各筆者間において、鉛筆とボールペンとで書かれた筆跡を合せたものについてクラスター分析を行った結果、全試料共筆記具の違いよっての分離はされなかった。さらに、クラスター距離が鉛筆あるいはボールペン単独で計算したものより大きく増加した筆跡は3名しかなく、筆記具が筆跡に与える影響はほとんどないものと考えられた。

《主成分分析》

「藤」について：筆記具の違いにより、主成分分析で分離した筆跡が2(女1)であった。このことは、筆記具が筆跡に与える影響はそれほど大きくないことを示している。つぎに、主成分得点から記載さ

れた10文字の何番目が乱れるかを検討したところ、鉛筆、ボールペン共に特定の番号は抽出されてこなかった。このことから「藤」は筆記具の違いが筆跡に影響を与えることはないものと考えられた。

「市」について：「藤」と異なり筆記具の違いによって主成分が分離した筆跡は認められなかった。また、主成分得点による、記載された10文字の乱れも鉛筆、ボールペン共に特に特定の番号は抽出されなかった。このことから、「市」は筆記具による差はないものと考えられた。

《因子分析》

「藤」について：20名の筆跡の中で、共通の特徴が抽出でき因子分析が可能であった筆跡は18であり、これらは、いずれも鉛筆、ボールペン間での分離は不可能であった。因子得点による記載された10文字間の乱れも認められなかった。

「市」について：20名の筆跡すべてについて、各々共通の特徴が抽出でき因子分析が可能であった。しかも、これらすべてが筆記具の違いによる分離は不可能であった。因子得点による記載された10文字の間の乱れは、鉛筆においてNo.9,10が抽出された。しかし、ボールペンによる乱れは認められなかった。

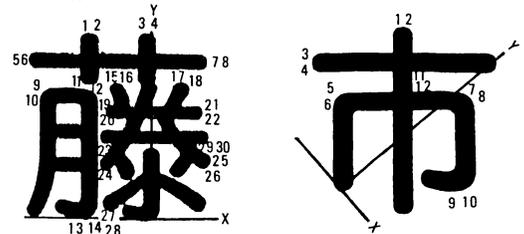
《数量化第4類》

「藤」について：鉛筆では要素番号14が最も関連の薄い要素として抽出された。その他、要素番号26,30も比較的関連の薄い要素であった。ボールペンについては、要素番号26が最も関連の薄い要素であり、その他、14,28,22が比較的関連の薄い要素であった。これらの要素は、記載時にそれほど注意を払わない(バランスを取らない)点であると考えられた。

「市」について：鉛筆では要素番号5が、ボールペンでは要素番号10が最も関連の薄い要素として抽出された。その他、鉛筆では6,10、ボールペンでは5,6が関連の薄い要素であった。

《結論》

鉛筆、ボールペンと筆記具を変え記載された筆跡は「藤」、「市」ともに筆記具の違いによる筆跡への影響は特に認められなかった。



記載枠の有無が筆跡に及ぼす影響

○ 若原 克文 川村 司 三井 利幸
(愛知県警察本部) (愛知県立旭丘高校) (愛知県警察本部)

《緒言》

筆跡が原稿用紙等の枠のあるものに記載された場合、枠に束縛され筆跡に何等かの影響を与える可能性が考えられた。そこで、今回は記載枠の有無がどの程度筆跡に影響を与えるのか、さらに影響があるとしたらどの部分に表れるかを検討した。検討した文字は、「藤」と「市」の2文字で、これを男女各10名に記載枠12mm×12mmの原稿用紙とB6の白紙に10回書かせたものを用いた。パーソナルコンピュータによる処理は「藤」については測定点15(要素数30)、「市」については測定点6(要素数12)を用いて、すでに報告した多変量解析法で行った。

《クラスター分析》

「藤」について：原稿用紙に記載された筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 30$)が10(女7)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $30 < X \leq 45$)が8(女3)、バラツキのある筆跡(クラスター距離 $45 < X$)が2(女0)であった。また、白紙に記載された筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡が13(女6)、ややバラツキのある筆跡が4(女3)、バラツキのある筆跡が3(女1)であった。つぎに、同一筆者内で両方の筆跡を合せた20文字について計算した結果は、記載枠の有無により分離された筆跡が8(女4)であった。しかし、分離されなかった12についてもクラスター距離は、個々のクラスター距離と比較して大きく増加した筆跡が9あった。

「市」について：原稿用紙に記載された筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 12$)が4(女3)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $12 < X \leq 18$)が6(女5)、バラツキのある筆跡(クラスター距離 $18 < X$)が10(女2)であった。また白紙に記載された筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡が3(女3)、ややバラツキのある筆跡が4(女4)、バラツキのある筆跡が13(女3)であった。両者を合せたものについて計算した結果は、両者が明確に分離できた筆跡1(女1)であった。しかし、分離しない筆跡19についてもクラスター距離が大きく増加したものが13あった。以上のことから、原稿用紙に書かれた筆跡と白紙に書かれた筆跡では、「藤」のように画数の多い文字ほど影響が大きいことが明かとなった。

《主成分分析》

「藤」について：同一筆者について記載枠の有無により分離した筆跡は8(女4)であった。このこ

とは記載枠が筆跡に影響を与えることを示している。

「市」について：同一筆者について記載枠の有無で筆跡が分離したものは認められなかった。

これらのことは、クラスター分析の結果とほぼ同一で、画数の少ない「市」は記載枠にそれほど影響されないが、画数の多い「藤」は記載枠に影響されることを示している。つぎに、記載枠の有無による両者それぞれの筆跡について10文字中何番目の文字が全体から外れているかを、主成分得点から検討した。その結果、記載枠の有無に関係なく、いずれも最後に近い記載文字が全体から外れていることが明かとなった。

《因子分析》

「藤」について：20名の筆者のうち記載枠の有無に関係なく共通の特徴が抽出でき、因子分析が可能であった筆跡は4(女2)であった。さらに、そのなかで両者の分離が可能であった筆跡が1(女0)であった。ここで、記載枠のある筆跡で因子分析不可能な筆跡が12であったのに対し、白紙に記載された筆跡は7であった。このことは、記載枠のあるものに書かれた筆跡は、記載枠にとらわれ筆者の特徴が失われるためと考えられた。

「市」について：20名の筆者のうち共通の特徴が抽出でき、因子分析可能な筆跡は18(女9)であった。しかし、これらはすべて記載枠の有無による両者の分離は不可能であった。「藤」と異なって因子分析可能な筆跡が多いのは、「市」は画数が少ないために記載枠にそれほどとらわれないためと考えられた。

《数量化第4類》

「藤」について：記載枠のある筆跡では、要素番号26,14,28が関連の薄い要素であるのに対し、白紙に書かれた筆跡では、要素番号8,14,26が関連の薄い要素であった。さらに、両者を合せたものの計算結果から、記載枠の有無による筆跡への影響は、要素番号6,8,24,28に表れるものと考えられた。

「市」について：記載枠のある筆跡では、要素番号6,10が関連の薄い要素であった。白紙に書かれた筆跡では、要素番号5が関連の薄い要素であった。これらのことから、「藤」のように画数の多い文字は記載枠の影響を受けやすく、「市」のように画数の少ない文字は記載枠の影響を受け難いものと考えられた。

《結論》

記載枠の有無は、「藤」のように画数の多い文字には影響を与え、筆者の筆跡の特徴を破壊する傾向が認められた。しかし、「市」のように画数の少ない筆跡については、それほどの影響は認められなかった。

参照文字の有無が筆跡に及ぼす影響

○ 三井利幸
(愛知県警察本部)

若原克文
(愛知県警察本部)

川村 司
(愛知県立旭丘高校)

《緒言》

犯罪等に用いられる筆跡は、他人名義のキャッシュカードや銀行通帳等を使用するため、被害者に似せた筆跡を記載する例が多々ある。そこで、他人の筆跡に似せた文字を記載した場合、記載者自身のもっている筆跡の特徴がどのように変化するかを調べる目的で、男女各10名に86の白紙に「藤」と「市」を各個人の筆跡と見本に似せた筆跡(以下見本筆跡)を10字ずつ記載させたものを、パーソナルコンピュータで処理し、見本が個人の筆跡に与える影響について検討した。コンピュータによる処理方法は、「藤」については、測定点15(要素数30)、「市」については、測定点6(要素数12)を取り、従来からの方法で計算した。

《クラスター分析》

「藤」について：個人の筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 30$)が13(女6)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $30 < X \leq 45$)が4(女3)、バラツキのある筆跡(クラスター距離 $45 < X$)が3(女1)であった。同様に、見本筆跡について計算した結果は、バラツキのない筆跡が13(女7)、ややバラツキのある筆跡が5(女3)、バラツキのある筆跡が2(女0)であった。つぎに、各個人間で両方の筆跡を合せたものについて計算したところ、両者が明確に分離した筆跡7(女3)であった。このことから、見本の有無は各個人間の筆跡のまとまりに影響を与えないものと考えられた。しかし、個人内では見本に似せて記載することにより、個人が持つ筆跡の特徴に変化が認められる筆者がかなりである可能性が考えられた。

「市」について：個人の筆跡から計算した結果は、バラツキのない筆跡(クラスター距離 $X \leq 12$)が3(女3)、ややバラツキのある筆跡(クラスター距離 $12 < X \leq 18$)が4(女4)、バラツキのある筆跡(クラスター距離 $18 < X$)が13(女3)であった。見本筆跡について計算した結果は、バラツキのない筆跡が3(女2)、ややバラツキのある筆跡が7(女5)、バラツキのある筆跡が10(女3)であった。各個人内で、両方の筆跡を合せたものの計算結果では、すべての筆跡でクラスター距離が18以上となった。さらにそのうちの16は、クラスター距離が大きく増加したこれは「藤」の両者を合せたもののクラスター距離45以上の筆跡が9であることと比較して明確な違いを示し、「市」のように画数の少ない文字ほど見本に似せて記載し易いものと考えられた。

《主成分分析》

「藤」について：個人の筆跡および見本筆跡を合せたものについて主成分分析を行ったところ、分離する筆跡が7で、クラスター分析と同一の結果が得られた。主成分得点からは、個人の筆跡では、記載された10文字間では特に全体から外れた文字は認められなかった。しかし、見本筆跡は、明かにNo1,2の文字が他の文字から外れており、最初の方が見本に強く影響されるものと考えられた。

「市」について：個人の筆跡および見本筆跡を合せたものについて主成分分析を行ったところ、分離する筆跡が4(女4)であり、クラスター分析の結果とほぼ一致した結果が得られた。主成分得点から、記載された10文字の乱れる文字番号を検討したが、両筆跡ともに特に全体から外れた文字は認められなかった。このことから、「市」のように画数の少ない文字については、見本の有無が「藤」ほどには筆跡に影響を与えないものと考えられた。

《因子分析》

「藤」について：見本の有無に関係なく、共通の特徴が抽出でき、因子分析可能な筆跡は6(女3)であった。しかし、個人の筆跡のみでは因子分析不可能な筆跡が12(女5)、見本筆跡では10(女5)であった。このことは、見本を見せることによって各個人の筆跡は多少影響を受けることを示している。

「市」について：見本の有無に関係なく、共通の特徴が抽出でき、因子分析可能な筆跡は6(女3)であった。このことは、「藤」よりも「市」のほうが見本によって個人の筆跡の特徴が失われる可能性が高いことを示している。

《数量化第4類》

「藤」について：個人の筆跡では、要素番号8,14,26,28が、見本筆跡では、要素番号8,14が関連の薄い要素として抽出された。また両方を合せた筆跡の計算結果も、要素番号8,14が関連の薄い要素として抽出され、この要素が見本の有無に大きく影響を受けることが明かとなった。

「市」について：個人の筆跡では、要素番号5が、見本筆跡では、要素番号5,10が関連の薄い要素として抽出された。また両方を合せたものについては、要素番号5が関連の薄い要素として抽出され、「市」は見本の有無に関係してこないことを示している。

《結論》

見本に似せて記載することにより、各個人の筆跡の特徴がどのように変化するかを検討した。その結果画数の多い「藤」は影響を与えることが明かとなった。

オフィス・オートメーション機器における 精神作業素質の研究（Ⅰ）

○鈴木 清 杉本千代子 内藤みちよ 利光 恵子
（立命館大学文学部）（姫路学院女子短期大学）（第二北山病院）（立命館大学文学研究科）

今日事務作業は大きく変化しつつある。従来のペーパー・アンド・ペンシルタイプの作業から、キーボードとCRTを人・出力とするいわゆるOA機器が事務作業の中に漸次大きな比率を占めてきている。こうした事務作業の変化に対応して、新しい作業素質の検討も意義深いものがあると言える。

目的：今回の報告は、パーソナルコンピュータ操作作業の経過を分析し、その特徴を考察することを目的とする。

方法：鈴木が日本心理学会第49回大会(1985)および第3回日本マイコン研究発表会(1986)において報告し測定方法を用いる。本法は、当初内田クレバリン法（以下内田法）のパソコン版を作成するつもりであったが、CRT画面の認知やキーボード操作など、内田法とは異なったテスト条件をもつもので、今日ではむしろ新しいテストとみの方が相応しいと考えている。すでにその内容については公表しているので、簡単に本法の特徴を記す。刺激は、仕切り線で4つに区切られたCRT画面に呈示される。それぞれの仕切りには、6-9の数字が割当てられている。テストが開始されると、どれかの仕切りの中に1つ数字が表示される。被験者はすでに仕切りの中に割当てられている数字と仕切り内部に新たに表示された数字とを加算し、その和の1位数を数字キーによって入力する（リターンを必要としない）。テスト時間は、5分の休憩を5回で前後各10分で計25分である。結果は1分毎の作業量と誤りの数、休憩前後の平均作業量、平均正解数、平均誤答数、各分毎の修正回数、定型指数*、休憩効果指数*、変動指数*（*は相馬、1949による）がプリントアウトされる。

測定は主として立命館大学学生129名を被験者として行った。今回報告するデータは、1985年-1987年秋のあいだに実施したものである。なお現在内藤および利光によって、病理群について実験を行っている。

結果：定型指数というのは、相馬のよって開発された、極く初期の内田法の数量的処理のひとつで、休憩後10分の作業について、いわゆる定型と一致の度合いを指数化したもので、+1から-1までの値をとる。定型に完全に一致すれば+1である。表1に定型指数の分布を示している。

表1 定型指数分布表

指数	人数	%
+1.6以上	5	4
+1.1～.5	25	19
0	9	7
-1.1～-.5	70	54
-1.6以下	20	16

表から分るように逆定型の傾向を示している。これは第1分目の作業量が少くないことがあげられる。それぞれの被験者の平均作業量を50とする標準作業量に換算すると、45以下が85%に達する。これは休憩前の1分目に特に顕著である。また各被験者がピークの作業量を示した時間を見ると、特に休憩前に8分目以降に多い。休憩後については、それほど顕著な傾向はみられない。強いていえば4分目以降に多くなる傾向がみられる。

考察：あらかじめ、印刷されているペーパーを対象とする従来の事務作業とは異なり、パソコンのようなOA機器の場合は、通常なんの予告もなくCRT上に刺激が呈示され、それを認知しなければならない。このことが、初頭の作業を困難にし、作業量も少ないことになる。またそうした作業に順応するのに、ほぼ8分を要している。休憩による効果は認められるが、そのため、やや再び順応するのに時間を要している。こうした点は、他の視覚作業と比較し吟味する必要がある。また、キーボード操作の問題もある。筆記で解答する場合、正解を誤って記入するものは減多におこることはない。しかし、キーボードの場合は、誤動作が生ずるのである。誤答数と修正回数を記録しているので、今後検討を加えたい。

文献

- 相馬紀公(1945)：内田クレバリン精神反応検査の数量的取扱 日本・精神技術研究所
- 鈴木清(1985)：心理テスト自動化の試み 日本心理学会第49回大会発表論文集 p.704
- 鈴木清(1986)：パソコンによる心理テスト作成の試み—作業テストの試作— 「マイコンサーキュラ」第11巻第12号 p.28～37 日本マイコンクラブ

WISCの自動分析と応用の試み

女子聖学院短期大学 西方 毅

知的能力を測定する道具としての知能検査は、Binet, A.が初めて作成して以来さまざまなものが考案され、用いられている。中でも、Wechsler, D.によるWISCは、最も広く利用されているものである。この検査は、12の下位検査のプロフィールから、さまざまな知的特性を判定することが可能と考えられるため、学業不振や学習障害などの診断・研究に用いられている。

この検査は、上述したような特長をもつ半面、その実施に時間がかかる、結果の解釈・判定にかなりの熟練を必要とする、熟練者であっても解釈・判定に時間がかかり過ぎるなどの問題がある。このような問題のために、検査結果が十分に利用されず、単にIQを計算する、あるいはもう少し進んで、V-P差を見る程度にしか用いられていないのではなかろうか。

検査の信頼性や有効性を高めるために課題の数は多い方が良い。したがって、検査の実施に時間がかかることはやむをえないとしても、解釈・判定に時間がかかる点は改善する必要があるのではなかろうか。すなわち、検査結果を何らかの形で処理し、検査者がより容易に解釈・判定できるようにし、検査者の負担を少なくすることが必要なのではなかろうか。

このような目的から、WISCの検査結果(評価点)を入力することにより、下位検査のプロフィールから、可能性のあるすべての知的特性を抽出し出力するパーソナルコンピューターのシステム作製を試みることにした。このシステムを用い、いわば前処理、スクリーニングをすることで、検査者の知的負担はかなり軽減され、より精密な分析ができるようになれば、WISCはより有効に用いられるであろう。

システムの概要

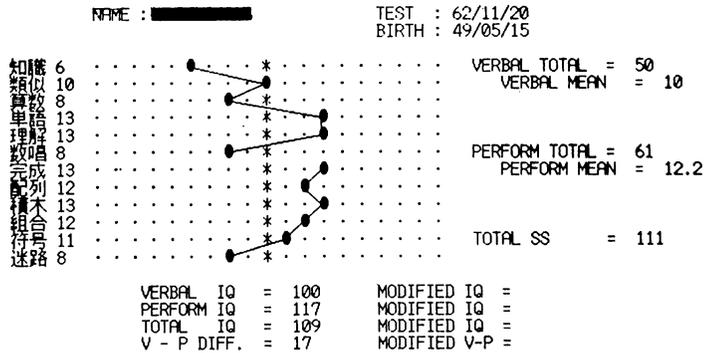
- ・使用機器：16ビットパーソナルコンピュータ (PC-9801)
- ・使用言語：BASIC
- ・入力：キーボードよりの評価点出力
- ・出力：CRT画面上にプロフィール知的特性のリストを表示

- ・判定される知的特性：言語概念化能力、言語表現能力、習得知識、社会的判談能力、記憶、視知覚能力、収束的思考、系列化能力、推理、注意集中力など52項目

今回用いた判定方式は一種のパターンマッチングであり、さまざまな研究により見出されているプロフィールパターンと入力された評価点のパターンとを比較し判定するようにしてある。

このシステムの有効性について、また、判定された知的特性が何を意味し、その判定がどのように利用されるかについて明瞭でない面がある。これらについてはさらに検討し明らかにすることが必要であろう。また、捕捉検査や結果の利用の仕方についての情報も出力できるようにすることで、より有用な診断システムとなるであろう。以上については今後の課題として追究していきたい

なお、このシステムで用いた、判定基準およびプロフィールパターンは、主として、Kaufmann, A.S.の「WISC-Rによる知能診断」(1977, 日本文化科学社)の要約にあるものを参考にした。



*** 以下の能力、機能に特性が見られる ***
(ANALYZE LEVEL: 5% MODIFY.A - No)

- | | | | | |
|---|------------|----|----|----|
| D | 記憶 | 知識 | 算数 | 数唱 |
| D | 視覚的能力 | 記号 | 迷路 | |
| D | 筆記能力 | 符号 | 迷路 | |
| D | 一般的知識 | 知識 | 迷路 | |
| U | 単語知識 | 知識 | 迷路 | |
| U | 実学的知識 | 言語 | 迷路 | |
| D | 視覚的パターンたどり | 理解 | 迷路 | |

* V-P差:有意 以下の項目を検討のこと *

評価: 理解 & 迷路を除く動作性検査
言語、聴覚的能力の不足、左半球の脳機能低下、学習障害
文化的環境の欠如、場独立的パーソナリティ

足立浩平

(科学警察研究所)

[目的] ポリグラフ検査の質問法の1つである緊張最高点質問法(POT)は、犯行に関与した者が知覚・経験した裁決項目と、裁決項目とは異なるが無関係者にはどれが裁決項目であるかを識別できないような複数の非裁決項目を提示することにより行われる。POTによる検出成績に影響すると考えられる変数の一つに、質問項目間の非類似性がある。足立(1985)は、模擬窃盗の1時間後に、質問項目間の非類似性の大きい質問表(DQ)または小さい質問表(SQ)を用いてポリグラフ検査を行う実験により、DQの方が裁決項目の再認が容易になり検出成績が高くなることを示した。しかし、上記の実験でみられた非類似性の効果は再認記憶を媒介としたものであり、非類似性が直接に生理反応に及ぼす効果は明らかでない。そこで、裁決項目の再認記憶を統制した実験手続き、すなわち、被験者が裁決項目を記録した直後にポリグラフ検査を行う手続きによって、非類似性の効果を検討した。

[方法] **被験者** 男女24名。SQ・DQ群各12名。**質問表** 足立(1985)と同じ(表1)。質問項目になりうる39項目間の非類似性データのクラスター分析結果から、SQは質問項目を1クラスター内から選び、DQは裁決項目はSQと同一だが各質問項目を別々のクラスターから選び、作成された。**手続き** (1)被験者に6ケースのうち1つを選ばせ、その中に記された項目名(6ケースすべて鉛筆)記録させた。(2)「ポリグラフ検査であなたがおぼえた項目が何かを判定する。判定が誤れば報酬150円を与える」という要旨の教示をした。(3)SQまたはDQを用いてポリグラフ検査を行った。各質問をテープ記録の再生により18~22秒間隔で提示し、被験者に否定の返答をさせる質問系列を5回反復した。N0, N'0は常に系列の最初に提示し分析対象から除いた。他の5つの質問項目は、1つ前の系列とは異なる順序で提示し、裁決項目は3、4または5番目に提示した。**測定・記録** SRCを

表1. 各群の質問項目

S Q		D Q	
N0	カッターナイフ	N'0	カセットテープ
N1	消しゴム	N'1	たばこ
N2	のり	N'2	つめ切り
N3	定規	N'3	腕時計
N4	クリップ	N'4	かぜ薬
C	鉛筆	C	鉛筆

N, N': 非裁決項目

C: 裁決項目

新栄製ブリッジボックスを介して電流密度 $10 \mu\text{A}/\text{cm}^2$ で測定し、理化電機製多ペンレコーダでDC増幅記録した。抵抗値をコンダクタンスに変換し、SCRの振幅の平方根を分析対象とした。

[結果・考察] 各群ごとにSCRについて、(質問項目)X(系列)の分散分析を行ったところ、両群とも質問項目の主効果がみられたので、多重比較した結果、両群とも、裁決項目のSCRは非裁決項目のどれよりも大きいことが示された(図1)。なお、両群とも、系列が進むごとにSCRが小さくなることを示す系列の主効果がみられた。SQ及びDQ群の比較のため、各系列ごとに5質問項目のSCRの平均・SDをもとに各質問項目のSCRの標準得点を求め、次の2つの分析を行った。(1)裁決項目の標準得点について(群)X(系列)の分散分析を行った結果、群の主効果がみられ、DQ群(M=1.07)の方がSQ群(M=0.7)より裁決項目の標準得点が高いことが示された。(2)各群ごとに、裁決項目の標準得点が規準値Cより高くなる確率(ヒット率)及び非裁決項目の標準得点がCより高くなる確率(フォールアラム率)を、Cを移行しながら求め、ROC曲線を描いた(図2)。その結果、SQ群よりDQ群の方がROC曲線の下部の面積が広がった。(1)及び(2)の結果から、質問項目間の非類似性が大きいほど、裁決項目に対する特異反応の生起が促されると考えられる。

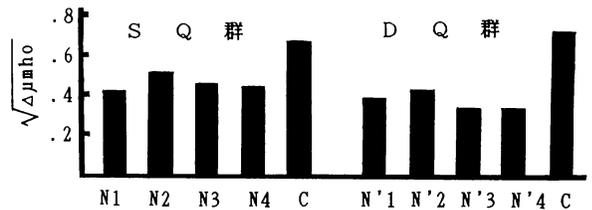


図1. 各群の各質問項目に対する平均SCR振幅

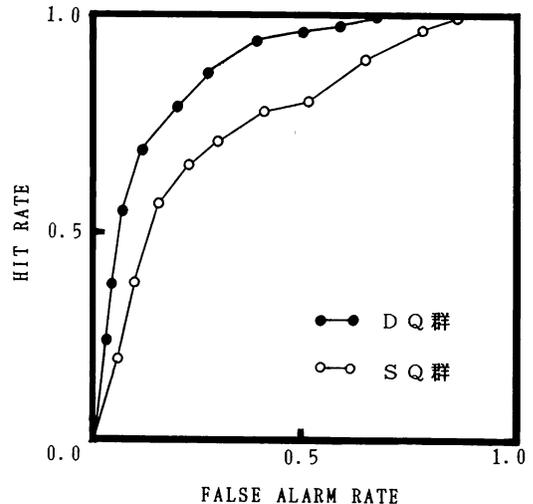


図2. 各群のROC曲線

単語能力の年齢的变化及び地域差

- WAIS(1958)単語問題資料による -

児玉教育研究所 飯島 澄子

単語問題は一般知能の中で優れた尺度とされていることは周知の通りである。昭和55年以来WAISを用い、高年齢における知能の変化について継続研究してきたが、単語問題のテストをするときいくつかの疑問点を持った。これらについて検討してみたい。

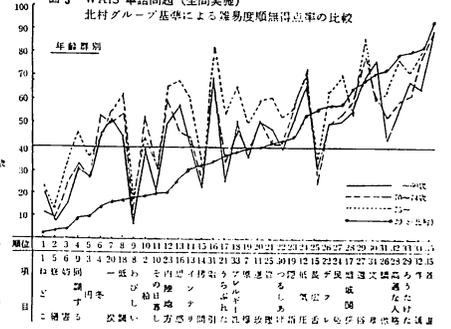
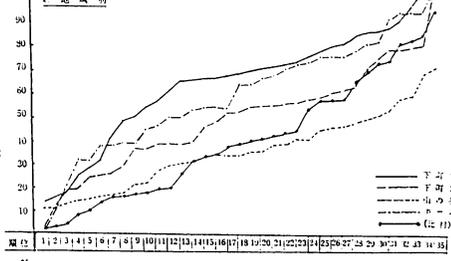
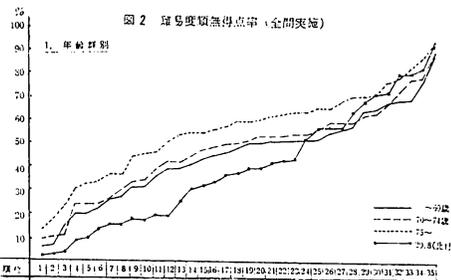
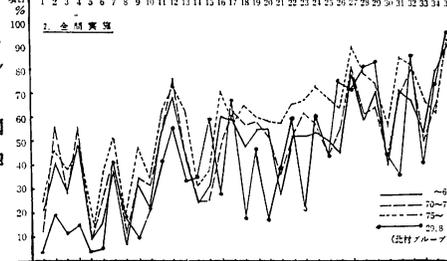
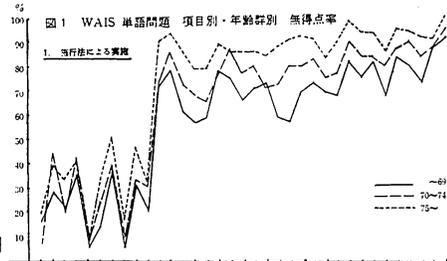
1. 研究の目的 (1) 施行法上の問題 : ① 「問6から始めて問10までの間に1語でも0点をとるときは問1から問5までテストを終わって中止する。」 ② 「5問継続して0点のときはテストを中止する。」 という施行法では、問題が難易度順になっていなければ被験者によっては自己の能力を十分に示す機会を失い、正当な評価が受けられなくなることが予想される。特に①に関しては被験者に与える影響が大きいと考えられる。(2) 単語問題の内容について: 1958年に標準化されて約30年を経過しているため、各項目の内容において従来の項目は適切でないものもあることが予想される。(3) 北村の研究(以下北村グループとする) - 心理測定ジャーナル 21-9- との対比: ① 年齢別 ② 地域別 但し、北村グループは1地域のみならずとできないが、特に比較的高学歴の山の手地域との対比を行いたいと考えた。対象者は表1, 2の通りである。学歴は旧制中学以上卒。
2. 方法 全問実施を行いWAISの指示する規定の施行法による採点及び通常の採点を行い、無得点率(各項目に対して0点をとった被験者の比率)により年齢別・地域別に比較検討を加えた。
3. 結果と考察 (1) 図1により、規定の施行法による無得点率が高く、年齢が高くなるに従って比率も高い。特に問11以降の無得点率は殆ど70~80%以上となっている。(2) 地域別では山の手地域が最も成績が良く、次いで下町2地域、下町1地域の順で、学歴の高い地域ほど施行法による影響が少ない。(3) 年齢別・地域別とも、両施行間の平均値に有意差が見られた。尚、北村グループは規定の施行法による結果がないため比較できなかった。(4) 項目別にHold性(第48回応心大会論文集P. 29)から見て比較的易しい項目は、全年齢共通では問1, 3, 5, 6, 8, 10, 14, 全地域共通では問1, 5, 6, 8, 14で、問10までに比較的易しい項目が多い事を示している。中でも、山の手地域と北村グループでは、問10までの全項目が無得点率40%以下であった。(5) 問6~10の間で問7, 9の無得点率が高く、明らかにテストの中止条件に該当する被験者が出ていることが予想される。(6) 図2-1により、好成绩の北村グループも第24位あたりから高年齢群との差が見られなくなっている。(7) 図2-2により第23位あたりまで山の手地域と北村グループは接近していたが、その後両者は離れ、山の手地域の成績が最も良い。但し、両者間の平均

値には有意差は認められなかった。(8) 図3により、高年齢群と北村グループは異なったカーブを示しており、個別的なものだけでなく年齢層のもの及び歴史的・文化的背景の影響が考えられる。北村グループに易しく高年齢群に難しい項目のうち、無得点率30%以上差のあるものは問4, 18, 20, 23, 31で、問4以外はWAISの配列順位より10位以上上昇しており、北村グループには易しくなったことを示している。一方、74歳あたりまでの高年齢群の方が北村グループより好成绩の項目には問7, 8, 14, 15, 17, 21, 22, 24, 26, 28, 29, 30, 32, 35などがあり、特に問15, 28, 29は北村グループには耳慣れない単語のようである。しかし、問7, 8, 14, 22, 24, 30のように、現在でもよく使われている単語に対して高年齢群の方が好成绩で、地域別では山の手地域が最優秀であった。

4. まとめ (1) 施行法と全問実施との間に①明らかに統計的有意差が見られた。② 1. (1) ①により、問6~10の無得点率が高いとき被験者に及ぼす影響が大きいと考えられるが、問7, 9で、年齢別では約30~51%。地域別では下町1・2で約40~55%の無得点率となっており、テストの中止条件に該当する被験者が出ていることが予想される。これらにより、明らかに施行法上に問題があると考えられる。(2) 単語の問題内容については①年齢・地域によって各項目に対する無得点率の差が大きく②又、各項目内の順位変動が0~25と著しいなど一様ではないため、厳密に難易度は決め難いが、問15, 26, 28, 29などは現在あまり適切ではないと考えられる。(3) 山の手地域と北村グループの対比では、平均値の差に有意差は認められなかったが、山の手地域が優位であった。これらにより、必ずしも無得点率だけをもって単語の難易度を決定することは出来ないが、今後、その配列を見直していく上で重要な示唆を含んでいるものと思われる。
- なお、本研究は、現在WAIS-Rの検討資料となっている。

	~69歳	70~74歳	75歳~	計	学歴
下町1	18名	20名	20名	58名	5.9年
下町2	15	23	20	58	25.8
山の手	22	19	15	56	62.6
全地域	—	10	31	41	12.2
計	55名	72名	86名	213名	

	平均年齢	29.8歳
高校生	42名	
大学生	110	
計	152	293名



題目 作業曲線型の男女差、産業差、中学高校差

板倉善高
(適性研究所)

作業性格は年令と学力の外に、性別と産業の結果:(%)
種類によつて相異なる。この度は、中学生と高校生(中三) (高二) (高三)
について調査した結果を報告する。

調査の対象は、中学生男女、高校生男女

中学三年 46校 男5000人 女5000人
高校二年 73校 男10000人 女10000人
高校三年 73校 男10000人 女10000人

	中三		高二		高三	
N型	男	女	男	女	男	女
N型	0.03	0.03	0.031	0.03	0.073	0.018
U型	0.14	0.164	0.162	0.18	0.087	0.092
D型	0.11	0.13	0.136	0.146	0.146	0.210
O型	0.23	0.21	0.173	0.156	0.265	0.210
I型	0.15	0.13	0.100	0.091	0.284	0.266
S型	0.35	0.35	0.399	0.396	0.145	0.112

作業曲線型の判定基準

N型 正常型、U型 上昇型、D型 下降型
O型 突出型、I型 下降型、S型 平坦型

又各曲線型の性格的特性は次の通り

N 3.4%	安定 つき おとなし おの協調 なし 癖な し 強健	O 14.2%	気が強い 興奮性 むら気 ま 非協調的 過激
U 15.2%	出足がのろ いが根気あり 努力型 意志強固 概ね内向消 極的	I 9.9%	疲労性 注意散漫 意志薄弱 あきら むらあり 事故性弱視 弱身
D 16.7%	出足は早い がすぐあきら 無気力 意志投げ やり概ね外向積 極的 弱視・弱身	S 40.6%	内気で無口 無表情 無気力 きちょうめん コンコン型 無関心

	工業高校		農業高校		商業高校	
N型	男	女	男	女	男	女
N型	0.0125	0.005	0.002	0.0212	0.024	
U型	0.0927	0.0155	0.0107	0.063	0.0757	
D型	0.164	0.055	0.087	0.300	0.340	
O型	0.222	0.122	0.271	0.187	0.167	
I型	0.300	0.165	0.197	0.229	0.223	
S型	0.205	0.175	0.228	0.191	0.172	

中三、高二、高三の差

中三、高二 --- O型、U型、S型多し
高三 --- D型、O型多し

男女差

中三、高二 僅少

高三 男 --- I、O型多し

女 --- I、D、O型多し

工業高校 --- I、O、S型多し

農業高校 --- S型多し 女子は O、I型多し

商業高校 --- 男女とも S型、男子は O、I型多し

即ち 作業曲線 = f(計算力) (性格)
(視力)

MSCとエゴグラムとの関連

○寺沢美彦 久米 稔、高野隆一 三島正英 伊賀憲子
 (日本福祉教育専門学校)(早稲田大学)(工学院大学)(山口女子大学)(文化女子大学)

(はじめに)

恩田 彰(1978)は、創造性の定義として、新しい価値あるもの、アイデアを作り出す能力のほかに、それを基礎づける人格特性をあげている。この人格特性を創造的構え(Mental Set for Creativity, MSC)と名付けて作成されたのが、MSCテストであるが、今回は、このMSCが一般に知られている人格特性とどのような関係にあるのかを、エゴグラムを用いて、検討することにした。

エゴグラムは、人間の自我状態を、CP, NP, A, FC, ACの5つの部分に分解し、それぞれの要素の強弱から自己分析を行なうためのものであるが、ここでは、創造性と関係のありそうな、CP, FC, ACについて説明しておく。

CP: CPは個人の中の、父親的部分で、価値判断、良心、理想などを含んでいる。この部分の強い人は、責任感が強い反面、保守的で命令的であるとされている。

FC: FCは、無邪気な自由さのことで、わがまま、ユーモア、感情的などがこれにあたる。

AC: ACは、親の顔色をうかがっている子供の姿で、本音をかくして、自分を押えるこのの多い人はACが強いといえる。

一方、MSCは、自己信頼感、客観性、細心さ、排他性、持たさ、探究心の6つの因子からなり、創造性との関連もある程度確認されている。そして、このすべての因子について、高得点の者は自己実現型として高い創造性があることが予想され、逆にすべてについて低得点の者は自信喪失型とよばれ、創造性の発揮が困難であると考えることが出来る。

(方法)

被験者 専門学校学生男女 34名

材料 東大式エゴグラム
 MSCテスト

(結果と考察)

創造性を「超自我からの解放」と考えた場合、CPとの関連が問題となる。結果は図1の通りで、予想に反して、自己実現型は高得点者に多い。これは「何を想像的とみるか」という創造性テストの価値標準とかがわかってくるであろう。

次にFCとの関連であるが、もともとFCには創造性が含まれている。予想通り、高得点者に自己実現型が多い。(図2)

そしてACであるが、高いACが創造性発揮のさまたげになることは当然である。しかし自信喪失型は一業に分布しており、ACが低くても、他の要因がそろわなければ何もならないともいえそうである。

▨ = 自己実現型

▨▨ = 自信喪失型

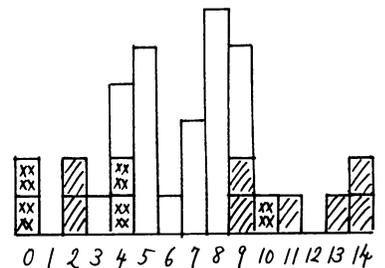


図1 CPの分布と自己実現型・自信喪失型

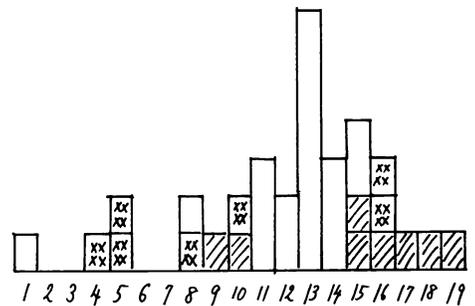


図2 FCの分布と自己実現型・自信喪失型

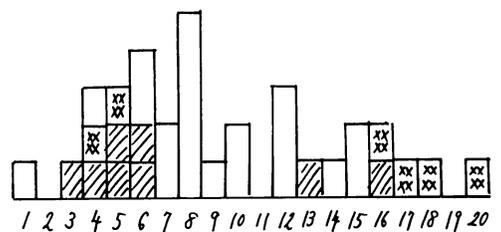


図3 ACの分布と自己実現型・自信喪失型

内田クレベリン精神検査による児童の作業特性(3)
 ○山田耕嗣・臼井博昭(日本・精神技術研究所)
 瀧本孝雄(独協大学)

第53回大会報告のデータについて、性差の観点から検討する。

対象；小学生(3～6年)男1,271名 女1,107名
 検討項目；Av；平均作業量(30分間全体) ZAv；前期平均作業量 KAv；後期平均作業量 K-Z；後期上回り差 R；後期上回り率 Pf；曲線偏差量(30分間全体) ZPf；前期曲線偏差量 KPf；後期曲線偏差量

各項目の男女別集計結果(\bar{x} , S.D.)は下表の通りである。

表1 8項目男女別集計

項目	男		女	
	\bar{x}	S.D.	\bar{x}	S.D.
Av	34.1	13.3	36.4	12.9
ZAv	32.6	11.8	34.6	11.4
KAv	35.6	15.0	38.3	14.6
K-Z	3.1	4.4	3.7	4.2
R	107.3	13.9	109.3	11.6
Pf	15.6	15.8	13.6	12.2
ZPf	5.8	6.6	5.3	5.1
KPf	7.5	9.0	6.5	7.1

なお、後期上回りの指標には、Rを用いることが多いので、ここではそれも示した。Rの学年別集計結果は、下表に示すとおりである。

表2 学年別R(上段； \bar{x} 下段；S.D.)

3年	4年	5年	6年	全学年
102.6	106.0	108.8	113.5	108.2
17.7	11.5	10.1	9.8	12.9

(Rと「K-Z」との相関係数は全学年で0.887である。)

作業量の男女差は明らかに認められ、前期においても、後期においても、女のほうが多いと言える。後期上回り(差・率)も女のほうが大きく、後期になると作業量の男女差は拡大する傾向にあるようだ。

後期上回りをふくむ期待曲線とのずれの程度、PF値にも男女差が認められる。しかし、後期上回りを除く前・後期別では、後期にのみ差があり、前期では男女の違いははっきりしない。まず、性差の認められるPF値における男女の分布の状態を、下表に示しておく。

表3 男女別PF値分布

PF値	男		女	
	N	累積%	N	累積%
3.0未満	10	0.8	13	1.2
3.0～	93	8.1	81	8.5
5.0～	163	20.9	187	25.4
7.0～	204	37.0	182	41.8
9.0～	165	50.0	153	55.6
11.0～	121	59.5	115	66.0
13.0～	102	67.5	86	73.8
15.0～	71	73.1	68	79.9
17.0～	59	77.7	35	83.1
19.0～	47	81.4	37	86.4
21.0～	32	83.9	26	88.8
23.0～	28	86.2	18	90.4
25.0以上	176	100.0	106	100.0

この表は、30分間でのPF値のものである。前・後期別についても同様の表を示せばよいのだが、紙面の制約上、それぞれについての性差は、下記の3分割表で示すことにする。分割ポイントは、男女合計における分布の31%、38%、31%に近いPF値を1.0単位で求めたものである。表4は前期PF値(ZPf)、表5は後期PF値(KPf)である。

表4 男女別前期PF値集計(()内は%)

	3.0未満	3.0～6.0	6.0以上
男	424(33.4)	489(38.5)	358(28.2)
女	389(35.1)	448(40.5)	270(24.4)
計	813(34.2)	937(39.4)	628(26.4)

表5 男女別後期PF値集計(()内は%)

	3.0未満	3.0～7.0	7.0以上
男	279(22.0)	568(44.7)	424(33.3)
女	286(25.8)	511(46.2)	310(28.0)
計	565(23.8)	1079(45.4)	734(30.9)

作業量の多さと期待作業曲線とのずれの少なさを、基準とするかぎり、女のほうが男よりも、質量共に、優れているようだ。ただし、曲線偏差量の差は、最初の15分間の試行では現れず、作業を中断した後の15分間で生じている。そこにおいて男のほうに不安定な作業経過を示す者が多いということであろう。

なお、低学年(3年)と高学年(6年)とも性差の傾向は、R以外全く同じである。Rのみ高学年で明確な差が出ていないということをつ記しておく。

心理検査の利用をめぐる諸問題

明治大学商学部

竹内常雄

はじめに

今日心理検査は教育場面ばかりでなく産業場面でも多く利用されている。後者では採用試験での利用が多いが、最近では企業組織内で登用や職種配分のために用いられることも多くなっている。

ここでは主として組織内での利用における留意点または問題点について考察する。

1. 妥当性

(1) 概念的妥当性の検討

7) 心理学的理論による推定。

4) 経験的知識からの類推；論理的には必ずしも完全ではないが、結果的には正しい場合が多い。一時的に誤りがあっても修正される。

2) 理論的妥当性の検討

主としてテストバッテリーの構成の問題に帰着する。検査問題の適否を判別する幾つかの方法がある。

(3) 経験的妥当性の検討

7) 検査導入の前後の比較；導入直後は可能だが時間経過とともに職務内容や作業環境が変化する。

4) 検査成績別の業績比較；属別するとセルが小さくなり、他の要因（作業環境、年齢、経験年数、教育訓練、給与・待遇 etc）との区別や交互作用の有無について統計的検定が困難な場合が多い。

(4) 表面的妥当性

検査に対する信頼感を醸成し、検査結果の活用や検査利用の継続に大きく影響するので特に留意する必要がある。

(5) その他の問題

紙筆検査、言語検査は日常の職務内容や学歴による影響があるように思われる。

2. 信頼性

(1) 測定誤差：組織の側の論理と個人の側の論理

統計的確率論の説得性は人事問題では限界がある。

(2) 再検査の実施

7) 制度的確立が困難な場合が多い；裾切り

4) 練習効果の混入

7) 追試に対する偏見

(3) 検査継続使用期間

7) 同一検査の長期継続使用は問題内容の漏洩および検査の陳腐化感を招く。

4) 検査の更改は判定の一貫性に対する疑念を生む。

判定の一貫性の維持は技術的にも難しい。

7) 等価な平行検査が用意されていることは少ない。

3. 標準化

(1) 無作為標本の抽出は現実的には不可能に近い。経

験的に等価と見られる代替標本を選ぶことになる。

(2) 標準化母集団は時間経過とともに質的に変化する。

従って、標準化は一定の間隔で繰り返す必要がある。

(3) 標準化母集団は必ずしも正規分布しない。しかる

に、正規分布を前提とするデータ処理がなされる。

(4) 検査対象集団が標準化母集団か；尺度の一貫性は

何によって保たれるか。

4. 判定および判定基準

(1) 判定基準の設定は企業の経営判断によるが、判断

の根拠となるデータは心理学的に準備される。そのため、判定に対する不満は心理学に向けられる。

(2) 判定の公正を保証する制度

7) 他の人事評価尺度との区別の必要性；妥当性の

低下の防止。（実務能力、功績、経験、情実 etc.）

4) 検査に関するルールの確立；検査結果に基づく評価は先天的、永続的とみなされるので、他の方法による評価とは違った受け取られ方を要する。

(3) 検査担当者の適格性

7) 人格的および職務経歴的側面；信頼と尊敬。

4) 実務能力および心理学的素養；錯誤防止。検査結果の正しい解釈と説明能力。

7) 制度的権威づけ；講習会修了等の資格。職名発令。

5. 検査成績の取扱い

(1) 守秘義務：通知の範囲、資料保管方等をルール化。

(2) 検査結果の伝達

7) 本人および関係管理者等に対する適切な説明。

4) 人事記録への記載方；事務引継ぎへの配慮。

(3) 検査結果の有効期間：心理学的に期間を限定することは困難だが、明示する必要に迫られる場合が多い。（運転免許の更改、定期健康診断等の例）

(4) 精神障害を暗示するデータの取扱い

7) 検査担当者の検査成績解釈力。心理学的素養。

4) 関係者（保健管理者、産業医、職場管理者、家族等）との連絡、相談。

6. その他の関連する諸問題

(1) 適性検査の正しい理解のPR

(2) 適性検査利用の視点：個人の論理と組織の論理

(3) 適性に応じた適切な助言、指導、教育の実施。

(4) 動機づけと適性または素質的能力との関係の研究。

7. おわりに

心理学者は産業場面における心理検査の利用の実態にもっと注意を向け、現実的な有効性や社会的な信用を高めるため、抱えている問題点の解決に積極的に参加していく必要があるのではないだろうか。

「血液型性格学」は信頼できるか (第5報) 大村 政男 (日本大学文理学部)

I はじめに

ABO式の血液型と気質との関連について最初に言及したのは原采復と小林栄(1916)で、それに続いたのが平野林と矢島登美太(1925), 中村慶蔵(1927)である。しかし、この分野の集大成者はなんといっても古川竹二(1927)である。現在、「血液型人間学」という名のもとに発展している偽科学は古川学説のコピーである。古川学説の興亡史と偽科学(血液型占い術)の出現については、大村政男「血液型気質説についての研究」, 日本大学人文科学研究所『研究紀要』第35号(1988)に詳説してある。ここでは偽科学のデータと科学的データとを対応させてみる。

II 研究の目的・方法・被験者

能見俊賢がその著『血液型恋愛学』(1988)に発表したデータを再検討するのが目的であるが、能見のデータには科学的な結果の表明に必要な数値が記載されていない。被験者数は約500人と記されているが血液型別の人数が記されていない。掲載されているのはパーセントだけである。これでは検討のしようがない。おそらく他者の再検討を抑制するために血液型別の実数を発表しないのだと思われる。ここでは偽科学に対する批判とともに、新しいデータを提供しようと思う。

この批判的研究の被験者になったのは、女子短大生と4年制の女子大学生495人で、年齢は18歳から24歳に及んでいる。血液型の分布は次の表1のとおりである。理論値と対応させると $\chi^2 = 3.81$ で、サンプルとして偏ったものでないことがわかる。

表1 この研究のサンプル (単位:人)

数値の種類	O型	A型	B型	AB型	合計
観測値	139	209	106	41	495
理論値	152	189	108	46	495

III 能見データの一部と能見の結論の誤謬

能見の前掲書には次のようなアイテムに関するデータが掲載されている(問の番号は大村が付したもの)。

問1: あなたは他人からどんな女性に見られたいですか(選択肢については表2を参照してほしい)。

問2: 恋人に望むものは(選択肢: やさしさ, 頼りがい, 誠実さ, ほがらかさ, 情熱)。

問3: 結婚後の夫婦のあり方はどうあってほしいか(選択肢: 亭主関白, 内助の功, カカア天下, 共同生

活者, 友だち夫婦)。選択肢はみなよくない。

表2 問1についての能見データ (前掲書P110)

選択肢	O型	A型	B型	AB型
かわいい女	36.8	43.1	40.7	44.3
思いやりのある女	29.2	30.1	28.0	26.2
知的な女	6.9	9.2	11.9	11.5
個性的な女	13.9	9.2	6.8	9.8
セクシーな女	3.5	0.7	1.7	1.6
自立した女	1.4	2.6	0.9	4.9
楽しい女	8.3	5.2	10.2	1.6

他の問に関する表は省略するが、能見はこの表から「かわいい女」指向のAB型、「個性的な女」と「セクシーな女」指向のO型などを指摘しているが、前述のように検討のしようがない。まずはでたらめと見てよいであろう。

IV 大村・石黒園子のデータと結論

われわれのデータは表3・4・5のとおりである。

表3 問1についてのデータ (数値:%)

選択肢	O型	A型	B型	AB型
かわいい女	27.3	●22.0	●34.9	24.4
思いやりのある女	42.5	47.9	38.8	53.7
知的な女	9.4	9.6	9.4	2.4
個性的な女	11.5	12.9	6.6	12.2
セクシーな女	0.7	1.9	0.9	0.0
自立した女	3.6	1.9	2.8	2.4
楽しい女	5.0	3.8	6.6	4.9

表4 問2についてのデータ (数値:%)

選択肢	O型	A型	B型	AB型
やさしさ	29.5	26.8	28.3	26.8
頼りがい	45.3	47.8	49.1	36.6
誠実さ	18.0	16.3	15.1	24.4
ほがらかさ	5.0	2.4	2.8	2.4
情熱	●2.2	6.7	4.7	●9.8

表5 問3についてのデータ (数値:%)

選択肢	O型	A型	B型	AB型
亭主関白	6.5	●5.7	●12.3	2.4
内助の功	18.0	13.9	14.2	22.0
カカア天下	2.2	0.5	0.9	2.4
共同生活者	10.8	9.1	●14.1	●2.4
友だち夫婦	62.5	●70.8	●58.5	70.8

われわれは上掲の全数値について102組の組合せを検討したが、CRで有意差が出たのはわずか9組で、それもまったく無視していいような関連性であった。(表中にある2つずつの●は、それら2つの比率間に $P < .05$ で有意差のあることを示している。)

パーソナリティにおける開放性-閉鎖性次元の研究
 - 開放的な人間と閉鎖的な人間における
 「現在の生活」の情緒的意味構造について -

西川隆蔵 (帝塚山学院大学)

【問題】人間は、様々な種類の経験、自分をとりまく世界の中での新しい状況との出会いをとおして、その可能性を実現していく存在であり、自らの経験に対して、心が開かれているか、閉ざされているかは人間個人の成長において重要な要因であるといえる。本研究は、このようなパーソナリティにおける開放性(openness)-閉鎖性(closeness)の次元について、主に Rogers の経験への開放性(openness to experience) や Rokeach の独断主義(dogmatism) の概念に基づいて、実証的な検討を試みようとするものである。これまで仮説的構造に基づいて、測定尺度(経験質問紙:EI) 作成のための予備的研究やそれによって操作的に規定される開放性と閉鎖性の外部基準との関係の検討を行ってきた(日心、第50回、51回大会)。

今回は開放性の高い者と閉鎖性の高い者とは、自己の生活意識においてどのような差異が見られるのか、特に情緒的(affective)な意味構造に焦点を当てることによって、パーソナリティにおける開放性-閉鎖性次元の特徴を明らかにすることを目的としている。

【方法】 情緒的意味構造を測定する方法として、「現在の毎日の過ごし方」を刺激概念とするSD法(semantic differential)を用いた(スケールは20尺度、7段階評定)。

被験者は、男子大学生 170 名、女子大学生 170 名の計 340 名(年齢 18-26)で、経験質問紙(EI) とSDスケールを集団、および個別で施行し資料を得た。SDスケールの結果は便宜上7段階の評定結果に対して左から順に 1-7 点を割り当て、経験質問紙(EI)の結果は「ハイ」「どちらでもない」「イイ」を各々2点 1点 0点 とし、開放性(40項目)、閉鎖性(40項目)の各得点を算出した。

さらに開放性と閉鎖性の両得点の平均値(中学生、高校生、大学生、社会人から得た合計764名の資料: 開放性 M=44.57、閉鎖性 M=39.56)にもとづいて、開放性と閉鎖性の両得点が高い群(H-0.H-C群)、開放性が高く閉鎖性が低い群(H-0.L-C群)、開放性が低く閉鎖性が高い群(L-0.H-C群)、開放

性と閉鎖性ともに低い群(L-0.L-C群)の4群を選択した。

【結果と考察】 4群のSDスケール結果について個別に因子分析を行った(主因子法により3因子抽出後、バリマックス回転を行った)。Table.1は H-0 L-C群 L-0 H-C群において明らかになった主要3因子に負荷量の高い尺度を示したものである。

両群間の「生活」の情緒的意味構造の差異が第1因子に顕著に現れている。H-0 L-C群では、「個性的-画一的」、「前向き-後向き」といった尺度に示されるような個性化、将来への展望という観点から意味づけられやすいのに対して、L-0 H-C群は「にぎやか-さびしい」「協調的-対立的」といった尺度に示されるような社交性、対人関係性の観点から意味づけられやすいところに特徴があるといえる。

特にH-0 L-C群では、「開いた-閉じた」「明るい-暗い」という言葉が 時間的展望のニュアンスを持つのに対して、L-0 H-C群では対人関係的なニュアンスを持つといえる。また第2因子に高く負荷している尺度は、H-0 L-C群では評価的なニュアンスを持っているが、「にぎやか-さびしい」という言葉が調和や安定感、健全さと関連するところ L-0 H-C群との差異があり、さらに L-0 H-C群においては、「個性的-画一的」という言葉が「生活」の充実感や安定感と関連の強いものであることが特徴といえる。

以上のように開放性の高い者にとって「生活」は時間的な展望にもとづいた個性化の側面から意味づけられ意識されやすいのに対して、閉鎖性の高い者にとって「生活」は人とのつながりの中に位置づけられて意識されやすいことが示唆されているといえる。

Table.1 H-0 L-C,L-0 H-C 両群のSDスケール因子分析結果

H-0 L-C (N=55)	L-0 H-C (N=59)
Factor1 15.個性的な-画一的な 18.開いた-閉じた 12.前向きな-後向きな 10.明るい-暗い 19.柔軟な-硬い	Factor1 8.にぎやかな-さびしい 18.開いた-閉じた 10.明るい-暗い 7.協調的な-対立的な 6.うちとけた-一人ぼっちの 11.香々しい-年寄りじみた 19.柔軟な-硬い
Factor2 16.調和のとれた-不調和な 2.安定した-不安定な 13.健全な-退廃的な 8.にぎやかな-さびしい	Factor2 14.充実した-むなし 15.個性的な-画一的な 2.安定した-不安定な
Factor3 4.自由な-窮屈な 6.うちとけた-一人ぼっちの 5.ゆったりした-こせこせした	Factor3 5.ゆったりした-こせこせした 4.自由な-窮屈な

(負荷量 .6 以上の尺度)

自己受容性の研究 (8)

— 統制の位置との関連について —

板津 裕 己

(駒澤大学文学部)

研究目的

前報 (板津, 1988) では、筆者が過去に構成した自己受容尺度 (板津, 1986) の質問項目を再検討して、新たに自己受容尺度短縮版 (以下 S A S S V と記す) を作成し、これと鎌原ら (1982) の Locus of Control 尺度との関係を検討した。

本研究は、S A S S V とその他の Locus of Control 尺度との関係を検討すること、さらに、前報で得ている結果を含めて、自己受容性と統制の位置との関係を総括していくことを目的とする。

研究方法

質問紙調査法による。

質問紙: Locus of Control (以下 L O C と記す) を測定する尺度には、水口 (1985, 以下 L O C M と記す) と H. Levenson (1981, 以下 L O C L と記す) を用いた。自己受容尺度には上記 S A S S V を用いた。

被験者・調査時期: 都内 1 大学の学生 191 名 (男性 103 名・女性 88 名)。調査は昭和 62 年 6 月に集団形式して実施した。

結果と考察

全体での S A S S V と L O C M ・ L O C L との相関関係は表 1 のようであった。

まず、L O C M との関係では、自己統制の欠如因子と S A S S V 合計点・全ての下位因子得点との間に有意な負の相関関係をとる。さらに、社会的無力感の因子や尺度合計点との間で有意水準に達する負の相関値をとる対が多くみられる。他の対も全体的に負の相関をとる傾向にある。

L O C L とでは、I 次元との間に正の相関関係を、P ・ C 次元間には、負の相関関係をとる傾向にある。

L O C M では、高得点になるほど外部統制的とみなされる。また、L O C L では、I 次元が内部統制を、P ・ C 次元が外部統制を意味することから、上記の結果は、S A S S V の下位因子得点・合計点で高得点をとるほど内部統制的傾向になることを示す。言い替えば、自己受容性と内部統制傾向との間に関係があることをあらわしている。

3 尺度間の相関値を性別に求めると、女性の方がより内部統制傾向を示すものの、いずれの対においても性差間に有意な差をとるほどではなかった。

本研究で得られた結果は、前報で得た結果と基本的傾向で類似している。しかしながら、本研究では、前報で得た自己受容性の構成因子 (構成概念) レベルよりも自己受容性全体レベルの方が、より内部統制傾向と関連することが明確に示されなかった。この点について今後さらに検討すること、検討し得られた結果いかんによっては、そのような結論に至る根拠や背景も明確にしていける必要がある。

自己受容性と内部統制傾向の間に関係があることは、これまでも多く研究者によって指摘されている。そして、本研究においてもこのことが確認される形となった。両概念間にこのような関係が存在するのは、自分自身を信頼できる・受容できることが、行為の規範を自分自身に置くように作用する、内部統制を可能にさせるためと考える。さらに、本研究では、自己受容的な人は、自己を統制する力を有し、社会的に受動的な存在でないことも確認できた。このような結果は、旧尺度においても確認されており、S A S S V が旧尺度と同様な方向性を保持していることを意味する。以上の結果を、尺度という観点から見れば、S A S S V の内容的妥当性が検証されたと言えよう。

表 1 自己受容尺度と Locus of Control 尺度間の相関関係 (全体)

	自己受容尺度					尺度合計点
	I ^a	II ^b	III ^c	IV ^d	V ^e	
第 1 因子 ^f	0.019	-0.072	-0.064	-0.059	-0.204 **	-0.129
第 2 因子 ^g	-0.358 +	-0.166 *	-0.239 **	-0.243 **	-0.178 *	-0.395 +
第 3 因子 ^h	-0.131	-0.041	-0.116	-0.107	-0.007	-0.133
第 4 因子 ⁱ	-0.065	-0.183 *	-0.153 *	-0.307 **	-0.363 +	-0.359 +
第 5 因子 ^j	-0.131	-0.007	-0.041	0.063	0.040	-0.026
尺度合計点	-0.193 *	-0.133	-0.175 *	-0.183 *	-0.202 **	-0.297 **
I 次元 ^k	0.352 +	0.249 **	-0.042	0.116	0.206 **	0.298 **
P 次元 ^l	-0.089	-0.064	-0.044	-0.241 **	-0.096	-0.176 *
C 次元 ^m	-0.207 **	-0.123	-0.078	-0.177 *	-0.098	-0.228 **

* 危険率 5% 水準で有意な相関があることを示す ** 危険率 1% 水準で有意な相関があることを示す
+ 危険率 0.1% 水準で有意な相関があることを示す

a. 生き方 b. 他者との関わり方 c. 情緒不安定でないこと d. 自信・自己信頼に欠けていないこと
e. 自分自身への満足感 f. 努力のむなしさ g. 自己統制欠如 (自我の弱さ) h. 運命好機志向
i. 社会的無力感 j. 刹那主義
k. internal control l. powerful other's control m. chance control

自己開示性に関する研究(6)

—面接条件による差異—

神 澤 創

(関西学院大学)

【問 題】心理臨床場面における自己開示は、来談者にとっても、また臨床家にとっても重要な変数である。面接過程のそれぞれの局面で、自己開示の役割は様々に変化するであろうが、基本的には歓迎される場合が多いように思われる。従来「面接者は中立的な立場を維持し、個人的な情報の開示は差し控えるべきである」といった考え方が重んじられてきたようであるが果して、そういった対応が全てのケースで効果的な働きをするものといえるであろうか？また、初回面接など、初対面の相手から、限られた時間内にできるだけ多くの個人的な情報を収集する必要に迫られた場合、面接者のこういった接し方が開示を促進するかは興味のもたれるところである。

【目 的】そこで、本研究では個人面接場面における面接者の開示的対応と非開示的対応が、被面接者の自己開示にどのような差異をもたらすか、また面接者の性別による影響はどのようなものであるかを検討する目的で以下の実験を行なった。

【方 法】被験者：大学生37名(m=7, f=30)に実験への協力を依頼した。

手続き：面接者の対応(開示的・非開示的)及び性別によって4つの面接条件を設定し、自己開示質問紙(KSDQ)の得点において等質の4群に分けられた被験者に対し、個人面接を施行した。

面接内容はビデオテープに録画され、面接終了後、時間的な計測を行なった。

また、面接者(男女各1名)には、数回のロールプ

レイセッションを行ない「開示的」「非開示的」両条件の練習をさせた。

面接終了直後、被験者にSD法(5段階、22対)によって「面接者のイメージ」を記述させた。

【結果・考察】Table 1.に各条件における被験者及び面接者の開示時間を示した。

全面接時間に差がみられるのは、面接者の開示時間に違いがある為であり、被験者の開示時間に統計的な有意差は認められなかった(Table 2. 参照)。更に、被験者の開示が面接全体に閉める割合(SUB%)では、非開示条件の方がはるかに大きくなっており、これらのことは、面接者の開示的に対応(開示モデルの提示)が、必ずしも被験者の開示を促進するとはいえないことを示している。この結果は、当初の予測に反するものであり、一部にやや逸脱したデータがみられたことを考慮しても、注目に値するものである。個人的な情報を自ら進んで開示することのない、所謂中立的な態度が、却って被面接者の開示を促す結果となる場合があるのかもしれない。また、開示条件での面接者の開示が不適切なものであったという可能性も考えられる。一方、面接者の性別による影響は顕著なものではなかった(有意差がみられたのは「開示的条件」におけるSUB%のみ)。また、SD法による「面接者のイメージ」にも条件・性別による目立った差異はみられなかったが「暖かい」「明るい」「近づき易い」などの項目で開示的条件の方が、非開示的条件よりも明確な印象を形成したようであった。

Table 1. 各条件における開示時間の平均(SD)

面接条件	全面接時間	被験者	面接者	SUB%	INT%
開示的面接者					
同性	745.2(187.0)	409.3(135.0)	335.9(66.2)	53.9(7.0)	46.1(7.0)
異性	801.3(227.5)	333.0(123.5)	468.3(133.6)	40.9(8.7)	59.1(8.7)
total	771.8(203.2)	372.2(132.0)	398.6(121.4)	47.8(10.2)	52.2(10.2)
非開示的面接者					
同性	471.4(220.1)	353.0(207.9)	118.4(16.9)	71.1(9.4)	28.9(9.4)
異性	642.1(303.8)	514.9(297.4)	127.2(20.0)	76.3(10.5)	23.7(10.5)
total	556.8(271.9)	433.9(262.5)	122.8(18.5)	73.7(10.0)	26.3(10.0)

※SUB% = 被験者が話した時間が全面接時間に占める比率。

INT% = 面接者が話した時間が全面接時間に占める比率。

Table 2. 各変数の開示的・非開示的的条件間のt検定

	t
全面接時間	2.71*
被験者	n. s.
面接者	9.78**
SUB%	-7.82**
INT%	7.82**

※ * = p<.05, ** = p<.01

記憶反応検査におよぼす年齢の影響

○竹内由則 (航空医学実験隊)
長塚恭一 (")
長沢有恒 (")

人間の種々の機能は、年齢とともに変化する。現在、航空自衛隊では、操縦者の教育と任務付与の資料とするため、年齢による機能変化を身体的、認知的側面より調査するための検査を開発中である。今回は、認知的検査のうち、記憶反応検査について報告する。

実験 I

【目的】
スタンバークメモリ式の記憶検査を試作し、年齢に応じた記憶処理量、反応速度を測定することができるかを検討する。

【方法】
器材はハンドヘルドコンピュータ (EPSON、HC-40) および付属のプリンタを用いた。

画面に2、4、6文字のいずれかの文字数のランダムなアルファベットが表示される。被験者はこの文字を記憶し、ひき続いて表示される2文字ずつのランダムなアルファベットのうち、いずれか一方にでも記憶していた文字が含まれていれば↑キーを、なければ↓キーをできるだけ速く押すよう求められた。

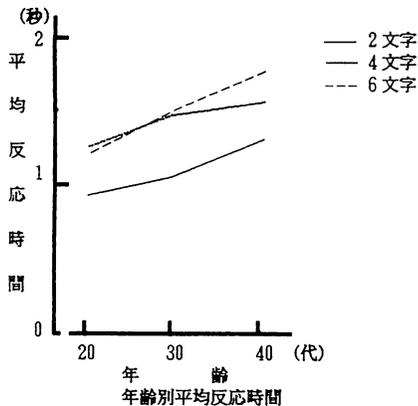
反応文字は被験者がキーを押す毎に変化し、誤反応の場合には、短いブザーが鳴らされた。

検査時間は2分間で、2、4、6文字条件をランダムな順序で各1回ずつ行った。

なお、記憶文字の表示時間は、2文字5秒、4文字10秒、6文字15秒である。

【被験者】
航空自衛隊男性。20代3名、30代5名、40代10名である。

【結果】
平均反応時間は年齢、文字数の増加とともに長くなった。誤反応は平均10.63回であるが、被験者のうちには記憶した文字を忘れ、著しく多い誤反応を記録した者もいた。



【考察】
年齢が高いものは文字の記憶が難しいと報告する者が多く、誤りの数も多かった。誤反応が多いことは記憶負荷が高すぎることが考えられ、弁別反応時間を正確に測定していない可能性がある。

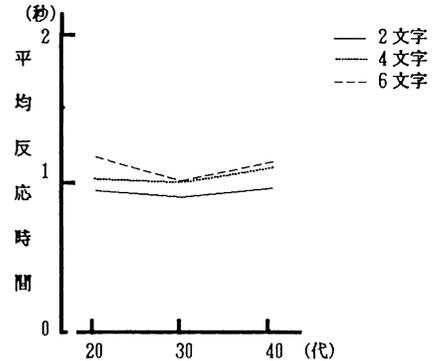
実験 II

【目的】
実験 I の課題を記憶負荷量の小さいものに替え、検討する。

【方法】
記憶文字を2文字はAB、4文字はABCD、6文字はABCDEFとした。他の条件は、実験 I と同じである。

【被験者】
実験 II に参加していない航空自衛隊男性。20代24名、30代12名、40代21名である。

【結果】
年齢条件、文字条件ともに大きな差が見られなかった。誤反応は平均6.36回。40代は文字数が増えるにつれて、5.67、5.57、7.95回と増加している点特徴的であった。



【考察】
英文字に対する識別力・記憶力に個人差が大きく、そのため条件差が現れなかったものと思われる。

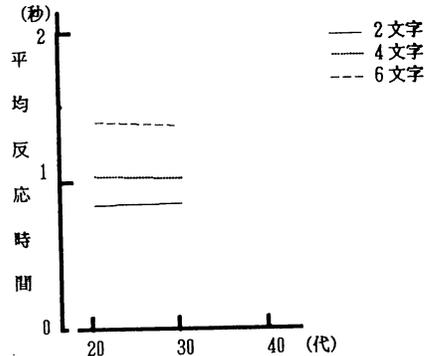
実験 III

【目的】
記憶文字の親近性が、各被験者にとって等しいものとなるよう、数字を用いて実験を行う。

【方法】
記憶文字に2、4、6文字のランダムな数字をもちいた。他の条件は、実験 I と同じである。

【被験者】
実験 I に参加していない航空自衛隊操縦者および航空学生。20代43名、30代18名である。

【結果】
この条件課題が最も高い文字数の影響の識別力を示し、検査として使用に耐え得ると判断される。誤反応は平均6.95回で、20代の6文字条件が若干高かった(8.74回)。



【考察】
年齢差がみられなかったのは、30才前後の者が多かったこと、被験者ソースが類似していたこと、実験環境が均一でなかったことによるものと思われる。今後、対象年齢を拡大し、認知能力評価に最適な年齢区分を検討する予定である。

歯科用文章完成法 (SCT-D)

からみた歯科衛生士像

○ 藤田 主 一 (城西大学)
 駒崎 勉 (城西大学)
 西川 博文 (明海大学)

1. 問題と目的

歯科医療場面に心理学が果たす役割については、今日までいろいろな角度から紹介されてきた。我々は、歯科医師や歯科衛生士、歯科医療行為などと患者や歯科学生との心理的な関わりについて、その解明を試みるために心理学的ないくつかの検査や調査を行ない、それらを比較・検討することで相互関係を分析してきた。その際、我々が多く用いたのは顕在性不安検査(MAS)、歯科用文章完成法(SCT-D)である。たとえば、患者の不安度と歯科医師の患者に対する印象との関係を知る目的で、担当歯科医師の患者への評価とともに上記両検査を合わせて実施したところ、歯科医師の評価と患者の不安の高さとは関連すること、また MASをベースにしながら患者のSCT-Dを解釈することによって、患者の歯科医療場面に於ける心理的特徴が一層明らかにされたのである。

我々は昨年度の本学会において、特に歯科大学学生の心理構造を教育年数を変数にSCT-Dの特性から検討している。そこで、本研究は歯科衛生士専門学校生の歯科医療に対する心理構造を、SCT-Dの結果から明らかにしようとするものである。

2. 方法

1. 被検者：埼玉県内の一年制歯科衛生士専門学校生33名。初回検査実施時の平均年齢19.07歳(18歳～27歳)。
2. 検査材料：新版の歯科用文章完成法(SCT-D)。これは歯科用に作成されたもので、15の項目から成る(表1.参照)。
3. 手続き：一年の教育期間の内、入学時と卒業時の2回、上記SCT-Dを実施した。手続き等は標準法に準拠した。

3. 結果と考察

(1) SCT-Dの構成 - 15項目の中で項目2、項目8は緩衝項目であり採点等はしない。緩衝項目を除いた13項目に記入された反応語は、以下の一定の基準によりスコアリングされる。

- ・ P (生理的反応)：頭痛、動悸、口渇、筋の硬直など。

表 1. SCT-D (新版)

1. 子どもの頃私の歯は _____
2. 治療を痛くないために _____
3. デンタルチェアに座ると _____
4. 注射は _____
5. 歯科の先生は _____
6. 歯を抜くこと _____
7. 歯科の看護婦(衛生士) _____
8. 私の食事は _____
9. 口を開けているとき _____
10. 歯科の先生は、たいてい _____
11. 歯の治療中 _____
12. 受付の窓口で _____
13. 歯を削るとき _____
14. 歯科の看護婦(衛生士)は、いつも _____
15. 私は、自分の口臭 _____

- ・ S (満足反応)：感謝、ほっとした感情、安心など。
- ・ O (中性的反応)：科学的、客観的な事実を述べたもの。
- ・ Ag (攻撃反応)：攻撃、皮肉、批判などの攻撃的感情。
- ・ E (期待反応)：期待感、甘えなどを示すもの。
- ・ F (不安反応)：精神的な緊張感、不安、心配など。
- ・ Fr (不満反応)：不平、不満、強い要求など。
- ・ NA (無答)：NAも一反応と数える。

各項目につき一反応 1点の方法で採点するが、1項目に二つの反応があれば 0.5点ずつを与える。

(2) 全体の反応傾向 - 表2は、SCT-D13項目に対する反応の出現率を入学時と卒業時ごとにとまとめたものである。入学時と卒業時との間で比較的变化が見られた反応は、第一に中性的反応Oの減少(70.1%→59.9%)であり、それを受ける形で生理的反応P、満足反応S、攻撃反応Ag、期待反応Eなどが増加している。これは、おそらく入学時の前後において客観的に、そして冷静に認知していた歯科医療の各場面に對して、歯科衛生士としての専門教育の進行とともに、かなり身近かな存在へ医療をとらえているものと考えられる。

(3) 歯科医師への態度 - 個々の項目の中で、歯科医師に対する2つの項目をまとめてみる。入学時から卒業時への推移で明らかに大きな相連の一つは、O反応の減少(46.2%→29.6%)とAg反応の増加(17.4%→32.6%)である。これは、歯科医師の医師としての専門性や技能を、ある距離感を持ってながめていた入学当初から、卒業時にはそれにも増して歯科医師の態度や性格、人間性などに対して特殊な感情を抱き始めたことを物語るものであろう。

(4) 歯科衛生士への態度 - 自身の将来の職業には特に関心が深いと思われる。これもO反応の減少(58.3%→37.9%)およびS反応の増加(26.5%→39.4%)が特徴的かもしれない。歯科衛生士とはどんな仕事かといった知識的な見方から、歯科衛生士の歯科医療場面に於ける位置づけや役割を、卒業時には柔軟にとらえている姿が理解できると思う。

表 2. SCT-D における反応の結果 (※)

項目	内容	実施	P	S	O	Ag	E	F	Fr	NA
2	治療方法	入学時	0	0	87.9	0	0	3.0	6.1	3.0
		卒業時	0	0	97.0	0	3.0	0	0	0
3	治療イス	入学時	22.7	4.6	45.5	0	0	24.2	0	3.0
		卒業時	37.8	9.1	25.8	0	1.5	25.8	0	0
4	庄 則	入学時	0	1.5	97.0	0	0	1.5	0	0
		卒業時	0	0	98.0	0	0	1.5	0	0
5	歯科医師	入学時	0	16.7	39.4	13.6	4.5	19.7	6.1	0
		卒業時	0	18.2	21.2	31.8	9.1	9.1	10.6	0
6	床 山	入学時	0	0	86.4	0	1.5	12.1	0	0
		卒業時	1.5	0	97.0	0	0	1.5	0	0
7	看護婦(衛生士)	入学時	0	30.3	48.5	1.5	18.2	1.5	0	0
		卒業時	0	45.5	30.3	3.0	18.2	0	3.0	0
9	開口時	入学時	10.6	0	81.9	0	0	4.5	0	3.0
		卒業時	40.9	0	53.0	0	0	6.1	0	0
10	歯科医師	入学時	0	4.5	53.2	21.2	0	13.6	4.5	3.0
		卒業時	0	12.1	37.9	33.3	0	10.6	6.1	0
11	治療中	入学時	13.6	4.5	63.8	1.5	0	13.6	3.0	0
		卒業時	10.6	4.5	48.6	0	4.5	30.3	1.5	0
12	受付窓口	入学時	0	1.5	84.9	0	0	6.1	4.5	3.0
		卒業時	3.0	7.6	77.3	0	6.1	1.5	4.5	0
13	歯の切削	入学時	10.6	0	65.2	0	0	21.2	3.0	0
		卒業時	7.6	0	74.3	0	0	13.6	4.5	0
14	看護婦(衛生士)	入学時	0	22.7	68.2	1.5	6.1	0	1.5	0
		卒業時	0	33.3	45.6	3.0	13.6	0	4.5	0
15	口 臭	入学時	10.6	0	89.4	0	0	0	0	0
		卒業時	27.3	0	72.7	0	0	0	0	0
全 体		入学時	5.3	6.6	70.1	3.0	2.3	9.3	2.2	1.2
		卒業時	9.9	10.0	59.9	5.5	4.3	7.7	2.7	0

問答法による

人生観同定の試み(7)

斎藤幸一郎

○千田茂博

(常磐大学)

(武蔵工業大学)

【目的】

問答法の本来の目的は、内省法や外部観察法ではとらえきれない被験者の人生観を面接を通して被験者の意識を共感的に理解していくことによって同定しようとするところであるが、ここではそれに先立って行なっている文章完成テストのデータのうち、「人生とは・・・・と私は思う」という部分の内容について分析することにより、問答法のための予備的情報を得ることを目的とする。

【方法】

手続き：A大学(都内)の学生149名、B大学(地方都市)の学生99名を被験者として「私は・・・・」、「人生は・・・・と私は思う」、「世の中は・・・・と私は思う」という3つの未完成の文章について20個の自由記入欄を設けた用紙に、それぞれ10分間でできるだけ多く思いつく限りのことを記入してもらった。

分析対象：今回は「人生とは・・・・と私は思う」に関する記述に限定して分析することとした。先の被験者のデータのうち、記述に不備のあるものを除き、また年齢の対応を考慮して、A大学女子学生(AF)、A大学男子学生(AM)、B大学女子学生(BF)、B大学男子学生(BM)の4グループが、それぞれ19歳8名、20歳9名、21歳6名と各グループ23名ずつになるように被験者のデータを抽出し、計92名のデータの「人生とは・・・・と私は思う」の記述のついて分析を行なった。そして、よく出てくる文章表現、言葉をKEY WORDとして、そのKEY WORDの出現頻度(人数)を調べた。ただし、記述の意味内容を考慮して、KEY WORDと表現は異なっても内容的には同一と考えられるものは含め(たとえば「本人次第でどうにでもなる」は「自分次第でなんとでもなる」に含める)、逆にあるKEY WORDを用いてはいるが意味内容が異なる場合は除くこととした(たとえば「自分を愛する」は「愛」から除く)。

【結果と考察】

出現頻度の高いKEY WORD(7名以上)を順に並べたものが表1である。性別によって出現頻度に差がみられるものとしては「苦あれば楽あり」、「楽しいもの」、「自分だけのもの」、「人とかかわりあい」が女子

学生に多く、「ゲーム」が男子学生に多くみられた。また、大学別で出現頻度に差がみられるものは「一回きりしかないもの」、「長いようで短い」、「楽しむべきもの」で、すべてA大学のほうが出現頻度が高い。ただ、B大学女子学生は「自分で切り開くもの」というKEY WORDの出現頻度が23人中13人(57%)と他のグループに比べて特に高く、逆に「自分次第でなんとでもなる」が0人と他の3つのグループとは異なった傾向がみられる。いずれにしても、今回の報告はまだ予備的な段階のものでしかなく、今後、大学生だけではなく、成人も含めたデータを分析していくことが必要である。

表1 KEY WORDの出現頻度 (人数)

No.	KEY WORD	AF	AM	BF	BM	計
1	自分で切り開くもの	5	7	13	5	30
2	苦あれば楽あり	7	4	11	4	26
3	はかないもの	7	8	6	3	24
4	楽しいもの	6	4	8	2	20
5	一回きりしかないもの	7	6	3	1	17
6	愛	4	3	3	7	17
7	山あり谷あり	3	3	4	6	16
8	つらいもの	2	5	6	3	16
9	すばらしいもの	7	2	3	2	14
10	出会い	5	3	1	5	14
11	勉強、学ぶこと	3	4	3	4	14
12	夢	3	5	2	3	13
13	長いようで短い	5	5	2	1	13
14	ゲーム	2	4	1	5	12
15	自分次第でなんとでもなる	4	4	0	3	11
16	人それぞれ	2	2	5	2	11
17	自分だけのもの	4	1	5	1	11
18	おもしろいもの	3	5	2	1	11
19	バラ色	1	2	3	4	10
20	希望	5	1	1	3	10
21	人とかかわりあい	5	1	4	0	10
22	楽しむべきもの	4	4	1	0	9
23	思い通りにはいかないもの	2	2	2	2	8
24	旅のようなもの	2	2	1	3	8
25	偶然	2	4	0	2	8
26	川のようなもの	2	2	2	1	7
27	チャレンジ	3	2	1	1	7
28	ドラマ	1	3	1	2	7

問答法による人生観同定の試み(8)

斎藤幸一郎 千田茂博
(常盤大学) (武蔵工業大学)

【序】

問答法というものは、被験者の意識を観察して一歩として取り出すための方法のみならず、われわれが

開発してきたものである。ところで、心理学における基本的な観察法には3つのものがあり、その第一のものは、人間や動物の外にあらわれ反意や行動を示す対象とする場合の外部的観察法、第二のものは、心理学研究者が自己の意識をみずから観察する場合の内省法であるが、第三の観察法として、研究者が自己以外の他者(指導動物を含む)の意識を対象とする場合の方法として共感的観察法と

いふ便利な道具を用いるという方法を重ねてゆくことによつてはじめて、研究者は、被験者の意識のありのままに次第に深く正確に共感してゆくことが可能となるわけである。
【目的と方法】
今回の研究の主目的は、問答法の信頼性を高めるための方法を試みることである。

それは、共感照合法としても名づけておいてよい。要するに、ただ従来の観察者が問答を行つた結果を出してしまつては、もうこれ以上の研究者Bが、問答のテープを録音したテープを聞くことを通じて、やはり共感的観察(聴取)を行つて、この人は、AB二人の間答を行ない、二人の観察結果に一致したところを出してこようとして、真実的のには、前次表で対象とした2名の被験者の中から、20歳の男子1名A0君と、20歳の女子1名Mk君とを選入し、個別に、問答法の被験者になつてもらう。但し、今回は、各被験者に関して、下記のようないく段階の手続をとつた。

段階1——問答法実施のための準備段階である。千田と斎藤とで、被験者の一連の記入内容(「私は…」)、「人生とは…」、「世の中は…」の未完成文章に対する各10分間(の記入内容)を検討し7.25に話し合い、被験者の質問に際して話題を必ずこまめにそろえ、この話し合いを7.1/録音した。

段階2——被験者の問答の段階である。斎藤が直接被験者の問答を行なう、だが、問答内容は必ず7.1/録音した。所要時間は被験者A0君の場合約50分、Mk君の場合約65分であった。問答に当り、その留意事項として、たまたまの(1)は、前回(昨年)まで、われわれの研究によつて得られた知見によつた。段階3——問答内容検討の段階である。段階2で得られた録音を再生し7.2、千田と斎藤とで討議を行ない、被験者の意識のあり方について検討を加えた。そして、そこで2人の問答内容を7.3/録音し、さらに検討の材料とした。

【結果】

上記の手続によつて到達した各被験者の人生観同定の結果は下記の通りであった。
被験者A0君の場合——段階1で、被験者による記入内容全体を検討した限りでは、この被験者は、自分について自己肯定的であり、人生については絶望的にならなく、世の中についても否定的な面は見えなく、むしろA0君が不思議に感じられるほど「あつた」のであるが、段階3までを終つてからは、自分でも言つておけるように、「偽善趣味で、はまにかまえて生きたが、という自分であつて、実は、それは世の中、ぱつぱつと気が持たないわけはない」といふことが、た。しかし、現状では、「完全な偽善主義者になり切れずに居り、かといふ、それを否定し切ることができず、中途半端な緊張状態にある」といふのが彼の現状である。

被験者Mk君の場合——彼女によつて記入された内容からすると、「人生とは…」では「ちんかさい文ばつ」の表現が、「世の中は…」では「はつたすの言い方が多い」ことが目立つた。段階2では、フルバット先での最近の不平不満の体験、異性の交達への「かすはなれず」のつきあひの経験、母親との理解し合えない関係などを話された。そして結論的に、彼女の人生観はまだ流動的な状態にあり、カウソセリレツの場合のように、亦しよ問答を通じて彼女の

もの見方が変化していったことを示した。

ナルシシズムの基礎的研究

—— P O S ・ G D S と

N P I ・ E F I の関係について——

福田 美由紀 (関西学院大学)

問 題

ナルシシズムへの関心が増大する昨今、ますます注目を浴びているのが Kohut による自己の発達理論である。彼は、Freud と同じく「自体愛」から出発しながら、そのあと「未熟な乳児期自己愛期」があり、次いで「高度で健康な自己愛期」を考え、ナルシシズムを自然な発達段階に見られるものとしている。この未熟な自己愛期には、「誇大自己」「理想化された親イメージ」「分身欲求」の3つの欲求があり、これらの欲求が満足されないと、後に、自己が断片化し病的なナルシシズムに陥るとしている。最近、彼の概念を中心に Lapan と Paton (1986) が偽自律性尺度 (Pseudoautonomy, 以下 P O S - 誇大自己より) と仲間集団への依存尺度 (Peer-Group Dependence, 以下 G D S - 理想化された親イメージより) を開発し、妥当性研究を行なう中で、臨床群と正常群の識別を可能にした。そこで本研究では P S O と G D S の日本版を作成し、ナルシシズム的人格目録 (N P I)、及び自我機能調査票 (E F I) との関係を検討することで、その信頼性及び併存的妥当性研究を行なうことを目的とする。

方 法

被験者：大学生 262名 (男子 102名、女子 160名)
 手続き：被験者に P O S ・ G D S と N P I ・ E F I を集団施行した。P O S ・ G D S ・ N P I はそれぞれ8項目、8項目、54項目から成る二者択一強制選択法である。E F I については、中西・古市 (1981) が、自我諸機能を評定するために Bellak らの考案した臨床的面接法を改定したもので、①総合・統合機能 (S M) ②現実感覚 (R S) ③衝動統制 (R C) ④対象関係 (O

R) ⑤防衛機能 (D F) ⑥刺激障壁 (S B) ⑦自立的機能 (A F) ⑧現実検討 (R T)、の8つの自我機能の水準を測定評価するための8下位尺度72項目から成る質問紙であり、妥当性も確認されている。

結果と考察

(1) 内的一貫性と項目分析

Cronbachのα係数を求めると、.51と.65で、原版の.77と.75に比べ、あまり高い信頼性は得られなかった。また、項目選択率については男女にかなりの差が認められ、P O S では1項目を除く全ての項目で女子より男子が高く(3項目は有意差あり)、G D S では全項目で有意に男子より女子が高かった。以下男女ごとに検討する。

(2) 総得点

P O S と G D S の平均値は男子 2.9 (SD=1.8), 4.6 (SD=2.0) 女子 2.0 (SD=1.6), 5.7 (SD=1.8) で、双方とも男女間に有意な差がみられた ($t=3.89, p<.001, t=4.43, p<.001$)。

(3) N P I と E F I との関係

表1はN P I と E F I との相関を示している。P S O については男女ともN P I と正の相関 (.33, $p<.01$, .36 $p<.001$) を示したが、E F I との相関は認められなかった。G D S についてはN P I では女子のみが (-.30, $p<.001$)、E F I では男女とも負の相関 (-.42, $p<.001$, -.28, $p<.001$) がみられた。

以上の結果より、自分自身の内的理想や目標の代理人として他者に防衛的愛着を示すことを意味する「仲間集団への依存尺度」で高得点を得た人はそうでない人より自我機能が低いことが推察され、その意味ではG D S の併存的妥当性は証明されるといえるかもしれない。しかし、この尺度自体がナルシシズムの定義として妥当であるか、また男女でナルシシズムに違いがあるかは今後さらに検討を加える必要があると思われる。

表1. P O S ・ G D S と N P I ・ E F I との相関

		P O S	G D S	N P I	E F I	S M	R S	R C	O R	D F	S B	A F	R T
P O S	男子		-.14	**.33	.10	-.17	-.06	-.01	-.13	.06	-.05	-.05	-.18
	女子		**.23	**.36	.04	-.03	.05	.03	-.07	.12	.07	.15	-.11
G D S	男子	-.14		-.18	***-.42	.02	***-.38	***-.35	-.21	***-.45	***-.42	*.27	*.27
	女子	**.23		***-.30	***-.28	-.13	***-.31	***-.23	-.20	***-.23	-.14	***-.21	-.03
N P I	男子	**.33	-.18		.06	-.10	.03	.04	.08	.12	.02	.14	-.01
	女子	**.36	***-.30		.06	-.05	.08	.04	.07	-.01	.01	.15	-.01

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

アルコール依存症者のBody Imageに関する研究

— ロールシャッハ法による検討 —

○柴崎圭子 稲富正治 中村昭之
 (駒沢大学大学院人文科学研究科) (国立療養所久里浜病院) (駒沢大学文学部)

<目的>

近年アルコール依存症者の数は増加の傾向にあり、さらにアルコールの女性層への普及、若年化などのため問題が複雑になってきている。しかし、彼らの心理的側面についての研究はまだ不十分で、その特性も明らかにされていない。

本研究では、アルコールの問題は身体的なものであることに注目し、ロールシャッハ・テストで性格特性の一側面としての身体像境界 (Body Image Boundaries) を測定し、彼らが自分の身体をどのように感じているのか、またそれは彼らの病理とどのように関わっているのかということについて検討した。

<方法>

対象者：アルコール依存症の診断を受け、横須賀市にあるK病院に入院加療中の男性 (以下、AL群) 13名を対象とし、著しい精神症状を伴う者、アルコール問題や加齢によって心理検査が施行困難な程、知的能力が低い者を除外した。また、統制群 (以下、C群) との教育歴の条件をそろえるために学歴を大卒もしくは大学中退の者に限った。なお心理検査施行時は入院後 2週間以上たって退薬症状が消えた後とした。年齢は、28-51歳 (平均 40.0歳) であった。C群は、男子大学生 (以下、C群) 15名とした。年齢は、18-23歳 (平均 20.8歳) であった。

手続き：各対象者に個別にロールシャッハ・テストを施行し、各々のプロトコルから Fisher & Cleveland (1968) の身体像境界得点に準拠した採点基準 (木場ら、1980) に基づいて Barrier反応 (以下、B反応) と Penetration反応 (以下、P反応) とを採点した。

<結果と考察>

表1は各群のB反応とP反応の出現数であり、その平均がB反応ではAL群3.31 C群4.90、P反応ではAL群3.08 C群1.90で、統計的には有意差はなかったが、B反応ではC群、P反応ではAL群が傾向的に出現数が多いという結果であった。

表1 B反応およびP反応の出現数

	B反応	mean (SD)	P反応	mean (SD)
AL群	43	3.31 (2.09)	40	3.08 (2.53)
C群	73	4.90 (2.39)	29	1.90 (1.39)

表2はB反応とP反応の出現率である。B%ではAL群21.97 C群23.75、P%ではAL群19.84 C群8.83となり、B%ではC群、P%ではAL群が傾向的に出現率が高いという結果であった。

表2 B反応およびP反応の出現率(B%,P%)

	B%	mean	range	P%	mean	range
AL群	21.97	7.7-50.0	19.84	0-60.0		
C群	23.75	4.0-43.5	8.83	0-16.7		

本研究の結果、AL群とC群のB反応、P反応の出現数では有意な差は得られず、傾向としての域を出なかった。しかし、AL群で得られた高いP反応、低いB反応という傾向は、彼らの身体像境界がいまいで脆く崩れやすいものであり、未成熟で対人関係でも不適応になりやすく、自己をうまく統制できないと考えられる。

さらに、高いP反応というのは従来の精神分裂病を対象とした研究の結果 (木場ら、1976、1981; 橋本、1979; 梶塚、1977) と同じ傾向にあり、ある意味では精神分裂病者と同じ性格特性を持っているといえよう。彼らのアルコールに対するコントロールのなさを見ると上述の性格特性と密接な関連を持つということが考えられる。

今回の研究では、教育歴に限って条件をそろえただけであり、今後は対象者の生育歴や症状の細かな分類をふまえた上でさらに対象数を増やし研究を進める予定である。

抑うつの研究 1

— Hopelessness Scaleを用いて—

○ 畠山 浩子 松坂 利之 中村 昭之
(駒沢大学大学院人文科学研究科) (駒沢大学文学部)

目的

絶望感は、従来数量化するには困難なものであると考えられてきた。しかしStotland(1969)は、将来や、自己に対する否定的な予測をあらわす言葉により客観化されうるとした。Beck, A.T. (1974)は、絶望感を測定するために、将来に関する20の項目からなる質問紙 Hopelessness Scale(HS)を作成した。

HSを用いたうつ病患者を対象とした調査では、特に重度の抑うつ状態において、絶望感が自殺願望を引き起すもっとも一般的な動機の一つであり(Beck, A.T., 1979)、抑うつの中核的役割を果たしていることが報告された(Nekanda-Trepka, C. J. S.ら, 1983)。また我が国における調査では、中村ら(1988)が、HSをもちいて大学生を対象に絶望感と充実感とのかわりを調査した結果、充実感に対して絶望感が抑制的に働いていることを報告している。

本研究では、大学生を調査対象とし、抑うつ因子構造を明らかにする前段階として、HSを五件法により再検討することを目的とする。

方法

【調査対象】東京近辺の大学生、専門学校生、高校生 1057人(男子 451人、女子 606人)

内訳：大学生、専門学校生562人 (男子 252人、女子 310人)、高校生 495人 (男子 199人、女子 296人)

【調査期間】1987年 6月から 7月中旬

【質問紙】中村ら(1988)が日本語に翻訳したHS (20項目、二件法)を五件法で評定させた。

【調査方法】集団形式による自由速度法

結果と考察

HSの20項目について主成分分析法・直交バリマックス回転を行なった結果、4因子が抽出された。4因子中で因子負荷量の絶対値が0.35以上のものを取りあげ因子の解釈を行った。これら4因子で全分散の52.68%を説明している。()内の数字は、因子寄与率をあら

わしている。

第一因子：将来への絶望感 (23.50%)

第二因子：将来への期待の欠如 (11.32%)

第三因子：将来への不安 (9.74%)

第四因子：目的達成への見込の欠如 (7.94%)

第一因子は10項目からなり、将来に対する否定的な態度を示すものからなっている。第二因子は、4項目からなり、将来に対する期待感を表現する項目からなる。これらは逆転項目のため、意味づけは「将来への期待の欠如」とした。第三因子は3項目からなり、将来の見通しに対する項目からなっている。第四因子は2項目からなり、目的達成に関する項目からなっている。因子分析により項目番号の14が除外された。他の統計処理は、残りの19項目で行った。

因子合成得点の平均では、大学生、高校生とも性差は見られなかった(表1、2)。大学生、高校生間の差も見られなかった(表3)が、傾向としては、高校生のほうが数値が高いことから、進路問題や不安定な青年期の状態等が何らかの影響を及ぼしているように思われる。

各項目のMSA値の全体平均は、0.94という数値が算出された。また折半法による信頼性係数は0.890であった。中村ら(1988)による二件法による調査の報告では、折半法による信頼性係数0.783が報告されている。今回、五件法で試行する事によって、多少精度が高くなったものと思われる。

今後は、さらに質問紙としての精度を高め、絶望感が、抑うつ状態に対してどのように作用しているのかを検討する必要がある。

表1 大学生全体の因子得点の平均(標準偏差)

因子	男子(252人)	女子(310人)
I	10.897(7.211)	9.914(6.949)
II	6.262(2.844)	6.023(2.722)
III	6.655(2.560)	7.067(2.570)
IV	4.004(1.654)	4.179(1.659)
因子全体	27.843(11.671)	27.131(10.961)

表3 受検者全体の因子得点の平均(標準偏差)

因子	大学生(562人)	高校生(495人)	全体(1057人)
I	10.344(7.211)	13.612(6.949)	11.833(7.209)
II	6.133(2.844)	6.740(2.722)	6.409(2.777)
III	6.873(2.560)	6.443(2.570)	6.658(2.556)
IV	4.106(1.654)	4.467(1.659)	4.274(1.796)
因子全体	27.451(11.671)	31.123(10.961)	29.173(11.431)

表2 高校生全体の因子得点の平均(標準偏差)

因子	男子(199人)	女子(296人)
I	14.080(7.211)	13.137(6.949)
II	6.810(2.844)	6.669(2.722)
III	6.558(2.560)	6.298(2.570)
IV	4.458(1.654)	4.470(1.659)
因子全体	31.941(11.671)	30.572(10.961)

抑うつの研究 II

— 充実感尺度との対比による —

○水田 茂久 畠山 浩子 松坂 利之
 (駒沢大学大学院人文科学研究科)
 板津 祐己 中村 昭之
 (駒沢大学文学部)

目的

Hopelessnessは抑うつにおいて最もよく見受けられる態度である。また、これはその程度の差こそあれ臨床的うつ病患者だけでなく、一般の人々においても見られるものである。すなわち、Hopelessnessが人生に対する基本的態度要因の一つである「希望(hope)」の喪失状態として位置しているからであろう。

このHopelessnessはそれまで数量化困難なものであると考えられていたが、Beck, A.T. (1974)は将来に対する様々な態度に関しての20の項目から成る質問紙形式の Beck's Hopelessness Scale (以下HSと略す)を作成した。また、このHSは抑うつの測定に用いられるBDI (Beck Depression Inventory, Beck 1961) と高い相関があると報告されている。わが国におけるHSの研究(中村、林、板津、1988)においてはHSより6つの因子が抽出され、充実感尺度との対比において高い負の相関があることが報告されている。

そこで本研究は前報においても述べたようにHSへの回答を二件法より五件法へと変更し、Hopelessnessの対比概念として充実感を取り上げ、HSと充実感尺度との間の関係を調査することを目的とする。また、併せて性差についての検討も行なう。

方法

〔調査対象〕関東、東北地区の大学生、高校生435人

内訳：高校生231人(男子152人、女子79人)

大学生204人(男子125人、女子79人)

〔調査期間〕1987年6月下旬から7月上旬

〔質問紙〕中村ら(1988)の翻訳によるHS(20項目)と、大野(1984)による充実感尺度(53項目)を五件法で実施。

表1 充実感と絶望感の因子得点の相関係数

	第I因子		第II因子		充 実 感 第III因子		第IV因子		合計		
絶	第一因子 ^a	-0.522**	-0.499**	-0.279**	-0.251**	-0.183**	-0.148*	-0.228**	-0.240**	-0.434**	-0.459**
			-0.541**		-0.302**		-0.213**		-0.221**		-0.505**
望	第二因子 ^b	-0.446**	-0.453**	-0.348**	-0.348**	-0.274**	-0.312**	-0.320**	-0.399**	-0.487**	-0.517**
			-0.461**		-0.360**		-0.253**		-0.214**		-0.474**
感	第三因子 ^c	-0.480**	-0.424**	-0.285**	-0.210**	-0.220**	-0.245**	-0.184**	-0.178*	-0.459**	-0.414**
			-0.521**		-0.334**		-0.195**		-0.189*		-0.491**
	第四因子 ^d	-0.636**	-0.656**	-0.466**	-0.241**	-0.293**	-0.241**	-0.295**	-0.312**	-0.638**	-0.643**
			-0.619**		-0.480**		-0.340**		-0.280**		-0.635**

a「充実感気分—退屈、空虚感」因子 b「自立、自信—甘え、自信のなさ」因子 * 危険率5%水準で有意差あり 全体 男子
 c「連帯—孤立」因子 d「信頼、時間的展望—不信、時間的展望の拡散」因子 ** 危険率1%水準で有意差あり 女子

〔調査方法〕集団形式による自由速度法

結果

結果に入る前に、本研究とほぼ同時期に実施された研究Iにおいて、HSから4因子が抽出され、(因子名、因子負荷量は研究Iを参照)また、充実感尺度からも4因子が抽出されており、これらの因子を用いて統計処理を行ったことを明かにしておく。

表1は全体、男子、女子のそれぞれについてHSと充実感尺度との各因子の相関を示したものである。これによるとほとんどの因子間の相関は1%水準で有意である。

また、全体においてHSの各因子ごとに最も相関の高い充実感尺度の因子をみると、HSの第I、II、III因子については充実感尺度の第4因子との相関が最も高く、HSの第IV因子については充実感尺度の第2因子との相関が最も高かった。

これらの相関係数について男女差の検定を行ったところ、有意差は見られなかった。

考察

HSの各因子と充実感尺度の各因子との間に高い負の相関が見られたことより、今回も前報で述べたように「Hopelessnessの状態は充実感に対して抑制的に働く」ということが支持された。

また、全体を通してHSの第I、II、III因子と充実感尺度の第4因子との相関が高かったことより、HSは、Hopelessnessというものを将来に対する不信、時間的展望の拡散という視点を中心として測っているのではないかと考えられる。

今回もまた性差が見られなかったことより、青年期におけるHopelessnessと充実感との間の関係に男女差はないといえるであろう。

HSがHopelessnessを時間的展望の拡散という視点から見ているのであれば、自我同一性との関連も十分に考えられるが、この関係は今後の研究課題としていきたい。

精神分裂病者の色彩認知

成田 猛 (東京青梅病院)

はじめに

精神分裂病者の情報処理は、聴覚刺激、視覚刺激を用いて、神経心理学的、電気生理学的に研究され、さまざまな所見が述べられてきた。しかし、色彩刺激に関する研究は少ないようにおもわれる。

目的

精神分裂病者の色彩の認知機能を検討する。

対象

健康成人、精神分裂病者各8例(平均年齢各々28.8、29歳、すべて右手利き)両群とも色盲はない。

方法

刺激 Non-Color刺激: 黒字でアカ、ダイダイ、キイロ、キミドリ、ミドリ、アオ、アイイロ、ムラサキ、アカムラサキと白いカードに各々印刷した9種類。

Color刺激: Non-Color刺激に対応するMunsell Colorを白いカードに貼った9種類。

手続き 被験者に、カードを同時に3枚提示し、似た色の組合せを選択させる(三組法)。試行回数は、84である。これを、同一被験者にNon-Color、Color刺激、各々施行した。

WAIS、Semantic Differential Testもあわせて施行した。

解析 各群のデータは、SMACOFで処理した。個々人のデータは、MDSALで処理した。

結果

1 健康成人群は、Non-Color、Color刺激では、Munsellの色環の刺激布置に対応した。

2 精神分裂病群は、Non-Color刺激では、Munsellの色環の刺激布置に対応しなかったが、Color刺激は対応した。

3 健康成人、精神分裂病者では、両刺激とも個々人に色環の歪みが見られた。

4 健康成人は、両刺激とも ほぼ二次元布置で表現された。精神分裂病者は、Non-Color刺激は 殆ど三次元構造をなし、Color刺激では、概ね二次元布置で表現された。

5 健康成人群のWAISは、言語性課題が一軸に、動作性課題が二軸に表現されたが、精神分裂病者群では、健康成人群の結果と逆に表現された。

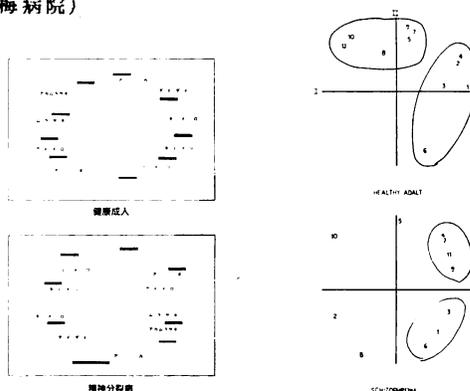


図1 ソマコフによる解析 図2 *WAISの因子分析の結果

考察

図1に見るように、精神分裂病者は、Non-Color、Color刺激(視覚的提示)に、健康成人と同様の対応関係が認められない。この原因は、健康成人の結果から見て刺激のモダリティにあるとは考えにくい。例えば、同じ視覚刺激「アカ」でも 彼らはNon-Color刺激、Color刺激各々の類似性判断が異なっている。これは、精神分裂病者では両刺激に対する情報処理のストラテジーが異なっているため生じると考えられる。

知覚とは、さまざまな情報の中から本質的な手がかりを捜す能動的な探求過程である。これには高次の中枢過程が関与していると言われる。精神分裂病者は範疇化、抽象化レベルに障害があるのかもしれない。しかし、精神分裂病者は、Non-Color刺激(文字のレベル)だけに障害があらわれ、Color刺激(色彩のレベル)には粗大な障害が認められなかった。色名呼称障害、色彩失認も認められない。精神分裂病者の色彩の認知障害は、神経心理学的な検索では 鋭敏に反映されないと考えられる。

ただし、精神分裂病者の色彩に関する事象関連電位の研究(古賀、成田 1987)では、色彩認知障害が確認されている。この障害は電気生理学的にだけ反映される微細なものであると推測される。

精神分裂病者のNon-Color刺激、Color刺激の不一致は、彼らが病気を繰り返すことにより、図2に見ような高次機能が損なわれることで、生じてくるものと考えられる。その意味では、精神分裂病者の色彩の認知障害は二次的なものであると推測される。

* 1 一般的知識 2 一般的理解 3 算数問題 4 類似問題 5 歌唱問題
6 単語問題 7 符号問題 8 絵画完成 9 積木問題 10 絵画配列 11 組合せ問題

国立大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の学習意識の研究（その1）

○村上生美（新潟大学医療技術短期大学部）
原 幸子（同上）
内海 滉（千葉大学看護学部）

はじめに

看護基礎教育課程終了後、看護実務にある卒業生にとって卒業後の学習は大きな課題であり、専門職業人として必須の要件である。その課題は個人的研鑽によるものと、組織的研鑽によるものの両側面から果たされているといえよう。

卒後教育プログラムは卒業生の学習意識の認識のうえにたって企画する必要があり計画的、継続的取り組みが望ましい。そこで、卒業生の学習に対する意識を明確にする目的でアンケート調査を試みた。今回はその第一報として学習の必要性、研修会等参加希望に関する認識の調査結果を報告する。

1. 研究目的

国立大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の卒業後の学習に関する意識を明らかにする。

2. 研究方法

昭和55年度国立大学医療技術短期大学部看護学科卒業生（卒業後7年）11大学、688名に対して卒業後受けた教育、卒業後の学習について昭和62年12月、郵送によるアンケート調査を行った。

3. 結果

1) 回収

調査対象688名中 205名（29.8%）が有効回答であった。回答者の年齢は27才から36才におよび、平均年齢は27.9才であった。また男子1.0%、女子99.0%、結婚歴は未婚39.0%、既婚61.0%であった。既婚者の子供数は0人から3人であり、平均子供数は1.3人、既婚者中子供のいない者は21.6%であった。

2) 卒業後の進路

医療技術短期大学部卒業後の進路は、進学しなかった者114名（55.6%）、進学した者90名（43.9%）、その他1名（0.5%）であった。進学者の内容は保健婦学校40名（19.5%）、養護教諭養成課程25名（12.2%）、助産婦学校21名（10.2%）、大学4名（2.0%）であった。

3) 現職

医療技術短期大学部卒業後7年後の現在、職業に就いているもの148名（72.2%）、就いていないもの56名（27.3%）であった。

4) 卒業後の学習

現在の日常の職業の中で学習の必要性を感じる者は全体で176名（85.9%）、感じないもの9名（4.4%）、その他20名（9.8%）であった。

学習の必要性を卒業後の進路別にみると、必要性を感じた者は大学進学者の場合100%、保健婦学校進学者97.5%、養護教諭養成課程進学者92.0%、助産婦学校進学者90.5%、進学しなかった者78.9%であった。必要性を感じなかった者は進学しなかった者の場合6.1%、助産婦学校進学者4.8%、養護教諭養成課程進学者4.0%であった。

5) 学会出席

卒業後現在までに学会に出席した者は全体の54.1%、出

席したことのない者38.5%であった。今後学会出席を希望するか否かについて尋ねたところ、希望者は全体の47.3%、希望しない者25.4%、無回答27.8%であった。

学会出席希望を卒業後の進路別にみると、大学進学者の場合100%、助産婦学校進学者71.4%、保健婦学校進学者52.6%、進学しなかった者43.9%、養護教諭養成課程進学者28.0%であった。

6) 研修会出席希望

卒業生の研修会、講習会等への出席希望は、希望する者92名（44.9%）、希望しない者113名（56.1%）であった。研修会出席希望を卒業後の進路別にみると、大学進学者の場合66.7%、保健婦学校卒業生60.0%、養護教諭養成課程進学者56.0%、助産婦学校進学者52.4%、進学しなかった者35.1%であった。

7) 専門誌購読

卒業生の専門誌購読状況は1冊の者58名（28.3%）、2冊38名（18.5%）、3冊以上9名（4.4%）、購読していない者100名（48.8%）であった。

4. 考察

われわれは卒業生の卒業後の学習意識を明らかにするために卒業生の学習ニーズ、学会・研修会出席希望、専門誌購読状況等について郵送によるアンケート調査を試みた。

卒業生の学習に対するニーズは高く、卒業後の進路との関係は進学した者に高い傾向を示した。卒業後、保健婦、助産婦、看護婦、養護教員として働く職場の環境は働く者の学習ニーズと密接に関係する。すなわち、職場の学習環境、学習を助ける人的環境、専門職同志の相互関係、その専門職を取り巻く研究会等の社会環境がその代表であろう。

また、卒業生の学習ニーズは基礎教育（補習的基礎教育を含む）とも関係が深いと考える。医療技術短期大学部における教育は、看護の基本的理論と技術、人間的成長を中心課題に据えたものであり、学生は卒業後の学び方を学んで卒業すると言っても過言ではなく、卒業後の学習ニーズの高さも当然といえよう。

しかし、卒業後進学した者により高い学習ニーズが認められたことは上記の社会環境的要因が強いと考えられる。例えば臨床における看護と比較して相談相手や学習の場の限られた養護教員等はその代表ともいえよう。また、3年間学んだ者と4年間学んだ者との間の学習意識に関する何等かの相違の探求は今後の課題である。

卒業生の学会出席希望者は全体の47.3%、研修会出席希望者は44.9%、専門誌購読は52.2%であり、学習ニーズは認められるが学会、研修会にはやや消極的と言えよう。これは学会や研修会が必ずしも学習ニーズに合致していないという考え方も可能であるが、卒業生の学習ニーズが具体的でなく抽象的であり、したがって学習方法の決定に至らないという考え方もできよう。

おわりに

国立大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の卒業後7年目の学習意識についてアンケート調査した結果、学習意識が強いことが認められたので基礎的報告をした。今後はこの学習意識の構造を多方面から分析したい。

看護学生の母性意識の形成に関する検討

東京女子医科大学看護短期大学 ○高橋真理、
柳沢千衣、
千葉大学看護学部 前原澄子、内海 滉

研究目的：われわれは、母性意識は幼少期からの成育過程のなかで時間をかけて形成されていき、妊娠、出産、育児体験を通して発達させていくものであると広義にとらえている。青年期であり、将来母親になるであろう看護学生が、子どもに関心を持ち、子どもと触れ合う体験をもつことは、母性意識の形成に影響を及ぼすであろうと考え、今回、臨床実習の中で初めて子どもと触れ合う機会である保育園実習を通して、母性意識の形成がどのようにみられるか検討した。

方法：対象は、1988年2月22日から3月4日までに5日間の保育園実習を体験した当看護短大の2年次女子学生56名で、方法は、保育園実習の前後で以下の調査を行い、変化を検討した。①現在子ども好きかどうか¹⁾ ②花沢(1985)を参考に肯定、否定感情各14項目を作成
結果と考察：有効回答者は36名(64.3%)であった。

1、実習前に子ども好きかどうかは、「とても好き」17名(47.2%)、「どちらかという好き」15名(41.7%)、「どちらかという嫌い」3名(8.3%)、「嫌い」1名(2.8%)と子どもに対して肯定感情をもつものは約9割で、平井の調査による一般の女子大生7割より高い集団であり、これは看護を志すものの特徴と言える。

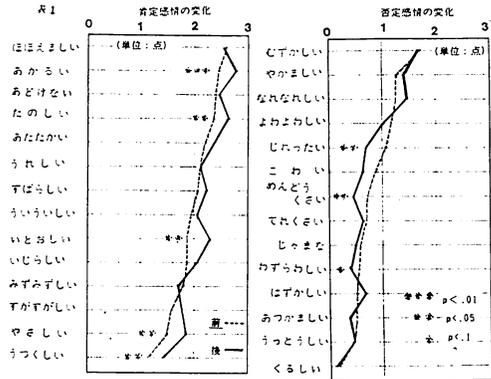
2、子ども好きかどうかを、「とても好き」3点、「どちらかという好き」2点、「どちらかという嫌い」1点、「嫌い」0点とし、実習前後の平均値を比較すると、前2.33、後2.56(p<.05)と、実習後により子どもに対して肯定感情が高くなった。

3、『子どもを頭に思い浮かべたとき、どのように感じるか。』について、肯定と否定感情各14項目を、「非常にそのとおり」3点、「そのとおり」2点、「すこしそのとおり」1点、「そんなことはない」0点とし、実習前後の変化を比較した。

①肯定と否定感情の各々の個人別合計得点の平均値を比較すると、肯定感情は、前26.8、後29.5(p<.05)と実習後に有意に高い。否定感情は、前11.5、後10.0とやや低下したが、有意ではなかった。これは、個人の中での実際の子どものに対する感情は、肯定、否定の方向のみでなく、両面的な感情が起こってくるからであろうと考えられる。

②肯定と否定感情の各14項目の平均値を比較すると、

肯定感情では、「あかるい」(p<.01)、「たのしい」、「やさしい」、「うつくしい」、「いとおいしい」(p<.05)がより上がった。否定感情では、「めんどくさい」、「じれったい」、(p<.05)、「わずらわしい」(p<.1)が下がった。(表1)



③各項目得点の変化を因子分析(バリマックス法)すると、3因子が抽出された。第1因子は、「あたたかい」、「うれしい」、「いじらしい」、「いとおいしい」、「やさしい」で、『愛着感情』(=肯定感情)、第2因子は、「すがすがしい」、「ほほえましい」、「ういういしい」、「みずみずしい」、「うつくしい」、「じゃまな」、「めんどくさい」で、『無邪気感情』(=両価感情)、第3因子は、「あつかましい」、「こわい」、「わずらわしい」、「うとうしい」、「くるしい」で、『迷惑感情』(=否定感情)と解釈した。(表2) ④各学生の因子スコアより、それぞれの特性との相関を分析した。

表2 回転後の因子負荷量

	第1因子 愛着感情	第2因子 無邪気感情	第3因子 迷惑感情
あたたかい	.54	.01	.36
うれしい	.48	.42	.07
いじらしい	.43	.08	.03
いとおいしい	.69	.09	.18
やさしい	.61	.08	.07
すがすがしい	.26	.58	.04
ほほえましい	.22	.47	.01
ういういしい	.19	.51	.15
みずみずしい	.19	.46	.08
うつくしい	.52	.47	.18
じゃまな	.10	.56	.23
めんどくさい	.31	.46	.19
あつかましい	.09	.15	.55
こわい	.02	.38	.44
わずらわしい	.08	.01	.51
うとうしい	.04	-.04	.74
くるしい	.01	.02	.66

以上より、子どもと触れ合う体験は、看護学生の母性意識に影響を及ぼし、子どもに対する感情として、肯定感情、否定感情、両価感情の3つが認められた。

引用文献：1) 訖摩武俊監修：ホッケジ・性格の心理1、40頁、プレジデント出版、1985。 2) 平井信義編：母性愛の研究Ⅰ、176~178頁、同文書院、1981。

看護教育による看護学生の意識構造の変容（その2）
 草野美根子（長崎大学医療技術短期大学部）
 内海 凜（千葉大学看護学部）

<目的>看護教育の中で臨床実習の影響は大きいと思われる。第54回日本応用心理学会では、看護学生のはじめての臨床実習に対する感想録をもとに因子分析を行ない、意識構造の変容を捉えた。今回は、更に臨床実習終了後に同様の調査を施行したので、その結果を比較して報告する。

<目的>長崎大学医療技術短期大学部に学ぶ看護学生45名（回収率=94%）を対象とした。

<方法>臨床実習開始前と終了後の自由感想文を分析した。「臨床実習後次のようなことについて書いて下さい。1)嬉しかったこと、楽しかったこと、愉快だったこと。2)賞められたこと、役立ったこと。3)困ったこと、戸惑ったこと、不安だったこと。4)悲しかったこと、辛かったこと、イヤだったこと。5)興味あること、これから勉強しようと思うこと」とし各質問欄に自由に記載させた。各質問欄の記載事項を内容、話題数、文字数を数え、関係した人間、対象となった事項などを分類した。因子分析により3因子を抽出し、各学生の因子スコアをかれらの入学時の身上調査により群別に平均値を算出して比較検討した。

<結果>3因子を抽出し、第1因子（興味因子）、第2因子（役立つ因子）、第3因子（賞められ因子）、とした。（表1）

各因子間の実習開始前と実習終了後の平均値をt-検定し、表2のような成績を得た。

すなわち、有意差の認められたものは、県内出身の者-県外出身の者、私立高校出身の者-公立高校出身の者、母が有職の者-母が無職の者、家族に医療関係職のいる者-いない者、家族あるいは本人に病気の経験のある者-ない者、生徒会活動だけの者-体育系活動だけの者などであった。

表1 因子分析による3因子の各質問項目からの因子負荷量

1 興味因子	2 役立つ因子	3 賞められ因子	質問項目
0.73	-0.07	0.16	55) 興味あることの項目数
0.71	0.08	0.16	58) 興味あること内容(看護技術)
0.68	0.10	0.43	50) 楽しかったことの内容
0.68	0.00	0.07	59) 興味あることの内容(その他)
0.67	-0.15	-0.07	35) 辛かったことの内容(その他)
-0.10	0.76	0.04	8) 役立ったことの内容(実習態度)
-0.01	0.70	0.06	9) 役立ったことの内容(看護技術)
0.24	0.68	0.26	6) 役立ったことの項目数
0.25	0.67	0.13	10) 役立ったことの内容(その他)
0.15	0.64	-0.10	29) 悲しかったことの内容(実習内容)
0.11	-0.06	0.73	1) 賞められたことの項目数
0.04	-0.16	0.66	3) 賞められたことの内容(実習態度)
0.19	-0.27	0.66	5) 賞められたことの内容(その他)
-0.00	-0.35	0.64	4) 賞められたことの内容(看護技術)
-0.04	0.43	0.62	11) 困ったことの項目数

<考察>有意差の認められた県外出身の者は県内出身の者に比較して、第3因子（賞められ因子）が高く、他県における期待感の大きさを物語っているように思われる。しかしながら実習後に、両者の差のみられないことは、県内出身の者と県外出身の者とのそれ程の違いがなかったと思われる。私立高校出身の者と公立高校出身の者で実習前にそれぞれ公立高校では第1因子（興味因子）、私立高校では第2因子（役立つ因子）が高く、公立私立高校の教育方針の方向性を思わせるものがある。この傾向は実習後にも、維持され、公立高校出身者の課題に対する取組みの姿勢が窺われた。実習後の私立高校に第3因子が高いことは、私立高校出身の者の社会性の豊かさとも考えられた。

母が有職の者は、そうでない者に比べて、実習前後により強い興味を抱いていることは、母親への関心が学習の動機に昇華されている面が推定された。

また、逆に、家族に医療関係職のいる者では、実習前に、第3因子（賞められ因子）が低く、家族の医療関係を身近に眺めて、酷しく批判的立場を保持していることも窺えよう。

家族あるいは本人に病気の経験のある者の実習前の第2因子（役立つ因子）の高値にも期待と失望とが感ぜられる。本人は病気の経験を通して、実習前の知識の修得に頗る共感を覚えていたものが、現実の世界では、自分の病気の経験とは別に、全く異質の価値体系を悟らされたものでもあろう。

生徒会の者と体育系活動の者との比較では第1因子（興味因子）で実習前後の興味意識が逆転する。実習前では生徒会が高く、実習後では体育系が高い。これは、生徒会の者には知的欲求が、体育系活動の者には肉体的労働の喜びが仮定される。体育系の者には、実習後第3因子（賞められ因子）が上昇し、いかに、肉体的労働のやり甲斐がかれらを満足させているかが考えられる。更に看護学生の学習の動機を活用する上で、かれらのクラブ活動の影響は調査されるべきである。

表2 実習前後で有意差の認められた項目

項目	DF	実習前			実習後		
		第1因子	第2因子	第3因子	第1因子	第2因子	第3因子
県内-県外	45	0.13	1.90	2.33*	1.09	1.74	1.73
私立-公立高校	45	10.14*	2.78*	0.85	2.63*	1.56	2.02*
母有職-無職	44	3.29*	1.26	1.16	2.07*	0.36	2.15*
家族医療職-それ以外	45	0.56	0.76	3.47*	0.09	0.39	1.64
病気の経験あり-なし	45	0.47	2.41*	1.58	0.63	0.83	1.34
生徒会-体育活動	23	4.20*	6.81*	0.76	2.24*	1.75	2.65*

* 有意差あり

看護態度の意識（第1報）

—臨床場面における態度に関する看護婦と看護学生との意識構造の比較—

○森下節子（都立医療技術短期大学） 鈴木信子（都立荏原看護専門学校） 小池妙子（都立板橋看護専門学校）
玉木ミヨ子（都立広尾看護専門学校） 内海汎（千葉大学看護学部）

看護婦の態度は、患者に対するケアや医師等との関係を円滑に維持する上に大きな影響を与える。V.ヘンダーソンは、看護婦の仕事には、自己を知り、他者への理解と同情心をもった人格が要求され、それが看護ケアの効果をも左右するといっている。それゆえ、看護基礎教育において、知識、技術の習得と併せて態度の育成を教育目標に掲げている学校が多い。それを教育する科目としては、臨床実習が有効であると、小池等は報告している。臨床実習は、学生が自らの思考や判断をもとに能動的に行動することを要求されるからである。その行動の反応を通して学生が意識している態度を把握する事が教育上重要である。同時に、現在医療の場で活動している看護婦はどのような意識をもっているのかを知り、双方の意識構造を明確にすることは、看護基礎教育における態度教育に関する方向性を見出せるのではないかと考える。そこで今回は、「臨床場面における看護婦の態度」に対する看護学生の意識と看護婦との意識とを調査した。その結果、看護学生と看護婦との意識には、構造的な相違があることが認められた。

1. 研究方法

1) 調査内容

臨床場面から『挨拶、申し送り時、援助場面、記録報告、人間関係、自己研修』を抽出し、任意に配列して各項目に3段階のスケールを付記した。それは、実行できるを3点、どちらともいえないを2点、実行できないを1点に配点した。項目数は28である。

2) 対象

看護専門学校（3年課程）6校の3年次学生341名。研修中の看護婦203名。

3) 調査の手続

研究対象とした施設は機縁法に基づき抽出した。

4) 調査期間

昭和62年5月中旬より10月上旬まで。

2. 結果

学生の回答と看護婦の回答を別々に28変数を因子分析し、さらにバリマックス回転により処理し、それぞれ第3因子まで抽出した。

①学生群の因子負荷量の高いものは、第1因子は、項目2「忙しくても時間外でも頼まれたことは責任を

もってやる」等患者に関する項目が多い。これを対患者因子と命名した。第2因子は、項目23「学習に必要な文献を探索したり、講習会に積極的に参加している」等知的好奇心を持ち、学習する意欲をもっていると考えられる項目が多い。これを学習因子と命名した。

第3因子は、項目5「ユニホームを着用するのにふさわしい清潔な髪型をしている」等相手を配慮し人間関係に影響を与える叙述が多い。これを対人間関係因子と命名した。

②看護婦群の因子負荷量の高いものは、第1因子は、

項目17「仕事上に必要な専門雑誌、専門書を読んでいる」等患者に対する態度としてすでに学習した内容から“あるべき姿”を回答していると考えられる。これを対建て前的患者因子と命名した。第2因子は、項目16「チーム・メンバーの仕事が残っている時、積極的に助言できる」等同僚に対する人間関係に関する叙述が多く、これを対同僚因子と命名した。第3因子は、項目27「患者が説明を正しく受け止めない時でも相手を責めない」等患者に誠意を持って対応する項目が多い。これを受容的患者因子と命名した。

これらのことから、学生は、臨床実習を授業としてとらえていることがわかる。そのため、学生にとって学習対象である患者は、患者因子となっている。また、学生が意識している学習課題は学習因子となっている。そして、実習を効果的におこなうための他者への配慮は人間関係因子となっているものと考えられる。

看護婦群は、患者因子と同僚因子に意味的に分類されるものと考えられる。患者因子は、さらに、学生群における学習因子と患者因子とが合体して患者因子を形成している。第1因子にみるように知識として蓄積されたものからの回答と、第3因子にみるように臨床経験をj通して培った患者への思いやりを共なった心情的な回答と、患者のとらえ方には2種類があるものと推察された。

看護態度の意識（第2報）

看護学生の実習における意識構造

○内海 凜（千葉大学看護学部）

森下 節子（東京都立医療技術短大）

小池 妙子（東京都立板橋看護専門学校）

鈴木 信子（東京都立荏原看護専門学校）

玉木ミヨ子（東京都立広尾看護専門学校）

第1報と同じ「看護学生の実習における態度に関するアンケート」28項目を3年課程の看護専門学校に在学する看護学生341名について施行した際に、同時に追加した2項の質問の回答の傾向について分析した。

すなわち、質問1)「看護態度の指導を希望するか」質問2)「今まで病院に入院したことがあるか」の2問である。全体で、質問1)希望129-希望せず193で、質問2)入院経験121-未経験219、その相関係数.034で、各学校間、東京・地方間にも相関係数の差はなく、回答の傾向にも有意差はみられなかった。

看護学生の実習における態度のアンケート28項目を回答者341名について因子分析を施行して得た3因子の各質問項目回答の因子負荷量は次のようであった：

第1因子[対患者因子]（カッコ内は因子負荷量）

①「批判的でうるさい患者のナースコールに快く応ずる」(.66) ②「忙がしくても患者から頼まれたことは責任をもってやる」(.58) ③「他の援助に忙がしくても必ず患者の質問には応える」(.57) ④「闘病意欲が低く指示を守らない患者の訴えでもきける」(.55) ⑤「患者が説明を正しく受け止めないときでも相手を責めない」(.52) 等

第2因子[学習因子] ①「学習に必要な文献を探索し、講習会に参加する」(.58) ②「申し送りを問題意識をもってきける」(.58) ③「医療チームメンバーの中で正しいと思う自分の考えがいえる」(.56) ④「患者によい援助をするため、課題をみいだし常に学習している」(.53) ⑤「専門誌を読んでいる」(.49) 等

第3因子[人間関係因子] ①「ユニホームを着用するにふさわしい髪型をしている」(.66) ②「実習中に約束や時間を守り他人に迷惑をかけない」(.43) ③「実習を振り返り自己をみつめる」(.43) ④「技術が未熟と感じた時、指導をあおぐ」(.42) ⑤「無菌操作など面倒がらずにやる」(.42) 等

各学生の因子スコアからの学校単位の平均値：

A校 n=68 f1 -.210 f2 -.195 f3 -.146

B校 n=44 f1 .285 f2 .385 f3 -.354

C校 n=51 f1 .091 f2 -.021 f3 .450

D校 n=22 f1 -.256 f2 -.184 f3 .416

E校 n=35 f1 .245 f2 -.016 f3 -.200

F校 n=121 f1 -.048 f2 .016 f3 .000

A,B,C,F校は都内の看護専門学校であるに対しD,E校地方の看護専門学校であるのでこれらを群別の平均：

都内校 n=284 f1 -.010 f2 .016 f3 .000

地方校 n=57 f1 .051 f2 -.080 f3 .037

追加した質問1)と質問2)との分布に対しては：

質問1)希望-希望せず 質問2)入院経験-未経験

f1 -.105 .070 f1 .027 .000

f2 -.042 .046 f2 .112 -.063

f3 .163 -.084 f3 .060 -.026

したがって、質問1)ではf3に、質問2)ではf2に差がみられた。t=2.18(df320) t=1.57(df338)

また質問1)と質問2)との組み合わせにおいては：

質問1)質問2)

a (+) (+) n=48 f1 -.300 f2 .085 f3 .121

b (+) (-) n=80 f1 .030 f2 -.123 f3 .208

c (-) (+) n=66 f1 .237 f2 .151 f3 .034

d (-) (-) n=127 f1 -.016 f2 .000 f3 -.146

となり f1では a-cにt=2.85(df112)、f2では b-cにt=1.60(df144)、f3では b-dにt=2.47(df205) 有意差がみられた。

次に、アンケート28項目に質問1)の回答を加えて、29項目にしたデータを因子分析した所、各因子は殆んど28項目の因子分析の成績と差がなかったが、質問1)の回答が因子負荷量によってどの因子に強く負荷されるのかを調べてみると第3因子に含まれており「看護態度の指導の希望」は「人間関係」の意識と同一視されているようであった。同様に質問2)を加えた29項目のデータでは、「病院入院の有無」は第2因子(学習因子)に含まれていた。

すなわち、「看護態度の指導の希望」を含めた因子分析の成績における因子負荷量で観察すると、f1では ①.64 ②.58 ③.54 ④.56 ⑤.54 f2では①.56 ②.58 ③.55 ④.55 ⑤.48 f3では①.61 ②.19 ③.48 ④.22 ⑤.25 であった。「看護態度の指導の希望」自体はf3で.51となり、f3のイメージが変わったようである。「病院入院の有無」を含めた因子分析でみるとf1では ①.66 ②.58 ③.59 ④.55 ⑤.52 f2で①.57 ②.59 ③.56 ④.52 ⑤.48 f3では①.68 ②.42 ③.45 ④.41 ⑤.39 であった。

更に各学校間の教育方針の特徴を明らかに出来た。

わが国の短期高等教育機関の在り方に関する研究

(1) 経営情報系学科における女子学生の進学動機について

○片山吉晴・松田美登子(日本電子専門学校) 松田浩平・西野泰広(豊橋短期大学)

わが国の高等教育機関には、大学・短期大学・高等専門学校・専修学校があり、1985年は約80万人が入学している。そのうち、いわゆる短期高等教育機関とよばれる短大・高専・専修学校には約40万人が入学した。また短期高等教育機関の在学者のおよそ70%が、女子で占められている。1976年に制度化された専修学校への進学者は年々増加を続け、老舗の短期高等教育機関である短期大学の進学者数を1985年では、短大:175万人に対し専修学校:209万人と大きく上回っている(表1)。さらに、最近の傾向として、短期大学における職業教育が実社会の需要に立ち遅れているとの認識から、短大における実務教育の重視が叫ばれている。いっぽう実務的な職業教育を教育目標の中心に据えた専修学校は制度の発足後10年あまりで短期大学と競合するまでに成長し、短期大学と専修学校の在り方や各々の独自性が問われるであろう。

【目的】

女子学生のみを対象とした経営情報系の学科における、ローカル型の短期大学とアーバン型の専修学校に在学する学生の進学動機の差異を比較検討する。

【方法】

被験者:代表的な2例として、東京の副都心に存在するN専修学校のコンピュータ科2年生92名および東海地方のT市の女子短期大学の秘書科(情報処理系コース)2年生115名である。

調査項目:淵上(教心研32-1,3:1984)の項目より40項目を選び、西野(豊短紀要3:1986)の2因子(自己実現・青春享楽)で分類した。表2の項目について高校時代を想起させ、進学を決めた要因として、「ぴったりとするもの」「少しは考慮したもの」「まったく考えもしなかったもの」との3件法で評定させた。そのうち、肯定的な反応率を2校間で比較した。

表1. 高等教育機関への入学人数(千人)

	1979年		1985年	
	男子	女子	男子	女子
短期大学	19	162	13	162
専修学校	60	115	89	120
高等専門学校	9	-	10	-
大学	331	95	308	103

【結果と考察】

表2に示した、最初の15項目が自己実現の因子に相当する項目で、次の13項目が青春享楽の因子に相当する項目で、その他12項目についても示した。

T短期大学生とN専修学校生の間で自己実現型の進学動機にほとんど差はないが、N専修学校生の方が職業指向的といえる。また青春享楽型の進学動機はT短期大学生の方がN専修学校生に比べ高かった。

すなわち、大学としてのT短期大学と職業教育的なN専修学校のあいだには、表面的な進学動機の上で差は少ない。しかし、T短期大学の志望者ほうが就職や結婚までのモラトリアム指向が強いといえよう。

表2. 進学動機として選択された比率(%)

進学動機	短大	専修
自分の可能性を求めるために	71	73
生きがいを見つけるために	50	46
自分の本当の生き方を見つけないので	60	59
くいのない一生を送りたいので	61	44
自分の個性を磨くために	70	57
広く教養を身につけたいから	85	74
視野を広くしたいから	85	69
学問をしたいから	59	43
自分の限界に挑戦したいから	29	26
自分の将来のために	93	93
多くの人と知り合いになりたいから	83	70
趣味や興味を活かせる職につきたいから	66	74
やりたいことをやるために	88	66
人の役に立ちたいから	31	16
専門知識を深めたいから	89	95
大学(専修学校)で学びたいから	83	33
なんとなく	65	57
解放感を味わいたいから	72	28
まだ社会人になりたくないから	92	78
みえて	24	8
大学(専修学校)生活に憧れていたから	87	60
周りの人が進学するので	56	31
結婚に有利となるため	42	12
自由を求めて	69	32
体裁がよいので	37	21
彼氏(彼女)を見つけないから	23	8
自由になるお金がほしいから	23	21
親が行けというので	41	18
女性も進学する時代だから	76	38
外国へ行きたいので	22	5
裕福な生活を送りたいから	29	17
親元から離れたくないので	10	10
専門職につきたいから	50	80
資格取得のために	85	92
一流(有名)企業に就職したいから	67	67
自分の子供のために	19	7
大学(学校)でクラブ活動をしたいため	33	11
ひまだから	27	7
両親の面倒をみたいので	14	14
その他	17	11

わが国の短期高等教育機関の在り方に関する研究

(2) 経営情報系学科における女子学生の学科イメージの推移について

○松田美登子・片山吉晴(日本電子専門学校) 松田浩平・西野泰広(豊橋短期大学)

高等学校から短期大学や専修学校といった短期高等教育機関へ進学を決定した段階で、一般的な学校や学科に対する漠然としたイメージが想起され、自分が進学したい学校が特定された段階で、イメージは明確化されるであろう。さらに、実際に入学した後で最初に抱いていたイメージが、学生自身のなかでより現実的に修正されて行くであろう。西野ら(1986)は、学科イメージの推移と満足感の関係について、女子短期大学生を対象に調査研究を行い、入学後の満足感が不十分な場合ネガティブなイメージへと推移すると報告している。また、測上(1984)は、進学する学校を決定する際に考慮した要因が多いほど入学後の満足感が高いと報告している。

また一般的に、短期大学は立地条件や学生の嗜好などから地方の中都市に根ざしたローカルな教育機関であり、いっぽう、専修学校は大都市に位置するアーバンなイメージを持つ教育機関といわれている。本報告は、西野(1986)の調査にない女子のみを対象とする経営情報系学科の学科イメージの推移を大都市の専修学校と地方中都市の短期大学について調査した結果を報告する。

【目的】

女子学生のみを対象とした経営情報系の学科における、地方型短期大学と都市型専修学校に在学する学生の入学前と入学後のイメージの変化を測上(1984)の尺度を用いて測定する。さらに、西野ら(1986)の3因子を用いて短期大学と専修学校の比較検討を行なう。

【方法】

女子短期大学生を対象とした学科イメージの因子論的検討として西野ら(1984)は測上(1984)の25尺度を用いて女子短期大学の幼児教育科と秘書科の学生に共通する「ホットなヒューマニティ」「自主的学習意欲」「行動のナウさ」の3因子を得ている。

被験者：代表的な2例として、東京の副都心に存在するN専修学校のコンピュータテクノレディ科2年生92名と、東海地方の中都市T市に位置する女子短期大学の秘書科(情報処理系コース)2年生115名である。

調査項目：測上(1984)にしたがいの25尺度について、入学時と現在の自分が所属する学科のイメージを5段階

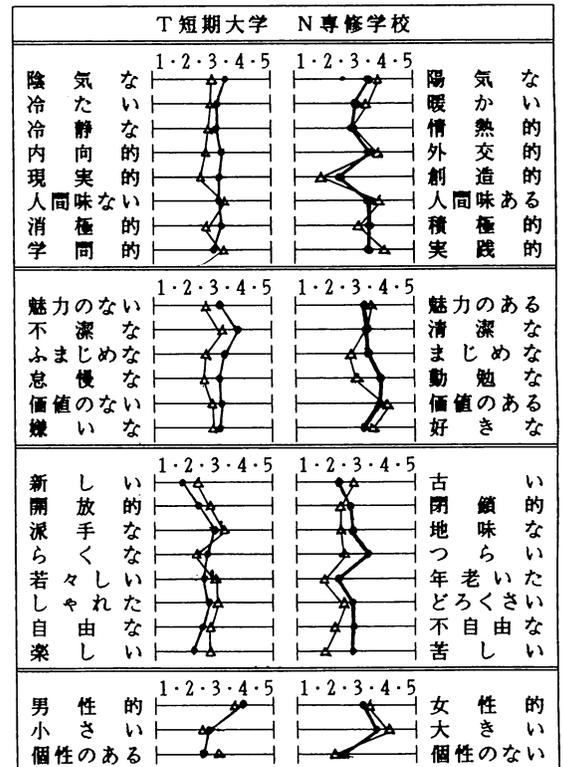
階のバイポーラで評定させた。

処理法：今回は被験者数などの関係から、新たな因子論的検討は加えなかった。入学前と入学後のイメージのプロフィールを3因子毎にまとめて、T短期大学とN専修学校で各々記述した。

【結果と考察】

全体的な傾向では、T短期大学の学生が自分の学校に対して抱いているイメージには、分散が大きく中心化傾向も認められ、あまり明確ではない。いっぽう、N専修学校生のイメージは、比較的分散が少なくイメージが明瞭化されている。すなわち、N専修学校に進学を希望した学生はT短期大学の志望者に比べ、学校を選択する際にN専修学校の独生や入学すべき必然性について考慮したものと思われる。

入学前と入学後のイメージの変化では、T短期大学の学生は、N専修学校の学生に比べ、3因子ともネガティブな方向に変化している。これは西野(1986)の報告にしたがえば、満足感が不十分と思われる。



幼児教育の個別化・個性化に関する研究

IX 5歳児の描画のイメージについて

○西野 泰広・松田 浩平

(豊橋短期大学)

I はじめに ここ数年来、西野はreciprocal P-D-S interactionモデルから、幼児の個性化教育のあり方を検討してきた。本報告は、MC(mothers' control)やSRC(self-regulation for children)スケールによる診断結果と、表現活動(描画)に見られる個性のタイプとの関連を分析した先回の報告(西野:教心1988)の続きをなすもので、描画のイメージの因子構造を検討したものである。

II 分析の対象画 造花のマーガレット1本を牛乳瓶にさした対象を見せて、白のB4版の画用紙に12色

表1 17枚の対象画の特徴

	L.V	リードH	大野	MC	SRC-U	SRC-J
①	視覚	思考内向	有機的	平均	平均	平均
②	触覚	感情外向	触覚的	上手	主張	気・従
③	混合	感覚内向	想像的	平均	平均	我が儘
④	視覚	思考外向	列挙的	下手	気難し	平均
⑤	視覚	感覚外向	装飾的	平均	気難し	従順
⑥	視覚	感情外向	触覚的	下手	平均	平均
⑦	混合	直観外向	律動的	平均	主張	気・従
⑧	視覚	思考内向	有機的	下手	平均	平均
⑨	視覚	感覚内向	想像的	平均	気難し	従順
⑩	混合	感情内向	表現的	下手	抑制	我が儘
⑪	混合	直観内向	構造的	上手	制御	従・我
⑫	視覚	直観外向	律動的	上手	主張	気・従
⑬	視覚	思考外向	列挙的	下手	主張	気・従
⑭	触覚	感覚内向	想像的	平均	抑制	我が儘
⑮	視覚	感情外向	触覚的	下手	抑制	従・我
⑯	混合	感覚内向	想像的	上手	気難し	従順
⑰	混合	感情内向	表現的	下手	気難し	従順

(紫、青、水、緑、黄緑、黄、橙、桃、赤、茶、黒、灰)のフェルトペンを用いて、子どもが好きなように描いた5歳児108名の絵を、3名の美術の専門家がローエンフェルド(1945)とリード(1943)の基準で分類した内から、表1の17枚の対象画を抽出した。

III 因子構造 直接バリマックス法などによる検討から、有効因子数を3と決定し、ヤコビ法→斜交ジオマックス回転を行なった結果を表2に示す。

各因子の分散は、I因子4.044、II因子3.612、III因子3.454と、比較的似かよった大きさの因子であるが、因子間相関を示すと、IとII因子間 $r=0.643$ 、IとIII因子間 $r=0.184$ 、IIとIII因子間 $r=0.432$ と、かなり斜交していることがわかった。

表2 5歳児の描画の因子パターン

	I 因子	II 因子	III 因子
穏やかな	.783	大人っぽい -.628	下手な -.739
月並みな	-.651	暗い .623	悪い .733
写実的	-.556	陰気な -.606	嫌い .648
軽い	.539	重い -.588	退屈な .427
女性的	.528	気難しい .585	平面的な -.418
模倣的	-.483	上手な .413	暗い .410
素直な	-.481		
大人しい	.477		
静的な	.417		
知的な	.412		

IV 対象画の因子イメージ 17枚の対象画の各因子の因子得点の平均値を±で二分割すると、A(+-型:①、⑨、⑬)、B(- - -型:②、③、⑦、⑩、⑫、⑭、⑮)、C(+++型:④、⑤、⑪、⑰)、D(-+-型:⑥)、E(- - +型:⑧)の5タイプに分類できる。

AとD・Eは、いずれも平均的な子どもの視覚的な合理的な絵であるが、Aが平均的な母親であるのに対し、DやEはしつけ下手な母親となっている。Bは、触覚や混合型の非合理的な絵で、子どもは抑制的だがままだであるか、主張的で気難しいが従順なタイプである。母親はしつけ上手である。Cは、Aと似ているが、子どもが気難しいタイプである。

無認可保育施設における乳幼児の死亡事故に関する事例的研究(1)

(麻布大学教養部)
岡本善之

目的：無認可保育施設における乳幼児の死亡事故の原因について事例的に研究し、事故防止に資することを目的とする。

方法：年次的に事例的研究を行なうため、今回は1982年1月から12月まで1年間につき、「月刊 子どものからだと心」アイオーエムに収録されている全国紙および主要地方紙等の新聞紙上で報道されたものによつた。事故の要因については、特にEpidemiology的にHost:事故児(H)、Agent:原因となつたと思われるもの(A)、Environment:保育者(N)、その他の環境的要因(O)の3点からみることとした。また、HeinrichのDomino理論(D1,D2...)による考察を試みた。

結果：(事例1)4カ月男、松山市、'82.1.7,15:00ごろ、ベッドでうつ伏せで、ベッドに寝かせて約15分後にうつ伏せになって様子がおかしいのに気づいたらしい。経営者(58,女)が気づく。社員の長男、夫婦共働き。呼吸不全。

(事例2)1歳11カ月女、神戸市、'82.1.18,22:30ごろ、夜泣が激しいので、経営者(32,女、3児の母)が、近所迷惑を考え、頭から布団をかけ数分間頭の部分を押さえた。1:20ごろ母親に引き渡すため布団を取り、意識を失っているのを発見。

(事例3)3カ月男、名護市、'82.2.3,13:38ごろ、11:00ごろミルクを与えたが、哺乳びんをくわえたまま寝入ったので、びんを口からははずした。間もなく様子がおかしくなり病院への送次息絶えたようだ。風邪気味で最近よくなりつつあった。重篤は乳幼児急死症候群(SIDS)とみている。保母(42)は18年前から、3歳月~2歳8月の乳幼児を一人でみている。

(事例4)3歳女、札幌市、'82.2.22,15:00ごろ、喘息の持病があった。11:30ごろ施設が用意したメロンパンとオレンジジュースの昼食をすませ、昼寝、14:00ごろ起き込んで泣く。別室にいた職員が落ち着かせたところ呼び醒めた。15:00ごろ職員がベッドをのぞき、液状のものを吐いて虫の息になっているのを発見。24時間制で0歳から6歳まで17人を園長(45,女)と60歳の保母資格者、アルバイトの17歳の3人でみている。'80.1開所して同年3月にも生後80日の乳児の死亡が起きている。

(事例5)4カ月女、世田谷区、'82.3.11,12:50ごろ、ベッドでぐったりしているのを施設の人が見つけた。あおむけに寝て鼻の下まで布団がかぶさった状態で発見された。12:50ごろ母親(区職員)がきて、見に行った施設の人が気付いた。4歳半で定員11人、都の助成金を受けていた。執刀医は突然死の可能性が大きいとする。2DK都営住宅の1室。

(事例6)1カ月男、横浜市、'82.4.1,16:35ごろベッドの上でぐったりしているのを迎えにきた祖母が見つけた。昼食の後、13:00ごろ毛布を4つ折りにした上うつ伏せに寝かされたという。SIDS。口紅、喘息気味だった。

(事例7)1歳2カ月男、静岡県富士山町、'82.4.16,16:00ごろ洋間ソファでぐったりしているのを経営者(33,女)気付き病院に運んだが頭部陥没骨折で死んでいた。2階洋間にソファ(幅77、長さ124、高さ70cm)2つを向かえ合わせに並べ本児と他の幼児2人を寝かせて12:10ごろ階下で食事をしてたところ、ドスンと音がしたのでいってみると本児が床に落ち泣いていた。あやして寝かせ、その後出掛け、13:40ごろ帰宅したときはすやすや寝ていたという。16:00ごろオムツを取り換えようとしたところぐったりしていた。

(事例8)2カ月女、塩釜市、'82.6.8,15:00ごろ、ぐったりしているのを経営者(46,女)が見付け、病院に運ぶ途中死亡。11:30ごろミルクを飲ませ、一人で2階の4畳半に寝かせた後、階下で預かっている3人の幼児を遊ばせていた。死因は吐いたミルクを気管に詰まらせたための窒息死。ここは「家庭保育室」で市独自の制度、助成を受けていた。

(事例9)2歳女、徳島市、'82.7.13,8:50ごろ遊戯室で19インチ大型テレビの下敷きになっ

ているのを保母(27)が発見、病院に運んだが間もなく死亡。3人がテレビの周りで遊んでいて、なんらかのはずみで約30cmのテレビが40cmの高さから倒れたらしい。テレビ台の大きさが合っておらず、台の足もぐらついていたという。

(事例10)2カ月男、東久留米市、市職員次男、'82.10.8,8:45ごろ子ども用ベッドでうつ伏せになってぐったりしているのを経営者(44,女)が見付け、救急車で運んだが11:30死亡。8:10ごろ母親ときて預けられ間もなく事故が起きている。署は窒息死とみている。

(事例11)2カ月男、田無市、'82.11.25,14:10ごろ6畳間でぐったりしているのを経営者(48,女)が見付け、すぐ病院に運んだがすでに死んでいた。ここはアメリカ式育児法を取り入れており、本児を寝るの数布団に右頬を下にしてうつ伏せに寝かせ、14:00ごろ左頬を下に寝かせ直した後、10分後に見回ったところぐったりしていたという。11月8日に気管支炎にかかり、翌9日にも発熱、病院で手当を受けていた。

考察：(事例1)H：自分でうつ伏せになったか。A：寝具が軟らか過ぎたのでは。N：傍にいなかったのでは。D1:4カ月児。D2:うつ伏せ。D3:寝具。D4:不在。D5:死亡。(事例2)A：布団が呼吸を困難にしたか。N：3児を育てながら24時間営業で他児を預かり無理がある。O：市営住宅で深夜の保育に適さない。D1:激しい夜泣。D2:近所迷惑になる。D3:うつ伏せ。D4頭から布団かける。D5:頭を押さえる。D6:窒息。(事例3)H：風邪気味。N：哺乳瓶をくわえたまま寝かせる。D1:3カ月児。D2:風邪気味。D3:瓶をくわえたまま寝入る。D4:死亡。(事例4)H：窒息。N：保育者不在。D1:栄養不良。D2:風邪。D3:保育者不在。D4:吐く。D5:窒息。(事例5)H：注射を受ける。A：布団が鼻の下までかぶさる。N：不在。O：ベッド上段で見にくいのでは。D1:4カ月児。D2:注射。D3:布団。D4:保育者不在。D5:死亡。(事例6)H：喘息気味。A：四つ折り毛布(通気性不良)。N：不在か。D1:喘息気味。D2:四つ折り毛布。D3:うつ伏せ。D4:保育者不在。D4:死亡。(事例7)H：まだおむつ必要なのなせか。A：ソファが高い。N：不在。O：堅い床。D1:高いソファ。D2:2平方苺に3人で寝る。D3:床に落下。D4:Nが異常に気付かない。D5:N不在。D6:死亡。(事例8)A：ミルク。N：不在。D1:2カ月児。D2:ミルクを吐く。D3:N不在。D4:窒息。(事例9)A：30cmのテレビ。N：不在。O：園児の傍に座りの悪いテレビ。D1:テレビ台がぐらつく。D2:テレビの周りで遊ぶ。D3:N不在。D4:テレビが倒れ

結論：1)11の死亡事故が報道されている。2)0歳児(2つ

3,3つき1,4つき2,11つき1),1歳児2,2歳児1,3歳児1で0歳児が63.6%。3)

男6,女5.4)体調を崩していた5(45.4%)。5)SIDS4,窒息

3,その他4.6)園児数は少ないところ3,多いところ4

7)事故発生時傍になかった8(72.7%)。8)過失1(ふとんをかぶ

る)。9)1人で3-4人みる4所(36.3%)。10)事故発見は

11歳1,8歳1,11歳1,12歳1,14歳1,15歳1

13,16歳1。11)父親の職業は会社員5公務員2その他4

12)父親の年齢は21歳1,25歳2,27歳1,28歳1,29

歳3,32歳1,34歳2。13)首都圏4,地方政令都市2,地方都

市4,地方町村1。14)事故発生月1歳2,2歳2,3歳1,4歳

2,6歳1,7歳1,10歳1,11歳1。15)異常発見者：経営

者7,保育者3,その他1。16)保育者数1人4,3人2,4人

2,6人1,不明2。17)異常発見のきっかけ：引き渡すた

め見について3,見回って2,起きてこないで1,おむつ

交換1。

「子ども」のとらえ方について (2)

○ 後藤 嘉余子 鈴木 裕子
(東京家政大学児童学科)

はじめに：児童学科、保育科に学ぶ学生がどのように子ども観を形成して行くか、その過程と明らかにし、大学における学習の方向性を見出す基礎資料を得るところに本研究の目的がある。前回は、子どものイメージ、存在観、生活観について検討したが、これらの結果を踏まえ、更に、子ども像、子どもの興味・行動に対する見方等の観点から、他学科の学生との比較において子ども観の分析を試みた。

方法：子どものイメージ、子ども観、子どもの興味・行動等全10項目から成る調査票を作成し、予備調査の後、教養課程終了前の学生に集団で実施した。対象は、短大保育科学生219名、児童学科児童学専攻生58名、児童教育専攻生61名、対照群としての家政系学生A(栄養学科)166名、家政系学生B(服飾美術学科)133名、合計637名で、昭和62年10月から63年2月にかけて行った。

結果と考察：(1)子ども像 専攻に関わりなく一般に、子どもはいきいき(34.1%)、ぼちゅぼちゅ(31.7%)とした感触で受け止められているが、連想する年齢によっても多少異なり、前記の他に、3歳以下ではかわふわ(14.8%)、5、6歳の場合はぎゃあぎゃあ(18.5%、17.6%)という感じを抱くようである。一方、かわいい、素直、敏感、活発、依存的等のイメージが子どもに描かれる点に着目して、それらに対する見解を求めたところ、児童系学生の凡そ9割に殆どの項目で肯定回答が示され、7~8割程度に留まる他学科の学生とは著明な差異が認められた(但し、依存的項目は60~70%対50%弱)。こうした傾向は、殊に、かわいい、活発、依存的といった面において著しく、児童・保育の学生が子どもと感覚的に捉えながらも素朴な子ども観を形成してい

る様子うかがわれる。

(2)子どもの興味に対する見方 学生に指摘された子どもの興味の対象をまとめた結果が表1である。遊び、生きもの、玩具は一様にあげられているものの、他に、友達、自然、テレビ、大人等が学科別に加わり、比率の上からも専攻による相違が見受けられる($\chi^2=47.130$, $df=28$, $p<.05$)。なかでも、自然、テレビには種々の情報、受講知識のかかわりが考えられ、児童学科学士の特徴をあらわすものとして注目される。また、興味の対象への行動については、接触、接近のみならず、見ることと児童の学生が強調し、逆に、知ろうとする行動では他学科に比べ低率を示す傾向にある(表2)。この時点において、既に、受講による知識、直接的、間接的な幼児観察等が子どもの見方に少なからず影響を与えているように思われ興味深い。

(3)「現代の子ども」観 最近の子どもは元気がなく、創造的遊びも減少したという見方に、6、7割が同意する中で、児童学専攻生、短大生には主旨の否定回答が20~30%みられ、10%台に留まる他学科の学生より好意的な捉え方をしている。他方、怪我に関しては、多くなったとする回答が40~50%と占める児童系学生に比して、家政系学生では30%弱の指摘にすぎず、子どもの現状把握に直結する関心度の相違が看取出来る。

おわりに：児童・保育の学生が、今後の学習で、自己の子ども観に実際の側面をどのように取り入れて行くか、その過程を追究することが残された課題である。

表1 子どもの興味の対象

項目	短大生		児童学専攻生		児童教育専攻生		家政系学生A		家政系学生B	
	F	%	F	%	F	%	F	%	F	%
遊び	171	25.87	43	24.57	50	27.93	120	30.15	84	22.95
生きもの	103	15.58	32	18.29	37	20.67	84	21.11	85	23.22
玩具	112	16.94	27	15.43	26	14.53	64	16.08	59	16.12
友だち	103	15.58	16	9.14	17	9.50	30	7.54	30	8.20
周囲の大人	53	8.02	17	9.71	13	7.26	34	8.54	44	12.02
テレビ	59	8.93	17	9.71	22	12.29	30	7.54	33	9.02
自然現象	54	8.17	21	12.00	12	6.70	30	7.54	27	7.38
その他	5	0.76	2	1.14	2	1.12	5	1.26	4	1.09
無答	1	0.15	0	0	0	0	1	0.25	0	0

表2 興味の対象への行動

項目	短大生		児童学専攻生		児童教育専攻生		家政系学生A		家政系学生B		X ² 値
	F	%	F	%	F	%	F	%	F	%	
触れる	139	63.47	35	60.34	39	63.93	89	53.61	98	73.68	12.964*
近づくと見る	144	65.75	37	63.79	34	55.74	77	46.39	69	51.88	16.972**
真似をする	105	47.95	38	65.52	35	57.38	66	39.76	50	37.59	18.778***
知るとうとする	88	40.18	32	55.17	29	47.54	65	39.16	64	48.12	7.020
試みる	88	40.18	23	39.66	34	55.74	59	35.54	68	51.13	12.362*
人に言う	82	37.44	11	18.97	18	29.51	66	39.76	59	44.36	13.206*
集める	71	32.42	13	22.41	14	22.95	43	25.90	35	26.32	4.332
身近に置く	44	20.09	20	34.48	13	21.31	38	22.89	27	20.30	5.961
	32	14.61	9	15.52	13	21.31	15	9.04	22	16.54	6.838
	22	10.05	3	5.17	7	11.48	9	5.42	10	7.52	4.414

注) X² 値 level *** p < .001 ** p < .01 * p < .05

比率は被調査者数に対する割合を示す

幼児の社会性と感情の発達 XIV

児玉教育研究所

(○ 筑前光 高橋豊 櫻葉和英 児玉省)

Ⅰ<研究の目的と方法>本研究は、文部省科研費による「幼児の成長と保育過程の問題」(村山貞夫教授主任)の中の児玉を班長とした「社会的感情的発達」(1983.12. 1984.3 対象年齢2群)を基礎として、今回は相模原市の保育園児について調査した。調査は2-6才児の幼児を対象に1988年2-3月に行なった。有効調査として統計化したものは145名(2才児15名、3才児21名、4才児46名、5才児26名、6才児27名)で有効回答率は65%であった。基礎研究と同一調査用紙を用い、児玉を園で保育者2名により、同時に家庭での親による記録を求めた。スケールは社会性10項目(下位項目10)、感情13項目(上位項目8)である。評価はA「非常に多い」、B「中間的」、C「非常に少ない」の三段階評価である。今回は園での保育者評価だけを示している。結果の分析については、2-4才児と5-6才児の大きな2つの年齢群にわけ、2つの年齢群の間に何らかの差異が見られるかどうかを検討した。この場合評価Bはほぼneutralと見られため、評価A又は評価Cの%を計算し、その比率の比較を行なった。この結果は別表のとおりである。特に感情項目の場合には、その構築に評価Aははたなりたゆ、主に評価Cを用いておこなった。

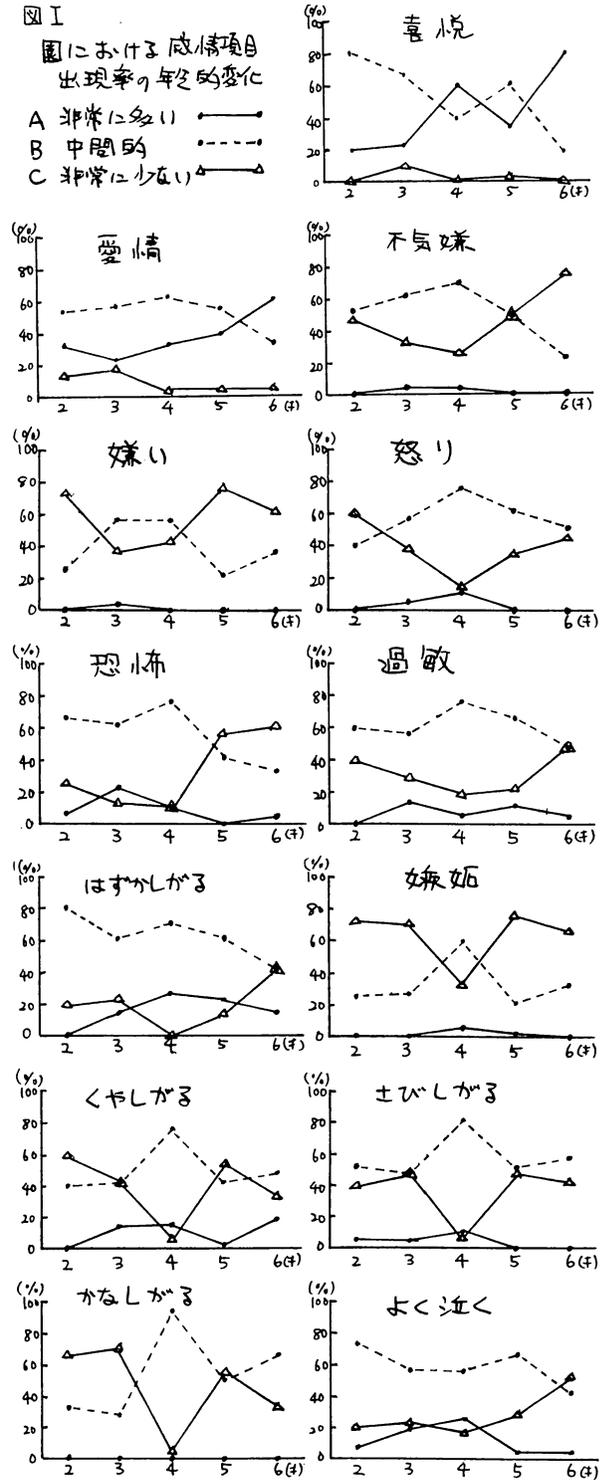
Ⅱ<結果と考察>始めに感情項目については1.喜悅評価A、有意差は見られないうち4才以下より早期の段階で変化が起きているかもしれない。2.愛情評価A、10%の水準で有意差あり社会性の発達と同一傾向年齢に伴って増大。3.不気味評価C、45%で有意差あり年齢に伴って不気味の感情の減少。4.嫌い評価C、45%で有意差あり。5.怒り評価C、ほとんどの有意差は見られず。6.恐怖評価C、45%で有意差あり。7.過敏評価C、有意差は認められず。8.はずかしがる評価C、25%で有意差あり。9.嫉妬評価C、1%で有意差あり。10.くやしがる評価C、1%で有意差あり。11.土いしがる^{評価C}、4%で有意差あり。12.かなしがる評価C、10%で有意差あり。13.よく近く評価C、25%で有意差あり。全体としてみると、ほとんどの社会性感情項目については減少傾向。2-3才で保育園という全く新しい環境に入ると、その外気、年齢に伴ってその人間的環境が好まれる力が増すに従って、それがマイナス感情の減少傾向が見られるのではないかと考えられる。感情発達のポイントが感情の発達と伴って増大し、ただし今回は標準数値から外れているため、これだけでは必ずしも断定することは困難なと思われるので、今後、さらに検討する必要があると思われる。

表I.感情項目評価(A,C)の年齢段階別出現率(%)

項目 年齢	喜悅 A	愛情 A	不気味 C	嫌い C	恐怖 C	過敏 C	嫉妬 C	くやしがる C	土いしがる C	かなしがる C	よく近く C
2-4才	43.9	46.2	31.7	47.5	14.6	10.8	50.0	25.6	24.4	32.9	19.5
5-6才	50.7	46.0	58.9	73.0	58.7	23.8	73.0	47.6	46.0	47.6	36.5

図I

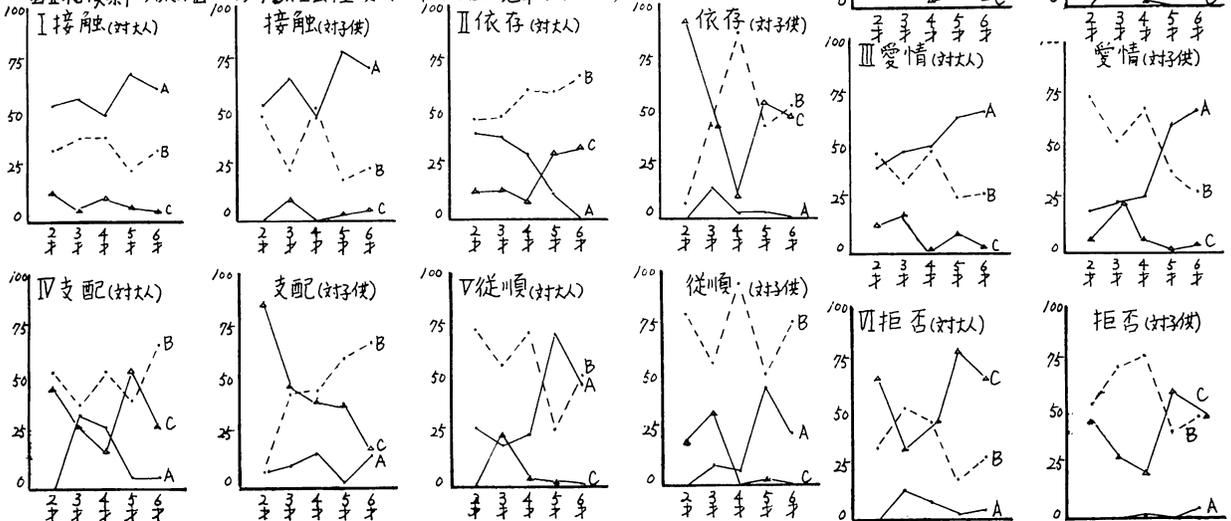
園における感情項目出現率の年齢的变化
A 非常に多い
B 中間的
C 非常に少ない



幼児の社会性と感情の発達 XV

○高橋 豊 箕浦 光 檉葉 和英 児玉 省
(児玉教育研究所)

表Ⅰ 相模原市の保育園における社会性項目の年齢別出現率(A=いつも, B=時々, C=ほとんどない)



表Ⅱ 社会性項目の年齢段階別出現率(A, C)及びχ²検定結果(*...有意差あり)

年齢	I 接触		II 依存		III 愛情		IV 支配		V 従順		VI 拒否		VII 競争		VIII 模倣		IX-1 責任	IX-2 自律性
	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供	対大人	対子供		
2才~4才	52.4%	53.7%	11%	34.1%	47.6%	24.4%	25.6%	51.2%	23.2%	6.1%	46.3%	2.8%	26.8%	20.7%	26.8%	23.2%	18.3%	
5才~6才	66.7%	76.2%	31.7%	52.4%	65.1%	61.9%	46%	31.7%	63.5%	38.1%	74.6%	55.6%	30.2%	15.7%	31.7%	17.5%	58.7%	73%
評価別(A, C)	A	A	C	C	A	A	C	C	A	A	C	C	A	A	C	C	A	A
及び有意水準	10%	1%	* 0.5%	* 5%	* 5%	* 0.5%	* 2.5%	* 2.5%	* 0.5%	* 0.5%	* 0.5%	* 0.5%	—	—	—	—	* 0.5%	* 0.5%

〔結果と考察〕感情に引き続き社会性も同様に、2~4才、5~6才の2つの年齢群に分けて比較した結果、18項目中、競争(対大人, 対子供)と模倣(対大人, 対子供)を除く、14項目において有意差が見られた。接触(対大人)は有意水準が10%であったが、残りの13項目は0.5~5%の水準で有意差が見られた。この結果、2~4才と5~6才の2つの年齢段階では本調査の社会性項目において、何らかの年齢的变化があったことが推定される。その具体的な内容を見ていくと、まず最も顕著な例として、責任と自律性を取り上げると、これらの項目は「規則を守る」「自分のことは自分でできる」、等の内容を持つが、丁度2才から6才にかけて評価Aの鋭角的な上昇が見られる。これらは年齢が進むにつれて、次第に学習して行く行動の代表的なものであると思われる。又これと軌を一にして、依存、特に対大人の評価Cが4才~6才にかけてはっきり上昇している。これらは、大人への依存から離れて自立して行く方向性を示唆しているものと思われる。次に従順(協調性)を見ると、年齢と共に評価Aの上昇が見られ、特に対大人で顕著である。これ

と対照的に拒否の評価C(ほとんど拒絶しない)は4才から6才へと上昇している。年齢と共に直接的な抵抗、拒否が減少して、協調性が増していく姿が推測される。愛情と接触では共に評価Aの上昇が見られるが、特に対子供でその変化率が顕著である。これらの項目からは、年齢と共に他人に対するpositiveな態度の増加と直接的なnegativeな態度の減少が推定される。次に、支配(命令)は評価C(命令しない)が対大人では上昇するが、対子供では逆に6才で最低になっている。この対照的な動きは、児童の同胞への関心、接触が活発化している様子を示唆するものと思われる。以上、大きく2つに分けた年齢群の比較からでも、幼児の年齢に伴う自立への傾向、直接的な拒絶の減少と協調性の増加、positiveな感情の発達とnegativeな態度の減少、対大人から対子供への関心の移行、等、年齢に伴う社会的行動の変化を読みとる事が可能であるように思われる。しかし、今回の相模原市の結果(145名)だけでなく、全国調査の結果(2998名)とのより詳細な比較検討が必要であると思われる。この点についての詳細は次回に譲りたいと思う。

笑(ユーモア)の教育(その5)

石川 透
(常葉学園大学 教育学部)

[目的]「笑(ユーモア)の教育」研究の基礎としてユーモア感についての大学生の実態の一部を探り、ユーモア教育の手がかりを得る。

[方法] ①質問紙 無記名 ②調査対象 常葉学園大学教育学部・外国語学部1年生158名(男43,女115) 静岡大学人文学部3・4年生58名(男25,女33) 計216名(男68,女148) ③調査期日 昭和62年2月5月

(結果) (4種複数回答を含む)

(1)ユーモアが	大好き	かなり好き	どちらでもない	あまり好きでない	大嫌い
男	15名 34.9%	23 53.5	5 11.6		
常大女	60 52.2	48 41.7	7 6.1		
計	75 47.5	71 44.9	12 7.6	0	0
男	8 32.0	14 56.0	3 12.0		
静大女	15 45.5	18 54.6	0 0		
計	23 39.7	32 55.2	3 5.2	0	0

(2)ユーモアのセンス	大いにある	かなりある	ほんとはあるが	あまりない	ほとんどない
男	3 7.0	9 20.9	23 53.5	7 16.3	1 2.3
常大女	4 3.4	32 27.8	66 57.4	11 9.6	2 1.7
計	7 4.4	41 25.9	89 56.3	18 11.4	3 1.9
男		11 44.0	13 52.0	1 4.0	
静大女		15 45.5	16 48.5	2 6.1	
計	0	26 44.8	29 50.0	3 5.2	0

4(3)ユーモアのセンスがないと他人から言われたら

	その通りだ と思う	そんなとは ないと思う	別にいい 感じない	そう言われる は恐ろしい	淋しい
男	2 4.7	7 16.3	11 25.6	1 2.3	17 39.5
常大女	3 2.6	25 21.7	21 18.2	6 5.2	49 42.6
計	5 3.2	32 20.3	32 20.3	7 4.4	66 41.8
男	0	9 36.0	2 8.0	3 12.0	7 28.0
静大女	3 9.1	6 18.2	2 6.1	5 15.2	10 30.3
計	3 5.2	15 25.9	4 6.9	8 13.8	17 29.3

かたい侮辱 だと感じる	その他	(4)の つぎ	親しみ やすい	付合 い	その他	無答
2 4.7	3 7.0	1 2.3	1 2.3	5 11.6	0	
9 7.8	5 4.3	0	0	11 9.6	1 0.9	
11 7.0	8 5.1	1 0.6	1 0.6	16 10.1	1 0.6	
2 8.0	2 8.0	3 12.0				
6 18.2	1 3.0	1 3.0				
8 13.8	3 5.2	4 6.9	0	0	0	

4(4)あもしろいことやユーモアをいつもよく口にする人をどう思うか。

	軽薄だ	あさはかだ	くだらない	あもしろい	羨しい
男	1 2.3	2 4.7	0	2 4.7	7 16.3
常大女	2 1.7	1 0.9	2 1.7	1 0.9	10 8.7
計	3 1.9	3 1.9	2 1.3	3 1.9	17 10.8
男					0
静大女					1 3.0
計	0	0	0	0	1 1.7

	魅力がある	尊敬しい	面白い人	たのしい人	頭の回転 が速い	度が過ぎる といや味
20 46.5	2 4.7	0	2 4.7	1 2.3	0	
66 57.4	5 4.3	10 8.7	8 7.7	3 2.6	3 2.6	
86 54.4	7 4.4	10 6.3	10 6.3	4 2.5	3 1.9	
2 8.0		5 20.0	1 4.0	9 36.0	10 40.0	
7 21.2		7 21.2	6 18.2	16 48.5	7 21.2	
9 15.5	0	12 20.7	7 12.1	25 43.1	17 29.3	

(注)「面白い人」以下の右の選択肢は静大にのみ設けた。

(5)友だちとの会話にユーモアをもたせようとしているか。

	いつも している	時々 している	あまり しない	ほとんど しない	そんなとは 少し考え たとはない	その他
男	13 30.2	22 51.2	3 7.0	3 7.0	1 2.3	1 2.3
常大女	22 19.1	63 54.8	12 10.4	4 3.4	9 7.8	5 4.3
計	35 22.2	85 53.8	15 9.5	7 4.4	10 6.3	6 3.8
男	5 20.0	13 52.0	5 20.0		0	2 8.0
静大女	4 12.1	22 66.7	3 9.1		3 9.1	1 3.0
計	9 15.5	35 60.3	8 13.8	0	3 5.2	3 5.2

4(6)自己のユーモアのセンスに特に影響を強く受けたと思う人(3人以内)

	家族	先生	友だち	芸能人他	その他	無答
男	9 20.9	9 20.9	50 116.3	19 44.2	0	
常大女	54 46.0	8 7.0	155 134.8	26 22.6	4 3.4	1 0.9
計	63 39.9	17 10.8	205 129.7	45 28.5	4 2.5	1 0.6
男	7 28.0	9 36.0	30 120.0	9 36.0		2 8.0
静大女	13 39.4	15 45.5	40 121.1	7 21.2		0
計	20 34.5	24 41.4	70 120.7	16 27.6	0	2 3.5

[考察]

①学校においても、笑(ユーモア)の教育は、実施できる見込みもありそうであり、その方法などについて、今後なお研究してみる必要がある。②復問項目を補訂し、さらに調査を続けてみたい。③ユーモアのセンスのあらわれる具体的な行動について研究する意義は深いものであろうか。

今年また まはろしの花か かたかごよ

教育評価の研究 (その28)

—リハビリ学習時代に於けるそのあり方ととらえ—

岸本 英男
(大塚四期会)

目的、生涯学習時代に迎えて、今や、あらゆる科学は、学際的視野の拡大と深度の探究に迫られ、既存の思考枠の転換も模索しつつある。教育学の領域に於ても、政治と癒着した行政の部分を除けば、臨教審の答申をおおむね妥当とし、21世紀教育をプロベイングするものと評価している。つまり教育学プロパーの領域が、学際的パラダイムにより、評価されるといふ従来見落とされてきた評価の問題が、漸く教育の聖域にとりこまれたという事にならう。

答申に曰く、「わが国が今後、社会の変化に主体的に対応し、活力ある社会を築いていくためには、学庁社会の弊害を是正し……学校中心の考え方を改め、生涯学習体系への移行を図っていくがなければならない。

つまり、既製の科学的価値体系の権威に依拠した国家の教育政策が、社会の変化に対応し切れなくなり、生涯学習という新たなパラダイムの構築に迫られつつあるという事である。答申は更に言う、「どこで学んでも、いつ学んでも、その成果が適切に評価され、多元的に人間が評価されるよう、人々の意識を形成していく必要がある。」これを裏返せば、従来の教育が人間の評価を、いかに学庁一辺倒、又は人格よりも能力の想に惑溺された硬直した価値規準に繫縛し、偏狭な類型に人間を鋳こんできたかの証と言えよう。

筆者は、1959年、第26回本学会(故児玉省奎委員長)に於てアクション・リサーチの立場からこの問題にアプローチしてきたが、漸く四半世紀を経て答申の形で結実した事になる。而し、これが制度的に定着するには更に多くの時間を必要とする。何と云へば「意識の形成」とはホニの天性を啓蒙する事、乃ち一種の人間改造である所から、世代的長期のとりこみと欠かす事はできないからである。しかし、それをシミュレートしてモデリングする方法を探究する事によって、時間を縮め、急激に変化する社会変動に正確に対応できる筈である。その一環として筆者はマントラパラダイムを提唱し来った事になるが、既に障害児者の教育評価に於て、その有効性が実証された事から更に一歩進めて、生涯学習をリハビリ学習と読みかえる事によって、一般健学者の「意識の形成」の一助とする事を、本研究の目的とする。

方法、

筆者は、既に $E = f(G, A, T)$ の公理をコード化

する事に成功してきたが、この公理を方法として、前記目的を達成するための仮説、乃ち、「生涯学習を教育的リハビリと読みかえ、マントラパラダイムを評価規準とすれば、今日、向われている教育問題の主要ないくつか、つまり人間の意識の形成が可能となる」意味であるが、この妥当性の範囲を普遍化する。つまり実証する事になる。具体的には、関連諸機関発行の論文集やアンソロジー等のミニコミ、大新聞、放送メディア専門誌等のマスコミ記載の文献や記事等を入力情報としてデカルト的評価を継続する方法をとった事になる。

結果、

$E = f(G, A, T)$ というコード化された評価概念は、裏返せば、G, A, Tの入力情報とその組合せにより評価は180度転換する。つまり裁判と同じく人が人を評価する際の眼界を示すものである。思想信条の自由が保証されている事は社会通念としての評価権(する、される関係)が万人に平等に与えられている筈であり当然の事であった筈が、実は教育の世界に於ては、教権維持—管理上の都合という経済原理が被教育者の学習権に先行せざるを得なかった(文明の優先順位のため)—という至上命令のため、モラトリアム化されていたと言えよう。今回臨教審がその実をふみこんだ答申を出した事は一応評価されている。つまり、この事実が既に筆者の提起している仮説を実証している事にならう。(6月14日付朝新聞社説「生涯学習に元家はいるないより」)

更に一例をおおげれば、如拙描く所の鞍馬島がある。筆就にとらわれたおれ、既に亡者と存った事を意味するらしい奇妙な人間が鞍馬島をもつて鯨を捕えおと腕まくりにして岸辺の藁のそよぐ汀に今ぐすねひいていて四柄で讃に「捕えられたらお慰み」とある。昭和25年に小林秀雄(著名な文芸評論家(故人)が親友を励ます意味でエッセイを草した際引用の禅函であるが、50年前、室町時代の足利将軍に何らかの禅機を啓示したものとして評価されていると言え、有力な例証であろう。「無常という事、小林秀雄者、P.147、昭和26年、創元社発行)その他「知性のある人は支えあえる人です」のキャッチフレーズが確実に読者と増した「ジパングタイムズ」の例もある。

考察、誕生の瞬間から、日々「大往生」へ。同様に在平中のつめこみ学力が卒後の社会生活に於て、低エントロピーを保つための利権現象を生ずる必然性がある所から、それに対する不断のリハビリ学習を必要とする自主的、意欲的、社会的な人へ、ゼロ・サム社会に生きる限界を悟る方向へ、教育評価は発想の転換を迫られつつある。「学力とは何か、中野敏雄著、P.217、岩波書店

英語教育に対する情緒とSTUDY SKILLSの 影響の検討

○ 永沢 幸七

林 潔

(愛国学園短期大学)

(白梅学園短期大学)

目的

本研究は前回に引き続いて、英語教育について影響を与える条件について検討を進めるものである。

英語学習における学習者の情緒因子の影響について検討し、あわせて英語教育の方法の参考に資することが本研究の第一の目的である。

学習活動は、学習者の情緒傾向の影響をも受けるものである。従って、効果的な学習は、学習者の性格傾向を考慮に入れて進められる必要がある。

学習者の学習活動の基礎となるものが学習技能—STUDY SKILLSである。アメリカの大学における学生のSTUDY SKILLS訓練の主な対象は、現実には英語教育や英語の訓練におかれている。本研究は、学生の英語理解力等と、学生のSTUDY SKILLSとの関係についても検討するものである。

方法

本研究では、英語理解力テストとしての、METROPOLITAN ACHIEVEMENT TEST, YG性格検査, STUDY SKILLSの質問紙を、方法として用いた。

結果および考察

これらのデータのうち、少なくとも、METROPOLITAN ACHIEVEMENT TESTのすべてを受け、かつYG性格検査と(または、STUDY SKILLS)の質問紙の被験者となった者のデータを、処理の対象とした。本研究では、方法として、5種類のテストと質問紙等を用いたので、同一講時に実施することができなかった。すなわち、同一被験者に対して、3-4回に分けて、この実験を行った。その為に、欠席によってデータが先の条件に該当せず、分析対象から除外された被験者がある。なおSTUDY SKILLSの質問紙は、当初より300人を対象とした。

これらの5種類のテストと質問紙の結果は、次のとおりである。なおこれらのデータは、2つの短大別に集計し検討した。

1. MATおよび短期記憶と性格との関係

MATおよび短期記憶と、YGの特性および系統値との相関係数を算出した結果、低い値ではあるが相関のみられる箇所が少数あった。しかしこれらのデータでは、A、B両短大に共通して相関の認められたYGの特性、系統値はなかった。従って、英語理解力およ

び短期記憶と性格との関係、「ネガティブな性格傾向は、英語学習活動を抑制する」という仮説は、成立するには至らなかった。

2. MATおよび短期記憶とSTUDY SKILLSとの関係
MATおよび短期記憶と、STUDY SKILLSの得点との間の相関係数を算出した結果、A短大の場合は、短期記憶を除いて、学習場面、STUDY SKILLSにも相関がみられたが、A、B両短大に共通して相関がみられたものは学習方法であった。すなわち、STUDY SKILLSのうち、特に「学習方法」が、英語学習と関係することが明らかになった。

3. MATの下位テストと全体、短期記憶との関係
MATの3つの下位テストと全体得点および短期記憶の得点との間の相関係数を算出した結果、A短大では語意と文章理解力、B短大では語意と短期記憶との間に相関がみられたが、両短大に共通して相関のみられたものはなかった。

以上の結果から、まず本研究の手続きによって測定される英語理解力等と性格との間には、少数ではあったがその関連性を残しながらも、明確な関係を見出すには至らなかった。短大別に集計したのは、ほぼ等質の集団の中でこれらの関係を見ようとしたからである。この等質集団における英語理解力と性格等の関係については、さらに方法論にも検討を加えていく必要がある。

第二に、英語理解力等とSTUDY SKILLSとの関係については、特に関係する条件として、STUDY SKILLSにおける学習方法の条件が明らかになった。この「学習方法」の内容は、因子分析の結果、「要点把握困難」「学習の粗雑さ」「学習に対する集中不十分」の各因子から構成されていることが明らかになった。これらの諸点に対する援助が、英語学習においても必要な条件であると思われる。

本研究のテーマについては、さらにデータを加えて、考察を進めていく。

【参考】

林潔 1982 学生のStudy skillsについて 相談学究15,1,10-21

永沢幸七 1967 文型学習の心理学的研究(1) 教育心理学研究15,4,236-247

内観法の教育的応用

楠 正三

(昭和薬科大学)

1. 内観法を教育へ導入する目的

内観法は現在わが国には、修養法あるいは心理療法として普及している。内観法の効果は1) 陰性の感情を陽性に転換する。2) 自己の破壊的傾向を認識する。3) 奉仕的な行動を動機づける。4) 心因性の心身症状に好影響を与える。5) 創造的能力を活性化する。6) 宗教的な悟りの境地に到ることが出来るなどといわれる。さらにごく短時間の内観では精神の鎮静化に有効である。これらの効果を期待して、生徒指導や教科への導入に内観を利用したり、問題のある生徒を内観法によって特別に指導することがある。前者は生徒全員が対象となり、後者は問題生徒だけが対象となる。

2. 内観法導入における問題点

内観法の導入に際してはしばしば次の事項が問題になる。

- 1) 内観法が宗教的色彩を持つこと。
- 2) 自己開示への抵抗。
- 3) 導入目的の曖昧性。
- 4) 時間的制約。
- 5) 場所的制約。

3. 解決の方向

- 1) 内観法が宗教的か、道徳的か実践者の態度によって決まる。指導者は倫理道徳的内観を指向する。
- 2) 自己開示の抵抗を和らげるため、内観の報告は強制しない。あるいは内観希望者だけに限定する。
- 3) ごく短時間(3~5分)の内観を周期的に行う。
- 4) 姿勢をただし閉目する。(刺激コントロール)
- 5) 教室を利用して、学習に組み入れる。

4. 適用例

1) 音楽教科への導入

原田さよ子氏は音楽学習時に教室で3~5分間の内観を生徒全員に課している。音楽教科では生徒の学習意欲が低く、集中力が希薄で、教員の指導が徹底しにくい。氏は音楽教科の開講時に、内観法の意義と教室へ導入する目的を説明して、生徒の協力を求めた。ついで、担当クラス毎に毎時間3~5分間姿勢をただし、閉目して、自分の両親や兄弟に対して、内観テーマで

ある「していただいたこと」、「して返したこと」、「迷惑をかけたこと」を調べる課題を与えた。

昭和58年から62年まで、毎年約50回教室内観を施行。内観の直接的効果は、教室内が静かになり、授業の雰囲気が高まることである。このために、出席調査も容易になり、講義内容はよく理解される。特に音楽鑑賞では内観を経験する前の入学時よりは、5分内観を20回経験した7月末の鑑賞が音楽にあらわれている作曲者の心をきとる姿勢が多く示されるようになった。また音楽鑑賞中に連想する言語が増加した。ただし、J. B. ロッターの内部外部統制尺度を使用して、パーソナリティの変化を調査したが、有意の変化はみられなかったということである。

以上の調査は統制群が無いので、仮説の域を出ない。しかし、3~5分の教室内観は教科への導入技法として、試みる価値は認められるのでは無かろうか。

2) 全教科の教室開講時黙想する自己観察教育

埼玉県狭山が丘高校(校長 近藤ちよ氏)では内観教育を教育スケジュールの中に折込、黙想教育として全授業時間及び全クラブ活動開始時に実践している。

朝のS. H. Rと各授業開始直後等1日に約8回の黙想は、3分間を1回の標準として出欠確認の後、担当教師から時宜に応じたテーマを出していただいてルーム長の「姿勢を正して黙想」の号令により始める。テーマは人生に関するもの、授業に関するもの、社会に関するものなど担任が自由に選択提起する。担任は「黙想やめ」と指示して、2~3名の生徒を指名「どの様に考えましたか」と質問する。ここで言葉遣い、話し方の助言をする。

たとえば「昨日帰宅後、本日この席につくまでの時間に体験したことをしらべる。誰とかかわり、何をしていたか、して返したか。」あるいは「前回の授業で学習したことを記憶再生する。」この場合には授業への直接的な導入になる。要するにテーマは生徒の内面生活を豊かにする手がかりである。テーマの魅力が大きいほど想像が豊かになる。テーマに沿って考えられない場合には、不安や恐怖におびえがちになる。冷静な思考習慣を養う点で高い効果がある。

本校は3分間の黙想に生命創造の夢を託している。

5. 結び

内観法は教育的日常と継続的に調和して、学習者の内面生活を豊かにすると同時に、冷静な思考習慣を養うことが出来る。1回の試行でも導入に有効である。

教師のオープン性 に関する一考察

手島 茂樹

(青森短期大学)

I 目的

カウンセリングでは、カウンセラーのオープン・ガ・マインドが強調されている。教師ではいかなるものであろうか。これがここでの問題である。

そこでカウンセリングの立場からの教師研究の一環として、今回は教師のオープン性を取り上げ、好かれる教師(尊敬されることを含む)と嫌われる教師(尊敬されないことを含む)を対象としオープン性の観点から分析することを目的とする。また、教師のオープン性の実態についても明らかにする。

ここでの仮説は、次のようである。

①好かれる教師は、嫌われる教師とは異なり、児童・生徒に対し心を開きオープンにしているであろう。すなわちオープン性は好かれる教師の条件であろう。

②またこのことは、児童・生徒の性別や性格とかがわりやすいであろう。

③さらにオープン性の内容は、児童・生徒の発達に添って表現されるであろう。

II 方法と手続き

上の目的のためアンケートを試作し、大学一・二年生を対象に調査。(男子20名、女子26名) アンケートの内容は、以下のようである。

1. 好かれる教師と嫌われる教師を、保育園・幼稚園時代から高校・予備校までの期間から、各自一名ずつ選択。

2. 次にその選択した教師について、

(1) 児童・生徒の話を聞くこと (2) 教師自らも体験・経験・思考を児童・生徒に伝えること の二観点に対し11項目別に6段階評価(非常に聞く、非常に語る から 聞いても読んでも解らない、話して聞かない)で、その教師の実態並びに可能性、また理想的教師像についてたえさせる。

項目 ①勉強に関すること ②進路に関すること
③クラブ・部活・クラス・委員会について ④親に話すこと
⑤経済面に関すること ⑥家庭問題に関すること
⑦友人に関すること ⑧恋愛に関すること
⑨性格・能力に関すること ⑩顔・身体に関すること
⑪社会・趣味に関すること

3. また、好きになった動機並びに嫌いになった動機について自由記述。

4. さらにまた、教師-児童・生徒間の心理的距離を計るため、13段階から好む教師、嫌む教師、理想的教師像別に選択。

以上を、性別並びに性格(学生には前もって下向き変換している)から分析する。

III 結果と考察

紙面の関係でここでは結果を要約しておく。(発表時に資料として統計を添す。)

(1) 好かれる教師は、嫌われる教師より有意な差で、児童・生徒の話を聞くこと、また自らのことを伝えていくことに積極性がみられる。これよりオープン性は、カウンセラー同様教師としての態度としても重要のことといえる。

(2) また、聞くことと伝えることでは、若年層に比べて高所得層が高い傾向がみられる。すなわち、児童・生徒にとっては、自分の話を聞いてもらえるか、好きかということのポイントという点である。

(3) 次にこのことを項目別にみると選択した学校する本人の年代とかがわかる結果が得られた。すなわち、中学校の教師を選択した学生は、進路直や進路に関し、高校では恋愛に関することも高くなるなどである。しかしこれは有意な差という点ではなく、やはり学校という特殊性がみられるようである。学生の期待のちがいにわかっていると思われる。

(4) 以上のことは、性別や性格とかがわりやすいものであった。

以上のことより、仮説はほぼ支持され、結果として教師のカウンセリング・マインドは重要なことといえるように思う。教師のカウンセリングの力量は、他の研究同様個別面接以上の意味があるといえよう。つまり教師としてのあり方とかがわかるのである。また、このことを裏づけるように、好きになるあるいは嫌いにさせる動機について自由記述をみても、児童・生徒と教師との関係のあり方にともなうものとみられるものである。よく理解してもらえるものである。さらにまた、児童・生徒との心理的距離についての調査結果をみても、教師としての態度と期待しなかつた親しささ求むる傾向があることもみられるものであった。

そこで、次には教師としての態度とはどうであり、かつ児童・生徒と教師とのよい関係とは具体的にどうあるかを調査してみることも意味があるものと考える。

精神テンポに関する基礎的研究 (第66報告)

三島 二郎 長崎 拓士 ○望 月 稔
 (早稲田大学) (秋田大学) (二階堂高校)

目的：近頃、俳句ブームが起こり、かなり多くの人々が句作している。これを人生の生がいとしている人も少なくない。明治・大正・昭和を通じて、一生の中でどの位の句作をしたかを調べると共に、年齢の推移によって、いかに変化していくかを検討しようとした。

わたくしどもは、これらの句作数を指標として、これを生活テンポとしてとらえ、その発達の研究を試みた。

方法：一個人の俳句数を隅なく把握することは至難であるが、個人が公に発表した作品を調べれば、一生を通じて、その数を把握することができる。従って、今回は、あくまでも公表された俳句数を対象としたものである。

しかも、明治・大正・昭和を通じて 俳句を好み、句作をつづけて発表し、死亡した人々を対象とした。それらの俳句は 条件を一定するために 5・7・5 の17字の定型俳句を作った人々を対象とした。

そこで全句集・遺句集を調べていくことにした。これは 俳句文学館にある蔵書を昭和63年3月20日より 4月30日までの間に調べた。

書籍は、現代俳句集成 (昭和57年8月30日 山本健吉 河出書房) から 句集の句数が示されているものは、その数を使い、不明なものは、さらに全句集を照合し、調べた。このほか遺句集を調べ、その対象者は30名になった。この中では 有名な俳人もいれば、それほど有名ではない俳人も含まれている。結果：調査対象となった30名の死亡年齢は、最も高齢の俳人は84才、最も低い年齢では28才であった。

これらの対象者は 全員男性で都会の俳人もいれば、地方の俳人もいる。俳句によって生活の糧にしているという俳人は殆どないといってよい。俳人によって、生活していくことは難しいといえる。このような点で全員が 同じような立場で句作していると考えられる。

ところで、この30名の俳人の句作数について発達の的にしらべようとしたが、明確に 年代別に分かっているものは限られていた。そこで、発達の傾向は、やむなく対象者を少なくしていくほかはなかった。しかし、なお 一層、時間をかけて他の文献から、年齢段階の句数を知る方法を進めている。

さて、この30名の中より、又 さらに、新たに俳人を加え10名について、その俳句数の発達の傾向を調べてみた。

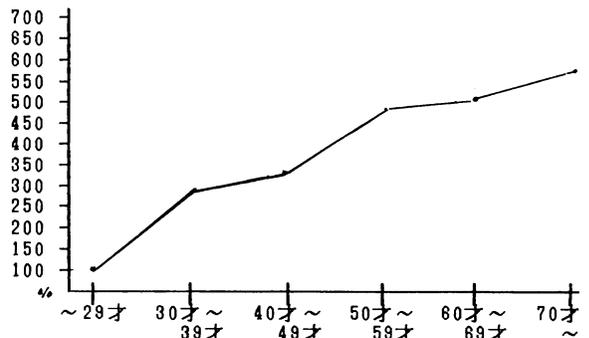
俳句に関心を持ち始めるのは 15才~20才位の頃であるが、本格的に句作しようとするのは 20才~30才頃のようなのである。

そこでTable 1 のように ~29才、30才~39才、40才~49才、50才~59才、60才~69才、70才~ の6段階の年齢について その俳句数の発達の上昇傾向を調べることができた。つぎに、最初の年齢段階での句作数を 100 として、その変化の傾向をさぐることにした。これは Fig.1 に示されている。この中で10名の句作数の平均値の推移をみると 上昇傾向にある。これはその生活テンポが個人の生活領域の拡大による助成によるものと推測されるにしても、なお目下検討中である。

Table 1 年齢段階別における句数の比較

年齢段階	平均	\bar{x}	S. D.
~70才		1129,5	49,79
69才~60才		1023,2	340,82
59才~50才		964,5	105,40
49才~40才		674,0	235,95
39才~30才		577,2	180,14
29才~		201,8	81,66

Fig.1 句作数の推移



舌の運動と構音 (V)

○安部 保子

(梅光女学院大学 短期大学部)

重永 幸男

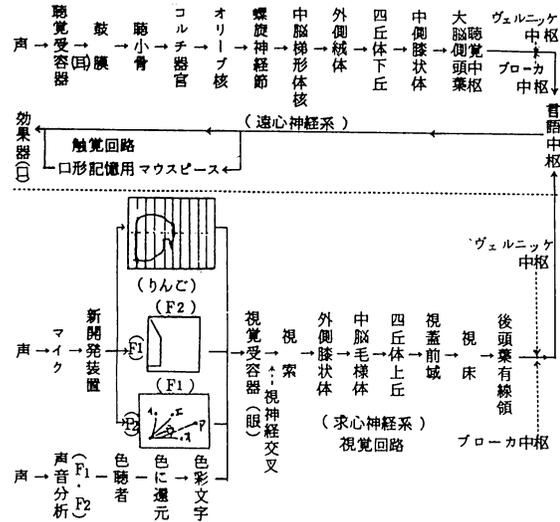
(長崎大学 教育学部)

1. 目的

本研究は前回の報告(日本応用心理学会第54回大会号71.72頁)にひきつづき言語訓練の過程を通してその中に内在するフィードバックのメカニズムを検討し、あわせて各種のフィードバック回路間に転移効果があるか否かを研究することを目的とする。古来言語訓練やその矯正は聴覚回路に基づく訓練効果のみに頼っていたが、それらの手法のみでは訓練効果に限界があり多くを期待することができない。そのため本研究はこれらの聴覚回路に基づく訓練過程のほかに新に4種の視覚を利用する訓練過程を開発し(図形によるもの3種, 色彩によるもの1種, 計4種)そのうちブラウン管上の図形表示による訓練方法やその効果についてはすでに報告した。

本発表は新開発した第4番目の系列として色彩の認知が母音訓練過程におよぼす効果について検討するものである。

第1図 通常フィードバック回路(上部)と新開発フィードバック回路(下部)



第1表 色彩文字「お」(男声, I. F₁+F₂)

N9.5	N9.5	1.0R	1.0R	1.0R	4.0GY	4.0GY
2.0Y 8.5/11.5	4.0YR 8.5/6	8.5/3.5	9.0/2	9.0/2	9.0/3	9.0/3
1.0.0R 7.5/5	4.0YR 8.0/2	5.0B 8.0/3	5.0B 8.5/2	5.0BG 8.5/2.5	4.0GY 8.5/7	5.0Y 8.0/13.5
9.0GY 6.5/5	9.0GY 6.5/5	9.0G 7.0/3.5	9.0PB 7.0/6	1.0RP 7.0/8	1.0R 7.0/2	4.0YR 7.0/2
9.0G 5.0/8.5	1.0R 5.5/11.5	1.0RP 5.5/11	1.0RP 5.5/11	6.0R 2.0/8.5	10.0R 6.5/3	5.0BG 6.5/7
4.0YR 3.5/3	4.0YR 3.5/3	4.0G 3.5/7.5	5.0BG 4.0/10	4.0R 4.0/14	4.0R 5.0/7.5	9.0GY 5.0/10
8.0YR 2.0/2	1.0P 2.0/2	1.0R 2.0/2	6.0P 3.0/6	4.0R 3.5/9.5	4.0R 3.5/3	4.0R 3.5/3

2. 第1実験・手続き

発声される声音のうち母音を色彩として表現するため音を聞くとして色覚を生ずる色聴者を利用する。色聴者には、音の高さが高くなるにつれて、見える色の色彩明度が明るく感じる者(これが最も多く、第1グループ〔I〕とする)、音高と色彩明度が関連がない者(これを第2グループ〔II〕とする)、さらに音高が高くなるにつれて見える色彩明度が低くなる者(これを第3グループとする)がある。そのためグループ3種, 母音が5種, 構成フォルマント3種(第1フォルマント〔F₁〕のみ, 第2フォルマント〔F₂〕のみおよび第1と第2フォルマント〔F₁+F₂〕対応の色彩を利用するもの)および性別2種をそれぞれ組合わせた都合90枚の色彩文字を作製した。

3. 被験者

成人男女各20名, 計40名。

男子には男声フォルマントによって作成した色彩文字, 女子には女声によるそれらを提示する。従って1人の被験者はグループ3種(I, II, III)×構成フォルマント3種(F₁, F₂, F₁+F₂)で9種の色彩文字を提示される。

4. 結果

意図した色とは別の色紙を選んだ者が多く, かなり顕著な変化がみられた。有意な差が認められたもののみをあげると次の通り。

男性 F₁+F₂ I う→お II い→お, う→あ III い→あ, う→お
 F₁ II あ→う, い→え, え→お, お→あ III あ→お, い→あ, う→う
 F₂ I あ→お II あ→い, い→お, え→あ III い→あ
 女性 F₁+F₂ II あ→お, い→お, う→あ
 F₁ I う→あ II い→お, う→あ III あ→い, う→あ
 F₂ I あ→お, う→い, お→あ II あ→お, え→あ III あ→お

以上のように、「あ」、「お」と感じられた色紙については、特に高い割合で選ばれている。また明度・彩度についてみると、「あ」は明度・彩度が最も高く、「お」はどちらも最も低い傾向にある。これらの結果から明らかなように意図して作った色彩文字に、かならずしもその母音として見られず、その変化が一定の傾向をあらわす。

5. 第2実験

これらの色彩文字は多色であるため、単色で提示する目的でこれらの色彩を用いて回転円枚を30枚作り、混色機により単色とする。

6. 結果

第1実験の結果と同様、高い確率で変化が認められる。いわゆるヒステリシス(hysteresis)現象である。

明度と彩度は「い」が高く、「お」が低い、単色表示することによって、特徴がでたと思われる。

第2表 最も多く選ばれた色彩文字(色紙)と割合(%)

母音	順位	割合(%)			明度	彩度		
		1位	2位	3位				
あ	男 III い	46.1	男 III あ	44.7	女 II う	43.4	6.10	7.50
	女 I え	43.4	女 II お	39.5	男 I あ	36.8	6.26	7.61
う	男 II い	39.5	女 I お	38.2	女 II え	36.8	6.10	6.62
	女 III お	36.8	女 II い	31.6	女 II あ	30.3	5.95	4.96
お	男 III う	42.1	女 III あ	26.3	女 III え	25.0	5.46	6.60

心理的距離テストの臨床応用に関する研究(Ⅳ)

橋爪 廣好(橋爪小児科医院)

○七浦 久子(東筑紫短期大学)

藤本 晴美(福岡教育大学)

秋山 俊夫(福岡教育大学)

【目的】教育相談や育児相談といった相談活動にとって、子供の問題行動の背景にある家族力動をいかに正しく理解するか、その問題点をいかにうまく相手に伝えるかは活動の成果を決める重要なポイントとなる。

そこで我々は、家族力動の理解、伝達にとって有用かつ簡便な心理テストを開発、試行している。我々が着目したのは、人が自分と他者との間に感じている距離(心理的距離)である。両者の関係の在り方によって、心理的距離は近くもなれば遠くもなる。この距離を測定することで家族力動の把握ができると考える。我々はこのテストを「心理的距離テスト」と名付け、家族関係の中でもとりわけ重要な母子関係理解のために試行している。今回、本テストを乳幼児健診の際に試行した。横断的資料(3年間)、縦断的資料(5年間)のまとめを報告する。

【方法】①調査対象：乳幼児健診に訪れた母親(横断的資料数：472名、縦断的資料数：101名)②期間：(横断的：1983年8月～1986年2月、縦断的1983年8月～1988年2月)③場所：H小児科医院待合室。④調査用紙：秋山らの方法によるpersonal space pattern(以下、p.s.p.と略)の測定。

【結果と考察】①p.s.p.の分類(表1)：母親の子供に対するp.s.p.をクラスター分析して4型に分け、いずれにも属さない不定型を合わせて5型に分類した。

表1. p.s.p.の分類

型	タイプ	特徴	比率(%)
一般		子供が不機嫌な時は近づき 機嫌の良い時は離れる	56.1
親中心		母親の機嫌の良い時は子供 に近づき、ライライする時 は離れる	14.0
密着		どの場面でも、子供に接近 ・密着する	18.4
疎遠		どの場面でも子供から離れ ている	3.0
不定			8.5

②心理的距離の年齢的動向(図1)：乳児期から幼児期にかけ心理的距離は同心円的に拡大する。③p.s.p.の横断的動向(表2)：一般型は子供の発達につれて増加し、密着型は逆に減少する。これは、母子関係が共生関係から、分離・独立の関係へと移行することを反映しているであろう。

4か月----7か月---
18か月---36か月---

表2. 一般型、密着型の横断的動向(人数)内%

月齢	一般型	密着型	その他	計
1~2か月	11 (33.3)	14 (42.4)	8 (24.3)	33 (100)
4か月	41 (46.1)	25 (28.1)	23 (25.8)	89 (100)
7か月	54 (52.4)	24 (23.3)	25 (24.3)	103 (100)
18か月	78 (57.8)	13 (9.6)	44 (32.6)	135 (100)
36か月	68 (60.7)	11 (9.8)	33 (29.5)	112 (100)

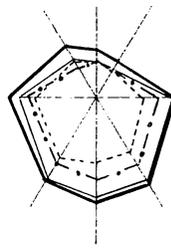


図1. 心理的距離の年齢的動向

④p.s.p.の縦断的動向(表3)：4か月から3歳にかけて一般型は高持続率を保つ(74%)。密着型は一般型に移行するもの(41%)と密着型を持続するもの(36%)とに大きく分かれる。親中心型は一般型へ移行するものが多い(75%)。疎遠型及び不定型は一般型への移行が多いものの、親中心型への移行も他の型に較べ多い。この様に、発達につれてどの型も一般型への移行が多いが、一方様々な移行の様相も見られる。

表3. p.s.p.の縦断的動向

3歳	一般型	密着型	親中心型	疎遠型	不定型	計	
4か月	61(100)	62(61)	13(13)	19(19)	3(3)	4(4)	計
一般型	61(60)	45(74)	3(5)	9(15)	2(3)	2(3)	61(100)
密着型	22(22)	9(41)	8(36)	3(14)	—	2(9)	22(100)
親中心型	4(4)	3(75)	—	1(25)	—	—	4(100)
疎遠型	3(3)	1(33)	—	1(33)	1(33)	—	3(99)
不定型	11(11)	4(36)	2(18)	5(46)	—	—	11(100)

⑤p.s.p.各型の子供に対する母親の感情：親中心型は「子供と対等に喧嘩をし、気ままに振舞っています。外で働く方がいい」、密着型は「育児に一所懸命で、子供にベッタリくっついてます。いつも、子供のことが気にかけて仕方ありません」、疎遠型は「一人遊びをよくし、手が掛からないので放っておくことが多い。あまり抱っこはしていません。テレビに子守りをさせていることが多いです」という言葉で各々の型が代表される。

【参考文献】1)秋山俊夫ほか：母親の子供に対する心理的距離の測定と、小児の精神と神経、25:27-37,1985。

関係発展評価法の活用

松村 康平

(関係学研究所)

目的：

関係発展評価法に関する研究の現況を明らかにし、人間の根源的な、自己・人・物の接在共存関係が顕在化されて共に育つ関係が発展する「実践活動」、関係発展評価法の活用について、発表する。

方法：

関係発展評価法では、関係学の立場から、その基礎として、「いま・ここで・新しく」の原理、「満点から始める」接近法がとられている。

[評価活動について]

○評価活動は、その活動に参加するものの「関係枠」を明確化する。その明確化は、他の「関係枠」をも同時に明確化する性質のものである。その明確化によって「関係枠」の内外の諸関係が、明確となり、関係の発展に役立つものとなるような、評価活動である(そうあらねばならない)。○評価活動がもたらす関係枠の明確化は、それまで关系的に存在していたものにおける関係の分離を誘い、関係からの離脱をも生じさせる。このような評価活動の結果に関する予測が成立し、関係の回復・発展への対策がたてられている評価活動でなければならない。○評価対象(物)にかかわる人(自己)と自己(人)の関係(物・人・自己の関係)において、どのような「かかわり」方の成立が関係の発展をもたらすかの認識、発展をもたらす技法の開発が必要である。○関係発展評価法では、自己・人・物の関係活動が自己(人)における体験として感知され、自己の成長・発展の構造的把握が促進されるように「評価項目」が設定されている。

[「看護関係発展尺度表」の活用による人格の構造的変化に関する考察](金井悦子・山口絢子・梅田ヒロ・坪根昭代・梅林圭子、ほか)

○本研究は、「看護関係発展尺度表」(関係学の立場からの継続研究による成果)を活用して、看護者の日常生活場面におけるかかわり方から、看護者の生活体験の変化に対応する人格構造の変化を明らかにして、クライアントとの発展的な看護を促進するかかわり方が開発されることを目的としている。(日本保健医療行動科学会、1987年次大会に発表。1988年次大会には、継続研究:「関係発展尺度表」による看護の役割別関係発展に関する考察が発表されている。)○尺度表で用いられている項目は、自己との関係(自己感知の

充実・発展の観点から、自己の、安定;分化・拡大;確立;充実;開発・新生のそれぞれ4項目)20、人との関係(人との出会いにおける気づきの充実・発展の観点から、主として、舞台的役割;観客の;演者;補助自我の;監督の、役割がとれる、それぞれ4項目)20、物との関係では、「物一般」に関して、(物の存在の認識;物の性質に即して動く;物の特性をいかして使う;創造的に使う;人との関係を発展させる、それぞれ4項目)20、「物(知識)」に関して(知識をもっている;知識に規定されて動く;状況に即して活用できる;構成して新しくする;構成した知識をいかして人との関係を発展させる、それぞれ4項目)20、「物(組織)」に関して(組織を知る;即して動く;いかして活動する;組織のもつ機能を発展させる;機能をいかして人との関係を発展させる、それぞれ4項目)20、計100項目。

[関係発展評価法の展開・発展]

○この評価法では、「ここでの活動を経て、私は、今」これとは思える項目に幾つでも「1つマル」をつけることで、関係体験への「関心一般領域」を、「1つマル」のうち、特にこれとは思えるもの3つにマル(2重マル)をつけることで、「凝集関心領域」を、そしてさらに3つのうちの1つにマル(三重マル)をつけることで、「焦点関心領域」というようにして関係体験への関心(気づき)の成層構造化がもたらされる。○構造化する自己の分化→統合→焦点化においては、自己の関心(気づき)活動が活性化する。その自己が活性化する活動の展開する状況(場面)を自分(自己)が描出する。その場面においては、活動を自己と共に担う人(ほかの人、相手)との関係が明瞭化する。その関係は、すでに自己の関心活動の変化・発展により促進されている関係であって、そこでは、その人(ほかの人、相手)の関心活動の変化・発展もまたもたらされている。そこで、自己の関心活動の変化・発展(項目の内容)がその人に伝えられ、その人の関心活動の変化・発展(項目の内容)もまた伝えられる(捉えられる)ならばさらに、関係発展をもたらす「関係発展評価法」の活用が段階的に進められることになる。○「関係発展評価法」(松村、浜田駒子、春原由紀、土屋明美、ほか)の新たな活用法が開発されている。「例えば、心理劇活動の開始時また適時にまた終結時に3段階評価を行ない、各自における関係体験の発展、また展開された心理劇の評価をあわせ行なう。開始時に、期待する関係発展項目(育てたい関係体験)を選び、参加意識を明確にする。」

I はじめに

小児看護臨床実習において、特に、子供とのコミュニケーションは援助の前提として重要である。そこで、小児看護学実習のカリキュラムでは、子供の成長を知り、子供との対応に慣れる目的で、保育園実習をとりいれてきた。また、実習後には学生自身が自分と子供との関わり方を知り、子供とのコミュニケーションを考える機会としてプロセスレコードを書かせて、指導を行ってきた。

今回は、過去3年間224名のプロセスレコードに基づき、学生がどのような場面で困ったと感じ、どう対応しているかの現状について検討したので報告する。

II 方法

対象：春日井市内6保育園、2才児～6才児 及び愛知県立看護短期大学、第1、第2看護科各2年次学生224名。

方法：1) 第1、第2看護科とも、2日間の保育園実習を行う。2) 実習終了後、本人が再現した「一番困ったこと戸惑った時の前後の経過」のプロセスレコードを提出させる。3) プロセスレコードの一人1場面について、岡山らを参考に場面分類する。(表1) 4) 保育園実習前に、東大式エゴグラム(TEG)を学生に実施する。エゴグラムの一番突出している項目によって、学生の性格傾向を「CP, NP, A, FC, AC」に分類する。

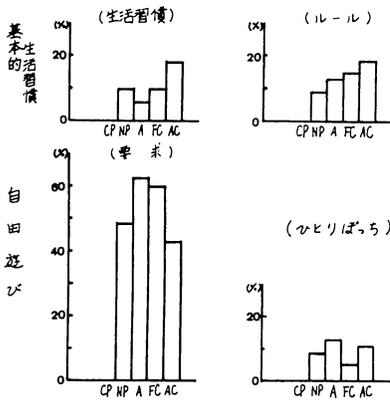


図1. 性格傾向別頻度

III 結果

困った場面の分類と頻度、児の年齢や実習時期別の比較、さらには、その場面の解決率、保母の介入の有無などについての検討を行った。

一方、学生の性格傾向との関連では、各性格傾向と場面の発生頻度との検討を行った。(図1) また、特に学生の子供とのコミュニケーション能力を要すると考えられる、子供が園のきまりに反した「ルール違反」場面、学生への様々な「要求」場面、子供同志の衝突による「けんか」場面については、柏木らのしつけ方略に基づき、学生の説得方法と性格傾向について検討した。(図2)

以上について詳細に報告する。

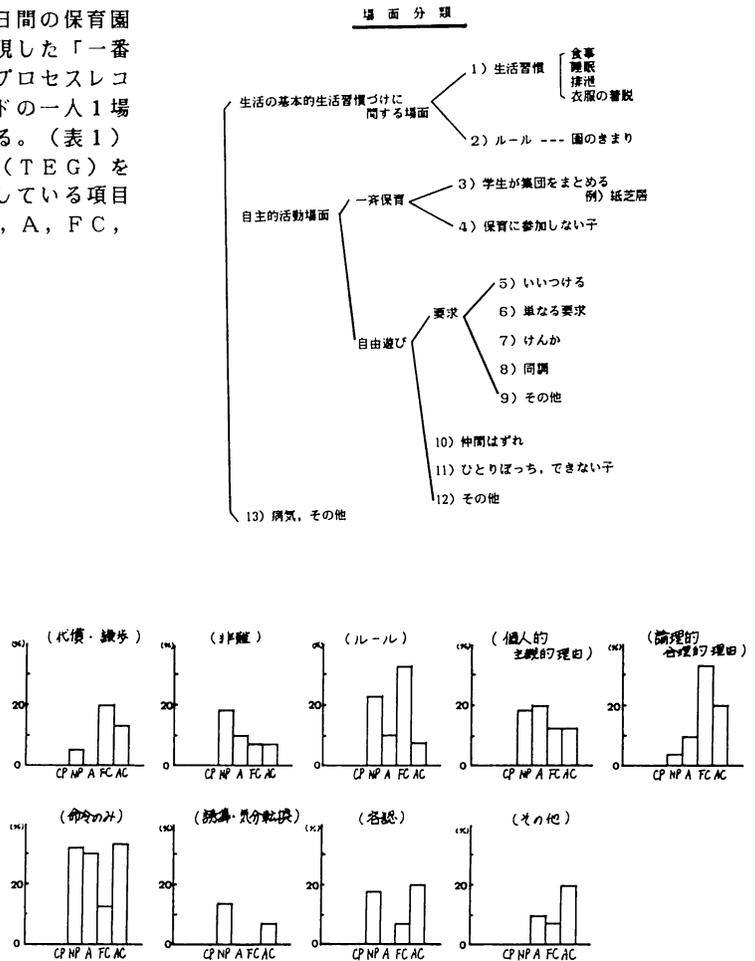


図2. 性格傾向と説得方法

看護場面における指導者および学生の患者に対する言語量の研究 II

山本勝則

内海 澁

(秋田大学医学部附属病院) (千葉大学看護学部)

[目的] 看護場面では会話を上手に行なって患者の心を安らげることが大切である。そのためには対話を分析し、有効な話し方を明らかにしていく必要がある。そこで我々は会話に大きな影響がある無言の時間を数量化し分析を試みた。

[方法] 基礎実習初日の看護学生と脳梗塞による片麻痺のある患者(57才)との会話及、そこに介入した臨床実習指導者の会話を録音した。学生と患者の最初の約3分間の会話をSTAGE Iとする。介入した指導者と患者の約4分10秒の会話をSTAGE IIとする。次の、学生と患者の約6分40秒の会話をSTAGE IIIとする。各々の発言時間と両者とも無言の時間をストップウォッチにより測定した。相手の発言時間とその前後の両者とも無言の時間の和(以下沈黙時間と呼ぶ)の累積を、対話者双方について求めた(①, ②)。次に両者とも無言の時間(以下間の時間と呼ぶ)の累積を求めた(③)。その次に患者の沈黙時間を学生もしくは指導者の沈黙時間で割ってその比率を見た(④)。最後に各々の沈黙時間を間の時間で割ってその比率を見た(⑤, ⑥)。

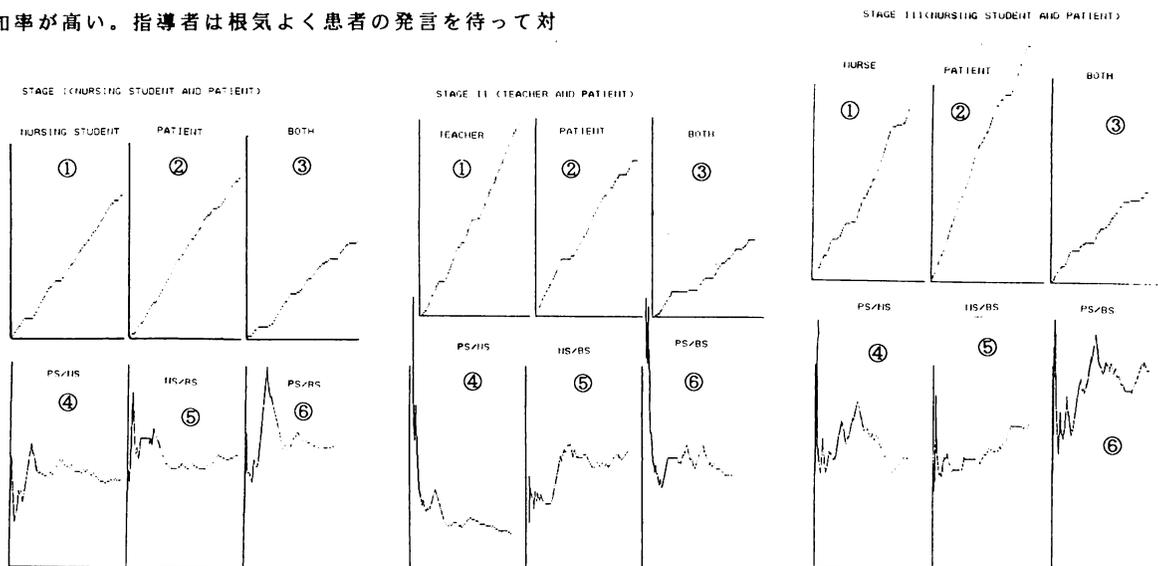
[結果・考察] 各STAGEの①と②より、患者と学生の対話では、指導者の介入の前後とも患者の沈黙時間の累積曲線のほうが学生のそれよりも増加率が高い。患者と指導者では患者の沈黙時間の累積曲線のほうが増加率が高い。指導者は根気よく患者の発言を待って対

応をしていたが、学生は患者の発言を待ち切れずに自分で話してしまい、指導者の介入後もその傾向は改善されなかったといえる。同一患者による対話でありながら指導者に対する沈黙の割合が学生に対する割合より低いことは各STAGEの④を比較することによりより顕著となる。STAGE IIの④は沈黙時間比の曲線がほぼ安定して低下傾向を示し、指導者が患者の発言を上手に引き出しているようすがうかがえる。STAGE I・IIの④・⑤・⑥では比率曲線が徐々に一定値へ収束する傾向にある。この収束した値が相互の安定した沈黙時間比と考えられる。しかし、この値はSTAGE IIIのように大きく変動する場合もある。そのようなときは話題の転換などにより相互の発言意欲に変化があったものと考えられる。各STAGEの⑤・⑥は間の時間が短く沈黙時間が長ければ高値になるわけであるが、各図に見るごとく各々が特徴的曲線を示しており、単純にその意味をとらえることはできない。他の図との比較とともに、今後例数を重ねることにより明らかになって行くと考えられる。

[結論] 沈黙時間の分析により対話の側面をとらえることが可能であり、それは対話の成否を明確化する一助となりうる。

[文献]

- 1) 山本勝則, 内海 澁: 医療場面における言語活動, 一第2沈黙時間について, 日本看護研究学会雑誌, 10, 2, 42-47, 1987.
- 2) 内海 澁: 医療場面における言語活動の問題, 医療と看護の心理学(三谷恵一, 菅 俊夫編), ナカニシヤ出版, 1979.



臨床実習前後の学生の変容(1)

— M A S ・ E G O グラム ・ 教師の評価
・ 自己評価の関係 —

○中 淑子(産業医科大学医療技術短期大学)
内海 況(千葉大学)

<目的>

看護教育における臨床実習は様々な点で学生の態度を変容させる。実習前の不安や自我状態は実習中にどのような態度の変容を示すであろうか。小児看護実習前後の学生に標題に示す関係について調べてみる。

<方法>

- ①実習前：M A S と E G O グラムテストを実施。
- ②実習後：実習中の態度について質問紙による学生の自己評価。評定は3段階評価。質問内容は④子どもが好き ⑤積極性 ⑥楽しい実習 ⑦発言 ⑧人間関係 ⑨健康 ⑩育児体験の影響などの7項目。
- ③教師側の客観評価として実習前の知識の成績・実習後の実習成績。

尚、学生数は58名で、小児看護実習の実習期間は昭和62年6月～昭和63年1月迄、その間に1回10名程度の学生が3週間づつ、6回に分かれて実習を行う。

<評価・考察>

- 1. M A S の A 値は平均17.32(SD6.77)を示し一般女子短大生の平均とほぼ等しい値を示している。
- 2. E G O グラムでは N P 値を最高に、続いて高い順

に A 値、F C 値、A C 値、C P 値を示し、「へ」の字型を表し、山口医療短大生と同様のパターン傾向を示している。

3. M A S の A 値と実習中の態度、および E G O グラムの N P 値と実習中の態度について行った分散分析の数列を表示した(表1)。これによると A 値、N P 値ともに実習中の態度との関係で有意差は認められない。

4. M A S (3項目)、E G O グラム(5項目)、自己評価(7項目)、客観評価(2項目)の合計17項目の関係を表2に示した。それによると、①嘘が言えず、従順な人は不安が高い(p<.05)。②E G O グラムでの N P 値と A 値の相関が高い(p<.01)。③実習中の態度では、発言が前向きで、人間関係がよく、楽しい実習をしている人に積極性が高いという四者の間に高い相関(p<.01)がみられた。

5. M A S (3項目)、E G O グラム(5項目)、客観評価(2項目)合計10項目×58例の行列式のマックス回転による因子分析で、6つの因子が抽出された。第1因子は N P 因子、第2因子は不安因子、第3因子は知識因子、第4因子は実習因子、第5因子は F C 因子、第6因子は C P 因子と命名した(表3)。

6. 学生58名の因子スコアを群別(積極性、発言など)に平均値と標準偏差を算出した。第1因子には育児体験、第3因子には楽しい実習・健康・育児体験、第4因子には子どもが好き・人間関係・育児体験、第6因子は発言に有意差が認められた。

表1 分散分析表
M A S (A 値)と実習成績

	平方和	自由度	不偏分散	分散比
級 間	158.70	2	79.35	F=1.745
級 内	2500.07	55	45.45	
総	2658.77	57	...	

E G O グラム(N P 値)と育児体験

	平方和	自由度	不偏分散	分散比
級 間	43.10	2	21.55	F=1.167
級 内	1015.12	55	18.45	
総	1058.22	57	...	

表2 相 関 係 数

M A S		E G O グラム				客観評価		実習中の態度			
A	L	C P	N P	A	F C	実習	積極性	楽しい実習	発言	人間関係	
L	-0.33	0.40	0.56	0.28	0.33	0.30	0.67	0.60	0.37	0.40	
AC	0.32		0.38			0.27	0.52	0.47	0.32	0.27	
健康	-0.26					0.26	0.38	0.39	0.26		
							0.38				

危険率 r 0.6=p<.001 r 0.5=p<.01 r 0.26=p<.05

表3 VARIMAX ROTATIONによる因子負荷量 (寄与率79.79%)

順位	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子
1	N P 0.90	L -0.78	成(嬪) 0.90	成(籍) 0.89	F C 0.85	C P 0.94
2	A (E G O) 0.72	A (M A S) 0.75	Q 0.48	Q -0.35	Q 0.52	A (E G O) 0.42
3	A C 0.57	A C 0.65	F C -0.19	A (M A S) 0.30	L -0.17	F C 0.11
4	Q 0.24	Q -0.24	A C 0.12	L 0.23	成(嬪) -0.15	Q -0.09
5	L 0.19	F C 0.10	成(籍) 0.12	N P 0.22	A C -0.10	A (M A S) -0.08
6	C P 0.18	N P -0.08	N P -0.08	F C 0.17	成(籍) 0.10	L -0.06
7	成(籍) 0.12	A (E G O) -0.05	A (E G O) -0.05	成(嬪) 0.16	C P 0.07	A C 0.05
8	成(嬪) -0.07	成(嬪) 0.03	L 0.02	A C -0.15	A (M A S) -0.06	成(嬪) 0.02
9	F C -0.02	成(籍) -0.02	A (M A S) 0.02	A (E G O) -0.04	A (E G O) 0.05	成(籍) 0.02
10	A (M A S) -0.01	C P 0.01	C P -0.06	C P 0.03	N P 0.04	N P 0.01
命名	N P 因子	不安因子	知識因子	実習因子	F C 因子	C P 因子

予備校生の健康に関する臨床心理学的研究(3)

林 敬子(神戸YMCA大学予備校)
内野 悌司 福田 美由紀 溝口育代
篠置 昭男 (関西学院大学)

目的

大学予備校が、わが国の学校教育体系を考えていく上で、もはや無視することのできない重要な位置を占めている今日、大学受験期の青年、ことにともすれば放置されがちな予備校生の心身の健康状態の把握と、その指導は関係者にとって大きな課題である。

われわれは前回のこの学会で、予備校生の健康、ことにその精神的健康に関する研究の第1報(1, 2)として、予備校生のSCT、CMIおよびLAPなどの成績と大学新入生のそれとの比較をおこなった。その結果は、SCTにおいて、予備校生の不安は当面する受験についての不安を中心に、現実水準不安ともいふべきものに集中して、いわゆる神経症的な不安は現実的不安に吸収される傾向を示し、大学生にむしろ神経症的な不安が多いことが見出され、CMIにおいても身体的自覚症、精神的自覚症の両方で、予備校生の方が大学生よりも訴えがより少ないなどの結果を得たが、これらは大学受験期の心理的緊張や不安、あるいは、その後にくる大学入学後の緊張からの開放ないし心理的拡散等を示唆するものと考えられた。

今回は前回の報告を承けて、受験期の進行につれて予備校生の心理状態がどのように変化するかについてCMI、SCTの成績の変化を中心に検討したい。検討の手がかりとして、予備校入学当初に実施したLAPの成績、および「進路決定とその経過についての調査」の回答結果を参照しつつ考察するが、それらを通じて受験期の精神的健康に関与する諸要因とその意味について考えたい。

方法

対象： 予備校生 676名(1浪のみ)
性別 男子 575名、女子 101名
実施の時期：1987年4月および同年11月
手続：CMIおよびSCTは4、11月の両期に実施、LAPと「進路決定とその経過についての調査」は4月期に実施
結果

(1) CMIの時期的変化

4月と11月の成績について、自覚症状の各項目毎に平均点の差を検討したところ、「目と耳」、「呼吸

器系」、「習慣」は0.1%水準、「疲労度」は1%、「心臓脈管系」で5%と、いずれも受験期の進行につれて症状的な訴えが有意に増加していることが認められ、「泌尿生殖器系」、「不適応感」、「不安」は5%水準で、11月期のほうが症状の訴えが有意に減少していた。概括的にいえば受験期の進行につれて、身体的訴えが増加し、精神的訴えが減少する傾向のあることが認められた。

(2) 進路決定過程の在り方とCMI

「進路決定とその過程についての調査」は、進路決定過程における受験生とその家族の人間関係、および家庭内緊張を明かにするために作成した質問紙であるが、それらは受験生の精神的健康ないし心身状態に最も密接に関与する要因と考えらる。

① 進学決定における家族の関与状況とCMI

「自分も家族も進学ということまで一致していた」、「家族とかかわりなく進学することを決めた」という両群がCMIにおいて、身体的、精神的の両面で自覚症状の訴えが少ないことが認められた。

② 進路決定の際の悩みとCMI

「両親の無理解や干渉、意見の対立」を悩みとして選択した群が、当然のことではあろうが、CMIにおいて非常に高い神経症的傾向を示した。

③ 両親の理解度あるいは両親との緊張関係とCMI

「両親に理解がない」と答えた群に身体的、精神的訴えが最も多く、父母の「双方が同程度に理解している」と答えた群は訴えが最も少なかった。

④ 受験生活の精神的支持者とCMI

「受験生活を精神的に支えてくれた人は父親」であったと答えた群は、CMIにおいて身体的、精神的訴えが最も少ない。

Table 1 CMIの身体的・精神的自覚症合計点の平均値・標準偏差・t値

	4月		11月		t 値
	M	SD	M	SD	
身体的自覚症	12.0	9.1	13.5	11.0	2.82 p<.001
精神的自覚症	6.7	6.2	6.2	6.4	1.37

Table 2 CMIの各領域に属する予備校生の分布状況

	I	II	III	IV	計
4月 (%)	357 (52.8)	227 (33.6)	79 (11.7)	13 (1.9)	676 (100)
11月 (%)	366 (54.1)	206 (30.5)	86 (12.7)	18 (2.7)	676 (100)

Table 3 神経症的傾向群と非神経症的傾向群の4月から11月への変化

	神経症的傾向群	非神経症的傾向群
4月	13.6%	86.4%
11月	15.4%	84.6%

面接の過程

高橋哲也

(東京都教育心理研究会)

目的: 面接を通して、クライアントがどのような過程で変容がなされたか、面接記録、体験学習を通しての分析と究明するものである。

方法: 個々の面接記録、体験学習の記録を集計し、面接の内容、体験学習前後の個々の記録の内容等を分析した。ねらいは、以下の通りである。

- ・面接の継続などのような反応、変化がみられたか。
- ・面接と体験学習を通してクライアントの性格、行動の変化が見られたか。
- ・面接と体験学習で病的、心理的状态から脱出ができたか。

面接継続中体験学習〔研修講座〕参加者の内容

- ・面接対象者、25才～65才、男、女、12名。
 - ・体験学習参加者、27才～61才 独身女性、4名。
 - ・面接中体験学習参加者、25才～65才、男、女、8名
- 面接初回頃のクライアントの発言内容。

- ◎ 自己の性格、行動面などについて、
- ・日常生活であっても興奮状態が訪ることが多い。
- ・話す言葉に高、弱があり、時に尊厳となること多い。
- ・他人の悪口を平気で言うことが多い。
- ・他人の行動や言語に気がなり、上げあしをとる。
- ・自分勝手であり、自己中心的である。
- ・イライラがあり、あやゆることになり、気がなってしまう

- ・面接者が研修講座に参加した結果とその後の変化、
- ・自分は変容しないと思っただが、職場の同僚が変わってきたと話す。
- ・最近、自分なりに児童、生徒に対する接し方が変わりつつあると思う。
- ・同僚に対しては言葉使いが変わりつつあると思う。
- ・対人関係がスムーズになり、接し方が変わった。
- ・保護者との接し方が前より変わった。

体験学習〔研修講座〕終了後の面接での発言

- ・今まで、自己中心であった。
- ・自分勝手に他人の批判をしていた。
- ・自己への気持ちに対する発言内容。
- ・冗談が通じなかった、・気難しく、理屈っぽい。
- ・意地が薄く頑固であった、・だべりが多かった。

体験学習〔研修講座〕内容

- ・ミニ、カウンセリング、・ケルソテスト、カウンセリング
- ・イオンラング、自律訓練法、・変容分析。

・催眠療法、・音楽療法、等である。

体験学習〔研修講座〕目的。

教育現場で必要とされる、具体的な実践的な児童生徒との関わりを実現するための方法を、教師が頭で理解するだけでなく、身につけるための講座で、学校カウンセリングの対策の主な柱としている。

この研修講座は、教師自身、一人一人が人間として自分を裸にして、自分の愛持を伝えることも重視している。本音を聞き、語る、コミュニケーションによって、教師と児童生徒との間に心の絆をしっかりと結び、そこで、初めて、児童生徒は元の教師の教えることを学ぶ意欲を刺激されることとなる。

教師と児童生徒の人間関係の確立を助け、教師及び児童生徒の互いの人間性の回復を促すための体験学習である。なお、教師自身の精神や心身の訓練を兼ねている。

面接、体験学習、一年後の過程と状況。

- ・社会的視野が狭いのが当たり前が出てきた。
- ・人間性に欠けていた面が多くあったことに気付いた。
- ・現在の状況全体が見えてきた、職場の人と楽しんでいけるようになった。
- ・研究会、職場での人間関係などの日常の中での行き詰っていた感じが流れ、動き出した。
- ・今まで自分に対して評価的だったのに、評価しなくなり、前より素直に受けとれるようになった。

結果: 自己として気付けが出た。職場においても適応されるようになった。

面接で発言内容のまじまりが多くなり、自己の問題の原因について問題解決に向けて積極的な態度を示すようになった。

面接者は、日々の生活の中で職場や家庭で、多くの問題を持っている。面接と体験学習を通して、変化なり、変容がなされた過程の中でみられた。多くの教師は何人かの問題や悩みを常に持ち続けている。

面接での対応: カウンセリングの基本的な態度にもとづくものであり、クライアント自身がみずから変容し変容したものと思われる。

Focusing 体験からの一考察 (7)

——研究会における体験から——

○田島由美子 高橋泰子 大沢美枝子 武村正明
(武蔵野フォークシング研究会)

(はじめに) Focusing 体験は、通常ある新しい気づき(意味)が見い出され終了に至るが〔完了〕、一方時に、何かすっきりしない、はつきりしないまま終ってしまう事〔未完了〕も現実である。そこで Focusing の完了・未完了に至る要因を、今回は Focusing する自己と、とりあげた問題 (Felt Sense) との距離に注目し、探ることとした。

(目的) Focusing の完了・未完了に至る要因を、自己と、とりあげた問題 (Felt Sense) との距離の観点から、考察してみる。

(方法: 手続き)

(1) focusing 逐語録30例(62.7~63.5に行われたもの)の focuser (以下F.)の体験を完了・未完了及び距離の観点から分類する。

(2) 分類基準は以下の如くである。

I 完了 … shift (気づきや心身の解放) が生じたもの

II 未完了 … shift が経験されなかったもの

i 適切 … ii, iii に該当せず、自己と問題との距離が適切に保たれたもの

ii 近い … 体感的表現、直接的な感情表現が多くみられ、全体として生々しい感じが表現されているもの

iii 遠い … Felt Sense (以下 F.S.) が感じられない、等といった表現や、その希薄さがみられ、又思弁的・説明的表現が多くみられるもの

(3) 分類は発表者4名の合議によってなされた。

(4) F. の構成は表1の如くである。

表1

	男	女	
20代	1	6	7
30代	2	2	4
40.50代	1	4	5

} 計16名

(結果) 分類結果は表2の如くである。

表2

距離	完了	未完了	
適切	A(適完) 8	D(適未) 2	10
近い	B(近完) 3	E(近未) 2	5
遠い	C(遠完) 7	F(遠未) 8	15
	18	12	30

(考察)

[I] 完了・未完了の観点から

(1) (i) 分類F(遠・未)のF.は Listener (以下L) が異なるいずれのセッションも未完了に終った。どのセッションも F.S. に触れるも、その直後に超自我による強い否定が現われ、focusing の進行が妨げられたものである。これらからは、自分の素直なありのままの状態を受けとめられない自我の防衛(弱さ)が推測される。尚このF. は非常に自己否定的であり、アイデンティティも十分ではない。

(ii) 分類E(近・未)のあるF.は、強くF.S.に触れるが、その言語化には強く抵抗があることを報告し、間接的な表現のままに終了した。このF.においては、ストレートな言語化は現実が生々しく迫ってくるように感じられ、言えなかったとの事である。この事は、受けとめられる程に距離がとれていない、又は、受けとめられる程の自我の強さがないことが推測される。

(i)(ii)で示唆されるように、focusing の完・未完了に関しては、F.自身の受けとめられる自我の強さと、とりあげた問題の内容・大きさ・切実度といった、両者の相対的強弱関係が密接に関与していると考えられる。つまり自己をみつめ、感じとる力は、F.自身の集中力や認知様式(知的か感情的か、など)以外に、自己がみつめている問題の質と自己受容度、自我の確立の度合が深く関連していると思われる。

(2) focusing を妨げる要因としては、超自我の存在が最も困難であると感じられた。

(3) 分類DのF.2名は、(i)Lへの配慮の(すぎ)(ii)Lの応答に関する異初感をあげた。又分類FのF.2名は共にイメージが流れてしまったものであり、この原因としてLのF.S.へのチェックの甘さが指摘された。ここで再びL機能の難しさと重要性が確認される。

以上各点は未完了の考察であるが、完了については後に高橋らにより、引き続き考察される。

[II] 自己と問題との距離の観点から

(1) 同一のF.であっても、とりあげた問題の重さ、内容、切実度、Lの違い等によって距離は異なった。一般に問題が大きい時、切実な時は適切な距離がとりにくい傾向(近いか遠いかになる)が伺われる。

(2) 距離の問題は第5回大会発表の象徴化の型と関連が深い。

(3) 分類Aに初心者含まれず、初心者4名はB・Cに分類された。これは経験によって次第に、適切な距離が学習されるものと思われる。

Focusing体験からの一考察(8)

- Focuser体験から -

○ 高橋泰子 田島由美子 大沢美枝子 式村正明
(武蔵野フォーカシング研究会)

〔目的〕 フォーカシングの実施例30ケースの中から一応完了したと思われるケース(完了例)と、リスターが途中で止めてしまったもの(未完例)とを比較検討して、両者の違いや未完例の原因等を明らかにしたい。特に、筆者は、フォーカサーの側から、その体験過程の流れと中心に追ってみたい。

〔方法〕 完了例、未完例の中から、夫々3ケースずつ取り上げ、逐語録を参考にフォーカサーが自分のフェルトセンスに感じていると思われる部分に息を吐いて、両者の違いがどこにあるの調べてみたい。★ A, B, Cは完了例、★ D, E, Fは未完例。

完了例

A (適・完)

- ① 頼られている自分を感じた
- ② 木のとき、嫌な感じ
- ③ 利用されるのは嫌
- ④ 何ともいえないもやもやした感じ
- ⑤ 胸の辺が重いような感じ
- ⑥ そのうち吐けられるような気がする
- ⑦ 吐けながら馬目になる
- ⑧ 重いのをまたぐように感じる
- ⑨ 自分が持っている事を言ってしまう
- ⑩ 全身がわっと熱くなる
- ⑪ 体が硬直している感じがする
- ⑫ 先に進めない
- ⑬ 外に向って発散させたい気持ちとそれを引きとめる自分
- ⑭ 今は先に進まない方がいい。

B (近・完)

- ① 丸い黒い、不安
- ② びくっとした、とび上がる感じ
- ③ とまどい
- ④ 体が小さくなっていく感じ
- ⑤ おんやがされる感じ
- ⑥ 腹がさ
- ⑦ せーんとする、脅えている
- ⑧ 稀薄な感じが生々しい
- ⑨ 辛い。
- ⑩ せーんとする

D (適・未)

- ① 丸い黒い丸いけと結構大きい
- ② 肩はさうで、さう、楽に物。
- ③ 人のことと面を慮って考えよう
- ④ 自分があまいん
- ⑤ 何か自分がやりのもの
- ⑥ 吐けながら息を吐く方が楽
- ⑦ りきみとの気負いがない
- ⑧ 自分がそこに思合わなから
- ⑨ 自分のままに居られる
- ⑩ 大まなことへの尻ごみ
- ⑪ 大変さうかな
- ⑫ かなりの覚悟がある
- ⑬ 自分がすべり込んでいくやう。

E (近・未)

- ① ちびと大人気ないな
- ② 人がうさやま
- ③ そのうちさうさうさうさうさう
- ④ 何か怖い
- ⑤ 不安が強い
- ⑥ 自分を見失ってしまう
- ⑦ 自分かめちめさる
- ⑧ 自分が頼りない
- ⑨ 一歩足をひき出すと谷あふ
- ⑩ 細いけとやと歩いている

- ⑪ たんどのよき感じ
- ⑫ たんどのよき感じ
- ⑬ 先が長いなあ
- ⑭ 無理に引き込まれる感じが自然にいきな

- ⑮ 嫌な感じ
- ⑯ 不安、恐怖、泣け
- ⑰ どうしようもない
- ⑱ 不自由だな

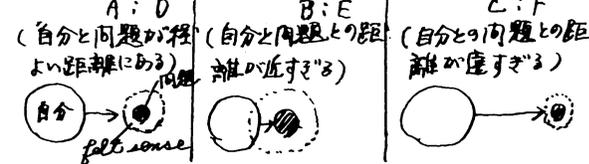
C (遠・完)

- ① 自分に重くはないかと存在感
- ② ひとと来ない
- ③ 大事なことをおぼわす
- ④ お豆腐な感じがする
- ⑤ 上ずべりしている
- ⑥ 邪魔する感じがする
- ⑦ ココロが引き込まれる感じがする
- ⑧ 感じがよい感じがする
- ⑨ 積りてくる感じがする
- ⑩ さういうの、もたない感じがする
- ⑪ つまんなさあ、と気持ちと今とつくと能率のあつさ
- ⑫ これで最初は何とてつたが

F (遠・未)

- ① 嫌な感じ、傍病と卑怯
- ② できるけどさうしたくない
- ③ どこかに押しやりたい
- ④ 自分の嫌なところと突っかかる感じがする
- ⑤ ちびと愛の谷あふ感じがする
- ⑥ 怖いから怖いと言えやう
- ⑦ 人のこと気にしやう
- ⑧ 人に合わせやう自分
- ⑨ 人の嫌な感じが思われる
- ⑩ 又、さう来てしまふ
- ⑪ さう簡単に愛さないうさう

上に述べたケースの特徴を同示すると次のようになる。



〔考察〕 以上述べてきた事をまとめてみると、次のことが言えると思う。

1. フォーカシングが成功するためには、自分と問題との程よい距離が大切である。しかし、★Dのように、程よい距離とほどほど居ても、直接フェルトセンスを象徴化する事なしに客体化したり、頭で考えようと、フェルトセンスはだんだんに薄れていく。
2. ★B, Eの様に両者の距離が近すぎると、生来の感情の前面に出てフェルトセンスが感じられなくなる事がある。しかし、★Bは、時に感情に流されさうになりながらも、もう一方にそれを見ている覚めに自分が居たことと、リスターが、フォーカサーの気持ちの動きをしっかりと受けとめて居たために、たんなりに距離がとれて完了したケースである。
3. ★C, Fの様に、両者の距離が遠すぎると、超自我が出て来て邪魔をしたり、感じがうすくなってケースFのように、うっも同じパターンで堂々めぐりしてしまうことがある。このような場合には、出て来た感じと消さないうように、そこに止まって感じ続ける練習や、出てきたものは優しく受けとめる事が大切である。

Focusing体験からの一考察(9) —Listener体験から—

○大沢美枝子・田島由美子・高橋泰子・式村正明
(武蔵野フォーカシング研究会)

〔目的〕フォーカシング・プロセスにおいて、フォーカサーがフェルト・センスを象徴化する際の、“自己”と“あるもの”との距離を重視し、ほどよい距離に導くリスニング方法の一般化を試みたい。

〔方法〕前発表者と同様の30事例を用い、フェルト・センスの象徴化の型(思考型、体感型、感情型、イメージ型)に留意しながら、“自己”が“あるもの”に近づきすぎている場合は遠ざけよう、遠ざかる場合は近づけるようにして、ほどよい距離をめざすという観点から、完了に至った事例(18)と未完で終わった事例(12)とを分析・検討した。“近づきすぎ”あるいは“遠ざかる”とは、そのために“自己”がフェルト・センスの存在を感知できなくなる距離をいう。“ほどよい距離”とは、“自己”が“あるもの”に近づきすぎず、しかも限りなく近づくことをめざす。従ってリスナーはほどよい距離の場合も、より近づけるように聴いていく。ほどよい距離で完了とされた高橋のケースAについて、以下に例示する。フォーカサーの発言を番号順に対応させてみてみると次のようになる。つまり、リスナーの発言はすべて距離を近づけるためのものとなる。

- ① (カウンセリング的対話)
- ② 具体的な場面を思い浮かべて、感じてください。
- ③ 都合よく使われるのはいいけれど、そういう感じと、感じているらいいという感じと、ふたつ対のようはありますか……
- ④ (前略) どう思いました。
- ⑤ その状況を感じていると何か出てくるのか、湧きわてきたり。
- ⑥ いはらく、そのところごで待ってください。
- ⑦ 進められたいら、どんな感じになりましたか。
- ⑧ 今のからだの感じは どうですか。
- ⑨ もう/もうおなかがほうに、何だろうと、まいてみて
- ⑩ 今ま、こみに感じてる、おなかが反応は どうですか。
- ⑪ 今の感じは。
- ⑫ まいここに来たいと思つた時、どんな感じでしたか。
- ⑬ ⑭ その感じを言葉にしようと思つた。

(注) ②はふたつ距離を遠ざけるために用いられる発言だが、この場合は、その前のフォーカサーの発言のくり返しであり、絶対的傾聴は、そこに居続ける、あるいは距離を近づけるための有効なため。

次に距離を遠ざけるためのリスナーの発言を同じ例を示すと、フォーカサーは⑪のあと、からだが使直して前に丸くかがみこんでしまう状態となつたため、

- 硬直してるけど、ほぐしませんが、そのままにしたいですか。
- 肩と繋がるとか、又または息をどうとか、背中とつながるとか、姿勢を変えようとか。
- ふたつの姿勢が、ふたつ、このこととか、な。
- ふたつの姿勢を思い、ふたつの姿勢を感じてみますか。

のようなガイドを行つた結果、⑫へと展開している。

〔結果〕(1) リスナーが距離が適当と考える場合。“もう少しその感じのところに居られますか”などの、さらに距離をほぐすためのリスニングや、絶対的傾聴を試みることによって完了に至るが、この場合でもリスナーがフォーカサーの気持ちとつれていたり、自分の価値観にとらわれ、リスナーの役割に徹しきれないなど邪魔をすると、未完で終わった場合もある。(2) 体感が邪魔をして距離が近づきすぎると、からだの緊張をゆるめる体身過程の流れを促すことができる。この場合、体感がフェルト・センスに関係があることを確かめて、フェルト・センスに触れたばかりからからだの緊張だけをゆるめるように留意する。上の例のように、フェルト・センスがそのまま残る場合も、フェルト・センスも形がまよひ、感じが変わる場合がある。感情にまよひまよひと距離がとれない場合は、カウンセリング的対話(場合、絶対的傾聴、セリ直し、“もしその感じがほか、たらどんな感じでしょう”など、ポジティブ・エネルギーを生み出さうような工夫をすると効果的のため)。(3) 思考やイメージによる象徴化と距離が遠い場合には、やはり強くフェルト・センスとのつまみ合わせを続けることと完了に至っているが、体験的傾聴によるカウンセリング的で完了が多い。カウンセリング的とはより意識レベルに近く、フォーカシング的とは前意識の概念化と考える。

〔考察〕(1) この距離と、フェルト・センスの象徴化の型とは関連が深く、距離が適当とされたいものは、ある型に偏ることなく、またフェルト・センスとのつまみ合わせを十分に行いながら象徴化を続けている。距離が近いとされたいものは体感型、感情型の象徴化が多く、距離が遠いとされたいものは思考型、イメージ型が多い。(2) フォーカシング・プロセスは、フォーカサーがフェルト・センスに触れ、象徴化を続ける過程で、“自己”と“あるもの”との距離が遠いになり、近づいたり、ほどよか、くりくり近しながら進行する。以下に、この観点から効果的と思われるリスニング方法を、プロセスに添って示す。①全プロセスを通して、体験的傾聴により自由に話しあえる雰囲気を保つ ②フォーカサーがどのように始めたいか確かめる ③他の気持ちなことを“置く”ことと間を作る ④“あるもの”をとり出してフェルト・センスを待つ ⑤フォーカサーが“自己”と“あるもの”との距離をほどよく保ちながらフェルト・センスに触れ、象徴化を続けていったりの表現を得るよう援助する ⑥シフトに至つたら、その感覚の象徴化を念入りに行ない、その意味を十分確かめ、味わってから終了。

Focusing 体験からの一考察 (10)

— Listener 体験から —

○ 式村正明 高橋泰子 田島由美子 大沢美枝子
(武蔵野フォーカシング研究会)

〔目的〕

フォーカシング実施例の中から、2人のリスナーが同一のフォーカサーと行なった2つのケース(完了例と未完例)を取り上げ、両者のリスニングの特徴を比較・検討することにより、リスニングをする上での注意点について考察してみたい。

〔方法〕

逐語録を参考として、リスニングをする上で重要と思われる個所に焦点をあててみる。即ち、完了例(ケースA)のリスニングでは、好ましいと思われる点について、また、未完例(ケースB)のリスニングでは、注意すべき点について、それぞれ検討してみる。

なお、両ケースとも、フォーカサー(同一人物)は問題との距離が遠いという特性を有していると考えられる。それは、ケースAにおける「頭の方で考えちゃう。」とか「何かもう少しありそうだけどよく解らない。」という発言、また、ケースBにおける「何か賑やかかっていうか。」とか「何か少しバラバラにほぐすと楽になりそうなんだけど。」という曖昧で推量的な言葉から窺うことができると思う。

(ケースA)

F: フォーカサー

L: リスナー

F: もの凄くつかみにくくなって……フェルトセンスをとらえにくい。

L: それじゃ、ゆっくりやりましょうか。暫く、それが浮かび上がってくるまで待つようにしましょうか。

(中略)

L: 何かまとまらない、その感じの中から言葉が浮かび上がってくるように、静かに待ってみてくれませんか。

(中略)

L: 頭から考えるのではなくて、そのちょっと言葉にならない微かな感じね。その感じがどんな感じがなあって、浮かびあがってくるまで暫くねばりませんか。

(リスニングの特徴)

当初、フォーカサーは、フェルトセンスを微かにしか感じられなかったが、それを的確につかめるようになるまで、リスナーは、適切な指示を繰返し行っている。

(ケースB)

F: 何か賑やかかっていうか。

L: うん、賑やか。

(賑やかというのは、具体的にどのような状態でしょうか。何か賑やかなんでしょうか。)

(中略)

F: 少しこういろいろ入りすぎていて窮屈な感じ。

L: うん、いろいろ入りすぎていて窮屈な感じ。

(どんなものが入りすぎているのでしょうか。解るものを言ってみて下さい。)

(中略)

F: 何か肩の辺りが重くなって、それがとても窮屈な感じと似ている。

L: 肩の辺りが重い。

(その肩の辺りが重いという感じを、暫く感じてみて下さい。窮屈な感じという他にも、その感じを表わす言葉とかイメージが浮かんでくるかも知れません。)(リスニングの特徴)

ほとんどフォーカサーの言葉を反復している。このようなリスニングによってフォーカシングが完了する場合もあるが、本ケースのように、問題との距離が遠いフォーカサーに対しては、何らかの指示を伴うより積極的なリスニングが必要であったと思われる。参考として、望ましいと思われるリスニングの一例を()内に示した。

〔考察〕

以上の検討をまとめてみると、問題との距離が近いフォーカサーに対するリスニングの注意点として、次のことが言えると思う。

1. フォーカサーが問題と向い合うようにするとともに、それについてのフェルトセンスが消えないようにする。

2. 微かなフェルトセンスが、次第にはっきりとしてくるのを待つようにする。次に、フェルトセンスについての言葉やイメージが思い浮かんでくるのを、時間を費やしてもよいから待つようにする。特に、頭で考えないようにする。

3. フェルトセンスを感じられなくなった場合には元に戻って最初からやり直してもよい。

4. フォーカサーの曖昧な表現に注意して、フォーカサーが問題との距離を縮めて、フェルトセンスを的確に表わす言葉やイメージを思い浮かべられるような指示を行なう。

5. 体の感じが出てきた場合には、それを感じ続けることにより、言語化できるような指示を行なう。

面接にFocusingを導入することに関しての研究

井上 澄子

(東京フォーカシング研究会)

<目的>

私たちはFocusingを体験的に研究、検討してきた結果、人が意識で分っていることはほんのわずかであり、からだがか包しているものの意味は大きいことを実感している。そしてからだの漠然とした感じ(Felt sense)に触れ、象徴化されたものを自分にとっての意味として受けとっていくプロセスは自己実現への方向性を持っていることが体験的に分ってきた。そこで今回は登校拒否など問題をかかえて相談にくる人との面接に導入し、どう援助し得るのかについて検討したい。

<ポイント>

人間は生理的には自然、環境との相互作用によって生きており、また文化、歴史そしてその人が生活してきたすべてを内包したからだ、環境、状況との相互作用を行いながら生きている。従ってこの体験過程の流れをスムーズにすることが治療の目的である。

<方法>

クライアント中心療法の面接の中で行う。つまりゆったりとした安心感のある土壌と素直さと優しさの中で、クライアントが自らの内面で感じられる感覚felt senseに触れ、その質感に注意を集中し、その核心をつかみ、象徴化し意味として受けとることを援助する。

1. 気にかかっている問題や人について話し終った時、その全体について今どんな感じを持っているかその感じに触れ、象徴化する。
2. からだの感じをなにげなくことばにした時、その感じにじっくりふれ、その質の核心を象徴化する。
3. 問題を話し、行き詰った時、今からだはどんな感じかを感じ、象徴化する。
4. 感情の大きな固まりがある時、その渦の中に入りこむのではなく、間をおき、そのこと全体をからだはどう感じているかを感じ、象徴化する。

<事例>

1. 登校拒否、高校退学 K子の母親

- ・ 真黒のいやな、やっかいな固まり、それが大きくふくれあがり、頭の上にかぶさってくる。
- ・ K子は20cm位の頑丈な壁があってその中にある。穴をあけて入りたいけれどできない。
- ・ K子はこわれた電気製品、私は大きなさつまいも。専門家でなければ治せない。
- ・ K子はバラの花、とげが胸に突きささり痛い。

- ・ ビーナツ…私と娘は固くくっついて身動きできなかった。空豆…皮と実、間と柔らかさが欲しい。
- ・ トンネルの先が明るい。「かも」という字が出てくる。私はあの子のかもになっていた。

(母親が自分の感じを明確にすることで少しづつあり様が変わり、K子も自立へと向かっていった。)

2. 登校拒否 高2 Y夫の母親

- ・ 胸がモヤモヤ→鉛がつまっている→息苦しい→頭が重い→吐き出したい→ブーっ→こんな感じだ。(Y夫が家から出ていく時、最も激しいことが分りほっとし、一体感でいたのに切ろうとして苦しんでいると気づき、ここからY夫の自立への援助が始まった。)

3. 登校拒否 高2 X夫の母親

- ・ からだが重い→人の目こわい目つき→手を大きく広げて追いつめられる→大きなものに締めつけられる→ふわっとした黒いもの、雲みたい→苦しい→呼吸ができない→あばれない、大声でわーっ→叫んだら楽になる→他人の眼と黒い雲ピッタリ(深いところにある恐れに直面したことから、転回が起り、家のもつ問題にとり組み、結婚以来の頭痛がなくなり、からだがか軽くなり、自信をもって対応するようになり、X夫は大検を受け、進学勉強をしている。)

4. いじめ、拒食、登校拒否 中2女子

- ・ 友だちが怖い→絵で猫の爪とふるえているねずみを描く、th「お腹ではどんな感じしているのかな」
- ・ 猫を画面一杯に描く→こんなに怒っている。
- ・ でも今は病氣、猫がねている姿をかく、ハートに矢を突きさし彼らより強くなって見返して上げる。(自分の内面のエネルギーを実感し登校した。)

<考察>

以上のごとく面接にFocusingをとり入れることは、変容への1つのきっかけになっている。しかし内面の深いところへの関わりであるため配慮が必要である。①クライアントの体験過程を大事にするとともに、セラピストも自らの体験過程に触れつつ、柔軟性をもって対応すること②象徴化されたことばなり、イメージを自分にとっての意味としてしっかり受けとれるよう援助する③からだのレベルで変化が起こり、意識面で受け取れない時は、その意味をはっきり伝える④生じてきたものは否定的、或いは非現実的なものでもそのまま意味として受けとる⑤ユング心理学、仏教、文化など広い範囲の勉強をして象徴の意味を広く深くとらえられることにより、より本質的な援助ができる。と考えられる。

カウンセリングのグループに
Focusingを導入する意味

川村 玲子
(東京フォーカシング研究会)

目 的

今まで私は、E・ジェンドリンが「体験過程Experiencing」という構成概念をもって、個人の中の前概念的な有機体的自己過程への臨床接近の道を公式化し、Focusingと名づけた内的な一連の人格変容をもたらす事象が、いかにしたら個人の中でより推進的に起るか、ということをも目的に研究実践を重ねてきたが、今回は、日常のカウンセリンググループのセッションの中で、felt senceに触れ続ける方向を指し示し、体験過程の円環体としてのファシリテーターの存り方、Focusing的かわりがグループメンバーにどのように作用し、グループ内にどのようにFocusingの一連の流れが起るか、グループにFocusingを導入する意味について、あるひとつのグループを基に検討し考察したい。

グループの性質とFocusing導入方法

ここで取り上げるグループは、参加資格35才迄の男女という規定のもとに集まった平均年齢24才、エンカウンターグループ中心の治療的グループ。個人面接途上、グループ参加が出来た迄に至った者が約半数、人間関係に自信がない未就労、転々のアルバイト、不登校等、構造拘束的な体験様式を持つ者、袋小路に陥って自己嫌悪から抜け出せない者、堂々巡りで、社会進出不適応等デリケートな集団である。

それ故特別に自由な許容度の高い場づくりが必要であり、ファシリテーターは、場から受ける自分の内面の体験過程の流れに従ってメンバー全体のある感じを感じ乍ら場に居て動くことを特に要請される。グループ参加のきつい人も居ることから、この場を安全であると内面で感じる度合の濃淡を感じ乍らの安心の土壌づくり、メンバーが間をもって場に居られ、漠然とした自分の内面のfelt senceに触れていられるスペースをつくることに心がける。セッションの始めには、clearing spaceづくりのインストラクションとして「Focusing導入のことばかけ」や、気のボール投など、からだをほぐすことを何気なく極く自然に行う。

話し合いの場では、メンバーからの一つの言葉にも、その人の内面の動きのある感じに焦点をあてた、個人的な暗黙の意味に反応する。felt senceによってチェックされる感じられた意味に焦点づける。

個人の過程

O君 …… 積極的に参加し乍ら場において何となく重荷のようなものを感じる。これはどんな感じからくるのか。グループを仕切りたい。でも仕切って有頂天になるのがこわい。恐れている。皆に嫌われたくない。あ～そうか！自分は本当に自由でない自分だったんだ！

K君 …… 場に入れぬ → 残念 → あせってる、と自分を感じていて「ひげ目」と言葉になったとたんスッと話し始めたが、話し乍ら「人との距離を測り乍らとりあえず無難に話している自分」を感じ、息づまる。そして、あ～自分はいつもこういうパターンだった！と感じ、大きく体がゆるむ。

F君 …… グループの中で皆の話しをきき、その時々自分の内面が変る。あ～変っていいんだ！変るのはいけない事と思っていた。自分が人に煙たがられていたのはこのことと関係ある。その時その時移り行く自分が大切だったんだ。無理してたなあ～。新しい地平が見えてきた。今迄の自分がくやしい。

Oさん …… 反撥、閉じこもり、攻撃。「屑」という言葉に縛られていた。長かった。「何となく」としか表現できない時でも自分の中で起っている言葉はいっぱいある。今こんな気分の浮き沈みを刻々味わえるようになった自分なんだ！自分は今迄実際の場でこんな学習を全くしてこなかった！

Tさん …… Oさんを見て、頑固 → 流されない → 自分を保ってる → そうか私は人の言いなりが素直と思って「自分の言いなりを無視して」否、流される、表現出来ないではなく自分の内面を知ることを恐れてた → 飼ひ馴されていった！本当の自分はいつも折りたんできたんだ！

T0さん …… 最後の時間に長い間の母親へのわだかまり、依存、規制、反発等しみじみ自分の中の感じをことばにし終えて、自分のからだの中でドッと血流が流れ出した感じ。今迄凍結して、からだの中は何一つ動いてなかった。となつて後、この人は家族を離れ他県の福祉施設に就労していった。

グループの過程

● 固い雰囲気。でもその中から自分の今の感じに触れ、漠然とした感じをことばにしようとする事から始まり ● 自分自身の何かに聴き入る存在として場に居る。 ● 他と違う自分、自分と違う他を明確に感じて居る。 ● 変化過程を許容して場に居られる。 ● 感じていること自体が中心課題となりその時感じつつあることに触れ続けられるようになる。 ● 自分を恐れなく表現しようとする。 ● 場に含まれる微細な感じの移りゆきを味わう。 ● 声の質からさえ相手を感じ、ことばに含まれる暗黙の意味とその人の存在を感じる場、となる。

考 察

以上、Focusing導入によりグループはfelt senceで交流する。個人の内面での暗黙の意味と象徴化との相互作用がグループ内で共時的に他のメンバーに影響する。人間存在自体が一つのまとまりであり体験過程の円環によって変化生成をたどるがグループの過程では、円環する個が核で、その個が関わり合ってグループ自体も一つのまとまりとして円環する。個の円環過程とグループの円環過程の相互作用がグループの成長をもたらす、グループに於ける個の成長をもたらす。

それ故、felt senceをさし示す、身体化されたFocusingの習熟過程の関与する層の厚いグループ程、円環過程は推進され、メンバー間に相互作用を起すネットワークをつくる。

死の心理と臨床

高 嶋 正 士
(共立女子大学)

問題点：最近、脳死等を含めた医の倫理、terminal care, Vihara といった一連の関心がたかまってきた。「死」についての問題が盛んに問われるようになった。日本の教育の中で「死に関する教育」が実施されていない点の指摘さえある。このような点から、とくに「死を看とる医学」といわれるホスピスの問題が浮かびあがってきた。欧米ではつとに「死を看とる医学」が盛んに行われているが、日本ではやと医師や宗教家の間でその必要性を唱えるようになった。本研究は、死の心理を臨床体験にもとづいて考察しようとするものである。臨床場面（病院）で、日本は死を語ることをタブー視されており、とくに臨死患者に対する人間的看護に欠けるのが現状であろう。これらの点について、応用心理学の立場で何をなすべきか、また、何ができるかについて考えてみたい。

考察内容：臨死患者や病者の三本柱といわれる不安・恐怖・孤独の問題がある。人間の最大の欲望は幸福な長命にあり、反対に人間にとって死は常に恐怖の頂点であるといつてよい。

(1) 人間は絶えず死を恐れて生きている：無意識下では自分だけは死なないと思っている。誰かに殺される以外は自然現象として、老齢のために死ぬとは考えないのであり、これが死の恐怖に対する最大の抵抗でもある。死は生物にとって不可避の問題であるが、近年科学の進歩に比例して死の現実を恐れ、否認する傾向が強くなってきたように思う。現代人の死から逃避したいという考えは、科学の発達していなかった昔の人と比較できないくらいに強い。死の不安、恐怖、孤独感によって、かえって自ら死の道を選ぶ者も多くなったように見える。

(2) 人生経験の少ない若年者や、科学的知識をもたなかった昔の人たちは、死を美化することもできた。しかし、あまりにも発達した科学のもとに生きる現代人は非人間的となり、機械的な治療によって死を否認しようとして苦悩の中に生きるようになる。肉体的苦痛よりも、むしろ情動的な面でもより苦しむようになったのは皮肉なことである。これらは、臨床体験から十分にうかがい知ることができる。

(3) 死と宗教の問題：科学の進歩によって無残にも宗教は破壊され、むしろ死の恐怖を強める結果となった。

たとえば、昔の産婦は分娩時の激痛にも堪え、明日の喜びを知っていた。現在の無痛分娩はこの喜びも取り去ったことになる。すなわち、苦しみにも耐えることを失ったということは、喜びもまた失ったということになる。このような意味で、死後の生や天国や極楽浄土を信じられなくなれば、死に対する苦悩や恐怖の増すことは当然である。

(4) 死の心理：死期が迫ると患者は拒否的となり、籌状態の続くことは殆んどの人に起こる心理状態であろう。当然、この時期は看護者と患者との心理的距離は増大してくる。しかしその過程を通り越して、患者との Rapport が成立すれば、人生に起きたいろいろのできごとを思い出すであろう。人間にとって死が未知である以上、どんな偉人でも不安や恐怖から解放されることはない。人は一生を通じて自己実現への道を歩み、死のときにあつて完成し、長い眠りに入っていく。そして、その直前に死を受容するようになる。人はある意味では生まれたときから、すでに死の準備に入る。そして疾病に冒されて手術を受けたり、薬を服用して死と闘う。すべての治療も奏効しなくなったとき、生を否認して死を受容する。キューブラーロス (Kubler-Ross, E.) の死にゆく患者の「死へのプロセス」の最終段階である acceptance であつて、平和な受容の中で、患者は俗世間のものから少しずつ気持を引きはなしていく。これが解脱というものである。

(5) ターミナル・ケアとカウンセリング：医療の目的は一見病気を治療する面のみに向けられているが、人間のたどる死に対しての苦悩を与えないことも、非常に重要な問題である。科学の進歩によって宗教に頼ることが少なくなった今日、医師や看護婦、カウンセラーやソーシャル・ワーカー、家族がその役割を果たさなければならない。カウンセラーのできることは、患者のベットサイドに坐つて共感的理解を示すことである。患者に「こうあるべきだ」とか、「ああすべきだ」という押しつけではなく、その人らしく生きる手助けをすることである。まさに、ブーバー (Buber, M.) のいう "live therapy" に徹することである。ターミナル・ケアやビハラの目的も結局のところ患者がいかに残された生を生きぬくかの援助にかかっていることである。

要約：臨死患者の心理を理解する手がかりになる点をのべたが、福祉医療は単に物的経済的援助のみならず、これからは精神的心理的サポートに重点をおくことを忘れてはならない。

Corr, A. & Corr, D. M. : *Hospice Approaches to Pediatric Care*. 1985. Springer Company

精神分裂病指標

ロールシャッハ・テスト、WAIS、
 症状評価との関連について
 新井 順 (社会福祉法人 毛呂病院)

【目的】精神分裂病者で症状が固定期にある人を対象にロールシャッハ・テスト、WAISを施行し、臨床症状との関連を検討し、それらの指標から精神分裂病の特徴を評価する。

対象は毛呂病院精神科、埼玉医科大学精神科に入院し、または外来通院中の患者で、RDCの精神分裂病の基準を満たし、精神症状が固定期にあると認められた33例である。

年齢：17才～45才 (女性17名、男性15名、入院27名、外来5名)

【方法】心理検査 (ロールシャッハ・テスト、WAIS) は報告者が個別に実施し、検査はロールシャッハ・テスト、WAISの順で行なった。症状評価はSitze (1983) らによるSADSの一部を改変して用い、幻覚、妄想、自我障害、奇異な行動、思考減退の5項目を6段階に評価した。評価は主治医が行なった。

【結果および考察】33名のうち有効数32名のそれぞれのI. Q. 分布は60～107にわたって平均値は83であり、偏りは生じていない。V. I. Q. (平均値86.00、S. D. 13.17)、P. I. Q. (平均値84.97、S. D. 12.74)、T. I. Q. は83.47 (S. D. 12.72) でWechsler, D (1958) に従えばdull normalに分類される。V. I. Q.、P. I. Q. と下位検査を用いてPearsonの相関係数を求め、これらの各項目について無相関の検定を行なった。無相関検定で有意差を生じた項目は多く、その中で絵画完成は平均値が最も低く (平均6.60、S. D. 1.76)、組合せ問題にのみ有意差を生じただけであった。

絵画完成はBerger, L (1964) によるとWAISの3因子の中の一つで、知覚統合因子とされ、同因子 (積木、絵画配列、組合せ) に較べて評価点が低く、特徴的に示された。このことは精神分裂病にとり影響を受けやすい課題であると思われる。

ロールシャッハ・テストの基本指標を、R (平均値19.03、S. D. 10.50)、M (平均値7.76、S. D. 26.04)、P (平均値20.19、S. D. 11.55)、ΣF+% (平均値46.4

7、S. D. 33.60)、修正BRS (-17.66、S. D. 13.56)、Δ% (14.63、S. D. 17.22)、RSS (-16.35、S. D. 30.23) とし、その相関係数を求めると、ΣF+%とM (.86)、修正BRSとRSS (.80)、RとM (.68) の関連が見出された。

正準相関によるWAISの下位検査とロールシャッハ・テストの基本的指標の有意性の検定の結果は、全て差はなく、冗長性係数Re (Y | X) は.224、Re (X | Y) は.400で後者の方が高く、精神分裂病者のロールシャッハ基本的指標と、WAISの下位検査評価点全体の関連の強さを示す指標であるccは.381であったが、Vcは.969と高く、後者の指標は2群XおよびYの関連を示すものとしては適切ではない (表、X=ロール、Y=WAIS)。

このことより、分裂病の指標として考えられたのは、WAISの絵画完成が他の下位検査よりも評価点が低く、一貫性のない知覚統合が示され、ロールシャッハ・テストの基本的指標で得られた量的方向性は精神分裂病の構造の特徴と思われた。これは従来の研究結果と一致するものである。

正準相関分析：冗長性係数

成分	Re (X / Y)	Re (Y / X)
1	0.19960	0.06080
2	0.03501	0.03670
3	0.05670	0.04374
4	0.05211	0.04475
5	0.01482	0.01317
6	0.03888	0.02298
7	0.00326	0.00250
合計	0.40039	0.22465

成分	固有値	正準相関係数	ウィルクスのΛ	カイ2乗値	自由度	上側確率
1	0.7585	0.8709	0.03101	71.2073	77	0.66456
2	0.1469	0.6685	0.12838	42.7357	60	0.95511
3	0.4045	0.6360	0.23209	32.2166	45	0.92356
4	0.3564	0.5970	0.38975	22.1694	32	0.90281
5	0.2347	0.4845	0.60554	12.7084	21	0.91849
6	0.1798	0.4241	0.79130	6.6934	12	0.87719
7	0.0352	0.1876	0.96480	1.1880	5	0.94602

ラオのF統計量 (自由度1, 自由度2) 0.8705 (77, 85)
 有意確率 0.73125
 一般化決定係数 0.3451
 ベクトル疎関係数 0.9690
 Mc (X, Y) 0.4507

神経症者の意味構造 - 自己概念を中心として -

小原ゆかり (秦野病院)

<目的>

パーソナリティの重要な特性である意味を、神経症について特に重視される自己概念を中心にSD法によって捉え、神経症患者、一般にあって高い神経症傾向の認められる者、一般にあって神経症傾向の認められない者の3群について比較検討し、治療による影響等をも調べる。

<方法>

対象：本院並びに北里大学東病院に於いて、神経症と診断された神経症患者35名(N群)、大学生の中からCMIのIV領域に該当した高い神経症傾向の認められる者52名(IV群)、同じくCMIのI領域に該当した神経症傾向の認められない者64名(I群)の3群を対象とした。

SDスケール：概念は、I 私のいる社会、II 私の母、III 私の父、IV 過去の私、V 未来の私、VI 現在の私、VII 理想の私、VIII 社会の中の私、IX 私の人生、X 死、の計10個である。これらを修飾するに適当と思われる形容詞対22項目を予備調査によって決定し、概念ごとに各項目は7段階尺度で評定を求めた。

<結果及び考察>

プロフィール：各概念に於いて、各項目ごとに3群の評価点の算術平均を求め、検定によって各群間を比較検討した。その結果、全体的にIV群が最も否定的であり、次いでIV群、I群の順に肯定的方向を示した。この傾向は特に現実自己、社会的自己、人生観について顕著であり、従来の研究同様、神経症者の自己評価の低さを示したと同時に治療による影響を窺わせるものであった。又、IV群とN群では未来の自己については同様に中間的捉え方をしているのに対し、過去の自己についてはN群はI群と同様に肯定的であった。理想自己及び死については3群とも同様な結果を得た。

因子構造：主成分分析法によって各群3因子を抽出し、直交バリマックス回転を行なった。3群共に第1因子の

全体に占める割合がほぼ50%と大きい。各群の第1因子、第3因子は非常に類似度が高く共通して、一般的評価性の因子、情緒安定性の因子と命名された。第2因子については、I群では社会的安定性の因子、IV群では個人的充足性の因子、N群では社会的交流性の因子と命名された。

意味構造：各群に於いて、因子スコアから各概念間の距離を算出し、意味構造図を作成した(Fig.1)。N群は現実自己を他の概念から孤立させ現在の不適応状態を現わした点で特徴的であった。IV群とN群は不適応の指標とされる現実自己と理想自己との開きが大であり、距離・方向を考慮するとIV群に顕著であった。又、IV群とN群は人生や父母を原点に近づけ、IV群では特に人生を無意味なものとして捉えている。IV群は現実自己と社会的自己を近づけ、同様な見方をしており、またそれが過去から変化していないものとして捉えている点でI群と似通っていた。社会については3群とも同様に否定的見方をしている。

総合考察：このように神経症者の否定的自己概念や社会に於ける不安定性が示されただけでなく、自己受容や不適応状態の捉え方が、一般にある神経症者と神経症患者として治療を受けている者との間で異なる事が示された。即ち、一般にある神経症者は全体的に神経症患者よりも否定的に自己を捉え、社会的にかろうじて適応を保ち、自己を社会的なものとして位置づけながら内面的には不適応であり、しかも問題を意識化する事が出来ず、閉鎖的な世界に目を向けており、不安定な状態にあると考えられる。一方、神経症患者は自己の不適応に気づいており、自己を孤立的に位置づけながら社会的側面に目を向け、治療によって自己をみつめ始めている、即ち再体制化が始まっていると考えられよう。

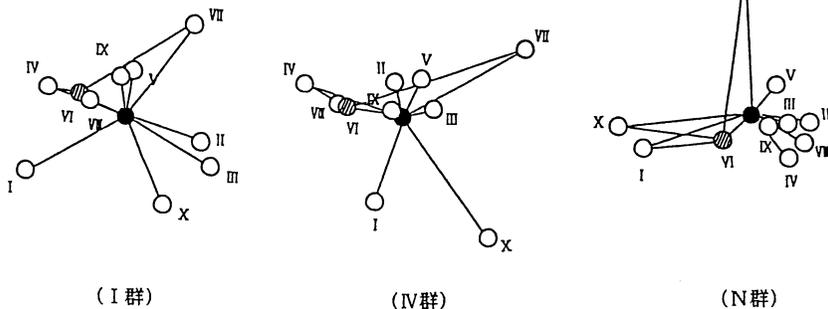


Fig 1. 意味構造図

強い現実不適応感を訴える高校生の症例

—— 何故、登校を続けられるのか ——

佐藤祥子

(仙南中央病院)

(はじめに)

不登校の問題については多くの方面で取り上げられ、しかもこれといった対策がないままにカウンセリングや家族療法、親の会、相談機関と学校とのつながりをよくするなど、様々な試みがなされている現状のように思われる。今回、私達は、現実の環境、特に学校場面において、被害的訴えが多くつよい不適応感を訴えているにもかかわらず、行動型としては「登校を続けている」という症例をとりあげ、学校場面に適応できないのに何故登校を続けているのかという面に焦点をあてながら、登校＝不登校のメカニズムの一端について考察してみたい。

症例：16才男子 高校1年 家族；父、母、兄高3、妹中2の5人家族。成育歴：出生時の問題なし、幼児よりひとり遊びが多く、集団の中に入って皆と同じ遊びをすることがほとんどなかった。他の児と比べて少しせわしい子供かと思われたが、自閉症とかMBDという診断は受けていない。小学校に入ってから、ロボットとか宇宙人などとあだなをつけられ、疎外され、友達との交流がないので、担任が心配をして友達をつけてくれたりした。自分でも他の児とは違っているという思いを持っていた。中学、高校ともに友人はできず、中学からずっと学校場面に対する不適応感を持ちつづけてきた。当院には、学校で奇異な行動や独語や被害的な訴えなどがあり、学校からのすすめで、受診にきた。初診時の仮診断は、短絡的反応にもとづく学校適応障害であった。本人は、受診したことについて「とても悲しいことだ。学校の皆に迷惑をかけてしまい申しわけない。この事で学校を休むことになってとてもつらい。私は学校に行きたい」と言い、反面「学校の先生は私にとっても冷たい。何かというとすぐに親につげ口をする。補習授業の時間割りにしても、私にあてつけにこんな変な時間にする。本当はあんな学校には行きたくないんです」と被害者的かつambivalentな気持ちを訴えていた。学校で体験した不満に対しては、暴言や家庭内での器物破損などの暴行的攻撃行動で解消しようとするか、ファミコンに没頭したりSFやオカルト小説を読むなどして現実逃避をはかることで心を静めるという二つの対応型をとるようである。

現在は学校場面における短絡的反応にもとづく問題行動のために休学処分となっている。本人はこの事で非常に落ち込んでいるが、一方では「こんな学校は初めからいやだったんです。私は別の学校を受験しなおすので勉強の毎日です」といっている。

考察：本例は現実の環境に対する不適応感をつよく訴え変身願望や異次元への逃避願望が強く、かつ現実世界への感情移入がうまくいかず、関係念慮に基づく突発的な衝動的暴力行為などがみられ、ことに学校場面において不適応場面を行動で示しているにもかかわらず、登校することに強いこだわりを持ち、しかも定時制高校に通学しているという現実に対しては自己嫌悪を持っており、全日制の高校生への劣等感もつよく、逃避としての不登校に陥入る方向性もあるのに「昼間の高校へ通学したい」ということで勉強する方向に向かわせている。彼の内面を分析してみると、今日までの生活の中で自分が考えていることを受けとめ、共感して話を聞いてもらえるような深い対人関係を持てなかったことや、小さい頃から変わっていると見られ、そのことを自分で自覚していたため他と交わりにくかったこと、さらに皆と同じ世界に同化できず違和感を持つ自分に対する深い劣等感を持っていることなどから、常に不安定で心のよりどころのない淋しさを持ち続けてきたのであろうと考えられる。その結果、周囲に自分を理解してもらおうと思いつつ、その表現方法が身についておらず、衝動的な動きをすることでしか自己を表現できずに、かえって自己評価を下げ、自分の行動範囲をせばめてしまうことになり、そのことがまた、自分の劣等感や不安定な気持ちを増長させることになっている。そして自分を支えていられる状態は、周囲の人達から離れ、自閉的な現実性のうすい世界を形成してその中で自我の安定をはかったり、感情のない機械を相手にすることで優越感を持つようになっている。しかし、心の底にある本当の気持ちは、他者と同じレベルに自分を置きたい、自分も居たいということであり、そのレベルでの価値方向ということは、全日制の高等学校で、同年齢の者たちと同じ生活を送ることである。こうして不適応でありながら、方向性だけは現実の具体的目標に向かっていく故に不登校に陥入らずにすんでいる。一方不登校の場合には現実の具体的目標を喪失している点で根本的に本症例などとは異なる体制をとることになるように思われる。

【目的】 現代は飽食の時代である。肥満することより、痩せることの方がはるかに難しい。「肥満は見苦しく不健康である。これに対して、痩せていることは美であり、優能さの証拠である」という考え方が、マスメディアを通して盛んに流されている。

こうした時代の風潮のなかにおいて、痩せたいという願望を持つことは、当然の成り行きである。事実、思春期女性の80%近くの者が、もっと痩せたいという願望を持っているという報告がある。

病的に痩せたいという願望が強くなり、太ることへの激しい不安、恐怖、嫌悪感を持ち、そのために極端な食事制限を行い、種々の食事行動の異常を起し、極度の痩せに陥っているのが Anorexia Nervosa である。そして、その予備軍として、強い痩せ願望を持つものの、食事行動の異常や過度の活動性の亢進を示さない Anorexia Athletica がある。そうした病的レベルではないが、Anorexia Athletica にも近い、痩せを執拗に追い求める者が、現代女性のなかには多数存在している。

したがって、現代女性にとって、太ることを想像することは、ストレスになるといっても良い。女性の心理的適応を考えると、彼女らのボディ・イメージを鍵概念にして考えることは意味のあることである。そこでこの研究では、現代女子学生の、①痩せ願望の実態、②やせ願望とボディ・イメージの歪みの関係、③痩せ願望を実現する手段としての食行動、服飾の在り方について調査したので、その結果を報告する。

【方法】 ①調査対象：女子専門学生 110名、女子短大生 140名、女子大生98名の計 348名と男子大学生 68名。②調査期間：1987年 2月より同年12月まで。③方法：1)身体に関する項目、食行動、服飾、母親の在り方に関する項目などからなる質問紙を配布し、記入して貰った(被検者全員に実施)。2)ボディ・サイズについての認知検査(一部の被検者に実施)。肩、胸、胴、腰の各部位について、被検者にそのサイズを主観的に評定させ、実測値とのズレを見る。

【結果と考察】 ①痩せ願望の実態(現実と理想の体型)：どの体型の者も、ブローカー指数で90前後の痩せた体型を理想と捉えている。実際に痩せた体型の者では、理想とする体型との一致度は高いが、肥満ある

いは標準の体型の者では、その不一致度が高かった標準的体型であるものも、けっして自分の体型に満足しておらず、強い痩せ願望をもっていただけられた。

表1 女子大生の実際の体型と理想の体型

体型区分	痩せ (n=29)	標準 (n=57)	肥満 (n=3)	全体 (n=98)
現 実	8 7	9 9	1 1 7	9 6
理 想	8 6	9 1	9 2	9 0

(数値はブローカー指数の平均)

②痩せ願望とボディ・イメージの歪み：標準的体型の者で、実際の体型と理想の体型のズレが極めて大きく、痩せ願望の強いと思われる者(痩せ願望群、n=15)と、その一致度が高く現状の体型に満足している者(現状満足群、N=12)との、ボディ・サイズの認知の仕方の違いを見た。その結果、表2に示すように、現状満足群は実測値とほぼ近い値か小さ目に、自分のボディ・サイズを評定していた。一方、痩せ願望群はそれよりも大きめに評定する傾向が認められた。Anorexia Nervosa の患者が、痩せているのに太っていると自分の身体を認知する仕方と共通するものが窺える。

表2 ボディ・サイズの認知

	現状満足群 (n=12) X (SD)	やせ願望群 (n=15) X (SD)	t検定 (df=25) t
肩 幅	81,2(12,93)	91,0(8,53)	2,273
胸 幅	102,0(15,22)	112,1(13,69)	1,744
胴 囲	107,2(14,16)	115,7(17,95)	1,290
腰 幅	96,9(16,34)	100,1(14,60)	0,816

注) 数値は、(評定値÷実測値)×100を表す。

③痩せ願望と食行動、服飾の在り方：標準的体型の者で、痩せるために「雑誌のダイエット特集を読む」といった関心を、受け身的ながらも持つ者が約半数ほどいるが、積極的に「運動や体操」をしたり「食事回数を減らす」者は10%内外しかいなかった。ただ「食事の量を減らす」努力をしている者が3割ほどいる程度で、強い痩せ願望とは裏腹に、痩せるための実質的な努力はされていないようである。その代り、服飾によって体型を細く見せる努力は「ガードルやコルセットを使用」したり「ボディラインをかくすような服」を着たりする者が、痩せた体型の者よりも多かった。

【まとめ】 ①標準的体型の者でも、現実よりも痩せた体型を理想とし、痩せ願望を持つ者が多かった。②痩せ願望を持つ者は、自己身体を過剰に大きく評定する傾向が見られた。③しかし、痩せるために、食事の制限や運動をするなどの実質的な努力によらず、服飾に気を配ることで、身体をいかに細く見せるかの努力がなされていた。

教護院における集団心理治療の試み(その1)

一寮単位のアプローチについて

千葉県生実学校 前田茂則

<目的>

教護院において寮単位で試みた集団心理治療の経過を分析し、その意義・特徴・問題点などについて検討する。

※教護院は、児童福祉法に基づく18歳未満の非行児を対象とする治療教育施設。当校は定員80名。1寮16名を收容。5寮のうち4寮が非行児寮(3寮が男子、1寮が女子)、他1寮は、主に登校拒否児・情緒障害児を対象としている。

<集団心理治療の方法>

①. 折中的アプローチ(未談者中心療法+ゲシュタルト療法)。セラピスト(以下Thと略)は、参加寮児(以下CLと略)のニーズや反応、全体的な動向に留意し、主に構成的手法を用いた。尚、治療場面でのCLの行動制限は、特別な場合を除いて、できるだけ避けるようにした。②. 期間: S61.6~62.3。

③. 回数・時間: 各寮とも曜日を定め、月2回(2週に1回)、1回90分で行なった。④. 集団構成: 開放集団。⑤. Th: 演者, 女性アシスタント1名。

⑥. その他: 特に寮担当者との連絡, 情報交換の実施。CLに対して職員は、治療場面などのことについて触れない。各寮でCLの動機づけを十分にする。

<結果(経過)と考察>

右側の表は、K寮(登校拒否児・情緒障害児)とS寮(非行児)の治療過程の概略である。

①. 両寮とも、概ね心理治療でみられる一般的プロセス(導入期→葛藤・展開期→終結期)を辿った。両者とも、寮内での通常人間(児童)関係が、直接的な形で治療場面にも転移され、治療状況・治療過程に強く影響を与えた。実施に当り、この点を十分に考慮しておくことが重要である。特に一部のCLによる支配的・命令的關係が濃厚な場合、構成的アプローチが良い、と思われる。②. 各期の治療過程において、寮内の日常生活場面で生じているCL間の緊張・対立関係などが顕現化した。Thは、これらの事象を直視させるようにし、その原因や解決方法などを話し合った。このことは、CLが相互にもっている問題点に気付かせるとともに、関係改善に役立った。③. 治療場面を通じて、寮の全体的雰囲気、CL間の相互関係、交流のしかた、寮職員のかかわりかたなどがよく把握されるの

表. 集団心理治療の治療過程

寮名	K 寮 (登校拒否・情緒障害)	S 寮 (非行)
I 導入期 61.6~8	11名(中3A・B・C・Dの5名、中2A・Bの2名、中1A・B・Cの3名、小学6年Aの1名)で開始。連日、中3下入寮11名となる。 初期は1編再導入を指示するとこれにこたえ、気をつけろ!などの発言もあられ、セラピストに対する防衛を強く示す。機づかのエクササイズを通して、メンバーの動きもスムーズなってきた。 中3、中2の幾人かはセラピストに関する話をよくし、リアクティブ。相互の攻撃性も出て様子はない。	8名(中3A・B・C・Dの5名、中2A・Bの2名、小5Aの1名)で開始。中3メンバーはリーダー格のAを中心にまわり、中2、小5メンバーは遠慮気味に参加。 (A・B)は「B」という対立関係が可視化し、中3メンバーは傍観者もしくは加害者となり、集団としての安全性、凝結性は低い。 「どうしてこんなことをするの?」などのことごとく、寮長に告げられる事。などの発言もあり、セラピストに対する防衛も強い。
II 展開期 61.9~12	14名(中3G・H 2名参加)となる。中3、8名と児童の多いグループとなる。しかし、下級生に対する攻撃的、否定的行動はなく、中3Aの行動にリードされる場面は多いが、比較的良い関係で発展して行く。反面、4月に入寮した中3Cが色々と寮内で攻撃的、依存的な態度を現し、セラピストに対して特定のメンバーに「B」を攻撃したり、離脱したり、他の児童にも、話による攻撃性を示す行動が多くなった。そのためCの対立を中心に場面展開する。特に中3、中2AはCの行動に対して強固に排しに行く様子が視られた。このCをめぐる対立を通して、さらに集団凝結性が高まってきた。	10名(中3C・D・Eの3名、A・Bは途中退寮後、中2A・B・C・D・Eの5名、小学生小5A、小6B 2名) 中3名の離脱、中3名と小6名の入寮などメンバー間の変動もあつたが、全体としてのまとまり(長児を中心とする垂直的關係が強い)、相互有用も高まる。例えは小5Aに「対し、こいつらのくせに生虫気た、くせなやつ」と中3を中3に攻撃感情が表された。これに対し「僕のことをどうに理解してくれているの?」と対した。この発言で、上級生が「観察する場面も生じた。セラピストは、相互の発言をフィードバックし、相互の問題点、関係改善のしかたなどについて話し合ったりした。中3C(エス)の発言が、下級生に主力となる場面もあったが、メンバーはかなり生き生きと動くようになる。
III 終結期 62.1~3	16名(中3I、小6B 2名入寮)となる。数人的にはCの高れる行動もあるが、以前より相対に変化してきた。 1期にCに対して反応していたBもそのような行動をすることも減少し、なごやかな場面構成となり、全体感も形成されてきた。	11名(上記10名に中2Fが加入) 中2B、小5Aに対するメンバーの反応、攻撃よりも相対的改善は認められたが、集団凝結性は以前よりも弱し、なごみなくなりとした雰囲気も形成されてきた。

で、ここで得られた情報を職員にフィードバックすることによって、CLの成長に役立てられよう。④. かなりの非行児や一部の登校拒否児には、言語的表現やそれによる交流を苦手としており、非言語的手段を主とするテーマを活用するのも有効である。⑤. 治療場面の内容が、寮やクラスなどで話題にされることはなく、「口外しない」という約束がよく守られていた。CLは、この場面を自分達の特別な場と認知し、大切にしていた、と考えられる。⑥. 入寮間もない児童は、治療場面に比較的短時間のうちに傾倒するようであり、開放集団方式で特に支障はなかった。⑦. 2週1回のローテーションでは、少し間隔があり過ぎるように思われ、治療効果という面からみると、1週1回で実施する方が有効であろう。⑧. 治療場面でのCLの行動一例えば、潜在的には問題のある反社会適応児が、寮内で無断外出など問題をよく起こす児童と意気投合(微妙な一体感という印象)したり、描画などで非行・犯罪者(集団)に対する親和性、同一視などを顕著に示す内容を心理的スタンスを失って表現する等一から、無断外出の行動予測が可能となるかも知れない。今後、さらに検討を重ねたい。

児童臨床に関する一研究

一集団状況における母子分離の問題について一

吉川 晴美

(東京家政学院大学 家政学部)

〈研究の目的〉就園前の2,3才児の小集団活動における母子分離の問題について、子ども同士の関係の発達という観点から考察する。さらに、入の時のみひとつの臨床事例から子ども同士の関係の発達を促進する臨床技法について明らかにする。

〈研究の方法〉東京家政学院大学児童学研究室幼児グループ活動の実践研究の結果(1987.4~1988.6)を分析し考察する。

〈結果と考察〉

1. 2,3才児の集団活動における母子分離^{*}の発達の意義(*ここでは母と子が集団として領域を命じし活動を展開するこれを意味している)

①役割、生活、関係構築の境をりをつくる

②しかし、各々の子どもの現在の関係の発達のしるしに、入れぐれの個性、特色がある。皆同じように一斉に母子分離を促すのであれば良いというのでは無い。ある子どもにおいては現在は母子単位、家族単位の関係の確立、充実に必要であれば集団状況においてもまだ母子関係の発展を観望し援助して、いっしょに待つべき。

2. 母子集団活動の形態

- ①母子共通基盤的活動
- ②母子分離への向うの活動
- ③母親集団、子ども集団、各々の分離活動
- ④母、子集団の出会い、交流、合同活動

3. 分離(命じ)の物理的形態

- ①同室同室領域を命じさせる。視覚的には見えず、いっしょに通行可能。◎
- ②隣室同室領域を命じさせる。境のドアは開けてあり、視覚的には見えず範囲を見え、通行可能。○
- ③隣室同室領域を命じさせる。境のドアは閉めてある。開閉はいつでもできる。視覚的には見えず、ドアを開ければいつでも通行可能。○

4. 分離活動において子どもが母を求め理由

- ①今は、誰よりも自分の英雄と認める。まだ遊び相手として欠くことのできない存在である。
- ②日常生活のゆとり(仕事、さうじい、世話等)によって、関わりをもつ機会が少なくなる。今は自分のひとり母親として入の関係を築かめたい。

③集団における不安、緊張、動揺、不安を、子に何としていっしょに受けようとする。安心する依り所として求める。

④集団の様子をしばらく見たり観察するにめくして確保する。

⑤生理的(眠い、痛い、だるい等)により、一緒にいたい。

⑥母親の側に子どもと離れることへの不安があり、子どもにも反映し両者が離れがたい。

⑦無理に離れようとして離れようとするにせよ、不安が高まり離れがたい。

5. 子ども集団への母親の考へのしるし

- ①子どもと一緒に待つ活動する(演者的役割)。
- ②子どもが安んじ活動しやすく、バックアップしから考へる(補助自発的役割)。
- ③子どもの活動の発展を促すよう役割をとって考へる(監督的役割)。
- ④子どもが求めてきたときにすぐ受け止められる集団の周辺に位置し見守る(観客的役割)。
- ⑤母親集団に位置し、子どもが求めて来ない時に受け止めたり、子どもが安んじする手前のひとを子どもと共に出る散歩等をして遊ぶ(舞台的役割)。

6. 臨床事例から

①主眼 A子(3才)は音楽教室の幼児グループに入会した。しかし活動中ずっと母親から離れず、指導者から出される課題にこたえずじっとして、3才態に染み母親が心配し未だ。

②臨床活動 初回のA子と母親の相談から遊戯療法の結果から、本学で行われた、3才児グループへの考へることに移す。

- ③子ども集団における臨床技法
 - 三者関係のタッチメント促進の技法
 - 物理的補助自発的創発の技法
 - 身体、姿勢と支える空間操作の技法
 - 集団状況を鳥瞰、飛翔する技法
 - 役割付与、明確化の技法 etc.

④母親の集団活動への考へ、カウンセリングの援助

7. まとめ

集団状況における母子分離の問題は、誰もが経験する一般的な側面をもちながら、時には、入に様々な発達の、臨床的諸問題を集団的、管制的に提示して行く場合がある。保育者、臨床者の多面的関係認識・洞察、関係の発達を促進する関わり方(技法)が重要である。
参考文献: 松村慶平「児童臨床者の資質要件」(児童臨床心理学 石井哲夫編) 他、研究協力者: 東京家政学院大学幼児グループ(鈴木百合子他)

「いのちの電話」に関する研究（その3）

—自殺念慮的悩みと現実的悩み—

片野 卓 矢ヶ崎 誠治 ○小山 一郎

（中央学院大学）（左に同じ）（人間開発研究所）

（目的）「いのちの電話」は、現在では悩み全般に範囲を広げているが、そもその始まりは自殺予防カウンセリングであった。「日本いのちの電話連盟」は、さまざまな悩みを項目別に分類し、さらに毎年その項目別に自殺志向がどのくらいあるかを集計し公表している。本研究により、どのような相談内容に自殺志向が多いか少ないかを知ることにより、相談内容理解の一助となれば幸である。

（資料）本研究は「日本いのちの電話連盟」の「全国受信報告（1986年）」に拠った。相談内容は大項目で人生・家族・夫婦・男女・対人・医療・教育・性・法律経済社会環境・情報・相談以外のものに分類され、それぞれ小項目を持つ。大項目人生の小項目「自殺」はコーラーか直接自殺を口にして相談した件数であり、その中には自分自身の自殺念慮ばかりでなく親族等の自殺（自殺企図）を含む。従って、コーラー自身の自殺志向は100%ではなく、親族等の自殺（自殺企図）を除くもの（男子60・7%、女子69・0%）である。一方、各小項目中の自殺志向の数字は相談員が、コーラー自身の自殺念慮の有無について判断したものであるから当然バラツキが考えられるが、各地とも基礎的教育訓練を実施しており、傾向性判断の資料として耐えうると考える。

（説明）大項目分類において、それぞれの項目の相談件数に対する自殺志向の件数割合が大なるものは第1表のとうりであった。全体では男女合計で自殺志向は2・2%に過ないこと、自殺志向は人生・医療に集中（第1表）大項目 % していることが知られる。人生と医療の小項目は、人生・自殺・生き方・孤独・性格・職業・宗教・その他。医療・健康保持・増進・身体の病気・精神の病気・薬物中毒・アルコール中毒・その他である。これら小項目別の相談件数に対する自殺志向の割合は、第2表および第3表のとうりである。第2表においては、当然のことながら自殺の項目に自殺志向が圧倒的に多い。生き方・孤独にもかなりの自殺志向が見られる。第3表においては、精神の病気に自殺志向が当然に多い。薬物中毒・アルコール中毒もかなりの数値である。一方、自殺志向の少ないものを見てみ

第2表 人生					%第3表 医療						
項目	自殺	対人	孤独	その他	合計	項目	精神	アルコール	薬物	その他	合計
男子	60.7	5.2	3.9	1.8	5.7	男性	6.8	7.6	5.2	2.1	5.0
女子	69.0	5.5	7.2	1.7	7.1	女性	9.1	2.4	3.1	2.3	6.9
合計	65.0	5.4	5.3	1.7	6.4	合計	8.3	4.5	4.3	2.2	6.1

ると、大項目で性0・2%、対人0・8%、法律経済社会環境0・9%、などがある。人生の小項目では同じく男女合計で宗教1・5%、性格1・6%、職業1・7%などがあり、医療の小項目では健康保持・増進0・4%がある。

（考察）悩みに対して安定を回復しようとするのは、心理的ホメオステイシスであるが、性格に強い歪を持つ者にとって心の安定回復は必ずしも容易ではない。心の歪にも種々の悪様があるが、強い歪に伴う苦しみからの解放のためには、生をすら放棄しようとする切なる、あるいは秘かなる自殺念慮を抱く。一方性格に強い歪を持たない者にも日常的悩みは生ずる。より良く強く生きようとする欲求と、それを阻害する現実との葛藤である。前者を自殺念慮的悩み、後者を現実的悩みとするならば、いのちの電話の統計でも、これら二つの悩みが単独にあるいは重複して表現されている。まず、自殺志向が少ないものについて述べるならば、「性」はよりよく生きることの最たるものであることから容易に理解できる。「対人」の小項目は、職業・近隣・グループ友人知人・その他であり、「法律経済社会環境」とともに現実問題であり、自殺志向が多くないことは十分に理解できる。医療の「健康保持・増進」はさらにより強い生への執着を示している。問題は人生の「宗教」「性格」「職業」で、一見深い悩みのように思われるが、何れも神仏や他者へ依存したいという人生に対しポジティブな欲求と理解できる。次に自殺志向が多いものを見てみよう。人生の「自殺」については述べるまでもない。「生き方」は自我が確立していない迷い・キャタールのいう「自我の弱さ」から引き起こされる不安の一の表明である。「孤独」は、内向性が性格の歪によるものであるから、これも納得できる。「精神の病気」は性格の強い歪の表現である。「薬物中毒」「アルコール中毒」が自我の弱さを克服しようとする試みが、自我の過度の拡大となり、後、身体的精神的目傷に陥る行為である。

（結論）自殺念慮的悩みと現実的悩みとは、相談内容によりおおまかに区別出来る。相談内容が自殺念慮的悩みに該当すると思われる時は、その解消にも思いを致すべきである。（「日本いのちの電話連盟」の宇野徹氏のお世話になったが、文責は一切当方にある）

項目	人生	医療	その他	合計
男子	5.7	5.0	0.4	1.5
女子	7.1	6.9	1.0	2.8
合計	6.4	6.1	1.7	2.2

人生と医療の小項目は、人生・自殺・生き方・孤独・性格・職業・宗教・その他。医療・健康保持・増進・身体の病気・精神の病気・薬物中毒・アルコール中毒・その他である。これら小項目別の相談件数に対する自殺志向の割合は、第2表および第3表のとうりである。第2表においては、当然のことながら自殺の項目に自殺志向が圧倒的に多い。生き方・孤独にもかなりの自殺志向が見られる。第3表においては、精神の病気に自殺志向が当然に多い。薬物中毒・アルコール中毒もかなりの数値である。一方、自殺志向の少ないものを見てみ

可能性としての人格(3)

○長谷川孫一郎・酒川靖一郎・中川敦子
(山形大学教育学部)(宮城刑務所)(金沢医科大学)

目的：矯正教育や病院等の心理臨床のための人格研究は、何よりも教育や改善の可能性やその手掛りを発見することにある。今回は前回につづいて大学生と少年鑑別所入所少年に実施した心理諸検査と面接所見に自己記述文を加え、諸結果のもつ意味を吟味する。

方法と手続：大学生群はAI(昭61)とAII(昭62)の面群と少年鑑別のB群のそれぞれに実施したMJPI(法務省式人格目録)・MJAT(法務省式態度検査)・WAT(言語連想検査)・P-F Study(PFと略す)・心情質問診(A群は予診)、さらに自己記述文(A群は検査等の実施前に「私の人格」、実施後に「私の人格診断」、B群は「私の性格」等の作文)を比較する。実施人員数は下表の通りである。

	MJPI	MJAT	WAT	P-F	心情質
AI群	92	-	113	110	119
AII群	171	172	155	179	171
B群	287	193	113	129	287

MJPIは前回同様、妥当性尺度のLi, De, Ed, 臨床尺度のH, C, D, U, X, Y, O, M, S, Pの粗点, MJATはA(家庭), B(近隣), C(友達), D(仕事), E(転職), F(木商売), G(盛り場), H(流行), I(金銭), J(警察), K(やくざ), L(性)のT得点, 以下前回同様WATは反応総の各種連合別%と反応尺如・遷滞の%, PFはGCR%と各因子の%, 心情質は各指標ごとにイとイロ, ロとロハ, ハ, ハニとニ, ニホと木の5段階に分け、各人別の結果から相関を求めた。またそれぞれの標準反応からの偏りを廿・十・十・一・一の5段階に分けて各群の出現率を比較した。さらに自己記述文から自己評価や検査結果についての言及の有無などを吟味した。

結果1. 検査の各因子と心情質各指標の相関

それぞれ各検査の各因子や各指標間の相関をみると、内部相関の高いにもかかわらず、その詳細は各群間でかなり異なる。また集団式検査のMJPI・MJATとWAT・PF, WATとPF, 心情質指標と諸検査の各因子の間に高い相関を示すものは少く、しかも各群間にかなりの相違が認められた(さきの昭和63年10月、日本心理学会で報告した)。

結果2. 検査結果と心情質指標の各群間の比較

各検査に著しい偏りを示す者や心情質変調の出現率

が、A群よりB群に多いことは前回と同様であるが、全検査を通じて著しい偏りを示す因子が一つもない例は、今回新たに加えたAII群にも1例もなかった。各群別に著しい偏りを示した例の出現率(%)をAI:AII:B(MJATはAII:B)の順で示すと、MJPIは41.3:35.1:57.5, MJATは65.1:89.6, WATは92.9:93.5:86.2, PFは50.0:58.9:82.9と大差がないが、WATのようにA群が多い。ただ心情質変調は14.3:6.5:95.1と大差があった。

結果3. 検査結果・問診所見と自己記述文の比較

検査結果と問診所見を本人に示した後に、本人が自己の性格を記述した内容を見ると、B群ではそれぞれそのまま肯定する例がほとんどであるのに対して、AII群では男子より女子に、検査結果は検査結果より予診結果を肯定する例が多い。これを資料別に肯定:疑問:無視:否定の順で%を示すと、MJPIは75:13:10:0.6, MJATは75:15:9:2, WATでは66:23:9:2, PFは66:12:21:1であり、心情質予診では78:12:10:1%であった。

また自己記述文の自己評価では、AII群182例中で長所を認める例は男子の92%, 女子の94%, 短所を認める例は男子の98%, 女子の99%であるのに対して、B群(男子67, 女子29)では、長所を認める例78%, 短所を認める例100%であった。そしてAII群では多彩な長所が記述されるが、B群では男女とも「明るい」「お人好し」「友だち思い」などに限られている。

考察：A群の大学生とB群の鑑別少年は多かれ少なかれ、性格の偏りはあるにしても、社会生活への適応や可能性の実現の有無に大差があるであろう。しかしそれを前提にしても次の2点が指摘できよう。まず心理検査を人格測定に用いるとき、A・B両群の差と共にAI・II群の差にみるような個人差が著しい。また検査の内部相関さえも異なることから、その評定尺度や反応分布など検査の構造や個人別の変化の分析が重要であろう。次に可能性としての人格をとらえるには、面接所見と共に自己記述文の分析が重要であり、各検査結果のもつ意味を明らかにし、短所以上に長所としての人格を自覚させることが望ましい。すなわち、多彩な人格特性を発見させ、それを肯定的ないし建設的な自己像へ転換させることがその第一歩であろう。

異文化生育者の非行に関する考察

— 中国で生育した者について —

川 邊 謙

(東京少年鑑別所)

I 目的；犯罪非行の国際化の一つに外国人や海外からの帰国者による犯罪非行がある。Hirshi, T(1969)や星野(1981)などによれば、非行要因として、(1)逸脱文化への接近学習、(2)ストレインの強さ、(3)コントロールの弱さがあるが、異文化生育者の非行においてはストレイン要因のうちSellin, T(1938)の指摘した文化葛藤要因が非常に強く作用すると推測される。本研究では同一の異文化(中国)生育者の非行を分析し、同要因の作用の方向、他要因の有無、程度を明らかにし、非行要因研究の一資料としたい。

II 方法；＜対象者＞昭和62年4月から63年3月にかけてT少年鑑別所に入所した少年のうち、表1に示した中国で生育し来日後非行化した男子少年10名(再非行による再入所を含め延べ13名)。うち8名は親等が中国残留孤児である関係からの来日者。

＜実施法＞本人、家族、関係者との面接調査及び本人に対する知能検査、各種心理検査を実施し、資質的負因、日本への適応状況、時間の構造化の仕方、法や道徳に対する考え方、将来展望、家族の適応状況、家庭の問題などについて分析した。そして、客観性を保ち得る事実については、同時期に同鑑別所に入所した男子少年と比較した。

III 結果と考察；

(1)資質的負因 いずれの事例にも知能障害、精神障害、性格異常などの資質的負因は認められなかった。

(2)適応状態 来日から本件非行(1回目入所)までの期間はまたまちだが、初発非行(本人申告)は9例が来日3年までにあった。全例が来日前には全く日本語が話せず、本件非行時にも在日10年以上の1名を除いては日常会話はほぼ可能だが、複雑或は微妙な意志疎通は困難な状況だった。学校には平均1.8年遅れで編入されているが、全例に「いじめ」被害体験、学校休休が認められた。親しい日本人の友人を持つ者は在日期間の長い1名だけであった。日本への適応不全が非行化の一要因であるといえる。

表1 事例の概要 (D2, F2, F2は再入)

	A	B	C	D	D2	E	F	F2	G	H	I	J	
本件年齢	16/8	17/2	19/4	17/7	17/8	18/2	18/4	17/9	18/1	15/9	19/5	15/9	16/9
非行年齢	17/11	5/4	0/2	2/4	2/6	1/9	1/11	3/9	4/1	4/3	10/3	1/9	3/0
非行期間	17/11	2/6	0/2	1/9	*	1/3	*	3/0	*	4/0	0/9	1/9	3/0
再入理由	+			+	*	+	*	2	*	2	+	+	+
生活態度	+			+	*	+	*	+	*	+	+	+	+
社会適応	+			+	*	+	*	+	*	+	+	+	+
犯罪歴					*	+	*	+	*	+			

(3)非行内容 本件非行は13例中7例(54%)が傷害であった。同時期の男子入所少年の本件傷害率は14%で、中国生育者に有意に(x²検定以下同様)傷害非行が多かった。粗暴非行と比較しても一般男子入所者で25%、中国生育者で69%でこれも有意に後者に多かった。言葉による意志疎通の困難から直接的攻撃が生じやすくなっていると考えられる。また、自分の名誉を回復する為ならば暴力はある程度は認められると、個人的な衝突にはあまり公権力は介入しないものと述べる者が多く、自意識や対抗意識の強さと共に文化葛藤も認められた。殺人の事例では被害者が自分では気づかずに侮辱のサインを出し、攻撃を誘発している。

(4)逸脱的文化の学習 万引き、有機溶剤、性の経験のあるのは在日経験の長い1名のみで、暴走族等の不良集団加入者はなかった。日本に既存の非行副次文化への接近は認められない。ただし、中国帰国者だけの閉鎖的集団を形成し、独自の対抗的、逸脱的文化を形成する傾向は認められた。

(5)家庭環境 本件非行時に保護者が実父母でなかった者は6例で、一般男子入所者の非実父母率46%と有意差はなかった。尚、再入所した3例、殺人事例、及び兄弟にも非行犯罪の見られる3例ではいずれも両親が離婚していた。また、いずれの非実父母家庭でも両親の不和、浮気、不道徳などの問題が生育過程に継続的に見られ、それが子の心理社会的発達、安定した自己像や自己統制力の獲得などを阻害したと考えられた。非行化には文化葛藤の外に家庭の問題も非常に強く作用しているといえる。生活保護家庭、保護者不就業の家庭は各5例であった。61年の厚生省調査では中国残留孤児家庭の生活保護受給率は約43%、無職率は約40%であり、これに比べれば多くはないが、一般入所者に比べれば有意に多かった。家庭自体の安定性、適応性が十分でなく、親が生き方のモデルとなり得ていないという問題が指摘できる。一方、比較的詳しく知ることの出来た同胞で非行のない者はいずれも学校や職場に安定しており、具体的な将来展望を持ち得ていた。Hirshi, Tのいうコントロール要因のうちコミットメント、インボルブメントが強く認められた。

IV まとめ；本研究では非行少年のうちの一部しか扱っていない、多要因を統計処理していない、同条件で非行のない群との比較がないなどの問題はあるが、1)異文化生育者の非行はストレイン要因の強さ抜きには考えられない、2)文化葛藤要因は不適応をもたらす直接的攻撃行動を解発する方向で作用しやすい、3)家庭の問題も大きく作用する、4)逸脱文化への接近なしに非行化することもあるなどが示されたといえる。

ポリグラフ検査の緊張最高点質問法における
裁決項目の記憶に関する一考察

○西田順造（千葉県警察本部科学捜査研究所）
山下素邦

目的…先に実務検査の緊張最高点質問法（KS POT）における裁決項目情報の記憶について検討し発表した
が、今回は実験的に裁決項目情報の記憶についての分
析検討を行った。

方法…被験者は大学生27名（男13名女14名年齢18才
～21才）でポリグラフ検査の未経験者であった。被験
者に模擬犯行を行わせ、ポリグラフ検査を実施した後
に、KS POTの裁決項目情報並びにKS POTの裁決項目と
することの可能な模擬犯行現場情報に関する記憶調査
を行った。尚、被験者の模擬犯行現場行動をONE SIDE
MIRRORにより観察記録した。

結果…1 KS POTの裁決項目情報の再生記憶調査結
果…A質問表（指示された行動目的に直接関係する質
問）では、A1質問表…現金の入っていた物の認識に
ついて。A2質問表…盗まれた現金の額について。
A3質問表…現金の入った物のあった位置について。
の各質問表の各裁決項目情報の再生記憶率はいずれも
100%で差異傾向は見られなかった。

2 KS POTの裁決項目情報とすることの可能な模擬
犯行現場情報の記憶調査結果（B質問）…鏡が88.8%
と最も高く、棚、ノート77.7%、灰皿66.6%、機械40
.7%、椅子18.5%、ドア、エアコン7.4%の順であった。

3 煙草の名称の知識の有無と記憶の有無の関係に
ついての調査結果（B2）…模擬犯行実行以前にす
でに名称を知識として保持していた者で調査時に記憶と
して名称を保持していた者17名(62.9%)、名称を知
識として保持していたが記憶としては保持していな
かった者4名(14.8%)、名称を知識としては保持して
おらず、記憶としても保持していなかった者6名(22.
2%)、名称を知識として保持していなかったが記憶と
して保持していたという者の該当はなかった。

考察…実験結果を分析検討すると、1-指示された
行動目的に直接関係ある情報には処理水準の高い注意
が払われ、その情報は記憶として保持される。2-指
示された行動目的に直接関係ないが行動場面に関連が
あると思われる情報については目的遂行時において示
した注意の処理水準によってその情報が記憶として保
持されるか否かが決定される。3-指示された行動
目的に直接関係があるか、行動場面に関連があるか
にかかわらず、記憶保持に影響を及ぼす因子として情報
の新奇性があげられる。4-記憶保持に影響を及ぼ
す因子として知識（過去経験の記憶）の有無があげら
れる。5-先に発表したポリグラフ検査事例研究(1)
（応心第53回大会）において被検査者の記憶がなかつ
た3裁決項目情報について知識の有無を調査した結果
被検査者は3裁決項目情報については、犯行前に知識
として保持していなかったことがわかった。

尚、本実験結果は実務場面において、ポリグラフ検
査後犯行を自供した“常習窃盗犯”及び“持凶器使用
の強盗犯”等の内観報告調査から「目的との関連性」
「情報の新奇性」「過去経験の有無」等が記憶として
保持され検査時における反応表出へと結びついている
ことが実証されている。

模擬犯行現場室内の物体の記憶について

表 1

	A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	B 1
	箱	現金	机	煙草	ラック	机	鏡
記憶あり	27	27	27	25	17	25	24
記憶なし	0	0	0	2	10	2	3
%	100	100	100	92.5	62.9	92.5	88.8

表 2

	B 1	B 1	B 1	B 1	B 1	B 1	B 1
	ノート	棚	灰皿	機械	椅子	エアコン	ドア
記憶あり	21	21	18	11	5	2	2
記憶なし	6	6	9	16	22	25	25
%	77.7	77.7	66.6	40.7	18.5	7.4	7.4

(N = 27)

高齢社会化状況の生活心理

宮 本 昇

(高千穂商科大学商学部)

[問題]

高齢社会化の急激に進んでいくなかで、働く中高年齢者はどのような生活心理を抱いているか。(調査Ⅰ)また、在宅の高齢者の意識や行動はどのようなものであろうか。(調査Ⅱ)

[方法]

(調査Ⅰ)

◆ 質問紙

①「中高年齢者」という言葉の内包的意味をSD法によって測定し、さらに、その因子構造を分析する。(12個の形容詞対、5段階評定尺度)

②中高年齢者自身が、自分のことで気になると思うこと、それから、仕事をしてゆくうえで困難を感じるようになると思うことについて、それぞれ5つの項目のすべての組合せにつき1対比較で調査する。

◆ 調査対象

●国家公務員67人(55～59歳 18人、50～54歳 32人、45～49歳 11人、40～44歳 2人、年齢不明 4人)

●地方公務員127人(55～59歳 5人、50～54歳 14人、45～49歳 22人、40～44歳 63人、35～39歳 16人、30～34歳 2人、年齢不明 5人、女性は7人、性別不明が5人)

◆ 実施時期

昭和62年11月

(調査Ⅱ)

◆ 質問紙

①日頃よく口にする言葉(複数選択と自由記述)

②身内の人や、近所の人たちに望むこと。それから、神や佛に祈願すること。(自由記述)

③健康のため特に気をつけていること、年をとって一番困ることにつき、それぞれ5つの項目のすべての組合せを1対比較させて分析する。

◆ 調査対象

S県S市の2地区の高齢者学級に参加した、心身共に健康な高齢者たち105人(80代: 男5人、女1人、70代: 男21人、女29人、60代: 男7人、女35人、年齢不明: 男3人、女1人、性別も不明なもの 3人)

◆ 実施時期

昭和63年3月

[Ⅰの結果]

①について

形容詞の対	平均値	標準偏差
①厳しい ← → おだやか	3.387	0.931
②温かい ← → 冷たい	3.062	0.903
③上品な ← → 品のない	2.995	0.766
④優れた ← → 劣った	3.062	0.793
⑤動的な ← → 静的な	2.546	0.888
⑥強い ← → 弱い	3.016	0.974
⑦明るい ← → 暗い	2.521	0.829
⑧重い ← → 軽い	3.423	0.868
⑨柔らかい ← → 硬い	2.660	0.954
⑩大きい ← → 小さい	3.129	0.821
⑪複雑な ← → 単純な	3.294	0.950
⑫広い ← → 狭い	3.139	0.969

なお、因子分析の結果、第1因子として、若年者と比較して得られる現実的な認知に関する因子を、第2因子として、キャリアをベースに得られる自信に関する因子を抽出することができた。累積寄与率83%

②について

知覚減退<意欲減退<知能減退<感受性鈍化<体力減退

仕事の相手の変容<職場の人間関係<組織や制度の変更<職場をめぐる環境の変化<仕事上の知識や技術の变革

[Ⅱの結果]

①について

◆ 過半数の人が選んだ言葉

60代の男: 近頃の若い人は

60代の女: 今の世の中は、昔は、どっこいしょ

70-80代の男女: 今の世の中は、近頃の若い人は、もう年だ、私が若い頃は、

70-80代の女: 昔は、どっこいしょ、ああ疲れた

◆自由記述で複数あったものには、健康的で前向きな言葉が多かった。ただ1つだけ、「今の時代についてゆけない」と書いた人が3人いた。

②について

●身内に対して: 話合い、やさしさ、思いやり、ごく普通に扱って欲しい

●隣人に対して: 助け合い、仲よく、ゆずり合い、ごく常識的なつきあいを

●神佛に対して: 無事、健康、平和、長生き

③について

のんき<飲食<仲よく<運動<休養
貧乏<孤独<病気<ボケ<寝たきり

現代青少年の結婚観・家族観

○小串 武 福岡県精神衛生センター
秋山 俊夫 福岡教育大学
寺崎 裕志 福岡教育大学大学院

目的：戦前の家制度では、男が家の中心であり、絶対の権限を持っていた。また彼がその家系を継ぎ、発展させていくことが決められていた。このような中であっては、当然のことながら、男の子が生まれることが望まれた。ところが戦後間もなく民法改正があり、従来の家制度が180度変化した。これにつれて人々の結婚観・家族観のあり方も変化してきたのも事実である。

そこで今回は、家族形態という視点から、現代の青少年の結婚観・家族観のあり方についてその実態を明らかにするのが目的である。

方法：結婚観、家族観を問う質問40項目からなる質問紙を作成し、高校生及び女子短大生に実施した。

- ・調査期間：昭和62年 9月～10月
- ・対象：高校 2年生 124名（男61名、女63名）
女子短大生 2年生 137名

家族形態別にみた男女別対象者人数は次のようになっている。

		高校生			女子短大生
		男子	女子	計	
家	三世代 一人っ子	1(1.6)	3(4.8)	4(4.3)	1(0.7)
	三世代 二人以上	21(34.4)	19(30.2)	40(32.3)	41(29.3)
族	二世代 一人っ子	2(3.3)	3(4.8)	5(4.0)	8(5.7)
	二世代 二人以上	34(55.7)	33(52.4)	67(54.0)	81(57.9)
形	片親 一人っ子	—	—	—	2(1.4)
	片親 二人以上	3(5.0)	5(7.9)	8(6.4)	7(5.0)
計		61(100)	63(100)	124(100)	140(100)

〔高校生の結婚観・家族観について〕

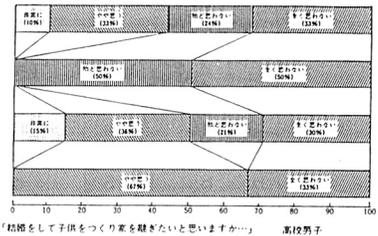
男女とも50%強の者が異性との交際をしていた。異性との交際の相手のタイプ、交際の内容、SEXの意義・目的において、家族形態での差は認められなかった。「結婚をして子供を作り家を継ぎたいと思うかどうか」の間に非常にそう思うと答えた者は三世代2人兄弟以上群と二世代家族2人兄弟以上群の男子のみに見られた。三世代家族では、結婚して家を継ぐという意識が育ちやすいといえるのかもしれない。又、この問いに対して片親2人兄弟以上群では、男女ともやや思うと、全く思わないのいずれか一つの答え方のみである。約60%の者が肯定的に反応をしていることは、他の群に比べて高いといえ、彼らには家庭ないしは家を作ることへの前向きの思いがあることが推察される。一方約40%の者が全く思わないと答える傾向は、他の群に比

べて高いとはいえないが、家を継ぐという概念に対し彼ら独自の否定観を持っているかもしれないということをおぼせる。全対象の内、1人っ子は男女合わせて9名であったが、そのうち家を継ぐことに肯定的なのは、1名のみであった。これは2人以上群に比べて非常に低いといえる。これはこの年代の1人っ子においては家を継ぐことに対して、反発ないし束縛感への反応が大きいといえるのかもしれない。

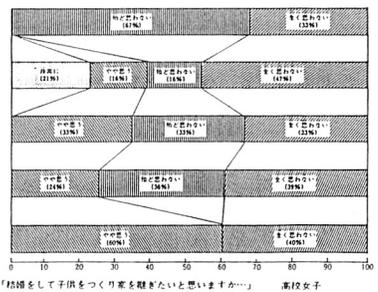
〔女子短大生の結婚観・家族観について〕

短大生の80%弱の者が異性との交際をしていた。異性との交際と相手のタイプ、SEXの意義・目的、交際の内容において、家族形態間において特に差は認められなかった。「結婚して子供をつくり家を継ぎたいと思うか」との問いについての結果は、図3のとおりである。非常にそう思うとか、やや思う等の肯定的反応が、二世代1人っ子群と片親2人兄弟以上群にやや高くでている。一方、全く思わないという否定的反応は三世代2人兄弟以上群と二世代2人兄弟以上群のみに見られている。2人兄弟以上の場合は結婚して家を継ぐという意識が1人っ子や片親家庭の者に比べて低いと言えよう。

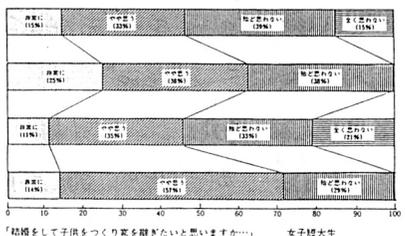
<図1>



<図2>



<図3>



地域の教育に関する親の意向

佐藤 伶

(秋田大学教育学部)

1. 目的：近年の日本の産業化・工業化にともなう社会変動は、伝統的な地域社会を大きく変えて来つつあるが、このことは同時にまた従来みられた地域の教育力を漸次低下させてきている。この傾向は農村部では共同体的結合の弱化や、工業就労要員として都市部へ若年層の人口流出の常態化により、地域住民をモデルとした社会化機能や、地域の青少年同士の相互学習機会の減少をもたらし、また大量の人口を抱えることになった都市部でも、居住地域に対して無関心で受動的層を増加させ、生活環境の悪化とともに匿名的生き方を強いられ、非行・犯罪を顕在化しやすいものとしている。さらに教育の専門家や制度化が、教育を地域社会から分離させ、学校独自のカリキュラムにより進行し、地域とかかわりあう面が制約されるようになって来ている。そこで今回秋田県教育委員会および秋田県生涯教育センターとの協力のもとに、地域の教育に関する問題に対する、児童・生徒を持つ親の意向について分析・検討し、地域の教育力を高めるための方策を探ることを目的とした。

2. 対象・方法：今回は秋田県内の農村部を対象地とし、北部から藤里町、中央部から矢島町、南部から太田町を抽出し、三町に現在居住している児童・生徒の親全員を調査対象とした。有効回収数 1,680名(回収率 88.5%)となっている。対象者の属性は男子45%女子55%で、年齢は30歳代61.5%・40歳代33.5%が主で、職業は会社員35%・農業24%・自営業17%・公務員団体職員13%などが主なものとしてあげられる。これらの対象者に質問紙法による留置法で、家庭・学校・地域における教育上の問題に対する意見を求めた。なお調査期間は昭和62年10月上旬～中旬である。

3. 結果と考察：(1)家庭教育の役割については、善悪のけじめがはっきり出来るようにする(61%)・基本的生活習慣の形成(56%)・暖かい家族関係を育てる(53%)・他人への思いやりや人間関係のあり方を教える(52%)・家族の一員としての自覚と責任感を育てる(44%)、が反応の多いものとしてあげられ、いわゆる社会人としての自立の基礎づくりとともに、人間関係の尊重を家庭教育で行っていくべきであるとしている。(2)学校教育の役割については、基礎学力をしっかりと身につける(59%)・豊かな心や道徳性

を身につける(58%)・集団生活での規律を守る(44%)・子どもの個性を育てる(37%)・子どもの悩みなどの相談に力をいれる(33%)、が主なものとしてあげられ、学校では学校本来の学習指導とともに、社会化と個性化をめざす生徒指導への期待が大きいのが目立った特徴としてあげられる。(3)地域教育の役割では、子どもの自発性、協調性、連帯感を育て、社会の一員としての自覚を持たせる(75%)・地域ぐるみのふれあい活動を通して子どもの健全育成をはかる(69%)・スポーツ、レクリエーション活動を通して子どもの身体を鍛える(54%)・ボランティア活動を通して、公德心や思いやりの心を育てる(41%)・地域の芸術文化・奉仕活動を通して郷土愛を育む(35%)、が反応の多い方からあげられ、地域教育では、地域の人たちとの接触・交流を通して連帯意識や協調性・公德心の育成とともに、地域への関心や郷土愛を育てて行くことを期待していると言えよう。(4)子どもの教育で、家庭・学校・地域が連帯して行っていく必要があることでは、他人への思いやりや協調性を育む(43%)・善悪のけじめを身につけさせる(40%)・ことば使いや礼儀を身につけさせる(38%)・整理、整頓や物を大切にするなど、基本的生活習慣を身につけさせること(36%)・学習の習慣を身につけさせること(35%)、が反応の多いものとしてあげられ、親たちはとくにきちんとした生活態度や学習態度の形成には、家庭・学校・地域社会それぞれの担うべき教育的役割の遂行とともに、さらに三者の連携によって立体的に当たっていく必要のあることを指摘していることがわかる。(5)そこで現在、家庭・学校・地域の連携の度合をみると、学校行事を地域社会が協力する・学校が地域活動への参加を指導する・学校を地域に解放する・家庭が地域活動への参加を促す、という諸点では割合よくなされているが、親の学習の場を地域の企業内にも広げる・地域の高齢者から教わる・教師の特技や能力を地域に提供していく・学校が地域の人材や施設を活用する、という諸点では従来からあまりなされていないという意向が認められた。

4. 今後の課題：地域の教育力を高めていく方策として、家庭・学校・地域それぞれの教育的意義や役割をふまえた上で、家庭・学校、家庭・地域、学校・地域の二者間の連携を計る工夫をPTAや公民館などが中心となって行っていく、その上に家庭・学校・地域の三者間の連携についての組織づくりとともに、実践への努力をしていくことが今後の課題とされよう。

明治前半期における心理学受容・形成過程の研究(8)註

安倍 淳吉
東京国際大学 教養学部

1) 西欧心理学原著の受容については、旧幕府中學校の
 一 南成堂(洋学)蔵書の中に Comte, A. の Discours,
 Guizot の History とともにすでに Paine, Martineau, A
 discourse on the soul and instinct, NY, 1848,
 230p を見出すことができる。なおこの旧南成堂の
 蔵書は 慶應4年3月討幕軍江戸城入城直前 勝海舟
 門下により持ち出されていた。同年5月徳川宗家が一大
 名に降下せられ封地として三河駿河伊豆を与えら
 れ、同年11月宗家が封地に移動直後府中(現静岡市)
 に開設した 徳川学内所 の蔵書にそれがあてられた。
 そして明治3年¹⁸⁷⁰ 宛いたし分として Haven, J. の "moral
 philosophy, Boston 1870, 366p を加えられた。同蔵
 書は、明治4年 慶應置縣とともに学内所が廢校と
 なり、その後静岡師範學校に移され、現在静岡県立
 図書館に存在する。見いし分を含めて 360冊に及
 んでいる。2) 他方蔵書を失い空家同然となった旧南成
 堂は慶應4年6月明治政府により接收され、旧南成堂
 の若手の人々により南成學校として西建、明治2年1月
 南成生徒を受け入れた。南成學校はその後大南校南
 校などと明治4年頃まで次々と改称されたが、大南校
 蔵書本の中に Haven, J. Mental philosophy, including
 the intellect, sensibilities and will, 1869, 590p 加
 Alden, Joseph, Elements of intellectual philosophy,
 late president of Jefferson College, NY, 1869, 292p.
 とともに存在する。明治2,3年頃の購入と推定される。
 3) 他面見落してはならないことは、~~Haven~~ Haven や Wayland
 などの心理主義的倫理学、政治学受容を通して心理
 学的歡楽が普及したことである。とくに Wayland の
 "moral science" の原著は慶應2,3年頃より江戸
 に輸入された。伊沢修二は慶應3年すでに同書を入
 手熟読していたのである。徳川学内所はもろもろ
 慶應義塾(即ち慶應4年3月創設) 共徳義塾(江戸
 前藩主南部信民によって明治5年東京に創立)、報
 國~~●~~ 學舎(久留米前藩主有馬頼成によつて明治5年
 東京に開設)等当時の代表的私塾で「道心論」教科
 書として使用された。4) 明治3年5月西用が哲学連環
 と講じた時には西のみでなく徳川学内所の在学者は
 すでに Comte, Guizot, とともに Haven, ~~を~~ ^{Wayland} まで知っており、大
 (註) 1) 拙著「明治期における心理学の受容・形成過程の研究(8)註」
 (現代心理学の理論的展開、川島書店、1984)

南校の在學生は Haven を、慶應義塾などの在學生は
 Wayland をすでに知っていたと推定しても決して自
 然でない。5) さて大南校は明治2年頃まで「は政府の中核校
 として大学の自負をもっていた。しかし海外の教育体系が次第に判明
 するにつれ明治3年頃より自らを中學校に定位し(その上に華内
 學校を構想するに至り、その中にフロンゾーを置いた。しかし明治
 3年には財政難の爲実現しなかつた)が明治6年最初の国立
 華内學校 東京開成學校が創設された。そこで Syke によつて
 Haven の mental philosophy, Wayland の moral science が
 心理学、道徳学の教科書として使用された。西書は全国的に広く
 權威づけられた。6) 当時文部省図書課長であった西村茂樹は
 明治8年明文社の友人西風に依頼して明治13年までに Haven
 の mental philosophy の訳註を文部省より刊行した。西は
 mental philosophy を「心理学」、Psychology を「心理学」という訳
 語を使用した。西訳由 Haven の「心理学」は明治20年代に至るまで
 日本全国で多くの版を重ねた。当時図書出版物の日本全国
 に亘る統一の配給組織がまだ存在せず各地で印刷売りさ
 ばかれたのである。明治14年の同書の奥付では東京大阪、
 兵庫加那山、名古屋、伊勢福岡、大分、熊本、土佐、仙台に及んで
 いる。明治28年谷本富が高師教授として學生に受験準備としてどの
 様な著書も使用した。大分アンソール大學生の過半数が西の Haven (西)
 によると答えた。20年代の Herbart や Wundt, 10年代の Bain などの
 影響は専門家の内に限られ明治20年頃まで一般大衆層
 にとっては依然 Haven の能力心理学であったことと推定しては
 ならない。7) Wayland の "moral science" は明治6年から同11年の間に
 異なった訳書が数校全国に亘つて出版された。泉西修身論(山本義後、
 明6年)修身学(尾見季吉、明7年)修身学(大井直志、文部省刊、明11年)
 修身学(神谷知常、明11年)それに訳者不明のもの(同11年松江で出版
 された。なお Wayland の manual of moral が小学生用教科書として
 修身論(阿部嘉吉、明7年)文部省から出版された。またこの Wayland
 は明治10年台三宅正一等の進化論的心理学の批判に対抗して19年代
 にも Wayland が意図的に使用された。8) さて教育学(教育心理学)
 發達心理学の受容は伊沢修二の教育要法(明治8年刊)に始る。
 これは彼が南校退學時 Verbeek から贈られた Page, H. Theory and
 practice of teaching の前半を骨子とするものであった。彼は明治7年愛知府
 で Page を講じた。師範學校は明治5年學制の前提として同年各府県
 に一校設立が強制され、12年頃まで全国に設立された。しかし中核校
 東京師範でさえ教科書としての心理学は10年教育学は11年に初めて設定
 教科書は心理学、倫理学ともに Wayland であった。その後市範は心理学
 教育学が全府県へ浸透する唯一の氷路となった。Wayland と Haven
 は当時北米でも最も基礎的・体系的な心理学の、旧派の教科書であった。

少数集団所属と孤立・イジメ

石郷岡 泰
(新潟大学人文学部)

孤立やイジメは、単なる「弱者」よりも、むしろ「集団の均質性」からはずれた者に対して向かう対応行動という傾向がつよいと考えられる。つまり孤立化に追いやられたり、イジメられたりする場合、その基盤には「集団の中における異質性すなわち〈どこかふつうとちがう〉〈どこかみんなとちがう〉」やそれにもとづく成員からの反感があることがうかがわれる。反面、同調行動からの逸脱者が他の成員から拒絶される傾向にあるという研究結果も数多くみられる。それでは同調行動をとると孤立化やイジメは現象化しないのかということかならずしもそうではない。たとえば、まわりの者との対比の際の価値雰囲気や行動基準などから、なんとなく目障り、シャクにさわる、ムカつく、気にかかる（つまりは異質性を見出す、つくり出す）が故に当初から同調行動を拒否される場合が少なくない。しかも、子どもの場合で見ると、孤立化やイジメの現象化している集団をとりまいて、あるいはつつみ込んでいる大人集団、地区の教師や父母や年長児童生徒たちのもつ価値雰囲気が背景または土台になっている場合が少なくない。むしろそうした価値雰囲気の背景があるから発達してくるとも考えられる。

こうした差別・偏見・イジメ・孤立化などを、少数集団としてのウタリ（アイヌ系日本人）の人たちとその人たちと居住を共にする同地域の一般住民との関係から捉えてみることによって、少数集団所属の意味およびイジメや孤立化のメカニズムの一端を明らかにしていってみたいと考える。

調査対象地： 浦河町および平取町、穂別町
調査対象： 一般住民および小・中学生
調査方法： 質問紙および面接による。質問紙によって一般的状況を捉え、面接によってその具体的な行動型や具体的な関わりのあるあり方を捉えた。

本稿には資料の一部をのせ、詳細は発表にゆずる。
以下調査結果の一部（資料）

アイヌの人達への偏見や差別 (217名)

1. 「アイヌ」「ヘカチ」「ボンチョ」と悪口を言われる 40 18.4%

- | | | |
|---|----|-------|
| 2. 「アイヌ」とか「メノコ」と呼ばれている | 24 | 11.1% |
| 3. 「コタン人」と言われる | 16 | 7.4% |
| 4. 「アイヌ」とか「ウタリ」と呼ばれる | 2 | 0.9% |
| 5. 学校の中で「アイヌ」と言われ、喧嘩すると必ず「アイヌ」と呼ばれる | 23 | 10.6% |
| 6. 学校での差別や偏見がある。先生の方からない時に「アイヌ」と言われたり、陰口される | 16 | 7.4% |
| 7. 学校で「ヘカチ」とか「アイヌ」と言われる | 2 | 0.9% |
| 8. 学校やバスの中で「アイヌ」「メノコ」「コタン人」などと言われる | 4 | 1.8% |
| 9. 子供達が差別されている。学校内で弱点を探して差別したり、「アイヌ」と言って馬鹿にする | 4 | 1.8% |
| 10. 学校で給食の時「毛が食べ物に入るから側に寄るな」と言われた | 3 | 1.4% |
| 11. 学校で給食の時「「アイヌ」の盛りつけは臭いから食べるな」と言われた | 1 | 0.5% |
| 12. バスの中で「毛がある」と言われる | 4 | 1.8% |
| 13. 子供達の中で顔を見て名前を聞いて差別する。友達同士でも差別する | 4 | 1.8% |
| 14. 校庭などで「側に寄るな」といわれる | 1 | 0.5% |
| 15. 子供を自家用車で学校まで送り迎えしている | 2 | 0.9% |
| 16. 高校でも差別がある | 2 | 0.9% |
| 17. 学校の内外で子供達に対してなされている | 4 | 1.8% |
| 18. 学校や職場で差別されたり陰口される | 15 | 6.9% |
| 19. 一般社会で仕事や生活の各レベルに多くの差別があり一言で語ることは出来ない。口には言えないくらい | 8 | 3.7% |
| 20. 「毛深い」と言われる | 16 | 7.4% |
| 21. 仕事のため手捲くりする時、毛は剃っていても手を出せない | 1 | 0.5% |
| 22. 職場で働いても「アイヌ」と呼ばれたり、差別されたりする | 4 | 1.8% |
| 23. 職場で行事などで仲間外れにされる | 1 | 0.5% |
| 24. 「「アイヌ」は臭い」と言われる | 3 | 1.4% |
| 25. 「あ、犬」（ア・イヌ）とか、「ア・イヌ来た」とか言われる | 24 | 11.1% |
| 26. 結婚の時に差別される | 23 | 10.6% |

大学生の自己確立過程について (I)

○常盤 満 嘉部和夫 高久信一
 (日本大学) (日本大学) (日本大学)
 土屋明夫 松本 洸
 (日本大学) (日本大学)

大学生における自己確立の過程の解明は、青年研究において中心となるべき課題の一つである。この過程を実証的レベルで解明することが本研究の目的でもある。特に大学生の未熟化の内容を知る意味で、自己確立への広範囲な影響要因を分析・検討することにある。

第1段階として、自己確立度を測定するのに必要な項目を既存の有効と思われる鍵項目を選定する。第2段階として、さらにその項目に体験項目を加味し、新しい質問項目を作成する。この質問票をもとに、調査を実施し、統計的処理を行い主要因子を取り出した。

つぎにそこから抽出された上位因子と大学生の各学部あるいは大学間、首都圏・地方の所在位置などの違いによる差異、また性別(男女)間の自己意識の差について検討を加えることを目標にした。

調査Ⅰ 自己意識尺度の作成

方法：これまでの自己確立過程に関する自己意識尺度18尺度計126項目(加藤隆勝・高木[1980]宮下・小林[1981]砂田[1979]加藤厚[1983]より)を選択し、大学生、短大生を対象に2件法で回答を求めた。それぞれの回答に対して『はい』2.0点、『いいえ』1.0点、『無記入』1.5点、の得点を与えた。18尺度の内訳項目は尺度Ⅰ自我の独立性(10項目)、尺度Ⅱ親への依存性(5)、尺度Ⅲ反抗や内的混乱(5)、尺度Ⅳ時間的展望の混乱(4)、尺度Ⅴ自己意識過剰(3)、尺度Ⅵ役割固着(6)、尺度Ⅶ労働マヒ(4)、尺度Ⅷ同一性混乱(4)、尺度Ⅸ両性的混乱(4)、尺度Ⅹ権威の混乱(5)、尺度Ⅺ価値混乱(4)、尺度Ⅻ孤独感(12)、尺度Ⅼ空虚感(9)、尺度Ⅽ圧迫拘束感(10)、尺度Ⅾ自己嫌悪(13)、尺度Ⅿ現在への自己投入(4)、尺度ⅰ過去の危機(まよい経験)(4)、尺度ⅱ将来への自己投入への希求(4)、である。

大学生計2055名、短大生計197名、合計2252名。学年別では1年生1492名、2年612名、3年92名、4年54名、5年以上3名である。調査期間は1986年12月～1987年4月である。

結果と考察：調査結果を因子分析をし、さらにバリマックス回転を行う。TABLE1では上位7因子だけ表示したが、とりあえず因子F15まで抽出しそれぞれがほぼ既存尺度と同一の内容をもつことが確認できた。

TABLE 1 各大学生の自己意識の上位7因子上の得点

大学・専攻名	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
CL(1) 地	-0.29	-0.03	0.23	-0.07	0.03	0.37	-0.05
CL(2) 中	-0.05	-0.15	-0.01	0.00	0.07	0.15	-0.11
CL(3) 中	0.19	-0.02	-0.06	0.05	-0.05	0.04	-0.08
CL(4) 中	0.17	-0.05	-0.18	0.16	-0.42	-0.18	0.05
CS(1) 中	0.02	0.10	-0.06	-0.02	0.09	-0.22	-0.13
CS(2) 中	-0.15	0.02	-0.02	0.04	0.06	0.23	-0.04
CS(3) 地	-0.13	-0.06	0.00	0.05	0.24	-0.10	0.06
CS(4) 中	-0.01	-0.20	0.12	0.03	-0.00	-0.03	-0.16
JCL(1) 地	0.21	0.13	0.30	-0.22	0.13	0.39	1.04
JCL(2) 地	-0.02	0.26	-0.25	-0.52	0.19	0.27	0.47
CS(5) 中	-0.17	0.01	0.18	-0.18	-0.31	-0.45	-0.25
JCL(3) 中	0.04	0.30	0.14	-0.45	-0.15	0.33	0.12
JCL(4) 中	0.26	0.28	0.54	0.08	-0.00	-0.22	0.43

CL大学文系、CS理系、JC短大、中：首都圏、地：地方

以下抽出したものの中から15因子だけを記する。

F1 充実感 ↔ 空虚感、F2 親密性 ↔ 孤立感、F3 マイペース ↔ 圧迫拘束感、F4 自我の独立性、F5 自我同一性、F6 自我同一性混乱、F7 親への依存性、F8 孤立感、F9 自己投入(-)、F10 社会的自己存在、F11 自己価値性 ↔ 自己嫌悪性、F12 全能性、F13 大人への反抗、F14 自信、F15 労働マヒ。

全般的に大学及び専攻の違いによる顕著な特徴は見出せないが、第1には大学の所在位置つまり首都圏の方が地方にある学生よりも充実感はあるが、自我同一性に関する自己意識の混乱は少ない傾向にある。大学と短大での違いは、専攻によって異なるが、独立性がなく孤立感が短大生の方に見られる。従って、全能感もかなり大学生の方が豊かであるようである。一般的に、特殊な専攻を除いては現在の学生はマイペースで過ごしているようであるが、やはり独立性はかなり低い次元にあると推察できる。

調査Ⅱ：性別による自己意識

結果と考察：TABLE2で表示した通りの結果である。

TABLE2 男女の自己意識

性別	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F9
男	-0.06	-0.11	-0.02	0.07	0.08	-0.06	-0.08	0.03
女	0.10	0.22	0.08	-0.19	-0.24	0.10	0.20	-0.07

全被験者の男女別数は男性1605名、女性644名、計2249名である。男子学生は同一性、全能感、独立性、自信、社会的存在傾向があり、女子学生は同一性混乱親依存、価値混乱傾向にあるが、マイペース、充実感自己投入ができていない。

大学生の自己確立過程について（Ⅱ）

常盤 満 ○嘉部和夫 高久信一
 (日本大学工学部) (日本大学商学部) (日本大学農獣医学部)
 土屋明夫 松本 洸
 (日本大学経済学部) (日本大学芸術学部)

<目的>大学生の自己確立過程の解明は、青年研究において中心となるべき課題の一つである。本発表においては、自己確立過程に重大な影響を与える、自我意識がどのような経験・体験要因によって変化するかについて報告する。中でも、何かを成し遂げて“やった！！”という体験（至高体験）を持っている者とそうでない者との間に、どのような相違が存在するのか。また、その体験が小学校時代、中学校時代、高等学校時代のいつにあったのかによって、どのような違いが生じているのかについても考察する。

<方法>加藤・高木 [1980]、宮下・小林 [1981]、砂田 [1979]、加藤 [1983] より選択された自我意識に関する尺度を利用して、因子分析を行い18尺度 126項目（意味が明確にならなかった尺度2つを除いて）を導いた。この因子を用いて、体験項目とのクロス集計を、各被調査者の因子得点について行い、その平均とSDを求めた。さらに、各グループ間で分散分析を行い、F比を求めた。

被調査者は、大学生計2055名、短大生計 197名、合計2252名である。調査期間は、1986年12月～1987年4月である。

<結果および考察>結果は、全因子の中で有意な差を示した因子についてのみ TABLE 1 に示した。

◎達成感の有無と因子得点：全因子の中で有意な差を示した因子は、F 2生活充実感（－空虚感）、F 4全能感、F 5親密性（－孤独感）、F 6自己独立性（－自信欠如）、F 10自己価値（－自己嫌悪）、F 11自己投入希求なし（－自己投入の希求）、F 15内的混乱、F 20社会的自己存在の8因子である。しかも、因子得点の平均は20因子全てについて その方向性が明確である（プラスまたはマイナスが両群に対立的に現れている）。有意差のあった因子の中で、F 2、F 4、F 5、F 6、F 10、F 20については達成感のあったグループがプラスの得点を示し、F 11、F 15についてはマイナスの得点を示している。つまり達成感（至高体験）を持ったグ

ループは、生活充実感が高く、全能感が高く、親密性が高く、自己独立性が高く、自己嫌悪がなく、社会的自己存在が高く、自己投入希求は高く、内的混乱は少ないとの特徴が認められる。しかし、達成感のないグループでは全く反対である。つまり、達成感は明らかに自我意識にポジティブな影響を与えている。

◎達成感を持った時期と因子得点：達成感の有無に関してはF 10に有意差が認められたが、ここでは有意差は認められなかった。しかし、逆に達成感の有無に関して有意差が認められなかったF 18（価値混乱）に有意差が認められた。つまり、どのグループの間にも自己嫌悪が無いことが明らかになったのである。一方、価値混乱が発達段階に応じて異なるのに、達成感の有無によっては差が生じていないのである。つまり、ここでは社会的価値の混乱が項目の内容であり、発達段階の影響を大きく受けたものと思われる。

総じて言えるのは小学校時代の達成感、他の時代の達成感と比べて、因子得点をそれほど高めるようには影響していない。高校時代の達成感、F 2、F 11、F 15、F 18、で最高点を示しており、中学時代の達成感、F 4、F 5、F 6、F 20、で最高点を示している。つまり、中学と高校の達成感には明確な違いが存在しているように思われる。高校時代では、生活充実因子に高く、自己投入希求が高く、内的混乱が少ないが、社会的価値は混乱している。中学時代では、全能感が強く、親密性も高く、自己独立性も高く、社会的自己存在も強く意識している。これは、中学時代が自己の内的世界中心に居ることを示している。しかも、この内的世界の充実を通過して、現実生活での自己投入希求が高まるのである。このことは、達成感が自我意識に明らかに影響を与えているとともに、発達段階に沿って自我意識が影響・形成されていることも示している。

小学校時代の達成感、F 2、F 4、F 5において達成感有りの平均を下回りマイナスの値を示しておりあまり強い影響は持たないようである。

TABLE 1. 各群毎の因子得点平均と分散分析の結果

	F 2	F 4	F 5	F 6	F 10	F 11	F 15	F 18	F 20
達成感有無 F比 水準	0.074 -0.189 15.145 **	0.042 -0.115 6.162 **	0.109 -0.260 29.489 **	0.067 -0.172 13.697 **	0.068 -0.097 7.370 **	-0.092 0.193 20.874 **	-0.058 0.064 6.197 **		0.036 -0.095 5.335 **
小学校 中学校 高等学校 F比 水準	-0.021 -0.016 0.121 10.270 **	-0.035 0.080 0.027 4.353 **	-0.036 0.163 0.099 21.272 **	0.065 0.081 0.050 7.317 **		-0.127 -0.143 -0.050 13.259 **	-0.116 -0.094 -0.027 3.272 *	0.043 -0.030 0.072 3.075 *	0.043 0.044 0.021 2.700 *

(* 5%水準 ** 1%水準)

大学生の自己確立過程について (III)

○高久信・ 常盤 満 嘉部和夫
 (日本大学農獣医学部) (日本大学工学部) (日本大学商学部)
 土屋明夫 松本 洸
 (日本大学経済学部) (日本大学芸術学部)

大学生における自己確立の過程に非常に大きな影響を及ぼしていると考えられる要因に、家庭の在り方と父母との関係があげられる。青年期の発達課題の一つとして、親からの精神的独立がいわれている。私立大学連盟や各大学の実態調査によれば、自宅を離れて一人で生活している学生は約半数にのぼっている。生活上の環境としては独立した生活を送りやすい状況にある大学生の、自己確立の過程と家庭および父母との関係をあきらかにすることが本報告の目的である。

方法：第一報で報告した自我意識尺度項目126項目を因子分析し、得られた各因子に対する各個人別因子得点を、各質問項目への反応パターン別に算術平均しさらに分散分析をした。その結果の一部をTABLE1に示してある。主要上位因子と家庭および父母に関する質問項目への反応の違いによる差異について検討をこころみる。

結果と考察：TABLE1で明らかなように「あなたは、これまでの家庭環境に満足していますか」という質問に対して、満足・どちらかといえば満足と答えた学生は83%である。また「幸せな家庭だと思う」と答えた学生は89%であった。家庭に対してかなり良いイメージを持っていることがわかった。この家庭環境に対し

て不満度が高いほど、F2親密性F3マイペースF7親への依存性の得点が低くなっている。幸せな家庭でないで答えた場合も同様であり、孤立感、圧迫的拘束感が強く、親依存出来ないようである。この家庭環境についての質問では、どちらかといえば不満と答えた場合のほうが不満の場合以上にF4自我の独立性F5自我同一性が獲得出来ないでいる。さらにF1充実感についてみると、家庭環境に満足していると充実感が高いが、次に高いのは不満であると答えたグループである。どちらかといえば満足または不満の場合には逆に低くなっている。これはF6自我同一性混乱の場合でも同様であり、満足・不満ということよりも、あいまいな回答をする学生に充実感の乏しさ自我同一性の混乱がみられる。父母との関係の質問では「父の愛情は十分である」89%「母の愛情は十分である」95%と非常に高いパーセンテージで肯定的である。父の愛情が十分でないで答えた場合には、親密性、マイペース、親依存が難しいようである。特に母の愛情が十分でない場合には親依存の得点が極めて低いのである。これを親からの独立とみるか、親依存が出来ないとみるかは他の項目との分析をすすめる必要がある。「親と私で考え方や生き方にくいちがいがある」と答えた学生は53%である。この親との対立を感じている学生のほうが自我同一性の獲得が困難で混乱がみられ、自己確立の途上であることがうかがわれよう。

充実感、自我の独立性因子では、父母に関する項目では有意差がみられなかった。

TABLE 1 各項目別上位7因子平均因子得点 (* 5% ** 1%)

質問項目	N	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
これまでの家庭環境に満足 不満	89	0.02	-0.64	-0.29	-0.04	-0.12	-0.32	-0.58
どちらかといえば不満	293	-0.12	-0.18	-0.17	-0.16	-0.24	0.05	-0.38
どちらかといえば満足	1025	-0.12	0.04	0.01	-0.03	0.02	**0.03	-0.05
満足	839	0.14 **	0.07 **	0.11 **	0.08 **	0.04	-0.05 **	0.26 **
幸せな家庭だと思う								
はい	2006	0.00	0.03	0.04	0.01	0.00	0.00	0.07
いいえ	239	-0.12	-0.36**	-0.29**	-0.13 *	-0.13 *	-0.05	-0.53 **
父の愛情は十分である								
はい	2002	0.00	0.02	0.03	0.01	0.01	0.00	0.06
いいえ	241	-0.07	-0.25**	-0.16**	-0.11	-0.17**	-0.06	-0.46 **
母の愛情は十分である								
はい	2143	-0.01	0.01	0.02	0.00	0.00	-0.01	0.04
いいえ	103	-0.02	-0.39**	-0.19 *	-0.10	-0.18	-0.12	-0.76 **
親と私で考え方や生き方に								
はい	1192	-0.04	-0.06	-0.02	-0.03	-0.12	0.05	-0.21
くいちがいがある	1053	0.02	0.04 *	0.04	0.02	0.12**	-0.09 **	0.24 **

中堅女子社員の職業的満足感・職業的同一性

全体的同一性に関する研究

その4. S C T 内容分析による同一性の検討

○中益 洋子 (青山学院大学保健管理センター) 園田 雅代 (玉川大学 文学部) 田中 香織 (テンポラリーエデュコンサルト)

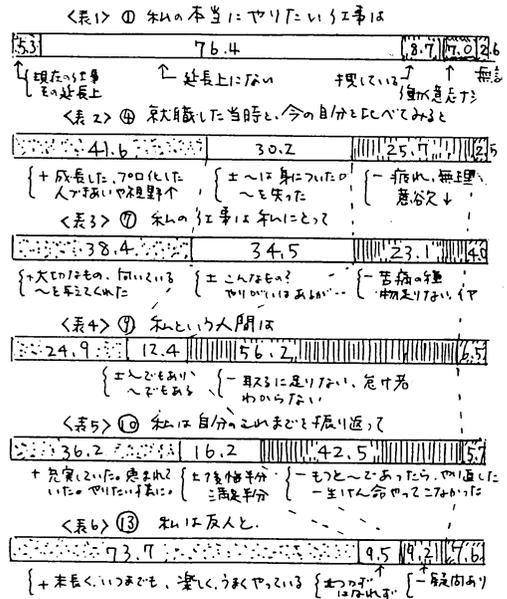
目的： 年齢20代半ばから30代半ばを主とする中堅女子社員の職業的同一性・全体的自我同一性を、文章完成法（SCT）を用いて測定する試みについて、引き続き報告を行なう。その1～3で、我々は、SCT反応を得点化する手続きと、そこから得たスコアを基にして同一性を測定することが、中堅女子社員群にとって内容的に妥当であることを検討した。その4では、SCT 14項目への反応内容をカテゴリー別に分類・整理し、そこから、中堅女子社員の職業的・全体的自我同一性を構成する内容について検討することを、ここで本研究目的とする。

方法： i) 質問紙について
14項目から成るSCTを作成した。この14項目のうち前半7項目(①～⑦)が職業的同一性の様態把握として、また、後半7項目(⑧～⑭)が全体的同一性把握としてそれぞれ用意されたものである。

ii) 被調査者
企業に勤務しているフルタイムの女性 354人。年齢的には19才～50才まで、平均年齢は27.8才。
・SCT反応を、その分化度や明確さといった次元とは別に、専ら内容のタイプによって分類し、それぞれの出現頻度を調べる。分類の際に、③～⑦⑨⑩⑬⑭に関しては、『内容がポジティブ(積極的・肯定的)であるか、ニュートラル(どちらとも言えない)か、ネガティブ(消極的・否定的)であるか』を第一の基準とする。また、①②④⑧⑪⑫に関しては、内容の類似性から幾つかのカテゴリーにまとめることとする。

結果と考察： 紙面の都合上、①④⑦⑨⑩⑬の6項目を取り上げ、おおよその傾向を指摘することで中堅女子社員の同一性について検討してゆく。

i) 職業的同一性
自分が本当にやりたい仕事として、現在の業務・あるいはその延長上の仕事を掲げる者は5.3%と少なく7割強の者が、働きがいや自分を生かすことを求めて何らかの転職願望を抱いている(表1)。しかし、その願望は現実性が乏しかったり、現状への強い不満だけが根拠になっていたりすることも多く(49.6%)、また将来への準備や自己投資もあまりなされていない状況であるため(項目⑤)転職願望といっても実現の見込みは必ずしも高くない。彼女らにとって、長期に



わたって働き続けることは、自己成長や向上を労働の目的と意識しているにも関わらず(項目⑩)必ずしも肯定的な変化をもたらす訳ではない。仕事に慣れるにつれ、興味や意欲を失ってゆく割合も高く(25.7%)、仕事=苦痛・退屈の種であると述べる者が3割に近い(表2.3)。中堅女子社員らの仕事への期待や理想に比して、実際に与えられる業務内容が退屈な作業であったり、長期的な満足をもたらす得ないものであったりする可能性は高い。そのため、彼女らは現実的な将来展望を描き難い状況に在るのではないだろうか。

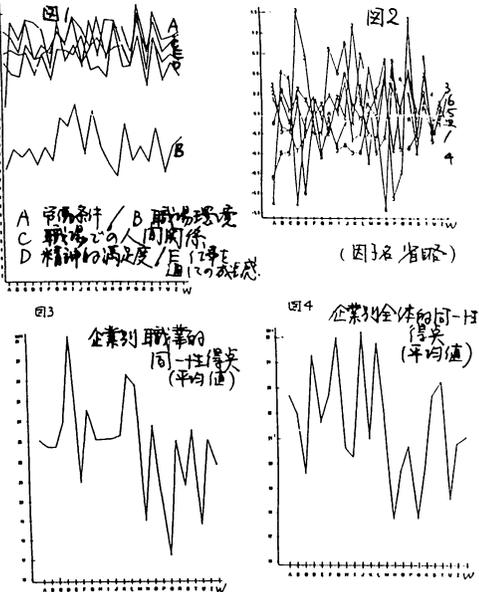
ii) 全体的自我同一性
対人関係を問題とする⑬⑭を除くと、比較的自分自身に対してネガティブな、即ち批判的な目を向ける者が少なくない(表4.5)。とりわけ、これまでの人生を振り返り、「もっと何かに打ち込んでおけばよかった、意欲的に学んでおけばよかった。」と述懐する者が42.5%と多い。将来の自己像や目的等への反応からも、彼女らの生きがいや充実を求める気持ちの強さが何えよう(項目⑪⑫)。結婚や育児等の言葉が反応の随所に見られ、それらが重大関心事であるのは言うまでもないことだが、仕事・働くことも何割かの者にとっては相当程度に強く根づいた姿勢のようである。

中堅女子社員の職業的満足感・職業的同一性・ 全体的同一性に関する研究

その5. 企業用コンサルテーションの一実践例の検討

○田中 香織 園田 雅代 中釜 洋子
(テンボラリーエデュコンサルト) (玉川大学 文学部) (青山学院大学保健管理センター)

目的: 中堅女子社員 248名を対象とした本調査には、一部上場の企業を主として合計21社からご協力をいただいている。データ数にばらつきが多く、単純な企業間比較はできないのだが、図1、図2に示すように、職業的満足感の5要素ならびに因子分析による6因子の得点には企業間での差、傾向がみとれる。ここから、企業に向けてはその企業内中堅女子社員層の特徴をフィードバックし、有効活用化へのコンサルテーションが可能と思われる。また当の中堅女子社員にとっても自分たちの職業的満足度を他企業の女子社員との比較から見直すことは、直接的かつ客観的な現状認識を促しやすといえよう。更に、本調査では、職業的同一性・全体的同一性の様相把握をも含んでおり、これらについても企業間での相違が得られている(図3図4)演者では、上述の問題意識にかんがみ、あるひとつの企業での中堅女子社員用の研修に本調査を援用し研修効果をこれまで以上にあげることができたと思いを抱いている。本報告では、その企業用コンサルテーションの一実践例の概要をまとめ、今後に向けて検討を重ねたいと思う。



注) A~uがある企業単位で、Zは企業名が不明なSsの集団(28名)である。

方法: 今回、研修した企業をW社とする。W社の調査協力女子社員は140名。年齢は22歳から29歳で平均年齢は26.4歳、平均勤続年数は5.2年で、これまでの調査と属性としてはほぼ同質の集団といえる。これまでと同様、職業的満足感については5段階自己評定、職業・全体的同一性はSCT法による質問紙調査を研修の約1ヶ月前に施行。先行調査の結果とT検定により、比較検討し、W社中堅女子社員の特徴を分析する。
結果および考察: (1) 職業的満足感 5要素ならびに6因子のT検定結果は表1に示すとおりである。

表1 **5%水準 ***1%水準

		W社	他社	有意差
N(人)		140	240	
5要素	A	29.15	28.30	なし
	B	16.91	>15.83	**
	C	28.70	>27.84	なし
	D	24.21	<25.51	**
	E	25.89	<26.96	**
6因子	1	-0.12	<0.07	**
	2	-0.09	<0.05	なし
	3	0.41	>0.24	***
	4	-0.75	<0.44	***
	5	0.08	-0.05	なし
	6	0.29	>-0.17	**

てW社は有意に高い満足感を示し、これはW社女子社員の良き特徴として特筆できる。

③また、最も注目すべきこととしてD、E、因子1といった「職業を通じての自己の成長感、精神的満足感」などが他社より有意に低いことがあげられる。これがW社の女子社員がもともと職業に対するコミットが低く、職業を重要なものとして考えていないという姿勢によるのかは、職業的同一性得点との関連から推測できる。そして更に自分は何なのか曖昧なための結果なのかは、全体的同一性得点との関連から考察できる

(2) 職業的・全体的同一性

	W社	他社	有意差
N	140	240	
職同一	21.93	22.38	なし
全同一	21.29	21.15	なし

各人の基本的な「職業観」「人生観」の明確度や能動性については、統計的には、W社と他社との有意差は見られなかった。W社の女子社員は、根本的には「仕事をどう自分の人生に位置付けたいか」「仕事を通じて自分はどう自分らしさを成長させたいか」といった職業観の問題をとりくむ足腰の強さは、比較的備わっているようで、それに関しては他社と遜色はない。また、「自分の人生をどう築きたいか」「自分は一体、何者なのか」という自己への問いをも積極的になしうる潜在的な能力はあるようだ(統計的有意差は出なかったものの、他社の平均値よりやや高い。)しかし、③で見えてきたように、上述のことが今ひとつ、具体的に今の仕事や職場での自己の成長感、手ごたえ感につながっておらず、むしろ、ギャップがくっきりと見られた。仕事以外のプライベートを充実させることで精神的な満足を得ているのかもしれないということが推測された。研修では、結果(1)(2)のギャップを強調して、女子社員各人に問いかけるように提示した。そこから、いろいろと自発的なグループ討議が始まり、自己解決にむけての工夫等が参加者から提案された。今後は、全般に低いスコアの女子社員への研修、もしくは、同一性得点は低い満足感が高いなどのギャップがある女子社員層各々にどのようなアプローチが可能か、企業側ニードのサーベイと明確化をともに図りつつコンサルテーションをしていきたい。

女子従業員のワークモチベーションに及ぼす
個人属性および組織要因の影響力について
早川 清一
(仁愛女子短期大学)

1. 目的

女子従業員のワークモチベーションに、組織要因(仕事の特性、給料制度、昇進制度)と個人属性要因(年齢、勤続年数、職種)の各要因がどの程度の影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査対象および調査実施時期

働く既婚女性を対象に、1986年6月に質問紙法で調査を行った。本研究では、この中の事務職、労務職に
従事している女性(575名)のみを分析対象とした。

3. 調査内容

ワークモチベーション: 3つの質問項目(5段階評定)で測定し、合計点をワークモチベーション得点とした。

組織要因: 仕事の特性(①達成感②能力発揮感③能力成長感④自律性維持感)⑤給料制度⑥昇進制度(いずれも5段階評定したものを3段階にまとめた)

個人属性要因: ⑦年齢⑧勤続年数⑨職種

4. 結果及び考察

ワークモチベーションを被説明変数とし、組織要因、個人属性要因を説明変数とするモデル式を数量化理論第I類で求めた。表1は、各要因の人数、カテゴリースコア、レンジ、偏相関係数を示したものである。

はじめに、偏相関係数を基に、各要因のワークモチベーションに及ぼす影響力の検討を行うことにする。

第1位が達成感(0.164)、第2位が職種(0.136)、第3位が年齢(0.126)で、最も影響力が強いのは組織要因の達成感(仕事の特性)であるが、職種、年齢という個人属性要因が第2位、第3位を占め、個人属性要因がワークモチベーションに大きな影響力を持っていることがわかる。

以下、給料制度(0.122)、能力成長感(0.077)、勤続年数(0.076)、昇進制度(0.044)、能力発揮感(0.030)、自律性維持感(0.026)の順である。

給料制度は、組織要因の中では、達成感に次いで第2位の位置を占めており影響力は比較的大きい。しかし、昇進制度の影響力はそれほど大きくはない。

日本の企業では、年功主義の運営がなされており、仮に業績主義を標榜していても、完全な業績主義にはなっておらず、たとえ努力して高業績をあげても、昇給額、昇進の程度が小さいので給料、昇進はモチベーターになりにくいと考えられるが、本研究の女子従業員(事務職、労務職)に関するかぎり、給料制度はワークモチベーションに比較的強く結びついており、給料は能力発揮感、能力成長感、自律性維持感などの仕

事の特徴要因を上回るかなり強いモチベーターであることがわかる。

次にカテゴリースコアを手がかりに、説明要因の各カテゴリーが、ワークモチベーションに対してどのように作用しているかについて検討する。

偏相関係数が最も大きい達成感については、「高」0.181、「中」-0.267、「低」-0.301であり、達成感が高いと認知しているほど、ワークモチベーションを高める方向に作用している。

職種については、「事務職」0.182、「労務職」-0.185であり、事務職はワークモチベーションを高める方向に、また労務職は低める方向に作用している。

年齢については、「25~29」-0.383、「30~34」0.095、「35~39」-0.066、「40~49」0.165であり、大まかな傾向としては、年齢が高いほどワークモチベーションを高める方向に作用している。

給料制度については、「高」0.155、「中」0.001、「低」-0.274であり、給料制度が業績主義であると認知しているほど、ワークモチベーションを高める方向に作用している。

以上より、分析対象9要因の中で、最も影響力が大きいのは、組織要因である仕事の達成感であるが、職種、年齢という個人属性要因も大きな影響力を持っている。また、給料制度は事務職、労務職の女性の場合については、比較的強いモチベーターであるといえる。

表1 数量化理論第I類分析結果

要 因	カテ ゴリ	人数	カテ ゴリ スコア	偏相関 (レンジ)
組 織 要 因	①達成感	高	348	0.181
		中	159	-0.267
		低	68	-0.301
	②能力発揮感	高	231	0.043
		中	204	0.001
		低	140	-0.072
	③能力成長感	高	239	0.111
		中	203	-0.132
		低	133	0.002
	④自律性維持感	高	218	-0.033
		中	187	0.048
		低	170	-0.010
	⑤給料制度	高	267	0.155
		中	157	0.001
		低	151	-0.274
⑥昇進制度	高	256	0.061	
	中	124	-0.073	
	低	195	-0.035	
個 人 属 性 要 因	⑦年齢	25~29	62	-0.383
		30~34	161	0.095
		35~39	214	-0.066
		40~49	138	0.165
	⑧勤続年数	~ 4	113	-0.150
		5~ 9	130	-0.081
		10~14	157	0.086
		15~	175	0.080
	⑨職種	事務職	290	0.182
労務職		285	-0.185	
全 体		575	重相関	0.365

秘書適性の研究 其の1

秘書職志望とパーソナリティの関係

○ 森田義宏 服部美樹子
(梅花短期大学)

秘書の業務は、スケジュール管理、接遇、文書管理、情報の収集加工、連絡調整、オフィス管理、経理事務など多岐にわたるが、上司を補佐し、その職務を効率よく円滑に処理するという補佐の方法では共通している。このような秘書業務を遂行するためには、職務遂行に必要な知識や技能の習得はいうまでもなく、上司や上司を取り巻く環境および人間の理解や的確な状況判断、信頼、良好な人間関係の維持などの人間的側面が求められる。特に個人のもつパーソナリティはこの人間的側面に大きな影響力を及ぼし、秘書職への適性を左右する主要な要件の1つとなる。このような見地から秘書として求められるパーソナリティを模索していたところ、文献中に秘書パーソナリティチェックリストを発見したので、このチェックリストの検討を手がかりに、秘書職の適性要件の研究に着手した。

目的 職業への興味は能力やパーソナリティと共に職業適性の重要な構成要素である。本研究では秘書職志望とパーソナリティの関連より秘書適性のうちのパーソナリティ要因を解明することを主たる目的とした。
方法 本研究で用いたテストバッテリーは、秘書適性チェックリストおよび矢田部・ギルフォード性格検査であった。秘書適性チェックリストは50項目で構

成され、3件法で回答を求めるもので、自信と勇気、落ち着き、率先力、知識・判断、信頼性、誠実性、社交性、決断と忍耐の8つの下位尺度をもつ(資料1)。本研究の対象となったのは、本学短大英語科1回生のうちの秘書学概論受講者(女子)136名であった。秘書職志望調査および秘書適性チェックリストは1987年12月秘書概論講義時に実施した。YG性格検査については1988年4月就職ガイダンス時に就職希望の全学生を対象に実施したものを利用した。

結果 I 各テストバッテリー間にみられた秘書職志望群と非志望群とのパーソナリティの差異(1)秘書適性チェックリスト-秘書志望とチェックリストを完全回答した124名について、両群間で有意差が見られたのは、誠実性($P<.001$)、率先力、総得点(いずれも $.01<P<.05$)で、秘書志望群の得点が高かった(表1)(2)YG性格検査-YG性格検査と秘書志望調査の両者に回答した120名について、両群間で有意差が見られたのは、活動的($.01<P<.05$)のみで、秘書志望群のほうがより活動的であった(表2)。

II 因子分析1…両群で有意差の見られた各パーソナリティ間の関連を検討し、意味づけるために相関とそれに基づいた因子分析をおこなった。ヴァリマクス回転後の第1因子にはチェックリスト全項目とYGのG尺度が高い負荷をもち、第2因子にはYG性格検査のD、C、I、N、O、C o、A g、Tなどの情緒尺度が高い負荷を有し、第3因子にはYGのS、A、G、A g、C oなどの向性尺度が高い負荷を持った(資料

2)。秘書適性チェックリストとYG性格検査は互いに独立した検査であった。

III…チェックリストの総得点とYG性格検査の重回帰分析-秘書適性チェックリストの総得点を従属変数とし、YG検査の12下位尺度を説明変数として重回帰分析をおこなったところ、チェックリストの総得点に有意に寄与したのはG(活動性)、R(のんきさ)、C o(協調性)の3下位尺度であった。

表1 秘書適性チェックリストの結果

下位尺度 \ 自信と勇気	落ち着き	率先力	知識・判断	信頼	誠実性	社交性	決断と忍耐	総得点	
志望 平均	14.185	12.925	13.259	15.333	12.685	14.722	25.129	5.981	114.222
N=54 SD	1.614	1.82	1.728	2.064	1.810	1.606	2.978	1.295	9.069
非志望 平均	14.128	12.700	12.442	14.928	12.371	13.842	24.514	5.885	110.814
N=70 SD	1.502	2.115	2.204	1.844	1.858	1.538	2.597	1.409	9.51
T値	.199	.621	*2.223	1.14	.93	**3.07	1.216	.385	*2.00

表2 YG性格検査の結果

下位尺度 \ 抑鬱	気分変化	劣等感	神経質	客観的	協動的	攻撃的	活動的	のんき	思考	支配性	社会	
志望 平均	7.75	9.192	7.923	7.884	6.557	5.807	10.711	12.942	11.5	10.692	11.211	14.692
N=52 SD	5.639	4.966	5.009	4.82	4.267	3.498	3.991	3.887	4.089	4.184	4.127	4.363
非志望 平均	8.058	8.529	8.588	8.279	7.705	5.955	9.955	11.264	11.558	10.926	10.661	15.147
N=68 SD	5.127	4.513	5.108	4.91	4.398	3.58	3.918	4.00	4.173	4.275	4.467	3.868
T値	.31	.756	.704	.436	1.423	.225	1.029	*2.28	.076	.297	.684	.598

表3 重回帰分析の結果 N=115 (有意な変数のみ)

変数	重相関係数	R ²	偏回帰係数	標準偏回帰係数	F値
G(活動性)	0.431		1.094	0.465	21.785 **
R(のんきさ)	0.462		- 0.094	- 0.217	4.63 **
C O(協調性)	0.473		- 0.375	- 0.143	1.86 *
全体	0.474	0.225			6.508 **

部下のパフォーマンスの原因帰属に及ぼす組織の圧力と監督者の要求の効果に関する研究 (II)

○松田幸弘
(立教大学)

角山 剛
(東京国際大学)

【問題】

前回の松田、正田(1987)では、原因帰属がリーダー行動に及ぼす効果について実験的に検討した。他方で、リーダーの原因帰属に影響する要因に関する研究も多く報告されている。そこで本研究は、部下のパフォーマンスの原因帰属に及ぼす組織の圧力と監督者の要求の効果に焦点を当て、実際の組織集団の第一線監督者を対象とした調査研究によって、上記の問題を検討するものである。

【方法】

1. 被験者 官庁の社会保険関係の第一線監督者45人。
2. 実験条件
 - ・独立変数-①圧力条件(高・低)×②パフォーマンス条件(高・低)
 - ・従属変数-①パフォーマンス評価、②原因帰属(能力、努力、課題の困難度、運)、③監督者の要求、④組織の圧力。(①、③と④は5ポイント・スケール、②は4つの原因の影響度の合計を100%にする。なお内的帰属の和から、外的帰属の和を引いた差をSTB-UNSの帰属スコアとして扱った。)

3. 手続き

22人の被験者はもっとも成績の良い部下を、23人の被験者はもっとも成績の悪い部下を選んだ。つぎに、被験者は部下のパフォーマンス評価をした後、その原因を帰属した。さらに、被験者は部下のパフォーマンスに対する要求の程度と組織からの圧力の程度を評定するように要求された。本研究Ⅱの被験者は低圧力条件に配置された。また研究Ⅰである松田、角山、橋本、松井(1988)の被験者は高圧力条件に配置された。

【結果と考察】

1. 独立変数の操作チェック

パフォーマンス評価では、高パフォーマンス条件がM=20.23、低パフォーマンス条件がM=13.57であり、平均間の差は有意であった($t[43]=7.70, p<.01$)。

ゆえに、被験者は成績の良い部下と悪い部下を区別することに成功した。また、組織からの圧力は研究Ⅱでは、M=3.60、研究ⅠではM=3.94であり、平均間の差は有意であった($t[115]=2.00, p<.05$)。

予想されたように、本研究での被験者は、研究Ⅰの被験者より、組織の圧力を弱く感じていた。

2. 結果と考察 Table・1は圧力条件(高・低)とパフォーマンス条件(高・低)におけるSTB-UNSの平均とSDを示している。低圧力条件では、高パフォーマンス群の平均はプラスであり、低パフォーマンス群の平均は0である。両群間の平均の差は有意であり($t[43]=3.19, p<.01$)、被験者は成績の悪い部下より、成績の

良い部下のパフォーマンスを安定要因に帰属したことを示している。さらに監督者の要求とSTB-UNSは高パフォーマンス群では、有意な正の相関($r=.36, p<.05$)を示し、逆に低パフォーマンス群では、有意な負の相関($r=-.41, p<.05$)を示している。つまり、被験者が成績の良い部下にパフォーマンスを維持させようとする要求は、安定要因への帰属を強めさせ、成績の悪い部下にパフォーマンスを改善させようとする要求は不安定要因への帰属を強めさせた。

Table・2は2要因の分散分析の結果を示し、圧力の主効果が高度に有意であることが分かる。すなわち、組織からの圧力が、不安定要因への帰属を強め、成績の良い部下のパフォーマンスを安定要因に帰属しようとする傾向を低下させ、成績の悪い部下のパフォーマンスを不安定要因へ帰属しようとする傾向を強めることを示している。

Table・1 圧力条件とパフォーマンス条件における、STB-UNSの平均、SD

Performance	Organizational pressure	
	High①	Low②
High		
n	37	22
M	14.74	20.91
SD	14.89	24.66
Low		
n	35	23
M	-11.27	0.00
SD	18.08	17.94

①研究Ⅰ(民間企業)のサンプル

②研究Ⅱ(官庁)のサンプル

Table・2 分散分析

Source	df	MS	F
Performance(A)	1	2102.38	5.88**
Pressure(B)	1	15230.60	42.58**
A×B	1	179.96	0.50

** $p<.01$

【引用文献】

松田、角山、橋本、松井(1988)日本グループ・ダイナミクス学会第36回大会研究発表論文集

企業従業員のWORK MOTIVATION (2) 営業職員のモチベーション喪失要因の検討

関根 一 美
(東京国際大学大学院社会学研究科)

《目的》

企業を取り巻く内外の環境が大きく変化している今日、従来の日本の経営方式は大きな転換点に立っている。この様な不安定な状況の下、企業の第一線に従事する営業職員は、一体どのような職務要因が負に刺激されることにより、モチベーションを喪失させてしまうのだろうか。この研究では、変化に富む企業の従業員（営業職）のモチベーション喪失要因を検証し、ハーズバーグの結果と比較すると共に、作成された質問紙の妥当性についても検討する。

《方法》

- 1) 調査対象：東京都内に所在する自動車販売会社の各営業所所属の男子営業職員138名。
- 2) 質問紙：職務要因として表-1の中にある12の要素（A～L）を設定し、各要素毎に2～4の質問項目（総数38）を設け、それぞれに4段階自己評定方式で回答するもの。

《結果》

- 1) 質問紙各項目の妥当性：項目分析の結果、全項目が有意（ $p < .01$ ）と認められた。
- 2) 質問紙各要素の妥当性：12要素間（加算尺度）の相関は表-1に示す通りである。要素G「私生活」とB「人間関係（上司）」C「人間関係（同僚）」、及び、要素F「労働条件」とB「人間関係（上司）」以外は、全て相互に有意（ $p < .01$ 、一部 $p < .05$ ）な相関関係が認められた。
- 3) 質問項目の因子分析：質問項目を因子分析し、3因子を抽出した。累積寄与率は95.2%であった。3因子は便宜的に次のように命名した。
 - ・第一因子：会社の処遇
 - ・第二因子：仕事での自己実現
 - ・第三因子：上司および上司との関係
- 4) モチベーション喪失要因：12の各要素がモチベーション喪失の要因になると回答した人数と、そうならないと回答した人数の比の差を臨回比(CR)

を用いて検定した結果が表-2である。表に示すように、要素B「人間関係（上司）」、A「目標達成」、L「賃金」、D「直属上司の管理」が有意（ $p < .01$ ）に喪失刺激として作用することが認められた。また、要素C「人間関係（同僚）」、J「承認」、F「労働条件」、K「自己実現」、H「雰囲気」は逆に、モチベーション喪失の要因にはならないことがやはり有意（ $p < .01$ ）に認められた。

《考察》

経営形態が変化し、不安定な状況にある企業の従業員（営業職）のモチベーション喪失の要因を検討したわけだが、結果に示すように、「上司との関係や上司自体」、「賃金」、「達成」がその要因になることが実証された。これをハーズバーグのハイジーン要因と比較するならば、「達成」以外はどれもそのカテゴリーに含まれるものであり、この点では、彼の理論の妥当性を示唆している。しかしながら、今回のデータが負の要因について抽出していることは確かなことだが、ハーズバーグの言う不満足要因と同一のものであるか否かは問題を残す所である。次に、今回の調査では、「達成」がモチベーション喪失の要因として上がっていることであるが、これはハーズバーグの説と合致しない。この結果が、業績に重きが置かれる営業職員の特徴を表わしていると直観的には考えられる。しかし、この点に関しては、他の職種の従業員のデータと比較検討をしてから改めて考察を深めたい。最後に、今回作成された質問紙の妥当性が実証されたが、特に、因子分析により抽出された3因子は、それぞれを人称次元（第一人称、第二人称、第三人称）に対応させることができる。モチベーション刺激および喪失の要因を考慮する際、この対人距離的な視点に立脚して研究を展開して行くことにも意義があると思われる。

表-1 12職務要因間の相関関係 ($r \geq .22 \dots p < .01$; $r \geq .17 \dots p < .05$)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
A	—											
B	.17	—										
C	.23	.27	—									
D	.22	.83	.37	—								
E	.50	.30	.32	.28	—							
F	.55	.13	.20	.21	.46	—						
G	.32	.11	.14	.17	.22	.30	—					
H	.42	.35	.40	.24	.52	.42	.29	—				
I	.37	.27	.28	.20	.61	.48	.31	.56	—			
J	.41	.39	.30	.35	.66	.39	.25	.56	.51	—		
K	.48	.30	.22	.27	.47	.44	.39	.61	.52	.59	—	
L	.50	.31	.21	.26	.65	.54	.26	.40	.63	.49	.39	—

表-2 職務要因別、積極回答者数と消極回答者数の比の差（臨回比CR） [*** $p < .01$]

B	A	L	D	I	E	G	H	K	F	J	C
4.95**	4.33**	3.57**	3.28**	1.13	0.80	0.60	-5.14**	-5.17**	-5.17**	-5.65**	-6.36**

仕事の成果に基づくTPI項目分析の試み

一般管理部門に関する分析

人材開発情報センター

(外島 裕)

Table 1 各評定ごとの人数

	上位群	中位群	下位群	計
仕事の成果	30	60	19	109
情報・モノ	32	58	19	
ヒト	20	67	22	

はじめに

TPIは500項目から構成されている多面式性格検査目録である。このTPIをアイテムプールと考え、新たな尺度を作成する試みがいくつかなされている。

しかし、社会人を対象として、生産活動との関係で、項目の分析を試みた研究はあまり多くない。

生産活動との関係で、ある特性を見出すことは、能力開発のポイントを考えるためにも必要なことと思われる。

本調査の構成

実際の企業活動の場で、職種のちがい・仕事の成果や仕事のすすめ方のちがいにより、どのような特性の差異があるかを、項目分析によって把握しようとするものである。

1. 職種の区分は次のとおりである。

技術系：研究開発・製造管理・工務施設・技術サービス

事務系：営業・一般管理部門

2. 仕事の成果は次のように評定した。

各所属部署において、人事担当者により評定したものである。

判断のポイントは、本人の仕事の実績からみて、その質的なレベルが高く、かつ会社にとって有用度が高いかどうかである。

上位群(25%) 中位群(50%) 下位群(25%)をめやすとした相対評価である。

3. 仕事のすすめ方は、以下の2つのポイントでとらえた。

(1) 情報・モノを扱うことのうまさ。

(2) ヒトを扱うことのうまさ。

それぞれを上位群・中位群・下位群に評定した。

4. 調査対象

東京に本社を持つA社。

全職種をあわせた人数は971名。

なお調査実施は1980年である。

本報告について

本報告では一般管理部門についての分析を報告する。

対象者は、部長以下主任以上で、大学・高専卒の者、109名である。

各々の評定ごとの人数は、Table 1に示す。

結果および考察

仕事の成果、情報・モノ、ヒトという3つの各評価別に、TPIの500項目それぞれについて、上位群と下位群の応答傾向をCR検定により検討した。

上位群と下位群との間で、CR検定により5%以下の危険率で有意であった項目は、次のとおりである。

Table 2は仕事の成果、Table 3は情報・モノ、Table 4はヒトについての各評価群のものである。

Table 2 『仕事の成果』による項目No.

7	25	34	49	50	55	59	60	62	75
99	117	121	134	149	151	159	181	184	190
206	216	225	235	238	248	255	258	307	315
350	354	362	366	367	371	373	390	394	399
413	416	418	436	466	470	472	480	490	

Table 3 『情報・モノ』による項目No.

26	34	36	49	50	60	75	76	117	152
181	183	184	199	200	203	206	214	225	235
238	255	275	299	307	315	326	333	362	387
388	390	394	399	420	421	423	470	472	480
487									

Table 4 『ヒト』による項目No.

2	19	34	59	99	129	150	184	187	206
215	225	235	236	291	307	362	366	373	388
399	410	413	426	461	466	468	470	472	487
491									

さらに、各群において見いだされた項目をもとに、検討しひとつの尺度と仮定して、応答傾向より得点方向を定め採点を試みた。各群の得点はTable 5に示すとおりである。

Table 5 各群の得点

	仕事の成果		情報・モノ		ヒト	
	上位群	下位群	上位群	下位群	上位群	下位群
平均	35.77	23.00	36.06	24.33	19.05	9.55
SD	7.29	7.25	3.88	6.70	3.36	3.03

どの評価群においても、平均の差によるt検定で危険率0.1%以下で有意であった。

各項目の内容について、さらに検討したい。

中小企業における新分野進出と経営者行動

高石 光一

(中小企業事業団中小企業研究所)

1. はじめに.

企業の経営状態は、規模の大小をとわず経営環境に大きく左右される。しかし、同じ経営環境の下で、同じような人材、設備、資金等の経営資源を有していても、ある企業は大きく発展し、ある企業は衰退することがある。これはその企業の取った経営戦略・管理等の結果であると同時に、経営者の能力、知識、意欲等のあらわれでもある。中小企業では、特に経営者の手腕が直接経営に反映されるため、企業の発展は経営者によるところが大きいと考えられる。

とりわけ、産業構造が大きく揺れ動く中で、製造業では、新分野、有望分野へ進出することにより活路を開拓することが最重要課題となっている。

2. 目的.

このような背景を踏まえ、本研究では新分野進出に必要な経営者の条件を解明するためのパイロット・スタディーとして、新分野進出過程と経営者の行動の把握を目的とする。

3. 方法.

新分野進出企業の経営者への面接調査を下記により実施した。

(1) 期間 昭和62年4月～10月

(2) 調査対象企業数 44社

(3) 新分野進出の形態

調査対象企業の進出の形態は次のように区分できる。

表1. 新分野進出の形態

形 態	件 数
a. 事業内容の質の変化 (例. 製品の高級化・高付加価値化等)	20
b. 業種間にわたる変化 (例. 業種転換・業態転換)	11
c. 製品の変化	5
d. 経営形態等の変化 (例. 下請から独立企業へ 等)	8

(4) 経営者概要 平均年齢53.6才(最年少38才、最年長70才)であり、全員が男性である。

4. 結果

(1) 経営者の問題意識

本調査より、進出以前に経営者は次のような問題意識を持っていた。

- ・現状(大手企業の下請)に嫌気がさしていた。
- ・既存のものに将来性が見出せなかった。
- ・余剰人員の雇用対策の為に何かをしなければならなかった。
- ・追い詰められていた、不安だった。等

(2) 経営態度

現状からの脱皮を促す要素として次のような経営態度が特記できる。

- ①危機意識 — 「30年以上続く仕事は無い」、「新しいものに飛びつかなくては将来が無い」
- ②反骨精神 — 「意地」、「負けん気」、「親会社を抜いてやりたい」
- ③仕事との自己同一化 — 「自分の存在を感じるために仕事に取り組んでいる」、「自分イコール仕事である」、「自分から仕事を取ったら何も残らない」
- ④不安の克服 — 「不安のある分喜びがある」、「未知の分野への挑戦であるから当然不安がある。しかし前進あるのみ」
- ⑤チャレンジ精神 — 「常に新しいものをやりたい」、「意欲的な焦燥感に燃えている」
- ⑥独創性 — 「まだ世の中に無いもの、他人の真似のできないものを創る」、「当社でしか出来ないものをやる」

(3) 行動

- ①意思決定 — 進出の提案・意思決定者は経営者自身
- ②集中 — 「熱中して手を抜くことが出来ない」、「仕事に没頭している時が一番嬉しい、業績・利益が上がっても感じない」
- ③独裁 — 「従業員はすべて反対しても、押し通す」、「自分の考えと同じであれば実行する」
- ④継続力 — 「一旦走れば徹底的にやる」、「一旦受けた仕事は途中でやめない」

以上の経営者の行動が代表的なものとしてあげられる。

5. 考察.

本調査対象企業では、経営者が先頭に立って新分野の開拓に取り組んでおり、今後とも、中小企業で経営者の果たす役割は大きいと考えられる。特に、新分野進出過程、経営者行動についての一層の理解、検証を将来の課題としたい。

中高年齢者の作業遂行行動について

—— 組立作業を用いて(その1) ——

向井 希宏

(中京大学 文学部)

目的 人口構成における中高年齢者の比率の増大により、企業内でもその中高年齢者の扱いが重要な問題となっている。本研究では、加齢と作業能力との関係に注目し、組立作業中に示す中高年齢者の行動特性について、学生被験者群と比較しながら考察を加える。

実験 課題は、組立具「ノアの木」を用いる乳母車の組立てである。この乳母車は47個の部品からなり、構造はかなり複雑である。男性被験者3名(A: 59歳, B: 60歳, C: 75歳)

は作業台の右側壁面に提示されたモデル図(図1)を手がかりに、連続5回の組立作業を行なう。

分析 作業中の被験者の行動はVTRに収録し、(1)動作分析的観点、(2)作業ミス形態の事例研究的観点の2つの面から分析を試みる。

結果 (1) 5回の連続作業にともなう組立所要時間の推移を若年群(学生)との対比で示したものが図2である。両群で組立所要時間の差は大きい、それぞれ試行にともなう技能習熟傾向は顕著である。

(2) 若年群(学生)では、組立てに行きづまるような大きなミスは組立初回にすべて出尽くし、2回目以降はうっかりミス、すぐ気づくミスがほとんどであった。それが図2(右)の組立所要時間の短さとして示される。

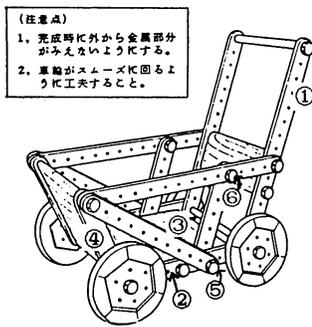


図1 被験者に提示されたモデル図

組立2・3・4回目にも出現し、組立所要時間の減少率は高いが、所要時間自体はかなり長い。

具体的に事例を示すと、被験者Aでは、組立1回目：図1の材料①に長い棒を選択し、矛盾を感じつつ正しい材料の選択に34分を要す。さらに材料②と底板③の選択に迷い、2種のうちどちらかが正しいとわかりながら決定できず26分経過。組立2回目：1回目にはうまく取り付けた材料④をつけ忘れて5分経過。組立3回目：材料④をつけず矛盾が生じるまで作業を続け、その後頭をひねりながら23分経過。さらに底板③を止めるネジ位置⑤が1穴ずれて8分経過。被験者Bでは、組立1回目：材料①に長い棒を選択し、完全に組立てを終了して「まだ未完成です」と指摘されるまで気づかず、取り替えに5分を要す。組立2回目：底板③を1穴後ろにずらして止め、車輪もとりつける。さらにネジ位置⑥が1穴ずれて気づくまでに7分経過。被験者Cでは、組立1回目：材料①に長い棒を選択し、矛盾を感じつつ抜け出せず66分経過。さらに材料④をつけ忘れて底板③が取付不能となり30分経過。組立2回目：ネジ位置⑤が1穴ずれて組立てに行きづまるが4分後偶然脱出。組立4回目：2回目と同様⑤のミス、しかし今回は構造上の特性を理解し13分で脱出、等々。

これに対して若年群では、組立初回に3人中2人の被験者が材料①に長い棒を選択するという同様のミスをおかしながら、1~3分という比較的短い時間でそのミスに気づき以後同様のミスは出現しない。

考察 今回の3人の被験者は若年群に対して組立所要時間が長く、それは、組立ミスによって作業に行きづまった際の打開策がなかなか見いだせないという混乱による。出現するミスの形態には両群で差がないことから、モデル図から対象の構造を読み取るという能力の点で中高年齢者は若年者に劣る。これは、向井・神作(1987)の『高齢者は、新しい課題への対応に行動のバラツキが大きい』という指摘に通ずる面があり、中高年齢者の行動特性の一面と考えられよう。しかしながら被験者Aでは4回目、Bでは3回目、最高齢のCでも5回目ですべてミスなく組立可能となり、また3人とも組立5回目にして11~15分程度で組立可能となる点も技能習熟という面からみて重要である。

なお今回の中高年齢者の作業行動特性の問題については、研究が進行中で被験者数も少なく、ここに紹介した行動事例の違いが年齢差によるのか、単に個人差なのかという問題についての考察は今後の課題である。

参考 向井・神作(1987) 若年・中年・高齢者の運動行動特性について 応心第54回大会発表論文集 P.101

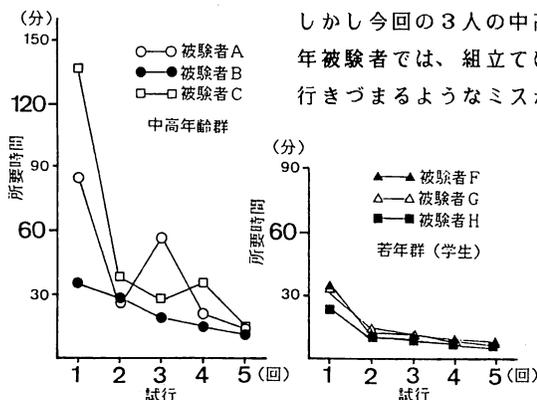


図2 組立所要時間の推移(中高年齢群と若年群の比較)

職務遂行能力に関する因子分析的研究

— 運輸従事者の高齢化に視点をおいた分析 —

所 正 文

(日通総合研究所)

【目的】

- ① 職務遂行に必要な能力の観点から職務の内容、性質を明らかにする。
- ② さらに加齢により衰える能力に関する研究(斎藤, 1967)を勘案し、中高年齢者にとって不適な職務内容を導き出し、職務再設計(job re-design)へと発展させていく。

【方法】

運輸業に携わる事業所を各業種(職種)ごとに事業者団体名簿から等間隔抽出法で抽出し、調査対象事業所として1,895事業所を選定した。調査対象事業所1件につき、原則的に1名の職場管理者に対して質問紙調査の回答を依頼した。質問紙テストは、職務遂行に必要な能力、最適年齢と限界年齢、および中高年齢者雇用に関する経営サイドの施策などを尋ねた質問項目から構成されている。なお、調査は郵送法により、昭和63年2月に実施した。有効回収数は962(回収率43.8%)であった。

【結果】

本研究では、職務遂行に必要な能力として「知識・理解力」、「企画力・判断力」、「学習能力・適応力」、「他人との協調性」、「筋力」、「機敏性」、「持久力」、「集中力」、「視聴覚能力」、および「手先の器用さ」の10項目を用意して、各職種ごとに必要性の程度を5段階評定で評価を求めた。なお、質問項目、評価方法については、『加齢と職業能力に関する調査報告』(労働省、昭和59年3月)に準じている。

その結果を因子分析すると、第1因子は、知識・理解力、企画力・判断力、および学習能力・適応力の因子負荷量が高い。これは、「知的精神的能力」の因子と命名できる。第2因子は「筋力」の因子、さらに第3因子は、機敏性、持久力、集中力、および視聴覚能力の因子負荷量が高いため、「感覚的能力」の因子と命名できる。(表1、表2)

表1 「職務遂行に必要な能力」間の相関マトリックス

	知識・理解力	企画力・判断力	学習能力・適応力	他人との協調性	筋力	機敏性	持久力	集中力	視聴覚能力	手先の器用さ
知識・理解力	1.000									
企画力・判断力	0.550	1.000								
学習能力・適応力	0.541	0.577	1.000							
他人との協調性	0.281	0.220	0.235	1.000						
筋力	0.045	0.003	0.041	0.194	1.000					
機敏性	0.167	0.215	0.200	0.193	0.316	1.000				
持久力	0.067	0.132	0.154	0.174	0.334	0.552	1.000			
集中力	0.171	0.241	0.262	0.184	0.080	0.461	0.463	1.000		
視聴覚能力	0.154	0.202	0.255	0.121	-0.016	0.354	0.313	0.488	1.000	
手先の器用さ	0.120	0.166	0.180	0.156	0.414	0.338	0.274	0.241	0.235	1.000

次に、職種別に因子得点を比較した。(表3)

第1因子(知的精神的能力)に関する能力を必要とする職種は、「航空パイロット・機関士」「船員」、および「鉄道運転士」「鉄道駅務員」「鉄道車掌」となっている。

第2因子(筋力)に関する能力を必要とする職種は「港湾荷役員」「積卸・運作業員」「倉庫荷役員」および「トラック運転手」となっている。トラック運転手が荷役関係3職種とともに筋力依存職種に含まれるという結果が示されたことは注目される。

第3因子(感覚的能力)に関する能力を必要とする職種は、「バス運転手」「鉄道運転士」、および「ハイタク運転手」となっている。すなわち、トラック運転手以外の陸上運行従事者(運転手)に関する職種が集まっている。

さらに最適年齢についてみると、筋力依存職種は30歳代前半、感覚的能力依存職種は30歳代後半、知的精神的能力依存職種は40歳代をピークとする回答がモードとなっている。これは、加齢により衰える能力に関する研究知見と符合する。《資料参照》

【考察】

職務遂行能力の観点から中高年齢者が従事する職務の適、不適を判断すると筋力依存職種、感覚的能力依存職種は、知的精神的能力依存職種に比較して不適といえる。中高年齢者の雇用の問題はトータルな雇用管理の側面からとらえなければならないが、この2つの職種群については雇用の継続を図るために労働科学的な知見も求められているといえる。

表2 因子マトリックス(回転後)

	因子負荷量			共通性
	第I因子	第II因子	第III因子	
知識・理解力	0.774	0.065	0.045	0.560
企画力・判断力	0.731	0.019	0.153	0.558
学習能力・適応力	0.731	-0.026	0.198	0.574
他人との協調性	0.301	0.200	0.148	0.153
筋力	-0.031	0.977	0.052	0.959
機敏性	0.138	0.316	0.629	0.514
持久力	0.038	0.314	0.622	0.487
集中力	0.178	0.035	0.720	0.552
視聴覚能力	0.178	-0.044	0.583	0.373
手先の器用さ	0.148	0.393	0.300	0.266
固有値	2.775	1.288	0.650	
累積寄与率	56.7%	83.0%	96.3%	

表3 因子得点表

職 種	因子得点		
	第I因子	第II因子	第III因子
鉄道駅務員	0.5066	-0.5947	-0.7376
〃 運 転 士	0.7102	-1.0246	0.5261
〃 車 掌	0.3465	-0.8792	0.0894
バス運転手	-0.1852	-0.4440	0.5553
ハイタク運転手	-0.3809	-0.7651	0.4760
船 員	0.9904	0.2404	-0.4610
航空パイロット・機関士	1.4840	0.0373	-0.1178
トラック運転手	-0.2445	0.5260	-0.0466
積 卸	-0.7433	0.7943	-0.5129
港湾荷役員	-0.3332	0.8346	-0.2546
倉 庫 荷 役 員	-0.1604	0.7042	-0.6732

日常生活におけるエラー研究(1)

—自動車内キー閉じ込みエラーの要因その5—

白井伸之介

(大阪大学人間科学部)

【目的】 白井(1987)は、日常エラーの典型例として、キー閉じ込みエラー(自動車内にキーを置いたままドアを閉める)を対象とし、その発生要因を、1. 発生時の回答者の行動プロセス、2. 回答者のエラー発生予防に対する態度、の2点から求めた。今回は前回の大阪地区での調査と同様の手法を用いた質問紙調査を、東京地区において実施し、大阪地区との比較から、前回得られたキー閉じ込みエラー発生要因の一般性について検討を加える。

【方法】 作成した調査用紙は、性、年齢、駐車場所、駐車目的、日頃の防止策、キー閉じ込み時にとられた行動、等を含めた39項目から構成される(白井1987参照)。調査手続きはJAF(日本自動車連盟)の協力を得て、実際キーを閉じ込めたドライバーを対象に、現場で直接調査用紙を配布、記入を依頼し、主にその場で回収した。調査期間は1987年4月1日-10日、東京都下全域で実施し、880のデータを得た。

【結果】 **I. 回答者の一般的属性** 調査回答者の性構成は、男80.6%(大阪地区77.9%、以下カッコ内は大阪地区結果を示す)女19.0%(21.7%)、運転経験年数では3年未満が25.9%(28.6%)、次いで3-6年が20.9%(20.3%)と多く、経験の浅いドライバーの比率が高い。性、運転経験、および一ヶ月の運転距離項目に関して、大阪地区との間に差はなかった。また年齢構成では、29歳以下が46.0%と約半数を占め、前回(50.5%)と同様若年層の多発が顕著であった。

II. エラー発生時の場面性 駐車場所では一般道路上が46.0%(42.4%)、一般の駐車場が32.2%(32.9%)、駐車形態では駐車時が59.5%(63.6%)、数分程度の停車時が36.0%(32.2%)であった。上記2項目に駐車目的を加えた3項目間でクロス集計を行なった結果、大阪地区とまったく同一の、エラー発生頻度の高い4場面性パターンを得た(Table 1参照)。これら4パターンは全回答者数の59.2%を占める(大阪地区58.8%)。

III. キー閉じ込み時の行動について キーを閉じ込めるまでの行動に関する質問項目を時間軸に沿って22項目あげ、Table 1 閉じ込み時の場面性パターン

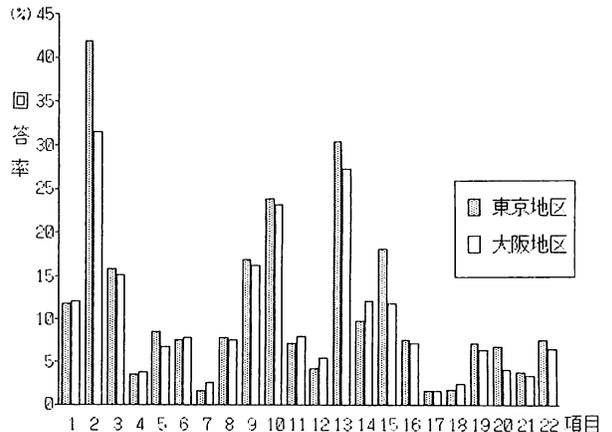
パターン	駐車目的	駐車場所 駐車状況	構成比
①駐車場到着パターン	仕事商用先に到着 食事、喫茶のため 買物をするため レジャー 通勤通学先に到着	一般駐車場 - 駐車時	21.8% (22.3%)
②道路上停車パターン	仕事商用先に到着 買物をするため 用事をするため 電話をするため	道路上・ 停車時	21.1% (15.4%)
③道路上到着パターン	仕事商用先に到着 知人宅を訪問 通勤通学先に到着 用事をするため	道路上・ 駐車時	10.6% (11.7%)
④帰宅パターン	帰宅して	自宅車庫 ・ 駐車時	5.7% (9.4%)

()内は大阪地区

9%、1.気がかり心配ごと-12.0%、が回答率10%を越えた項目であった。Fig.1で示されるように、エラー発生時の行動に関する質問項目においても、大阪地区ときわめて類似した結果を示している(項目2,15,20の3項目でのみ東京地区が有意に回答率が高い $P<.05$)。そこでIIで得られた各場面性パターンにおけるエラー発生時の内的、外的条件を明らかにし、加えてエラー発生のプロセス解明を試みるため、各パターンでの22項目回答率を算出し、全体回答率と比較した。その結果、パターン①では項目9,11,16.の回答率がその他全体と比較して有意に高く、目的地に到着したがゆえにとられがちな「車内での一連動作中断」行動が、エラー発生に関わっていた。パターン②では項目2,項目5,6,8.が有意に高く、道路上短時間停車に起因する「急ぎ」と「周囲への注意の転導」が複合しエラー発生を促進していることが示された。また④帰宅パターンでは、項目3,「疲れ」が有意に高かった。

【まとめ】 東京、大阪という異なった地域での調査においても、エラー発生時の外的状況性、ないし発生を誘発する内的諸要因に差はなく、エラー発生メカニズムはきわめて普遍的であることが示された。ただし「今後も防止策を考えていない」回答者は14.0%(22.6%)と東京地区において有意に低いが、「日頃防止策をとっていない」と答えた回答者も44.6%(58.3%)と低く、地域的文化特性が反映されうる項目に関しては今後検討を要すると考える。

【参考文献】白井伸之介(1987) 自動車内キー閉じ込みエラーに関する研究 IATSS Review, Vol.13, No.2, 43-52



1. 運転中何が気がかりなことや、心配ごとがあった。
2. 所用で急いでいた。
3. 疲れを感じていた。
4. 緊張していた。
5. 目的地、駐車場所、電話など何がさがしていた。
6. 止めにくい停車であった。
7. 駐車場所は危ない所だった。
8. 周囲には車や人が多かった。
9. 車外にでるまでにかかり用事をした。
10. 持ち出す荷物があった。
11. 服を履いたり、くつをはきかえたりした。
12. 車外に何か気になる人や物があった。
13. 早く出ようとしていた。
14. 仕事、家族や予定など何かほかの考えごとをしていた。
15. 特に、車を離れてからその次にすることについて、何か考えていた。
16. 停車後、同乗者と話をしていた。
17. 車内知人を持っていた。
18. 車外に出るとき、かさをさしていた。
19. 荷物などで手がふさがっていた。
20. フランク内の何かをとり出しに行った。
21. 一旦、車を出てからまた用を思いついて車内にはいった。
22. ロックするまでに、日ごろと何かが違ったことがあったり、したりした。

Fig.1 閉じ込み時行動に関する項目回答率(複数回答)

注意に関する精神生理学的研究 I

-Vigilance task performance (3)-

○中丸 茂 小林 正和 東海林 義信 谷口 泰富
 駒沢大学大学院人文科学研究科 駒沢大学文学部

〔目的〕 Vigilance Taskにおける行動的指標の時系列的変動を生理学的指標を使用して検討した。

〔被験者〕 本学学部生 14名 (男子学生 7名、女子学生 7名、年齢 21~24才、平均 21.7才)。

〔実験方法〕

〔実験装置〕 脳波計：日本電気三栄製 1A96、データレコーダー：TEAC製 XR-50、マイクロコンピュータ：NEC 製 PC8801mk II、マルチメーター：ADVANTEST 製 TR6646、デジタルレコーダー：TR6198、周波数分析機：日本工電製 MAF-5。

〔生理学的指標〕 脳波：TC 0.3, Cz, Oz, A1、心拍数：TC 1.0, ECG第 I 誘導法、呼吸数：TC 1.0、カーボンチューブを使用して、腹部より導出、SPL：左手第 3 指末節を活性電極とし、左手前腕部を基準電極とした、EOG：左眼水平、垂直導出、アース：鼻根部。

〔実験課題〕 0 を除いた一桁の数字が 2 秒毎にランダムな順序で提示される刺激系列の中で、現在提示されている数字と、そのひとつ前に提示された数字とを加算して 10 になる場合 (信号) に反応キーを押すという視覚ビジランス課題を用いた。作業時間は 60 分間であり、刺激間隔は 1 秒、提示時間は 240msec、信号は 10 分間に 5 回出現するように配置、信号出現位置はランダムに設定した。

〔実験手続き〕 被験者は、半防音シールドルーム (照度 120 lx) において、電極類を装着された後、作業を行った。

〔結果および考察〕 表 1 は、パフォーマンスと生理学的指標の平均値と標準偏差を各ブロック毎に示したものであり、各々の数値は、ブロック 1 を基準として、規約得点に換算したものである。

表 1 HIT 数, ERROR 数, 心拍数および呼吸数の平均値と標準偏差

INDEX	1	2	3	4	5	6
HIT (回)	0 -	-1.14 1.597	-1.42 1.049	-1.21 1.520	-1.14 1.551	-1.21 1.739
ERROR (回)	0 -	-1.42 0.638	0.0 0.845	-0.14 0.349	-2.85 0.589	-2.85 0.589
H R (/MIN)	0 -	-1.67 2.312	-3.62 3.513	-3.85 2.945	-3.77 2.629	-5.45 3.167
RESP. (/MIN)	0 -	-1.17 1.203	-1.30 1.283	-1.92 1.783	-2.02 1.639	-1.07 1.393

* 上段は平均値、下段は標準偏差

HIT 数は、ブロック 1 から 3 にかけて減少し、以後若干の増減を示し、ERROR 数は、ブロック 1 から 2 にかけて減少、2 から 3 にかけて増加、3 から 6 にかけて再び減少している (図 1)。心拍数は、ブロック 1 から 4 にかけて減少、5 から 6 にかけて再び減少している (図 2)。一方、呼吸数は、ブロック 1 から 5 にかけて減少しているものの、5 から 6 にかけて増加している (図 3)。なお、HIT 数と心拍数 ($r=.789$)、呼吸数 ($r=.782$) の間に必ずしも有意ではないものの正の相関が認められた。しかしながら、30 分以後の変化は図 1~3 に示されたとおりであり、Performance と生理学的指標とは見かけ上では平行関係を示すものの、必ずしも因果関係を示しているとは思わない。こ

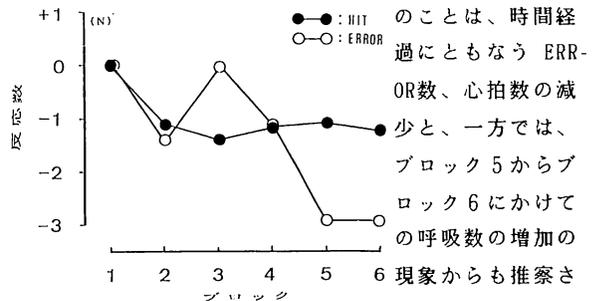


図 1 時間経過に伴う正反応数と誤反応数の変化

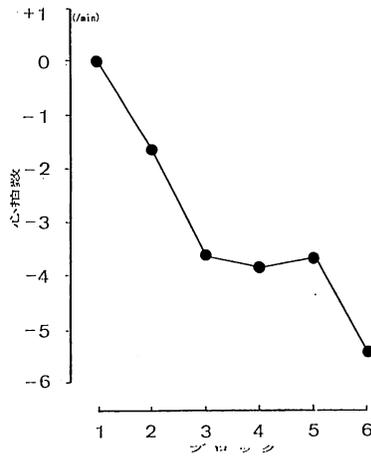


図 2 時間経過に伴う心拍数の変化

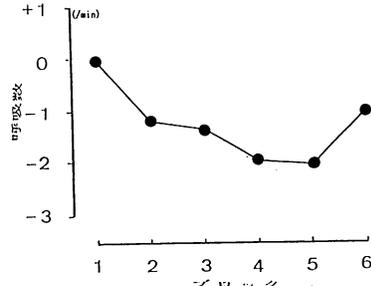


図 3 時間経過に伴う呼吸数の変化

のことは、時間経過にともなう ERROR 数、心拍数の減少と、一方では、ブロック 5 からブロック 6 にかけての呼吸数の増加の現象からも推察される。

Macworth, J.F. (1968) は、Vigilance Task における検出率の減少は覚醒反応の慣れの結果であるという仮説を提出している。

本研究で得られた結果は、中丸 (1986) の報告と一致しているが、脳波の徐波化や、SPL の陽性化などを併せて考えると、Performance の変動は、覚醒反応の慣れと脳の一般活動水準の低下との相互作用によるのではないかと考えられる。

ソフトウェア開発における 設計過程の作業分析

林 裕子

(東京大学 総合文化研究科)

1. はじめに

ソフトウェア技術者の負荷の特徴を捉えるために、前回の報告¹⁾では、作業工程のphase区分を通して分析を試みた。本研究では、上記の分析において非常に特徴的な負荷のかかることの示された1工程であるphase A (調査・概略設計) についての作業分析を行った。

2. 視点

phase A (調査・設計) は、発注者(ユーザー)のニーズを理解し、それらを仕様書にまとめ、(以上まで調査)、その仕様をもとに全体のシステムの構成およびその機能実現の概略をつくる段階である。このphaseの作業特性に対する担当者達の意見をまとめると、「要求仕様の内容と自分の理解、イメージとのGAPからくる不安、見通しの無さ」が作業者にとって負担になっていることが推測される。そこで上記の意見をもとに今回の分析の視点を、①先を見通せる設計者は実際どの様なこと(潜在的問題)を見通しているのか、②仕様書の機能のイメージはどの様にかたまっていくのか、の2点にしぼった。

3. 作業分析の手続き

上記の視点に基づいて作業分析を行うために、1つの具体的問題(仕様書)を設定し、設計者の知的作業の内容を発話プロトコル(concurrent report)をとって分析した。仕様書の内容は、在庫管理に関するものであり、完ぺきな仕様と言うより、客先のニーズをまとめたものに近い。この仕様書を5人の被験者に渡し、その理解から設計までの過程を、声に出して(thinking aloud) 2時間考えてもらい、その内容をテープレコーダで記録した。5人の被験者のうち、3人(S1~S3)は、仕様書からの設計経験があり、他の2人には設計経験がない。また、プログラム言語の選択は自由とした。

4. 結果

4-1 潜在的問題の予測と指摘

設計者の予測した潜在的問題は、A.書式と記録、B.異常処理、C.インターフェイス、D.在庫管理の方法、E.在庫不足リストの作成法、F.データ実現の方法、G.扱うデータの大きさ、H.システム実現の際の留意点、等の多岐にわたっている。この洗いだし能力は、その設計者の過去の経験に左右されるところが大きい。

4-2 イメージ形成プロセス

各被験者が仕様書の機能をどの様に具体化していったか、そのイメージ形成の大まかな流れをPBG(Problem Behavior Graph)に表して検討した。その結果、設計の経験者らは「言語の決定」の前に、入出力の整理、アルゴリズムの吟味、潜在的問題の予測などを行っているのに対し、設計の素人らは簡単なメモ、フローチャートを書いてのちすぐにコーディングを始め、そのあとでいくつかの潜在的問題に気付いていることが示された。より詳しくプロトコルを追うことにより、設計の素人は、「言語の決定」直前のイメージの解像度が経験者に比べて低いこと、具体的なコード化の過程でやっと問題に対する具体的イメージが形成されていることが読み取れる。

5. 考察

S1~S3のプロトコルから、設計のプロセスは、①自然言語によるプログラムの骨格の抽出、②設計用語による骨格の詳細化、③コード化、の3つのプロセスに分けられることが示唆される。3つのプロセスのうち特に①は、設計用語にもプログラミング用語にもよらず、自分の言葉で仕様の機能の本質と考えられる点を抽出する過程である。設計の素人は、①のプロセスが煮詰まらないうちに②③の複合プロセスにとんでしまっており、思考がプログラミング言語に依存している。この①(および②)のプロセスさえできあがっていれば、入出力も整理され、処理のイメージもできあがっているので、コード化するのは簡単である。上記2.でもふれた設計者達の意見(「イメージを固めるまでは先が見えない。」)にあらわれるイメージという言葉は、この①②のプロセスのイメージであるといえる。

参考文献

- 1) 林、越河、尾入、ソフトウェア設計作業における精神的負荷の分析(II)、応用心理学第54回大会論文集、1987
- 2) 林、ソフトウェア開発作業における精神的負荷の分析(2)、労働科学、Vol.64、No.6、1988

CST体験の現実場面への応用 (1) 危機状況への対処から対応へ

○ 上野 轟 清水 増三
(大阪教育大学教育学部) (パソ礼・マネジメント・センター)

〔問題と方法〕：我々はグループ・アプローチCST (Challenge Self Training) にこれまで精力的に取り組んできた。その際、メンバーにとって、この作業場それ自体がとりわけ現実的な危機状況であること：この状況に対するメンバーの対処から対応への転換のプロセスがこの危機状況に対する生産的克服の具体化であることに気づいてきた。

ここでは、CST体験の危機状況に対する生産的対応を喚起し学習するプロセスに光りをあて、メンバーの生産的対応具体化の諸要件の抽出を試み、これの現実の意味をより明確にしてみたい。

〔結果と考察〕：1. CST場面がメンバーにとってもつ意味—ひとつの危機的状況

通常構造化された日常生活場面にいる我々にとってCST場面は非構造化され、多義的かつ自由な生活場面であるため違和感の伴う居心地のわるい苦しい場として体験されている。そこではメンバーが各様に存在の代理不能性に伴う孤独感と、一回的存在であり死への存在であることに伴う意味喪失への脅やかしに気づかざるをえない。と同時にこうした状況に対する各人の対応が切実に問われざるをえない。CST場面はまさに実存の覚醒ともいべき苦悩に象徴され、それへの対応を迫る危機状況という意味を担う。

2. CST場面と現実の生活状況との一致

CST場面は、設定された場面であるとはいえ、そこを生きるメンバーは同時に日常生活を生きる同じメンバーである。この意味でCST場面と現実の生活状況との間に一致があり、そこでメンバーがなしうることは、日常生活場面でも同じくなしうる。

3. CST場面—危機状況に対する対処様相

危機状況をこれまでの解決様式によって克服できない苦悩状況に直面したときだとみると、CSTは危機状況にたいする対処から対応に至るまきからだごとの体験的学習過程とみなしうる。

危機状況に直面して、メンバーはまずこれに対する自己防衛的な対処のあり様をとる。この対処様相に3つが類別される。第一はこれまでの解決様式を適用する場合である(日常的な構造化を計る：講師に依存的になって答えを求める等)。第二は客観的にながめる場合である(無関心にながめる：距離をとってさけた

り拒否する等)。第三は自分をかかわらせて対面する場合である(混乱し困惑し、非難・攻撃し、拒否する等)。これは生産的対応への契機を成す。

4. 対処から対応への転換

直面した危機状況に対して、自分をかかわらせて対面すること：そのときのあるがままの自分で反応をなすこと：この反応を他者が受けとめ、これをフィードバックすること：このとき、私がいま、ここをともに生きるしかないとの気づきをえ、自己防衛から自由になって対応するあり様を具体化してくる。対処から対応への転換が生起してくる。

5. CST場面—危機状況に対する対応様相

自己防衛に自由になって、かかわり合いの中を生きるあるがままの私というあり方を具体化してくるとき、危機的状況に対する対応が具体化してくる。第一に、自然で柔軟で前向きの姿勢で安定し、まわりをよくみつめ(視線が合う)、よく通る声で現実とかかわり合う対応姿勢や構えを具体化してくる。第二に、沈黙や説明的自己弁明的表明を脱却し、かかわり合いの中での自他にかかわる私(気持)を出し、その責任対応をなすようになる。第三に、自分の伝えが相手にそのまま伝わるとの錯覚やそうでないことに気づいて、相手を説き伏せる：自分を引っ込める、感情的となる等に自由になって、相手に自分を話し、伝えきり、相手を変えうる、逆に相手のことが聴け、わかり、自分を変えることができる。こうしたかかわり合いによって双方の違いを違い、一致を一致としてみとめうる中で、新しい意味発見や解決に向けてわかり合える対応行為が具体化されるようになる。かくしてCST場面という危機状況を克服すると同時に、この危機状況を各人にとって、いま、ここを、私たちがともに生きるかけがえのない重要かつ貴重な状況として意味転換を具体化してくることになる。

6. 以上から、危機状況に対する対応要件として次のことが導き出されてくる。

- 1) 人はもともと対応する力を担っている。
- 2) 対処は誤りだが、誤りを受けとめ指摘する周囲の受皿によって、対応が開ける。
- 3) 自分とのかかわりで危機状況があるがままに受けとめ、勇気と信頼と責任という主体性の喚起の中で、状況がみえてき、これに対する対応的取組みが果たされてくる。
- 4) このとき、危機状況に対する意味づけがコベルニクスの転換をとげ、主体的かつ生産的な意味の再発見という世界が開かれてくる。

CST体験の現実場面での 応用 (2) 現実の危機的状況への対応に関わって

○ 清水 増三 上野 轟

(パソネ・マネジメント・センター) (大阪教育大学教育学部)

〔問題と方法〕ここでは、クレーム等にかかわる交渉という危機状況に対する対処・対応体験とCST体験から引き出されたそれとがきわめてよく対応し、その一致度が高いことの気づきを基に、現実の危機状況に対する対応指針提示の工夫(エッセンシャルCST)を行った対応事例を例示し、CST体験の危機状況に対する対応力の有効性を明確化したい。

〔結果と考察〕

1. CSTと交渉に於ける対処・対応の一致

1) 交渉に代表される危機状況に直面した時、CSTに於いてそうであるように、まずわれわれは恐く、そこから逃げたいとの心情に流れる。

2) だが、こうした危機状況は、CSTでさらされた実存への覚醒とも言うべき存在の意味喪失の脅威と同じく、生活上回避するわけにはいかないことである。

3) CSTに対する対処行動にみられるように、危機状況を一時も早く解決せんと構えたり、自分で解決出来ると思ひこんだり、人に依存・依頼したり、逃げ廻ったり、お金による解決に走ったり等の自己防衛的な対処に走りがちである。このとき問題状況はえてして錯綜化し、解決が計られず、泥沼化しがちとなる。

4) CSTにおける対処から対応への転換プロセスのように、この危機状況をさけられないとの自覚のもと、自分とのかかわりでこれを受けとめ、当事者意識をもって、主体的能動的に取組んでいくとき、危機状況への対応行為が具体化してくる。頭で考えた知恵をろうさず、危機状況の中をあるがままに勇気をもってみつめ、感受してわかり、この自分を信頼して、それこそ体ごと反応し責任を果たしていくということである。

2. 現実の危機状況への対応指針提示の工夫(エッセンシャルCST) - 対応事例の例示を通じて

1) 問題 : 運輸業務A社において、A社に全く責任のない事故の取扱いを通じて、無法なBがA社に対していいがかりをつけ、1年余りに亘って恫喝を加えてきた。そのため窓口の女子社員さえ体の不調を訴えるほどで、誰一人Bに対応できなくなっていた。

2) 体制 : A社と協議の上、一人の監督職にある年若い男性を担当責任者として任命してもらい(自分が受ける構えを明確にする)、まわりがこの担当者をバックアップする(当事者が孤立感をもたないように)

体制を敷くこととした。

3) 対応 : 危機状況する構えや学習の欠如に対する手当として、危機状況にいきなり対面してその人が崩れる危険をさけ、免疫性をはくむためのエッセンシャルCSTが工夫された。

3) - ①構えの育成(やってほしいことがあるがやってもらえるか) : 逃避が自分を護る手段ではなく、自信喪失の段階となること、自分の前に立ちただかる扉は実は心の中の自分一人の虚像であることの体験的自覚をうる。

3) - ②問題解決に向けた指示的援助 : 危機的状況への対応策が未経験で未知であると、われわれはとかく受身になり引いては被害者意識に陥入ることが多い。直面した問題が自分では解決不可能で困難だと理由から、自分にそなわっている理解力や解決力またその可能性に眼をつぶりがちである。

そこで問題解決に向けた実際的な準備を整え、何をするか指示し、それにそって現実にその人自身に動くことをしてもらおう。その際、こちらはこの人と一緒に息をしCST的対応をもってともにいる。

少なからぬ恐怖感や不安を持ちながらもトラブルの相手とのかかわりを通じて、相手の動きのホントウのところが理解できるようになる。強圧的な言動にでる人はその人自身がこわがっていること、こちらがこわいときこわいといえることが、強さになること、相手を見下したり逆にむやみやたらとベコベコする心情の根は同じところから生まれることなどその例である。

このとき、直面した事態から逃げず、勇気と信頼のもと相手とのかかわり合いの中で責任を果たす自分を実感する。自分を出し動いてかかわると問題解決に向けて局面が変化してくることを眼当りにして、当初の恐怖感や不安は自分の心の中の幻影にすぎなかったことに気づき、自分に解決能力があるとの確信をえ、自分に自信をえてくる。この自信をえてこの人自身の成長が眼をみはるばかりになってくるのである。

3) - ③結果 : わずか3ヶ月後このトラブルの相手はこの人のこうした対応行為によって後退し、やがて問題の解決をみるに至ったのである。

以上から、現実の危機状況に臨んで、人が自分にチャレンジするとき、自分の成長への道が大きく開かれ、危機状況が自分にとってかけがえのない貴重な糧となる意味を担うことになる。ここにCST体験の現実的な問題解決力育成の効用を見出すことができよう。

まさに、CSTにおける人との関係展開が我々の日常生活の土台をなしていることの証でもある。

対話型コンピュータシステムに関する研究

=画面表示のありかたに関する一考察=

○伊藤 典幸 自動車事故対策センター
井上 枝一郎 労働科学研究所
大倉 元宏 成蹊大学工学部

【目的】

ここ数年の間にOA機器が急速に普及し、今や職場においてワープロ、パソコンの存在は当然のものとなった。専門家だけでなく一般のユーザーがこれらの機器を使うようになり、そのソフトウェアの使いやすさ、習熟の容易さが重要な要素となってきている。しかし、現在市販されているそれらのソフトウェアは必ずしも一般ユーザーにとって使いやすいものとはいえない。

本研究では、ソフトウェアの使いやすさに大きく影響するコマンドメニューに関して、一画面あたりの情報量、及び、その階層構造の深さと使いやすさの関係を検討した。

【方法】

パソコンに実験用に作成したソフトウェアを組込み実際に被験者に操作させた。このソフトウェアは、ツリー構造を持ち、各画面で被験者が項目を選択する毎に、次々と画面が変わり、被験者が正しい選択を行なえば、実験の課題として開始前に被験者に対し提示した探し出すべきターゲットの存在する階層の最深部の画面が最後に現れる構造となっている。

被験者に操作させたキーボードは、標準JISキーボードであるが、被験者に操作させるのは、テンキーボード部分の0～9のキー及び「戻り」「取消」「確認」（それぞれ、テンキーボードの+、=、リターンキーにシールを貼ったもの）のみとし、他のキーにはカバーをかぶせた。

実験条件としては、一画面当りの情報量が多い条件（15項目/画面）と少ない画面（5項目/画面）の情報量に関する条件、及び、階層が深い条件（10階層=ターゲットに達するまでに10回の選択が必要）と浅い条件（5階層=5回の選択を要する）を設定し、これらを組合せ2×2の条件設定とした。

被験者は、これまでパソコンを使用した経験のない大学生24名（男子12名、女子12名）である。これらの被験者を各条件に6名（男女各3名）づつ配置した。

実験課題は、事前に与えた世界史上の事柄を、各画面の項目を選択しながら検索することである。

【結果】

検索に要する所用時間は、当然のことながら情報量大・階層深が最も大きく、情報量小・階層浅が最も小さくなった。

ターゲットに達するまでに探索した平均画面数（誤った選択をして正しい検索ルートから外れた画面を探索した場合探索画面数が増加する）を見ると、情報量大・階層深で12.0画面、情報量小・階層深12.5画面、情報量大・階層浅11.1画面、情報量小・階層浅7.7画面となった。

また、1画面当りの平均の探索時間は、情報量大・階層深で10.4秒、情報量小・階層深6.4秒、情報量大・階層浅8.6秒、情報量小・階層浅5.0秒となった。

各条件におけるエラーの発生率については、情報量大・階層深で8.3%、情報量小・階層深12.0%、情報量大・階層浅11.1%、情報量小・階層浅21.9%となった。

さらに、エラーの発生する階層についてみると比較的浅い階層において発生頻度が高くなる傾向が見られた。

【考察】

この結果は、①1画面当りの情報量に関してはその探索に要する時間が短くなるという点で、あまり多くない方が好ましいこと（実験後の被験者に対するインタビューにおいて項目数の多い画面では正しい項目を探し出すのに困難を感じたとの感想が多くでた）、②階層に関してはあまり深くないほうがよいこと（被験者より、深くなると自分がツリーの中のどこにいるのかわからなくなるとの感想が多くでた。また、被験者の行動観察でもそれが観察された）、③しかし、あまり情報量が少なすぎたり、階層が浅くなくても1つ1つの項目の意味が曖昧になってエラーの発生をまねくことになるおそれがあることを示すといえよう。

ただ、今回使用した実験課題では、その内容が十分な条件統制がとれなかった、また、被験者数も少ないためさらに研究を進める必要がある。

	ターゲットまでの 平均画面数 (画面)	画面当り 所用時間 (秒)	エラー 率 (%)
情報量大階層深	12.0	10.4	8.3
情報量小階層深	12.5	6.4	12.0
情報量大階層浅	11.1	8.6	11.1
情報量小階層浅	7.7	5.0	21.9

身体障害者の持つ職業情報の広がりについて

吉光 清

(国立職業リハビリテーションセンター)

はじめに

身体障害者の職業リハビリテーションの方向を本人との協同作業として決定してゆく過程において大きな問題点となるのは、本人が実現不可能な計画、あるいは能力的に非常に無理が伴う特定の訓練コース等に固執することである。これらの多くは、当該の職種についての情報不足、自己の能力水準、適性についての偏った認識、さまざまな情報を総合、判断することの未熟さ等に起因すると考えられる。そのような場合に、本人の希望のままにその時点で、当該の訓練コース等を選択させることは途中での挫折につながり易く、職業リハビリテーションの達成のうえで大きな損失を生むことになる。そこで、本人の職業的に未発達な部分を適切に評価すると同時に、それらの未発達な部分を補強する手段を開発することが必要になる。

目的

本研究では、質問紙によって本人の持っている職業情報の広がり の程度を把握しようとした。

方法

1. 質問紙の構成 日本版VPIに採用されている160種の職種・職位名(職種と略)をほとんどそのまま利用し、それらに対し「仕事の中味まで知っている(Y回答)」、「名前は見、聞きしている(P回答)」、「名前も知らない(N回答)」の3件法で回答させる形式とした。

2. 対象者 昭和61年5月から10月までの入所希望者のうち、新規高校(高等部)卒業者とした。肢体障害者41名、聴覚障害者25名となった。

3. 手続き 質問紙の実施は職業評価の初期の時点で集団で実施した。結果の整理の段階では肢体障害者群を養護高卒群(17名)と普通高校卒群(19名)に区分し、「ろう高卒群」と合わせて3群とした。

結果と考察

1. 3群間で回答の分布が異なった職種

表1は各群間でY、P、N回答への分布傾向が異なると見なされた職種数とその例を示したものである。分布傾向に差については χ^2 検定によって5%の有意水準を境界とした。分布が異なるとされた職種は91で、特定の職種群についての情報を持っているかどうかで個人を位置づける可能性が考えられた。

表1

3群間で分布の異なった職種数

(有意水準が5%の基準)

3群間で差が有意だった職種数	3群間で差が有意でなかった職種数
91	69
ジャーナリスト、私立探偵、シナリオライター、インテリアデザイナー、外交官、相場師、弁護士など	小売店員、出札係、写真家、社会学者、詩人、潜水士など

2. N回答に基づいた得点算出

種々の検討結果からN回答の数に基づいて個人の数値を算出することとした。すなわち、「160-N回答数」を個人の職業情報の広がり の程度を示す指標と見なすこととした。

3. 各群の平均値間の差

表2は算出された個人の数値に基づき、各群間で平均値の差についても検定を行った結果である。

表2

得点による各群間の比較

(* 5%水準 ** 1%水準)

	人数	平均	標準偏差	
養護高卒業者	19	146.2	15.66	
普通高校卒業者	22	150.4	10.35	*
ろう高卒業者	25	113.7	40.56	** **

「ろう高卒群」と他の2群との間に有意差が認められた。

4. 質問紙の構成に関する検討

図1はN回答が特定の行に偏在していないかを群毎に検討したものである。

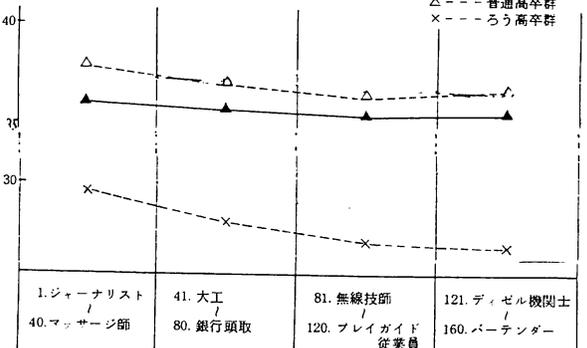


図1 各群における各行ごとの得点の変動

これらから、各行の数値には極端な変動は見られず、各群間の関係もよく保たれていると考えられ、今後の実際の利用を進める手がかりを得た。

交通行動に関する国際比較

(3) - ドライバーの確認行動 -

○ 蓮花一己 (帝塚山大学教養学部)
長山泰久 李 淳哲 (大阪大学人間科学部)

【本研究の目的】

本研究は、国際交通安全学会の研究プロジェクト「交通における文化的諸要因の国際比較-行動・意識・規範・思想」(1985-1988)のうち、交通行動に関する日本、韓国、カナダの三国比較の部分を取り上げたものである。前回の発表(1987)では日本とカナダの比較を行なった。今回、さらに韓国の行動観察を実施し、全体の考察を行なう。今回の分析は1)信号のない交差点でのドライバーの確認行動、2)高速道路における走行速度についてである。

見通しの悪い信号のない交差点での運転者の確認行動は、基本的情報摂取行動様式についての国別、地域別の違いを典型的に表していると考えられる。確認行動の回数とその内容を実際の観察データにより分析することで、今後の各国の事故統計や意識調査等のデータと結び付けて、その国の文化的特性やモータリゼーションの程度との関係を考察することが可能となる。

【方法】

(1)観察場所と観察期間

大阪府下	1986年 8月 4日 -- 8月 6日
東京都下	1986年 8月 26日 -- 8月 28日
トロント	1986年 11月 3日 -- 11月 5日
モントリオール	1986年 11月 10日 -- 11月 12日
ソウル	1987年 5月 1日 -- 5月 7日
釜山	1987年 8月 7日 -- 8月 14日

(2)確認行動の観察及び解析方法

信号のない交差点(十字型交差点かT字型交差点)で見通しの悪いものを選び、被観察車の接近停止状況をVTRで録画する。運転者の確認状況はビデオ画面から読み取れないため、観察者が近くの路上かその付近から運転者の顔の動きを観察し、左右確認と前方確認の状態をマイクロフォンでVTRに録音する。観察時の車両は自転車を含む全車両である。

解析手続きとしては、録画した画面より車種と停止状況、横方向からの車の有無、進行方向、運転者の確認行動を読み取る。考察対象となったのは横方向から車がきている場合のみである。また、十字型とT字型の差異を考慮して、右方向、前方向、左方向という3方向のうち、前方向の確認は各運転者の確認回数から省いている。

【結果及び考察】

分析の対象とした車両台数(自動二輪車と自転車を除く)は、東京A地点が82台、東京B地点が73台、大阪が233台、カナダのトロントが160台、モントリオールが100台、そして韓国のソウルが389台、釜山が127台である。

四輪運転者の左右確認行動の回数を都市別に比較すると(図-1)、確認回数の高い順からモントリオール(3.40回)、トロント(3.32回)、東京A(2.99回)、東京B(2.58回)、大阪(2.53回)、ソウル(1.59回)、釜山(1.37回)という順になる。そして、普通乗用車の運転者のみを比較しても、確認頻度の高い順から、モントリオール(3.35回)、トロント(3.32回)、東京A(2.81回)、東京B(2.58回)、大阪(2.57回)、ソウル(1.56回)、釜山(1.41回)の順になり、同一傾向を示している。

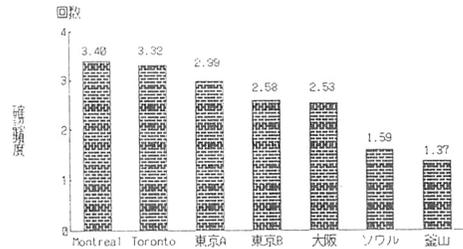


図1 四輪運転者の確認頻度

なお、普通乗用ドライバーの確認回数別の分布を示したものが図-2である。3回以上確認したドライバーの比率は、カナダのトロントとモントリオールで約70%-80%、日本の東京と大阪で約40%-50%、韓国のソウルと釜山で約10%-20%となっている。韓国では普通乗用ドライバーの5割以上が確認回数1回以下であるのが目立つ。

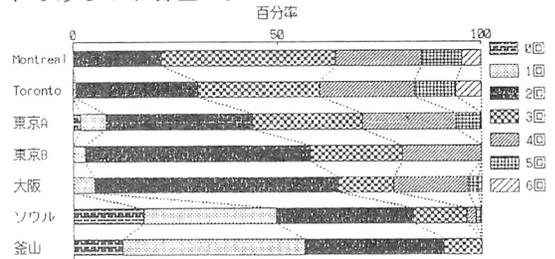


図2 普通乗用運転者の確認回数の分布

以上の結果からカナダ、日本、韓国の順でドライバーの積極的な確認行動様式が確立されているとの推測が成立する。この理由がその地域や国の文化的諸特性によるものか、あるいはモータリゼーションの進展の程度を反映しているのか、それともその両者の相互作用によるのかについては今後の検討課題のひとつであろう。

交通行動に関する国際比較 (4)

—日本、カナダ、韓国における速度行動—

○ 李 淳哲

長山 泰久

蓮花 一己

(大阪大学 人間科学部)

(帝塚山大学教養学部)

【目的】

本研究は高速道路における車の走行速度を分析することで、空間認識に伴う空間使用の原則において国別の特徴がみられるかを検討する(長山、1986参照)。そのために、平均速度とその散布度を分析し、走行速度の均質性を比較検討する。

【方法】

観察は、日本の東京と大阪は1986年8月、カナダのトロントとモントリオールは1986年11月、韓国のソウルは1987年5月、釜山は1987年8月に行われた。観察地点として各都市郊外の高速度路の各々1地点、計6地点で観察を実施した。日本の東京、カナダのトロントとモントリオールは3車線の高速度路であり、日本の大阪、韓国のソウルと釜山は2車線の高速度路である。

観察方法としては、高速度路における走行速度をVTR(SONY SL-B5とCCD-G5及びBetamovie BMC 500)で録画した。そして、分析方法としては一定区間を何秒で走行したかによって速度を算出し、車線別、車種別、単独か追従かの条件別に分析する。車種別については、普通乗用車、大中貨物車、貨物車、バン、軽乗用車と二輪車に分けて分析を行った。なお、分析対象の車両台数は各都市別に、ビデオ映像から1,000台までにする。今回は単独走行時の速度だけを分析対象とし、その平均速度と散布度について報告する。

【結果及び考察】

分析の対象とされた単独走行の車両台数は、東京が619台、大阪が499台、トロントが484台、モントリオールが568台、ソウルが655台、釜山が866台である。

単独走行時の平均速度は、モントリオール(100.72キロ)>トロント(95.48キロ)=大阪(94.51キロ)>東京(91.14キロ)>ソウル(89.34キロ)>釜山(87.24キロ)の順になっている(t検定の結果、モントリオールとトロント、大阪と東京の間に0.1%、東京とソウルの間に2%、ソウルと釜山の間に1%の水準で速度の有意差がある)。Fig. 1は速度の変動係数を用いて、各都市別の速度の均質性を示す。速度の均質性の高い順からみると、トロント(11.19)=モントリオール(11.38)>大阪(13.11)=東京(13.14)>ソウル(15.03)>釜山(16.80)の順になっている(F検定の結果、モントリオールと大阪の間に5%、東京とソウルの間に1%、ソウルと

釜山の間に5%の有意差がある)。

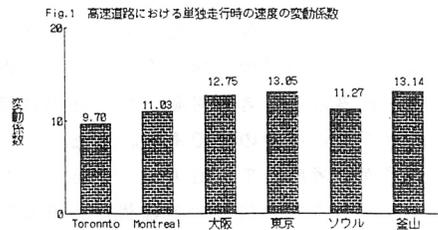
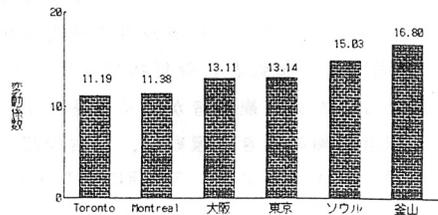
この結果の傾向としては、カナダのほうは平均速度が高いにも関わらず、速度の散らばりの程度は低くなっている。韓国は平均速度が低いにも関わらず、逆にその速度の散らばりは高くなっている。つまり、速度の均質性という側面からみて、韓国より日本、日本よりカナダのほうが行き速度の均質性が高いのである。

次に、普通乗用車の走行速度について検討する。分析の対象とされた車両台数は、東京が273台、大阪が236台、トロントが316台、モントリオールが381台、ソウルが273台、釜山が319台である。

普通乗用車の単独走行時の平均速度をみると、モントリオールが100.95キロで他より高くなっているが、トロント(98.67キロ)、大阪(97.17キロ)、東京(95.31キロ)、ソウル(97.02キロ)、釜山(96.84キロ)の平均速度はほぼ同じである(t検定の結果、モントリオールとトロントの間に1%水準の有意差がある)。Fig. 2は速度の変動係数を用いて、速度の均質性の程度を示している。F検定の結果、トロントとモントリオールの間に1%、モントリオールと大阪の間に5%水準の有意差がある。大阪、東京と釜山の間には有意差がないが、ソウルの散らばりは若干低くなっている(ソウルと大阪の間に5%の有意差がある)。

以上の結果から、カナダのドライバーは高速度路における空間使用に際し、速度の均質性が日本や韓国より確立されていると考えられる。

参考文献 長山泰久 1986 交通における文化的諸要因の国際比較 IATSS Review Vol.12 No.3 184-198



事故多発運転者に対するカウンセリングの効果

清 宮 栄 一
(東京国際大学教養学部)

(は し め に)

自動車事故対策センターにおいては、事故多発運転者に対してカウンセリングを実施し、安全運転者に自己成長するように援助している。同東京主管支所では、松平定康松平研究所所長、山下昇千葉工業大学教授、清宮栄一の3名でカウンセリングを担当している。

その結果の一部に関しては、1982年第49回本大会及び1985年度(文部省科学研究費補助金)総合研究Aの研究成果報告書において清宮が報告した。

今回は、その後実施したカウンセリングの効果について報告する。

I. 目 的

事故多発運転者に対して、1985、1986年度に上記3名が実施したカウンセリングの効果を検討して、さらにその効果を向上させるための資料を得る。

II. 方 法

上記年度中にカウンセリングを受けた運転手144名の子後について、自動車事故対策センター・東京主管支所の浜克秀主任診断員が、当該運転手が所属する事業所の管理者に対して電話による調査を実施した。

調査内容は、カウンセリングを実施した後の

(1)勤務状態 (2)事故発生状況 (3)態度変容及びカウンセリングに対する事業所の評価、感想、要望などである。

III. 結 果

1. 勤務状態は、表1に示したように、カウンセリング後、2名が配転、37名(25,7%)が退職している。退職理由は、自己の都合が最も多く、相変わらず事故が多く、勤務不真面目のための解雇、身体的限界に達したためがこれについている。

表 1 カウンセリング後の勤務状態

勤務状態	B	HT	T	A	計	%
乗 務	9	75	19	2	105	73
配 転	0	0	1	1	2	1
退 職	2	29	6	0	37	26
計	11	104	26	3	144	100

(Bバス HTハイタク Tトラック A自家用)

2. カウンセリング実施後1年間、乗務を継続した運転者144名の事故発生状況を表2に示す。無事故者は、72名(68,6%)であった。これは1982年の96,8%、1986年の88,2%を下回った。しかし、事故0件と1件のものを合計すると全体の85,7%を占めている。不十分ではあるが、カウンセリングの効果を受けてよいだろう。

表 2 カウンセリング後の事故件数

事故件数	B	HT	T	A	計	%
0	7	48	15	2	72	69
1	1	13	4	0	18	17
2	1	4	0	0	5	5
3以上	0	10	0	0	10	9
計	9	75	19	2	105	100

3. カウンセリング後の態度変容を表3に示す。好ましい方向に変わったものが65名(60,7%)であって予想を可成り下回った。態度変容の主なものは

- ・ 運転が慎重になった。
- ・ 真剣に運転に取り組むようになった。
- ・ 事故を無くそうという自覚が出てきた。
- ・ 基本に忠実な運転を心掛けるようになった。
- ・ 人の話をよく聞くようになった。
- ・ 明るくなった。
- ・ リーダ格になって後輩の指導をするようになった、など。

表 3 カウンセリング後の態度変容

態度変容	B	HT	T	A	計	%
+	3	48	13	1	65	61
±	6	27	7	2	42	39
-	0	0	0	0	0	0
計	9	75	20	2	107	100

IV. 考 察

期待したほどの効果が得られなかった。今後、事故を再発した者の特性と事故原因の解析、カウンセリング手法の検討を行って効果をあげなければならない。

(協力いただいた松平、山下両氏、自動車事故対策センター・東京主管支所及び同浜克秀主任診断員に対して深甚な謝意を捧げる。)

運転場面における危険対象の把握とその習熟過程

小川 和久

(大阪大学大学院人間科学研究科)

【目的】

運転者の認知的技能の一つである、「見る」行動の習熟過程を分析することを目的とした。再認課題、再構成課題を用いて、運転経験が危険対象の把握に及ぼす効果を調べ、対象の把握様式について検討を行う。

【方法】

◆被験者：大学生及び大学院生22名、運転経験の程度に従い被験者を、統制群（運転免許をもたない者）8名、初心者群（ペーパードライバー）6名、経験者群（運転年数1年半～5年、走行距離1万5千～6万3千km）8名に分類した。

◆刺激：刺激は実走行車両の中から撮影したビデオ映像である。走行道路はいずれも市街地の混雑した道路である。場面数は7場面、1場面の長さは約50秒である。

◆手続き：〔再認課題〕運転場面のビデオ映像を提示する。被験者は場面内の諸対象を記憶し、1場面終了する毎に再認テスト（二者択一強制選択）を受ける。テスト項目は、運転場面の諸対象を線画にしたものである。

〔再構成課題〕再認テストにおいて被験者がターゲットとして選択した項目を、時間的順序に従って並べ直し提示した運転場面を再現させる。その後、配置した各項目について、簡単な状況説明を被験者に行わせる。

【結果および考察】

◆再認課題：統制群、初心者群、経験者群の正再認率は、それぞれ68.2%、70.6%、75.8%となり、運転経験が豊富な者ほど、より多くの対象を把握していたことが示された。

◆再構成課題：全体的傾向として、経験者は時間空間的に秩序よくテスト項目を配置したのに対して、初心者や運転経験の無い者は、項目をうまく再構成することができ

なかった。その典型例を以下に示す。図1は場面中ある時点での状況を図示したものである。幾つもの対象が錯綜した危険な状況である。この状況の再現例を図2-a、b、cに示した。項目の配置位置の他に被験者の説明内容をも表示している。経験者群である被験者Aは、項目間の位置関係を正確に再現し、各対象について詳細な説明を行った。初心者群である被験者Bは、交錯する2台の車と二人乗りの自転車を正確に再現したが、両者間の時間的關係が不正確となっている。また歩行者が非ターゲット項目となっており、その記憶も曖昧である。統制群である被験者Cに関しては、正確に配置できたのは二人乗りの自転車のみであった。

以上のことより、経験者は対象間の関係を的確に捉え情報の体制化を行っていたことが示唆される。一方、初心者や運転経験の無い者は、個々の対象を独立させて把握していたと考えられる。それ故、幾つもの対象が錯綜するような状況を正確に再現できなかったのであろう。

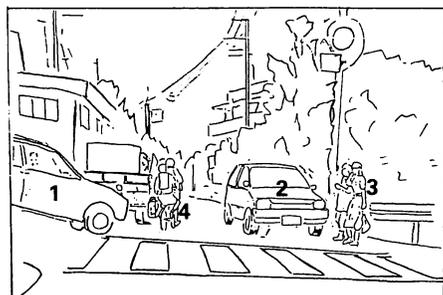


図1. ある時点での状況図。（交差点左方より軽四(1)が進入しようとした時に対向車(2)が接近。右方には歩行者2人(3)が横断を待ち、さらに前方には小学生の二人乗り自転車(4)がフラフラと走行している。）

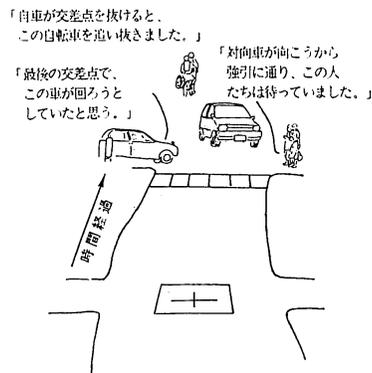


図2-a 被験者A（経験者群）の再構成図



図2-b 被験者B（初心者群）の再構成図



図2-c 被験者C（統制群）の再構成図

（場面は下から上へ進化したものとする。＊は非ターゲット項目を示す。）

人名索引

人名索引

数字はページ数で、ゴシック体数字は口頭発表者、明朝体は連名発表者を示す。S Iはシンポジウム1を、S IIはシンポジウム2を、またKSは公開シンポジウムを、それぞれ示す。

- | | | |
|----------------------|---------------------|----------|
| | 小 串 武 85 | 佐 藤 怜 87 |
| | 小 原 ゆかり 74 | |
| 〈ア〉 | | |
| 秋 山 俊 夫 59,76,85 | | |
| 足 立 浩 平 21 | | |
| 安 倍 淳 吉 88 | | |
| 安 部 保 子 58 | | |
| 新 井 順 73 | | |
| 綾 野 真 理 85 | | |
| | 〈カ〉 | |
| | 檜 葉 和 英 50,51 | |
| | 片 野 卓 79 | |
| | 片 山 吉 晴 45,46 | |
| | 角 山 剛 98 | |
| | 嘉 部 和 夫 90,91,92 | |
| | 神 澤 創 30 | |
| | 亀 谷 純 雄 86 | |
| | 川 邊 讓 82 | |
| | 川 村 司 16,17,18 | |
| | 川 村 玲 子 71 | |
| | 〈キ〉 | |
| | 木 村 周 S I 1,4 | |
| | 清 宮 栄 一 113 | |
| | 岸 本 英 男 53 | |
| | 〈ク〉 | |
| | 草 野 美根子 42 | |
| | 楠 正 三 55 | |
| | 久 米 稔 24 | |
| 〈ウ〉 | | |
| 上 野 蕨 107,108 | | |
| 白 井 伸之介 104 | | |
| 白 井 博 晤 25 | | |
| 内 野 悌 司 64 | | |
| 内 海 澁 40,41,42,43,44 | | |
| | 61,62,63 | |
| | 〈コ〉 | |
| | 小 池 妙 子 43,44 | |
| | 児 玉 省 50,51 | |
| | 後 藤 嘉余子 49 | |
| | 小 林 正 和 105 | |
| | 小 林 義 明 KS 11 | |
| | 駒 崎 勉 32 | |
| | 小 山 一 郎 79 | |
| | 〈ク〉 | |
| | 齊 藤 幸一郎 33,34 | |
| | 酒 井 民 雄 KS 12 | |
| | 酒 川 靖一郎 80,81 | |
| | 佐 藤 祥 子 75 | |
| | 〈シ〉 | |
| | 式 村 正 明 66,67,68,69 | |
| | 重 永 幸 男 58 | |
| | 篠 置 昭 男 64 | |
| | 柴 崎 圭 子 36 | |
| | 清 水 増 三 107,108 | |
| | 東海林 義 信 105 | |
| | 〈ス〉 | |
| | 鈴 木 清 15,19 | |
| | 鈴 木 茂 KS 10 | |
| | 鈴 木 寿 雄 S I 2 | |
| | 鈴 木 信 子 43,44 | |
| | 鈴 木 裕 子 49 | |
| | 杉 本 千代子 15,19 | |
| | 〈セ〉 | |
| | 関 根 一 美 99 | |
| | 千 田 博 茂 33,34 | |
| | 〈ソ〉 | |
| | 園 田 雅 代 93,94,95 | |
| | 〈タ〉 | |
| | 高 石 光 一 101 | |
| | 高 嶋 正 士 72 | |
| | 高 橋 哲 也 65 | |
| | 高 橋 真 理 41 | |
| | 高 橋 泰 子 66,67,68,69 | |
| | 高 橋 豊 50,51 | |
| | 滝 本 孝 雄 25 | |
| | 高 久 信 一 90,91,92 | |
| | 高 野 隆 一 24 | |
| | 竹 内 常 雄 26 | |
| | 竹 内 山 則 31 | |
| | 田 島 山美子 66,67,68,69 | |
| | 田 中 香 織 93,94,95 | |
| 〈オ〉 | | |
| 大 倉 元 宏 109 | | |
| 大 沢 美枝子 66,67,68,69 | | |
| 大 村 政 男 27 | | |
| 岡 本 英 雄 S I 1,3 | | |
| 岡 本 善 之 48 | | |
| 小 川 和 久 114 | | |
| 〈エ〉 | | |
| 遠 藤 小夜子 61 | | |

谷口泰富 105
玉木ミヨ子 43,44

<ツ>

土屋明夫 90,91,92

<テ>

手塚武彦 SII 6
寺崎裕志 85
寺沢美彦 24
手島茂樹 56

<ト>

常盤満 90,91,92
所正文 103
外島裕 100
利光恵子 15,19

<ナ>

内藤みちよ 15,19
中淑子 63
中釜洋子 93,94,95
中川敦子 80,81
長崎拓士 57
長沢有恒 31
永沢幸七 54
長塚恭一 31
七浦久子 59
中丸茂 105
中村昭之 36,37,38
長山泰久 111,112
成田猛 39

<ニ>

西方毅 20
西川博文 32
西川隆造 28
西田順造 83
西野泰広 45,46,47

<ハ>

橋爪廣好 59
橋本ひろみ 98
蓮花一己 111,112

長谷川孫一郎 80,81
島山浩子 37,38
服部美樹子 97
浜田卓子 SII 8
林潔 54
林敬子 64
林裕子 106
早川清一 96
原萃子 40

<フ>

藤田主一 32
福田美山紀 35,64
藤本喜八 SII 1
藤本晴美 59

<マ>

前田茂則 77
前原澄子 41
鈞治雄 KSI 13
正田実 SII 7
松井賢夫 98
松坂利之 37,38
松田浩平 45,46,47
松田美登子 45,46
松田幸弘 98
松村康平 60
松本洗 90,91,92
松本純平 SII 5

<ミ>

三浦武 SII 1
三島二郎 57
三島正英 24
水田茂久 38
溝口育代 64
三井利幸 16,17,18
箕浦光 50,51
宮本昇 84

<ム>

向井希宏 102
向山陽子 SII 9
村上生美 40

<モ>

森重敏 SII 1
森下節子 43,44
森田義宏 97
望月稔 57

<ヤ>

矢ヶ崎誠治 79
山口桂子 61
山下素邦 83
山田耕嗣 25
山本勝則 62
山本晴雄 KS 1
柳沢千衣 41

<ユ>

湯川倫代 61

<ヨ>

吉川晴美 78
吉光清 110

<リ>

李淳哲 111,112

<ワ>

若原克文 16,17,18

	日本応用心理学会第55回大会発表論文集
発行日	1988年10月20日
発行者	日本応用心理学会第55回大会準備委員会 委員長 山本 晴雄
	〒192 東京都八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 (0426-91-2211)
印刷所	明和印刷株式会社 東京都渋谷区東2丁目22番10号 (03-409-1521)

